

---

# その男、神の眼につき

神戒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その男、神の眼につき

### 【Nコード】

N1688V

### 【作者名】

神戒

### 【あらすじ】

運命とはなんだろうか。

数多の戦場をくぐり数多の死線くぐり数多の死を受け入れてきた少年と青年の境目に居る時衛士は、そんな考えても不毛な疑問をいだいていた。

予知能力——自分がどうなるか。その運命を絶対的に変則できる力を持つからこそ芽生えた疑問だった。

機関、協会。

適性者、特異点、スケアクロウ付焼刃。

襲いかかる能力者を撃つては捨て撃つては捨て。

内にも外にも敵がいる時衛士の物語は、様々な歪曲を経てようやく始まった。だと言うのに、また新たな、人生の分岐点が彼の前にやってきて――。

## この男、予知能力者につき

運命とは——なんだろうか。

生まれた瞬間から定められた人生の筋道？

一挙手一投足すらも予見された記録書？  
アカシックレコード

もしそれらがあつたとして、誰がそれを如何にして覆すことが出来るだろう。

屁理屈のようだが、誰かがその運命、筋道を歪曲させて見せたとして、その起こつた、変化してしまつた事象は”運命”ではないと誰が説明できるだろうか。

それは、それを証明できるのは——やはり”神”しか居ないのかもしれない。

『コードネーム”ゴッスウイジョン神之視点””。首尾はどうか』

考えを遮るように、ノイズ混じりの声が聞こえる。聞き取りにくい、喉が潰れたような鈍く低い声だった。

「配置に着きました。風が強いですね、ここ屋上は」

『最終試験のとおておき。だけど——夜にその”蒼い瞳”はいくらか目立ち過ぎやしないかい？』

青年は絶景とはいいがたい、ネオンが目立つ夜景を見下ろしていた。ビルや商店ないし露店に挟まれた大通りにはゴミが散乱し、その道行く人はまばらで——ターゲット目標の出現は未だ無いし、予定でもまだ望めない時間だった。

つまり彼は、無駄事を考えるほどに暇だつた訳である。  
ときえいじ

青年、時衛士は右目に付けていた眼帯を手で抑えて、眼窩から溢れて眼帯すらも透かして漏れる蒼い輝きをふさいだ。また対となる左目は光学照準器も無しに、銃自体に備え付けられている簡単な照準器から、直線距離で三〇〇メートル以上ある道を凝視していた。

夜も半ば。月明かりさえも不安定なそこで、暗順応したその瞳は街灯の下を通る人間の顔の見分けを付けている。凄まじいとしか言

いようのない視力は、狡猾に狙いを定めていた。

顔を上げれば飲み込まれてしまいそうに深い闇。晴れているのに星が見えない夜空は、どこか寂しい物があつた。

——来る。

直感がそう告げた。

衛士は木製ストックを左肩で押さえ、左手人差し指で撫でるように引き金に触れる。

胸が高鳴る。全身の血の流れが、まるで血管に耳を当てるようによく分かった。

精神が澄んだ。研ぎ澄まされるように、時衛士の肉体は触れるコンクリートの大地と一体化したように、思考を消して意識を集中させる。気配は殺され、仮に真横に立たれたとしても存在を知覚、認識されぬように息を殺した。

引き金を弾いたその瞬間だけ、時衛士は自己主張できる。

『あれから二ヶ月。この中国でも随分と肌寒くなったよね』

押し殺した声。彼は目標の接近を告げることは決して無いし、またそこはかとなく教えはしない。ただ何処からか、ヘッドセットのマイク越しに緊張でも伝わっているのか、察したように気を使うことだけはしていた。

——目標は、衛士が所属する国際機関のドイツ支部から上手いこと逃げ出した幹部の一人。

既に逃亡幫助した五。人余りは、掴まされていた、日本円にして一億円近い賄賂と共に処分されている。残るはこの『世界抑圧機関』、通称『リリース』から逃げた齡五二歳の男『バツハイム・クロウン氏』のみである。

そして最終試験と男は言ったが、ミスは許されぬ任務の一つだ。

さらに衛士が為すべき仕事はその男の処分ではなく、駆動系を破壊することによる逃亡や行動の阻止。つまりは辛うじて致命傷に成り得ない狙撃。足を狙えという事だった。

人を狙撃するのは何もこれが初めてという訳ではない。高等技術

を駆使した立体映像による擬似的な本番は何度も体験したし、適当な暗殺任務だつて数をこなした。何も、ただ使わぬ牙を研ぎ続けていたわけではないのだ。

だが——ここに来て、引き金を引くのに手が震えたのには流石に驚きだった。

クローン氏が接触したのは、機関から逃げた”特異点”と呼ばれる強力な超能力持ちの男が設立したと思われる秘密組織。ついこの間までは規模すら判然としない名称不明の集団だったが——。

『付焼刃推進協会……特異点とは異なる、簡易超能力者である付焼刃<sup>ロー</sup>を生み、ボくらに対抗する組織。今じゃ世界規模になつてゐるし、その上どうやって能力を作っているのかすら不明。すっかり一般戦闘員じゃ太刀打ち出来ないレベルに成長してゐるし……キミとも因縁深い所だ』

男の説明に、衛士の首が縦に動いた。

だがそれは首肯を意味したものではなく、生唾を飲み込む所作である。

気配が迫る。

既にその視界内に、肥えに肥えた、体重はゆうに三桁はありそうな巨漢が入り込んでいる。短い足はおたおたと歩き、その両脇には黒のスーツを身につけた男がそれぞれひとりずつ。手には護衛の為か、自動拳銃を装備していた。

目標はそれらに挟まれる、短い坊主に闇に溶けそうな地黒の肌の男。さらに今にもはち切れんとするスーツは護衛役と同色の黒であり、その上で身体を動かす足を狙撃するのは、ただ殺す事よりも難易度がいくつも高い。

そして恐らく、装備は専門家でさえも準備が足らなすぎると嘆くであろう代物。

ただ使い慣れた狙撃銃と、狙撃に慣れた狙撃手一人。  
状況は夜。

距離は三〇〇メートル。

風速五メートル。

気温は摂氏十五度。湿度六二％。

緊張状態。

視力はその距離でも道路の人の顔の区別がつく程度。

そして——五秒だけ未来が視える、予知能力者。

青年はいわゆる特異点と呼ばれる能力者だった。”予測”とは異なる”予知”であるのが味噌である。

『おそらく今回の接触で情報を得た協会連中はもっともっと強い超能力者ケアクロウを創る筈だ。キミが殺せても、でももっと多く、もっと沢山の能力者を。精鋭じゃなく、物量で。それでボクらが堪えると知っている。キミが証明したからだ』

だが、それを知ること、その情報を逆手にとった環境を作り出せる。情報漏洩はかえって有利になり得る可能性もあるのだ。

だが、過去を——聞いただけの話で、試験官が知った口を聞く。

この二ヶ月間の師匠であり戦友と成り得た彼が、かるうじて八年上の巨漢の男が、知識だけで過去を語った。

衛士には、それがとてつもなく我慢ならなかった。

「黙れ、アンタがオレの何を知っている」

『トーキ君。自重』

「ッ、了解」

そして彼の思惑通りに揺らいだ心が、思わず反論してしまった。

感情が出る。それはつまり、殺していた気配が、息が、同化していた肉体が露呈してしまったことを示す。この師匠はつまり、そうするためにわざと衛士を煽っていた。

理由としては、狙撃兵にとって重要な事。心を無にして弾丸に全てを掛ける為、それが衛士に出来ているかの確認。ただ吠えられただけで心乱される程度の集中力ならば、決定的なまでに狙撃に向いていないのだから。

ペンが走る音がする。恐らく採点表に何かを記した音だろう。

衛士は大きく息を吸い込んで、それから細々と吐き出した。

目標が街灯に迫る。が、衛士が見る未来には、その照明の下に行くのは右手側の護衛である。そしてさらに未来では——片腹をクロウン氏が血まみれになって横たわっている。

ミスだ。

衛士は短く胸中で呟くと、簡易な照準器サイトから目標が辿る未来の軌道上から、鉄柵の隙間から突き出した銃口をやや下げた。

すると途端に、記憶に刻まれていた未来が追加されて——新たに、右の太ももを抑えて倒れる姿が衛士に記憶された。

青年は眼帯を抑える手を地に落とし、人差し指で地面を叩く。秒針が時を刻むのと同じ間隔で、衛士はタイミングをとっていた。

「五、四、三……」

一步。さらに一步、クロウン氏が死の沼に足を踏み入れる。

その大通りの細い路地に潜む数人の一般戦闘員で構成されている強襲組の緊張が、衛士にまで伝わるようだった。

腹の奥底に、緊張のためか鈍い痛みが走る。

背筋がゾクゾクと妙に落ち着かなかった。

——人差し指の第二関節が曲がり、第一関節がさらに引き金を包む。

「これがあんたの運命だ」

どこか悲壮感の籠った言葉の直後、聴き慣れた発砲音が、慣れた衝撃が肩を打った。

火花が散り、弾丸が回転しながら直線でクロウン氏へと切迫する。コンマ秒がやがて一秒へと変わるよりも遙かに早い段階で、クロウン氏の右太ももの裏側に赤い血花が鮮やかに、瞬間的に咲き乱れた。

悲鳴。

バツハイム・クロウンが巨体を転がすように倒れ、同時に護衛役が戸惑ったように周囲のビルの窓を、屋上を見上げ始める。

衛士は即座に蒼い鬼火を透かせる眼帯を隠し、身を伏せる。その直後に——連続する無数の発砲音と、血が弾ける音とが響き始めて、

『任務成功。降りて、さつさと彼を連行して帰ろう』

師匠のヤコブは、どこか嬉しげに弾む声を最後に、インカムの電源を切った。

ヤコブから借りたPSL狙撃銃を片付け、展開していた全ての荷物をまとめてバックパックにしまい込む。それを中腰のまま背負って、また狙撃銃をケースに収めて肩に担ぐ。

立ち上がると——何かに引っかかるような間隔。腰が上がらず、低い空気椅子のような状態になってしまった。視線を落とすと、ベルトから伸びる細い鎖が、地面に突き刺してある釘に引っかかってしまっているようだった。

衛士はポケットから懐中時計を取り出し、手首を回すようにして釘から鎖を引き剥がし立ち上がる。

それから大きくため息をついて、衛士はようやく振り向いた。

睨むのは虚空。否、屋上に凸型に突き出た階段室。その影である。「いつまでそうしているつもりです？ 何か用事ですか……」ホ口ウ・ナガレ”さん”

口にした名は——例の協会の創立者。

つまり機関の人間でありながら、機関を抜け出し、それに対抗するべく組織を作り出した張本人。

彼が作り出した超能力者集団よりも、まるで次元の違う特異能力を保有する人物であり衛士と同様の、特異点と呼ばれる彼であった。

「ああ、バレてたの。いや、成長したなお前もって思ってたさ」

「いつでもオレを殺せる筈だ。そう、今でも」

「なあ少年、お前はまだ十七だろ？ 今も、初めてあった時も……。俺あこうなることを、まさか俺の教え子を拾いに行ったらもつとでっけえ拾い物をするとは……わからなかったなあ。人生って不思議だよな、とことん。俺も本当に、こんな能力者軍団を率いる予定も無かったんだがな」

ナガレはそう言って、肩をすくめる。やれやれと言った風に手の

ひらを空に向け、肩の高さに引き上げた。

さらに男は優男が女性を口説くようにペラペラと滑らかな口調で言葉を続ける。衛士はそれをうんざり思いながら、さりげなくポケットから四つの小葉があるクローバーを取り出す所作を見逃しはしなかった。

「ま、結果的にや何も拾えなかったが。その代わりに”次元干涉”が可能の特異点レベルの能力者は生まれねーが、それでもテレビに出てくる精神感應者とか、念力能力者なんか比べものにならない、いかにも戦闘用の連中が出来たがな」

「今じゃその連中が機関の邪魔立てをして、唯一確立してる敵って訳だ。なにか恨みでも？」

「たっはははは！ お前が一番分かる筈だろうがなあ……まあいい。ちよいと見つけたんで、今日はこいつを渡しに来ただけだ」

男はクローバーを手に、静かに歩み寄る。衛士もまたそれに倣うように彼へと近づいた。

殺気はない。

むしろあるのは、この青年の方だった。

恨みならば——機関、協会のどちらにもある。既に衛士の拠り所などは存在していなかった。

ただ動く、仕事をこなす便利な駒でしか無い。

殺戮兵器となった衛士の眼は、もう今を見ていなかった。自分が見ることができる未来、それより遙か遠く。これから起こるであろう無数の出来事を、あるいはこれまで起こった凄惨な出来事を夢想しているようだった。

儚い目付き。深窓の令嬢に似つかわしい眼を持つこの青年には何が必要なのか——ナガレは考えて、にやけた笑顔で首を振った。

コイツには、コレしか無いだろう。

「ほらよ。四つ葉のクローバー、お前に幸運を」

差し出す手のひらにそれは落とされる。

軽い、重量など存在していないかのようなソレが、革の手袋の上

に落ち着いた。

だがナガレはそれだけに終わらず、すかさずひざ丈のロングコートの内ポケットに手をつ突っ込んだかと思うと——直後に、衛士の肉体が硬直した。

身体を動かそうとする。が、動かない。

指先すらも震えない。まばたきすらも許されない。

何の予備動作も予兆も無いまま、それが起こった。

唯一可能なのが、鼓動と脈打ちと呼吸だった。

「勘違いされて下手に動かれても困るからな……。そういや、今回で二度目だったか？ 俺の能力を受けたのは」

無機物を空間に固定する——それがこの男の特異点たらしめる為の特異能力だった事を、衛士は今になってようやく思い出した。

殺される——されど青年がそう思うことは無い。

ナガレが内ポケットから抜いたのが、一輪の花であることが分かっていったからだ。

「こいつがクローバーの花。花言葉は——」

差し出された手に、手を重ねるようにして花を衛士に手渡した。

それと一緒に肉薄した男の顔が過ぎて、口が耳元に切迫した。

息遣いがくすぐつたい。好みじゃない香水の臭いが鼻についた。

「——復讐」

そいつを糧にしる。

お前のためになる。

お前の生きる希望になる。

——男はそう残して、衛士の横を通り抜けた。

直後に、肉体の可動が許される。

振り返ると、鉄柵を飛び越えて地上十数メートルの高さから身を投げるナガレの姿があつて——まばたきを一つ。その次の瞬間には、元からそこに居なかったように、彼の姿は跡形もなく消え去っていた。

「……瞬間移動。他にも仲間が居た……。つまり」

クローン氏はもう現時点で用済みだったという事か。

無論、それは予測の範囲内。これより処分される予定であつたらう彼を保護する事も、統合してこの任務だったというわけである。

「オレも、いつかは――」

一輪の花。茎をつまんで、夜空に張り付いている三日月の明かりを頼りに眺めてみた。

クローバー。花言葉は”復讐”。対となるのは幸運の伝説を持つた四つ葉のクローバー。花言葉は”Be mine”、つまり”わたしのものになってください”。

随分と洒落たプロポーズだと衛士は苦笑しながらも、それを闇に溶ける紺色の迷彩服のポケットに突っ込んで、ヤコブにどやされぬようにと足早に屋上を後にした。

## まだ日常

自堕落な惰眠。

今はそれすら許されない。

身体に染み付いてしまった習慣が、このたかが七カ月で刷り込まれた生活が、如何に疲弊していようと精神をすりつぶしていようと、日本時間の午前四時に意識を覚醒させてしまうのだ。

また二度寝に就くことも出来るだろうが——この機関に来てから、二度目からの寢覚めが心地よかった例がなかった。それがたとえ休暇中であろうとも。

だから、晴れて狙撃の技術を会得した衛士は今日から一週間の休養を許されたわけであるのだが、例に倣ってその時間に目を覚ましていた。

「……あー、慣れねえな」

身体が沈む柔らかな布団。高い寝台。傷一つ内キレイなフロアリング。

常時外の明かりを取り入れている窓に沿って置かれる寝台から降りて、近くのシンク台へと近寄った。

そこにはガス台もあり、またシンク台と壁に挟まれるようにして冷蔵庫もある。衛士はそこで洗顔、歯磨きなどの整容を終えてから、日課のトレーニングを開始した。

——衛士がこういった比較的まとまな部屋を使うのは、この機関に所属するようになって初めての事だった。

それまでは訓練兵として寮に住まい、打ちっぱなしのコンクリートが目立つ部屋で、広さとしてはシングルベッドの一回り程度。また寝台は低く、マットレスも硬く。まとまな睡眠が取れぬ環境であったが、今ではそちらのほうが恋しく思うほどであった。

——地下空間。

そこは日本の関東圏から地下五〇〇メートルほどにある広大な空間だ。

『世界抑圧機関』日本支部はそこにあった。他にもアメリカ、ドイツに支部はあるが、特に目立つ本部というものは存在しない。それは、それぞれが同等の権限を持つことによって面倒な反抗心を持たせぬことが目的ゆえに適当な均一的な関係にあった。

そもそもこの機関が戦闘能力開発に於いて作り出した”異能系統”の技術が、そうせざるを得ない状態にしているのだ。

異能——現在では、時空間を切り裂く『次元刀』<sup>スリット</sup>や射出した弾丸を任意のタイミングで停止させる事のできる『遅延弾丸』<sup>スピードローダー</sup>。そして使用者の数だけ無数に存在する、肉体強化が主の『耐時スーツ』などがある。

これら特殊な効果を持つ道具を『副産物』と呼び、またそれぞれを使用出来る人間も限られている。

適正者と呼ばれる人間がそれらを使いこなす事ができ、適正の無い人間が使えば一時的に自意識喪失し、暴力的に暴走する。<sup>トランス</sup>

その適性の無い人間は、この機関では戦闘員、あるいは研究員となつてみな精を出していた。

そして『特異点』と呼ばれる存在は——それら副産物を体内に取り込みある幾つかの条件を満たすことによって、道具を介さずにその個体が特異能力を持つことが可能となっていた。

そしてこの、日本支部でも——来日している特異点を除けば——ただ一人の存在である彼は、

「ああ、つたく」

<sup>アップグレード</sup>上位互換と呼ばれる、適正者の中でも一等実力を持つ格式高い集団に属していた。

「誰だ、こんな時間に——」

不満を漏らす。

それを遮るように、衛士が向かった扉の向こう側で誰かが呼び鈴を押したのか、ぴんぴん——と頭の中にまで響く電子音を鳴らしてい

た。

脱いでいたシャツを適当に着て、洗面所からジーンズを引きずりだす。衛士はそれから首にタオルを巻いて垂れ流れる汗を拭いながら、鍵を締め忘れた玄関を開けてやった。

「——ん？ あ、ああ。奇遇だねえ！」

と声を上げたのは、何を隠そう来訪者の方だった。

何を以て奇遇なのか。何故最初に来るで知らぬ顔をしていたのか——頭を抱えたいくなるような女性は、かつて戦場で肩を並べ背を合わせて以来親しい友人となった『ナルミ・リトヴァク』であった。

セミロングの透き通るような金髪はそれでも、もみあげ辺りから後ろに回し纏められている。青い宝石の様な瞳を輝かせて、彼女は満面の笑みを浮かべていた。

地下故に立体映像である青空から照射される太陽が如き照明は、もう季節は秋ということもあって鋭い。という風に感じるのは気のせい、実際に変わっているのは些か肌寒く感じるその気温だけだった。

ナルミは寒そうにとつくり首の網目が大きいセーターを着こみ、下には太ももにぴっちり張り付くようなスキニージーンズを履いている。そんな彼女が胸に抱えている紙袋には、正直嫌な予感しかしなかった。

「今、何時だか言ってみるよ」

「えー？ つと、四時……三。分ちよい過ぎ」

ポケットからタッチ式の通信端末を取り出し、言われた通りの時間を確認した彼女は悪びれた様子もなくそう告げて尚、

「でももう起きてたでしょ？ 知ってるよ、僕は」

なんて、どう好意的に捉えても図々しい台詞を吐き出してみせた。何故だかごく自慢気に。

「ったくよー、随分と女らしくなったと思ったら、何だ？ そりゃあ」

「いーじゃんーじゃん？ せつかくの休みでしょ？ 僕もそうなん

だよ」

「仕方ねえな……寒いだろ？　上がれよ」

「へへへ、優しいねえ」

衛士が身を引くと、彼女は玄関に上がりこんで鍵を閉める。それからその場で衛士の肩をつかんで支えにして、寄りかかるように靴を脱ぐと、そのまま臍気な足取りで居間へと誘う青年の後をついていった。

それからおざなりに設置してあるテーブルに茶色の紙袋を置き、汗でも拭うように額に手の甲一閃を引いてから、椅子へと腰を落としました。

衛士はその対面に座り、不安が募る袋を睨みつけていた。

「なあ、真っ赤な噂にお前がまさかの料理を始めたと訊いたんだけどさ」

「ははっ、なんだよ？　真っ赤な噂って。でもよく知ってるね」

「エミリアさんから聞いた」

「ったくもー。エミリーも割と堅物なのに口軽いなあ。エイジを驚かせてあげようとおもったのに」

——エミリアとは、訓練兵時代に最も世話になった上司であり、また上位互換になった今は肩を並べる同僚となっていた。いわゆる腐れ縁状態にあつて、どうにも気が合うのか合わぬのかよくわからない関係にある。

上位互換の女性メンバーは割合に仲が良く交流が多い。そしてエミリアと、彼女と同じく訓練兵の教育に当たっていた男性との交友があり、その男性と衛士との流れもあった。そういった一連があつて、またエミリアとの定期的な接触もあるお陰で、大体の話は届いている。

だからこそ——その丹精こめて作られた料理が、込められた思い分だけとんでもなくケミカルな味になっているという情報を、衛士は忘れることが出来なかった。

「いやあどの道驚くと思うけど？」

「でもエイジはわざとでしょ？ 知ってるよ。他の女の子にもそーやって優しくしてるのは」

「ほ、他の女の子だったって。そこまで知り合いに女の子いねーって」  
「うっん。訓練兵の時の女の子だって、キミは格好いいし」あの時  
”の事があるから結構良い感じに見られてるから、偶然を装って声  
かけられてるし。僕、見てるから」

彼女は袋を手にとつてがさごと手探りで目的のものを見つける  
ようにして、ようやく重そうに、何かが大量に収まっている、袋の  
形状を取る包装紙を取り出した。

「なんだと思う？」

彼女は袋の口を留める針金を解き、中から黄土色の平べったい、  
手のひらに乗る程度の大きさの焼き菓子を取り出して見せる。衛士  
はそれを注視するような真剣な眼差しで睨み、ややあって、口を開  
けた。

「十中八九クッキーだな」

およそ認知出来るのは、衛士が今まで生きてきた中でその物体が  
クッキーという菓子に外観が類似しているということだ。ならばそ  
れがクッキーなのかと問えば、否とも言える。それは非常にクッキ  
ーに良く似せた他の食べ物である可能性があるからだ。

殊、<sup>こと</sup>手料理に良い評判を聞かぬ彼女の手作り菓子であるからこそ  
生まれた発想だが、だからといってその御託を調子にのつてべらべ  
らと並べる必要はない。

今求められているのは正確な答えではなく、彼女が何を作ろうと  
したかであり、実際に思い通りにそれが作れているか、主観ではな  
く第三者の観点から見ても正しく目的の物が目的の物通りに見えて  
いるかが大切なのだ。

だから衛士がそう応えた。

ナルミは途端に花が咲いたように明るい笑顔をつくって、「よか  
ったあ」と胸をなで下ろしていた。

「残った目も節穴じゃないみたいだねー」

眼帯に視界を塞がれない左目を指さして、彼女はどこか意地の悪い少女のように冗談っぽくクツクツと肩を震わせて笑う。そうしながら袋の口を衛士に差し出して、クッキーを促した。

「あーんって、したほうがいい？」

先ほど出したクッキーを指でつまむと、大きな口を開けてそう告げる。衛士はそれをかつさうようにして受け取ると、じつとりと睨まれるような視線を受けながらそれを口にした。

唇に触れるそれは乾いて固い。歯で噛めばひどく懐かしい食感があって、力を込めればそいつは容易に砕けて口の中に散らばった。衛士は手に残ったかけらも一緒に口腔に放り込んで、溢れる唾液に混ぜてじっくりと咀嚼する。

じんわりと広がる甘さ。特に目立つことのないバニラの風味に、程良く溶けたバターの味が心地よい。

聞いていたケミカルさの一切は無く、市販のクッキーと相違ない、否、手作りだからこそある気分的な高揚や暖かさがそこにはあった。

「うん。旨い」

思っていたよりも。

ドロドロになったクッキーと一緒にその言葉を飲み込んだのは秘密である。

「それは良かった。疲れてる時は甘いモノが一番らしいからね」

「だな。さっきトレーニングしてたから、ウマさも一入だ」  
ひとつお

「うふふ、これでも普通の料理も結構イケる口だよ？ キミの家系に一人は必要だと思うけど」

衛士はもう一つクッキーを頬張ると、それから大きく伸びをして首を鳴らし、全身の筋肉をほぐした。

それから何かを思いついたように指を鳴らして――。

「そうだな、ならお前にチャンスをくれてやろう」

偉そうに仰け反り、そして意地悪そうな笑みを浮かべる衛士を見て、やぶへびだったかとナルミは思わず項垂れた。

「……っはあ！ ムリムリ、もう限界！」

菱形状に編み込まれた金網のフェンスに自ら背を叩きつけたナルミは逃げるなどしない、もう降参だと示すように両手を上げて首を振った。

激しく肩を上下させて呼吸を乱す。垂れ流れる汗はセーターに染み付き、ゴワゴワと肌に不快感を与える。彼女は高鳴る胸を抑えながら、眉間に突き付けられるブッシュナイフを見つめ、顔面を蒼白にした。

「き、キミはまたバカみたいに強くなったね……いや、経験値が爆発的に上がったみたい。僕だって一応、肉体派だ。刀剣使いだしね。その実力で上位互換まで来たし、勿論キミが視る五秒間の未来だって考えに入れて更に何十手も先を予想して動いてる。速さだってまだ負けてない」

だけど最終的には追い詰められた。それは単純に、ナルミが考える何十手よりも多くを考えているか——彼女が思いつかぬ行動を予想外に行い、対処しきれぬ内に攻めきったからである。そして今回は見る限りに後者だった。

「まあチートみたいな能力もんだしな……だけど、これだけでも随分と慣れた」

蒼い輝きを漏らす右目は、実際にその眼中に鬼火を灯している。そうしている間はその眼は——衛士の頭上から自身を見下ろすような視点を得る。また彼の意味によって、衛士を中心に半径約十メートル以内ならば自在に視界を動かすことができる。そして同時に左目はその凄まじい視力によって元々持ち合わせる視界を広げている。まるで二つの監視カメラをそれぞれ別の視点で視ているかのよう

に、衛士は目の前の世界を認識しているのだ。

一人称、三人称の視点。本来人が持ち得ぬ後者を捉えられる彼だからこそ、コードネームは『神の視点』と相成っていた。

また同時に、現時点から五秒の未来を記憶に刻む。

五秒と経たぬ内に結果が変異すれば、また新たに変わった未来が

与えられる。それら全てを処理し理解し使いこなすのは、尋常ではない処理能力が必要となっていたが――。

「最大で五分。それ以上は集中力がもたないな」

何でもそつなくこなす彼とて限界があり、それ故に制限時間をこしらえていた。

処理能力が、彼の言ったとおり五分しか保てず、五分を超えると途端に集中力の低下。狙撃手段を選んでいれば焦点を合わせられず、近接戦闘ならば動きが散漫になる。そして同時に激しい頭痛に見舞われるというのが、衛士の経験則によって恐らく起こるであろうと思われるリスクだった。

衛士は手早く右目に眼帯を付け直すと、頭上から自身を見下ろしていた視界はすぐさま塞がれ失われる。未だ鬼火は燃え続けたままだが、能力の発動はいい加減に自由に操作でき始めている。だからそれもしばらくすれば収まると衛士は判断して、大きく息を吸い込んだ。

――時刻は既に昼半ば。

休憩を合間に入れて居たものの、それでも手合わせの総時間は五時間は超えているはずだった。

「悪いな、ナルミ。こんなのにつき合わせちまって」

ゴムで出来たブッシュナイフを提げて、衛士は彼女とは対照的に涼しい顔で、どこか困ったように笑っていた。ナルミは汗によって顔に張り付く髪を掻き上げて、それから大きく息を吐き出す。心底疲れたように嘆息するも、大丈夫だよと顔の前で手を振った。

「キミの助けになったなら、ソレでいいよ。僕は」

「まあ侘びつつ一訳でも無いが、お礼かな……昼飯でも食いに行くか？ オレの奢りだ」

――人気のない、ただっ広い空間。屋外であるそこは、衛士がついこの間まで訓練兵として走り回っていた屋外訓練場だった。  
グラウンド

既にここで訓練を受けていた者たちはみな卒業してそれぞれ戦闘員やら研究員やらの職につき、来年の四月まで放置されるこの場所

は基本的に自由に使って良いとされている。遊具のない公園のようなものだと考えれば良いだろう。

「ああ、キミって随分仕事に駆り出されるから、報酬貰っても使う暇無いもんね。銃とか趣味になりそうなもんだけど」

「まあな。預金は軽く大台に乗ってる。上位互換はフルオート火器の所有が許可されてるって言うけどさ、買うとしてもM4カービンとか、M82かVSSくらいしか欲しいの無いなあ」

探せば中心街あたりの火器を販売している店に置いてあるものばかりだ。これらを購入して私物にすれば、支給される装備から幅が広がり、様々な状況を想定して備えることが可能となる。が、私物であるがために弾薬代がかかるし、手入れも必要だ。その為には専用のキットか適当な道具を買わなければならないし、その分資金が必要になるが、資金面での問題は今のところなかった。

問題は、探して買って持って帰るのが面倒だという点にある。

「んで、何がいい？」

「あ、それじゃあ良い？ ちょっと遠いけど」

「はは、もう見当つけてんのか。まあいいよ、どこへなりとも」

時間的な余裕はまだまだ有り余る程だ。部屋に籠っていても陰気になるばかりだし、一人で出かけてもこの街には何があるのかすら判然としえぬのだ。探索をして、戻れなくなっても困りものである。だから、誰かと共に出かけるのが丁度よい選択に思われたのだが――。

「なるほどこうなる訳か」

念の為に途中のコンビニで金を降ろした衛士は、それが無駄になったことを今ようやく悟った。

「ふう。十月でも、動けばやっぱり暑いねー」

彼女は言いながらセーターを脱いで下着姿になる。下着と言っても色気のあるものではなく、スポーツブラと呼ばれるソレだった。無論、押しつぶされることなく本来の豊かさを魅せつけるそれは色

気を見せぬといえは嘘になるのだが——何も人前で着替えなくても良いではないかと、衛士は天井を仰ぎながら思っていた。

場所は、彼女の自室で洒落た抹茶色のソファ二つが向かい合い、その間にテーブルが置かれる居間。人で賑わう中心街に入り込むやや手前のマンションだ。

ちなみに先ほどの屋外訓練場は訓練兵のための施設が一緒になった場所であり、この地下空間の端っこの方にある。また中心街とはそこから三〇分ほど歩いた場所で——中心街とは名ばかりで正確には中心などではなく、ただ商店が多く、賑わっているだけの場所である。

「てかキミ、ナイフばっか振ってるけど射撃練習とかしなくて良かったの？」

「この六十日あまりで何千何万発って撃って、狙撃銃を抱いて寝かせられたくらいだ。たまにはマトモに身体動かさねえと、いざって時に困るだろ？」

そもそも、今はただ単に射撃のセンスを見出されたから狙撃兵として育成させられ、ようやくつい昨日の深夜に教育課程が終了しただけなのだ。技術としてはまだ経験が浅いものの、まず実践に出てあらゆる状況に出くわしてもある程度は対処できるくらいは身に付いているし衛士自身そう出来ると自負している。

が、そもそも彼とて肉体派。その拳やナイフ、機動力で敵を翻弄し打倒してきた数のほうが、弾丸よりも圧倒的に多い。得意というわけではないのだが、だからといって放っておいてサビつかせるわけにもいかないだろう。

「なら、僕は？」

彼女はそう言って、下はジーンズを履くものの、上半身は下着姿のまま両手を広げて衛士に襲いかかる。

見下ろす形となる彼女の頭を衛士は掴んで腕を伸ばせば、どれほど手を伸ばしてもナルミの指先は衛士を掠める事しか出来なかった。「意味が判らないが——」

嘆息混じりに返す言葉を、遮るように呼び鈴が鳴り響いた。

衛士は弾くようにナルミを突き飛ばすと、彼女に背を向け玄関へと向かう。その間に慌てた様子で服を着るナルミの姿には、なにやら不倫相手と密会している所を慌てて隠す人妻のような雰囲気があった。

——玄関に到着すると、なぜか施錠していた筈の扉を開けて玄関内にて仁王立ちする女性の姿。

真っ赤に燃えるような髪が特徴的である彼女は、白衣を羽織って、そして赤い縁のメガネをかけていた。

「お楽しみのところごめんなさいね？」

「……何の御用です？ アイリンさん」

「あら、その名前で呼ばないでって言ってるじゃないのよ。右目を実験体にするわよ」

腰に手を当て、上位互換の一人である彼女は背を反らす。が、見上げるには至らずにただ衛士の姿を視認しづらくなったただだった。——上位互換と言っても彼女には戦闘能力は皆無である。評価されているのは研究内容であり、聞く処によれば幼少期よりこの地下空間で育っていて、その頭脳を見出されたとの話である。

現在では副産物の開発や付焼刃スケアクロウと呼ばれる、特異点とは異なる超能力者の研究などを主に専攻し、如実に結果を叩き出していた。

そんな彼女と衛士の接点といえば、ただ訓練兵時代の施設で保健医役として彼女が居たというだけの事である。

「右目塞ぎや監視視点かみのめも塞がるんすよ、勘弁してください——って、んな事良いんです。わざわざ休日初日狙ってこんなところに来るくらいだから、また妙に面倒な事でもあるんじゃないですか？」

衛士の嫌げな視線を受けて、彼女はにつこりと微笑むというよりはわざとらしい、不敵な笑みを浮かべて指を鳴らした。

「アナタに二つの朗報があるわけだけど。良い事と悪い事、どちらから訊きたい？」

ずっと上品な口元は歪んだ笑みを浮かべ、大人っぽい顔立ちは一

―その実二十代後半という立派なオトナなのだが――どちらかと言えば悪女っぽく変異する。

衛士は聞かずにそのまま逃げ出したくなったが、何の連絡も、位置情報を垂れ流す通信端末も持たずに外に出たのにも関わらず場所が判明されたのだ。無駄な抵抗はしない主義である衛士は、うんざりしたように肩をすぼめて首を振った。

「良い方からお願いします」

「アナタの部屋の隣に”ミシエル”が越す事になったわ」

名が上がる女性もまた、上位互換。

そして平凡な高校生だった衛士が、この世界と接触するきっかけとなった人物だが――この地下に来て以来、出会う機会がまるでなかったその人であった。

「……悪い報告は？」

「アフリカでの偽装紛争中に協会の抵抗があつてね。いつもなら半分くらい蹴散らした後で尻尾巻いて逃げるんだけど、今回は随分と強い能力者が居たみたいでね。いわゆる”覚醒者”？」

「……思ってますけど、アイリンさんが知ってる固有名詞で言われても、何も知らないオレはさっぱりなんです」

「ま、覚醒者つてのは例えよ。変異体とでも言い換えられるわね。ともかく、紛争地帯での虐殺を目の当たりにして超絶的な精神的ストレスと極限の自暴自棄による自我の開放とが合わさって、なにやら超心理学的な化学反応が起こって超能力を手に入れたわけね。一般に付焼刃って言われる能力者は後付で、他者による”催眠効果”によって目覚めるつてのが殆どだから、今回出てきた自力で目覚めた能力者は結構、希少かも」

「クイックシルバー的な感じですか？」

クイックシルバーとは女性のヒステリーが起こす心霊現象である。ポルターガイストおよそ通常では説明のつかない事象が起こる事だ。

彼女は最もらしい用語を交えた説明を終えると、大きく息を吐いて両の手を拳に変えて、腰にやった。

「つまり、協会が作った超能力者は養殖だけど、天然物はバカみたいに強いってわけですね？」

「そういう事になるわね」

「特異点は養殖できないんですか」

「ああ、それはもう才能っていうか、適正が飛び抜けた上でセンスと特別な条件が必要になるからね。まず極限状態でも打たれ強いタフな精神が必要だから、そうそう生まれないわ。耐時スーツも新しい段階に進化し始めてるし、適正者で十分。発火能力者の付焼刃バイロキネシス スケアクロウを生む位なら火炎放射器持たせたほうが断然コスパがいいわよ」

——そこまで話を進めると、背後からドタドタと騒がしい足音と激しく乱れる息遣いが迫ってきた。

振り向くまでもなく予想のつくその姿にため息をつけば、アイリンは衛士越しにナルミを見てニヤニヤと嫌らしい笑顔を顔面に張り付けていた。

その表情は模範的な、十八禁の女医のものだったが、どうにも嫌な感じがするそのいで立ちに衛士は思わず顔を引きつらせてしまう。そんな彼に気づくアイリンが、一瞥するように彼をにらむ中で、やがてナルミは衛士の横に現れた。

「どうしたんですか？ 仕事の話？ エイジって、休みじゃ……？」

「ああ、今アフリカで”いつもの作戦”が実行中じゃない？ そこでちよつと問題が起こってね」

「問題？ まさか、部隊が全滅したり……僕たちの出番、ですかね」アフリカでの作戦は主にドイツ支部の仕事である。だが、だからといって日本が無関係というわけではなく——たとえ関係ないと言えるほどでもない問題ことが起こったとしても、同じ国際機関として形だけでも援助をしなければならない。

そしてアフリカまでの出張といえは確実に一、二週間は潰される。そうなれば衛士と過ごせる時間は確実に飲まれて消えてしまうことだろう。

ナルミはそこまで想像して、目を見開き顔を青ざめさせていた。

「それは無いわね。作戦自体は、最近多い協会の抵抗があっただけで目的通り、大都市のスラム街を半壊、飢餓で死にかけてる村をいくつか廃村にして成功したわ。ただそこにちよつと特別な付焼刃が出てきて、彼に話を聞きに来たつてわけ」

「ああ、そう言えば何ですか？」

「今のところ、付焼刃との接触が一番多いのがアナタつてわけだけど——付焼刃が一度でも、時空間の歪みを知覚した事があるかしら？」

「時空間の歪み……。例えば、オレでしか知りえない『時間回帰』を、敵がなんとなく勘づいていたり？」

アイリンは頷き、先ほどとはまるで対照的に真剣な眼差しを衛士に向ける。

衛士はそれを受けて、回想する記憶の海へと飛び込んだ。

——以前は『砂時計』と呼ばれる、五分だけ時間を巻き戻せる副産物を使っていた。と言っても、使用した瞬間に五分を巻き戻すという便利な品物ではない。

砂時計を設置し、五分を計る。そして五分が経過し、その五分間を体験した瞬間に、砂時計を設置した時刻、時点まで時を巻き戻すという大変面倒な道具である。

最も、それを理解できるのは使用者である時衛士と、少なくとも副産物に適正があつて尚ある程度の技量を持つ上位互換の連中のみ。理解すると言っても、正確には時間回帰によつて歪んだ時空を肌にかけて”なにかおかしい”と認識する程度が殆どで、五分の時が巻き戻つたと完全に理解できる人間はわずかであつた。

そして——適性は無くとも特異点に似て非なる特殊能力を扱える付焼刃連中は、果たしてその時空間の歪みを知覚できただろうか。

衛士はそれまでの戦闘を思い返してみ、それから大きく首を振つた。

「たぶん居なかったハズ、です……」

「”たぶん”じゃ困るのよ。本気で言い切れないなら、このまま研

究所に連れてって記憶掘り出すわよ？」

「……居なかった。ええ、オレの記憶が改変されてなければ砂時計を理解した人間は居ない。”破壊”されたのだって、結局は『ナガレ』の命令だったろうし」

「ああそう。なら残念ね」

ぽかんと、話についていけずに口を開け間抜けな顔をするナルミを置き去りに、アイリンは哀れだと言わんばかりに嘆息した。

衛士も彼女が次に言う事が”視えて”、思わず肩を落としてしまった。

マジか、と漏らす言葉に、アイリンは予知能力で先読みしたのだと理解する。だが、優しさ故か、彼女は改めて言い直した。

「ようやく一を聞いて百でも千でも理解出来るようになったのね。これでやっと上層部も力が抜けるわね」

前置きを一つ。それは、衛士から離れてしまっただけで残念そうに顔を蒼白にしたナルミへの配慮というよりは、純粹な感想だった。

なぜ彼女がそれほどまで衛士に依存しているのか、正直な所アイリンにもわからない。単純に慕っている、好いているという領域を超えて、彼女個人は既に恋人気分だ。これが悪い方向に向かわなければと願うばかりで、どちらにせよアイリンには手のだしようの無い事である。

「精鋭メンバーで、今回の天然物が潜伏しているらしい南アフリカに飛んでもらう事になるわね。詳しい話はまた後日、エミリアが呼び出しに来ると思うわ」

「……またすれ違いですか」

「しょうがないじゃない。コレばかりは、あたし達にも予測不可能だったんだもの。不平垂れるなら早く千里を見渡しなさい」

「はは、んな事したら処理追いつかなくて頭沸騰しますよねっぽっそう」

「ならその脳みそに電極差して、今使ってる量子コンピュータと物理的に……有線接続すればいいんじゃない？」

「全世界を随時継続的に仔細に監視って……ソレこそ神の領域です

よ。人間はそんな事までなくていいんです。いや、その前に物理的に死ねますけど」

衛士がうんざりして首を振ると、アイリンは軽く笑って、それじやあと手を上げた。

「あたしも忙しいのよ。ちょうど今、実験の結果待ちで転送してもらっただけだしね」

彼女はそう言って指を鳴らす。

そして白衣のポケットが不意に発光して凄まじい光が空間を飲み込んだかと思うと——次の瞬間、光が失せた時には、アイリンの姿はなかった。

「まあ、そういうわけだな」

衛士は呆然とするナルミをよそに、便乗して帰宅することに成功した。

## 神父の知らない世界

世界は平和である。

そうほざいたのは一体何処のどいつだろうか。もしそんな事を口  
にしている野郎がいたら、たとえ餓鬼でもぶっ飛ばしてやる。

——男の悪態は心のなかにとどまらず、ぶつぶつとあたりの瘴気  
を撒き散らすようにしてつぶやかれていた。

焼けた人肉の汚臭が嗅覚を麻痺させていた。

焼けた家屋の煙が周囲の状況を曖昧にしていた。

女の悲鳴。男のげひた笑い声。

連続した、フルオートの発砲音が響く。

途端に衝撃。大地に凄まじい重量の何かが叩きつけられた音がす  
る。地が揺れ、視界が縦に揺らぐ。直後に鼓膜を突き破るような爆  
発音が響いて——隣の区画が、一瞬にして消し炭と化した。

それが列車砲による攻撃であることを彼は理解している。ソレを  
見て、早く逃げろと街に戻ってきたのだから。

そして間に合わなかった。

打ちひしがれる間もなく、一つの都市はわずか一時間足らずで崩  
壊していた。

たった一発の約五トンの榴弾が、広大なこの街を、区画をたった  
一撃で炎に飲み込ませてしまう。

一万人前後の人間が為す術もなく圧倒的な武力の元で、一秒にも  
満たぬ時間の中で肉塊と化す。そしてその肉塊すらも炭となって、  
個体としての区別をつかなくしていた。

「まったく、いつ見てもド派手だなあ！ この——人口削減？ って  
やつあ」

「ははは！ ざまあねえな。文明の進化を止めて繁殖ばつかしてる  
ツケだろ……つか、さっさと避難しねえとこっちもアブねえ。榴  
弾がもう近くまで飛んで来てんぞ」

「気にしなさんなつて。ここはもう制圧終わってんだ。しかも榴弾  
つたつて、アレ一発いくらだと思う？ 無駄弾撃って金ムダにやし  
ねえだろ」

「ははは！ 違いねえ！」

自己喪失して棒立ちする男の脇を、武装で固めた二人の兵隊が横  
切る。先ほどまで肩に担ぐその突撃銃で逃げ惑う人間を撃ち殺して  
いた彼らが、もう飽きてしまったように、興味が失せたように標的  
の一部であつた男を過ぎていった。

それでも——世界は、平和なのか？

平和ってなんだ。

こうすることが、平和につながるって事なのか？

「初めに」

冗談じゃない。

こんなのが平和なら、私は、わたしは——。

「初めに、神は天地を創造された……が、貴様等のようなクズを造  
つたのが、我が信ずる神の唯一たる汚点だ！」

わたしは今涙を流しているのだろうか。

どうしてだろうか。視界が鈍く歪んでいる。

「ああ？」

二人の男たちが反応する。流れるように、訓練に訓練を重ねたで  
あろうその研ぎすまされた動作で、振り返ると同時に彼らは突撃銃  
を構え、その銃口を彼に向けていた。

距離にして五メートル。初速七三。メートル秒である銃を、引き  
金を引かれれば、次の瞬間には男の命は散っているであろう。

だが——。

「ぐああ……？ 何だ、こりゃあ？！」

「クツ、息が……何だ、首が……あああッ！」

持ち前の黒い肌が多い南の地で珍しい白い肌。同色の黒い衣服は  
ロングコートのように長く、スネより下まで伸びている。目立つの  
は、そのコートの胸に刻まれる、白い十字架だった。

兵隊が、突然銃を落として首を押さえ始める。そして力を込め、己の力で己の首を、それぞれがそれぞれなりの早さで、力で、締めていた。

——薄い茶の髪は根元から白く染まり上がる。バラが、色の付いた水を吸ってその花の色を変異させるようだった。

「神に背きし哀れな子羊よ……我が神通力により——去ね」

太い血管が浮き出る手を、力強く握る。

瞬間。二人の男はおよそ自身ですら出したことのない激しい腕力、握力によって喉を掻っ切り、そして間もなく絶命した。

タイミングをずらして肉塊となった二つの人形は音を立てて地に倒れる。

「……神よ」

同時に膝をつく男は、兵隊が落とした小銃を手にとっていた。

使い方は分かる。心の中でつぶやいて、銃床ストックを地に立て、黒煙に

塗り固められた空を仰ぐ銃口に顎を置いた。

「わたしはあなたを、恨みます」

辛うじて触れる指先で、力強く引き金を弾こうとしたところで――

――男は支えを失い、不意に前のめりに倒れてしまった。

三点倒立の出来損ないのように頬を地面に擦りつけて、尻を突き出す。ひどくはしたない格好に男は驚きながらも慌てて立ち上がり、そしてまた、先ほどまでは居なかったはずの気配を捉えていた。

眼の前の影。兵隊とは違う迷彩服を身にまとう五人の連中。その先頭に立つ一人が、光の失せた男に手を差し伸べていた。

「神父様。その力は神によって与えられたモノ……。神は人の沙汰に手を出すことは無けれども、神は神を信ずる人の助けとなる。貴方はその力で、その力をどうすべきか……ご判断なされるでしょう」  
「わたしは……この街を、わたしの幸福を奪った連中を……。ああ、そうか――わたしは、神の仰せのままに」

——純然たる超能力者は、こういった極限的な状況によって生まれる事が殆どだ。

人為的に与えられる超能力とは比べ物にならぬほどの成長と強さを併せ持つ。いわばサラブレッドのような存在。

今のところ、『機関』は自らの仕事に夢中で、その仕事によって協会に塩を送っていることに気づいていない。

機関の仕事は——その圧倒的な軍事力によってテロ行為を未然に防ぐ事。そして今回のように、人口爆発による飢餓や財政の不安定などを解消するために、紛争を装って数万単位の人民を虐殺すること。最も、身内にはもっともらしい説明をしているだろうが、やっていることは大きく分けて矛盾のあるその二つであった。

そしてその機関と対立している協会が目をつけたのは、言わずもがな。今回のような事である。

怖氣がするほどの強力な念力使用者。テレキネシストまさに神通力なのだが、まさか神父がそれを手に入れるとは、なんとも話の種になりそうな出来事だった。

「……宜しく、お願いします。わたしの名はスコール・マンティア」  
「ようこそスコール神父。我らが協会……スケアクロウ付焼刃推進協会へ」

「スケアクロウ……？　なんです、それは」

——あ後の連中五人の抵抗は、それはそれは手に汗握る健闘だった。

列車砲からの弾道を見きって避け、街を守ることはしないものの、避難し始める敵兵の悉くを殺戮した。手段は様々で、瞬間的に首を刎ねる者、前に回りこんで口に手を突き刺して炎を飲ませる者、単純に射殺する者など、どれもが一撃必殺とも呼べるものだった。

そしてスコールが居た区画の敵をひと通り殲滅し終わると、追手が来る前に、と今度は彼らが逃げ帰ったわけである。

「まあ、アナタが純然と持つ超能力が、他者から後付けされた能力者ってトコですか。本来持つべき人間でないから、アナタほどに伸びしろは無いから成長が皆無。ホントにその場しのぎって感じなんです」

総数五人は結局五人のままあの戦地にやってきて、最後の方にまごまごと場を乱して数十人を血祭りにあげていた。そんな彼らはスコールと共に、用意していた護送車のような装甲車で道を南へと走っている。

目的地は彼らの活動地点であるらしいが、この大陸ではあの街から出たことがない彼にとつては何処へ向かっているのかサッパリで、どこか不安であるのが否めなかった。

窓から見える景色は荒野。まるでデスバレーにでも来てしまったかのような錯覚を覚えてしまう。

「つまるところ、我々はそういった能力者で構成される集団です。目的としては——ご存知は無いでしょうね。世界抑圧機関というものを、知っていますか？」

「世界機関って言うのと、国際機関ですよ。今の連中がそうだとしで、なぜそんな機関があのような事を？ 名を騙るテロとか……」

すっかり真つ白に染まり上がってしまった髪を掻き上げて、神父は前かがみになるように両手を組んで落とす。車内の側面に沿うソファーのように置かれる座席は向かい合い、外套を羽織りフードをかぶって顔を見せない五人は、それでも彼と対面する男以外は特に黙る事もなく雑談を交わしている。

スコールの台詞に呆気にとられたように口を開ける彼は、それかなるほどと、何かに納得するように頷いた。

「世界抑圧機関は人口調整と対テロを掲げた機関です」

「人口調整……あの、とんでもないテロ行為で？ そんなの、矛盾している……！」

「いいんですよ、そんなの彼らには建前に過ぎないんですから」

「た、建前？ は、ははは。まるで秘密結社みたいな活動ですね、それ」

にわかには信じられない。説明される内容すべてが世界の闇だ。今まで、まるで触れる事のなかった世界。これまでソレが、表の世界でいかに綺麗に上手く隠蔽されていたのかが理解でき、そしてそ

れ故に、今聞かされる話の全てが嘘なのではないかと疑えてしまう。  
出来た話だと捨てることは簡単だった。

スコールに否定が出来ればの話だが。

「すでにこの機関は数百年未来の技術を手にしている。時間回帰に  
時空間の操作、転送装置。そして我ら付焼刃ステイクローさえも持ち得ぬ特殊能  
力を有した道具の数々……何よりも、その莫大な資産と協力的な兵隊  
たち。その存在、保有により多くの国々がこの機関と協力関係にあ  
ります」

「恩恵を受けようとして、ですか。それほどの力があれば、世界掌  
握なんて夢じゃない……。もしかしたら、機関の目的さえもそんな  
のかもって事もありえますね」

「あはは、さすが神父様。彼らの目的は”たぶん”合意の元での世  
界統一。つまりは、誰もが認める世界の長者となるって事です」

馬鹿げた話だ、と若い男の声が悪態をつく。

スコールはソレを何処か、夢のなかで聞く言葉のように受け止め  
ていた。

怒りも悲しみも無い。漠然とした、規模の大きい話を聞く感覚。  
自分には関係のないことだろうと他人ごとに理解する言葉の数々を、  
やはり実感することは不可能だった。

「で、でもこんな力づくで街を潰して、全世界から慕われる筈がな  
いでしょう？ だからこそ、あなた達のような存在が生まれた……  
でしょう？」

「これはある意味で、彼らの思惑通りなのかもしれませんね」

「……ど、どういう事でしよう」

「世界に圧倒的な力を見せつける。そして実際に膨大な人口によつ  
て様々な問題が生じる国を、今回の人口調整によって減らし経済回  
復などを図る。更に、我々のような力を持つ反乱因子をあぶり出し  
——潰す。適わぬとなれば、腰を上げ拳を振り上げる連中も大人し  
くせざるを得ません。結果的に残るのは、手を出さなければ幸福を  
得られる、その選択を選んだ人間だけです」

前屈体勢を直して背筋を伸ばした男は、それからポケットをますぐりタバコを一本取り出す。

慣れた手つきでオイルライターを使って火をつけると、胸いっぱいに煙を吸い込んで、紫煙をくゆらせた。

「我々は抗う能力ちからを持っている。調子づいたその横っ面を殴り飛ばすチャンスです」

「そこで、あなた方と同様の能力を持つわたしが、誘われた訳という……」

「ええ。今は念力——いわゆる神通力に目覚めている神父様ですが、これからまた進化する余地がある。貴方には未来がある。我々とは異なる、先へ進む力がある。これは単純な戦力の強化は勿論、士気の向上に繋がります」

「いや、わたしなんて。ただこの能力で穢れを浄化さえ——つまり、その機関さえ潰せればそれでいい。わたしはそれだけです」

「それだけでいいんです。それで十分なんですよ、神父様——」

ガタガタと車が激しく揺れる道もやがては消え去り、固い座席によって痛くなる尻が、不意に一等大きい弾みによって一瞬浮いた。そして叩きつけられる身体は、同時にエンジンの駆動が失せた床にふせられた。

「疲れたでしょう。小休憩です」

痛めた腰を撫でながら辺りを見ると、外套の男たちはそろそろと出口から身を投げて外へと出ていく。スクールは這い上がるようにして立ち上がって、窓から外を見れば——近くにはたった一軒の宿らしき建物が、荒野の中にも不自然に建っていた。

「明朝に出発します。まだ道のりは長いので、今日はここで宿泊をしますので、ごゆっくりお休みください」

男はそう言つて、フードの下から爽やかな笑顔をのぞかせながら、神父へと手を差し伸べた。

## まだまだ日常

「……こつ、これがVSSですか」  
緊張する。

この、一定の距離内ならば威力を維持する亜音速弾薬を使用することによって驚異的な消音効果を持つ狙撃銃は、その殆どを大型の消音器と木製ストックで構成されている。それを前にして、衛士は珍しく胸を高鳴らせて、大きく息を吐いた。

この世界に踏み入れる前よりなぜだか名前を知っていた銃だ。確かゲームが何かで知ったのだろうが——まさかそれを手にする日が来るとは思わなかった。

師匠となっている男にこの銃の有用性を訊いてみた時は、「目的さえ果たせば別に発砲音で居場所がバレても関係ないでふ」などと言っていた。そして確かに、音ですらなく、既に発砲によって何があっても無くても位置が敵に察知される可能性があるのだから、彼の言葉は確かかもしれない。

が——それとは関係なしに、あこがれの的なものがある。

どうせ狙撃銃を買うのなら良い物がいいだろうが、衛士は構わずこれを選んで居た。

「ん？ ああ、だな」

無骨な反応を返す店主は、肌寒い季節に黒のタンクトップ姿で仁王立ちをしていた。

——店内は二十畳程の広い空間で、壁一面にそれぞれ拳銃、アサルトライフル、カービン銃、狙撃銃などが飾られて、壁に沿って並ぶ展示品でも入れるようなガラスケースの中に、さらに様々な火器類が置かれている。

そして何よりも目立つのが、店に入って正面にあるカウンターの奥にある対戦車ライフルだった。

何よりも大きく、見るだけで重量感溢れる外観。これを一発撃つ

だけでどれほどの衝撃に襲われるのか、想像がうまく出来なかった。

「なんだお前、ライフルが欲しいのか」

「まあ一応」

「ならん物よりこっちがオススメだ。狙撃なんぞ目的さえ果たせればいい。位置がバレるのが怖くて何が出来る？ 狙撃兵は暗殺者じゃない、陣形を乱して活路を作る……それが役割だと学校で教わらなかったか？」

「……ええ、技術的な事しか」

「ただの戦闘員にはできないことが出来る。それはその場ではお前にしかできないことだ。そいつをお前がする。しなけりやならない——と、ここに来た客にこの前伝えろって言われてな」

「……し、師匠お——っ！」

まさかここに来る事を予測されていたとは思わなかった。

あの巨漢の男が——ここまで考えていたとは。

あのナリでどこかつつきやすそうでありながらも、技術しか与えず、後は食事をする時くらいしか時間を共にしない、一緒にいて冷めていると、故に狙撃兵に向いているのかとよく理解できたあの男が。ヤコブが衛士の事をここまで考えてくれていたことに、思わず感涙してしまいそうになった。

あの肥満男は伊達に戦場で十年ばかりを過ごしていないというわけだ。

いくら師匠と言えども友人の様に接してきた男を上にとって、衛士は初めて彼の存在を誇らしく思うことが出来た。

「つー訳で、その師匠とやらのオススメ品は既に料金支払い済みだからな」

というわけで、とカウンターの奥に引っ込んだひよる長の背丈が特徴的な男は、その手にギターケースのような黒い袋を持ってやってきた。

「レミントンM700、素人が使うにも良い銃だ。弾は7・62mmって分かるか？ 単三電池より細くて長い。アレな。それと——

服を預かつてる。よくわかんねえが、これも合わせて銭別だだよ」

手に丸めた上着を掴んで、男は銃を手渡した後にソレを投げた。

「なんだこれ……ホントになんだこれえっ?!」

銃を脇に挟んで広げて見るソレは、腰までしか丈が無く、それでいて中指に紐を引つ掛けるように袖から輪が垂れている。革で出来たそのジャケットを衛士は広げて、随分とまた自分に合わぬ代物を寄越したものだと思息した。

胸と腹についているジツパーを開け閉めして、中になにか入っている事に気づく。取り出してみると、指ぬきのこれまた革製の手袋だった。また大きく開く事も閉じる事もできる胸元をいじってみて、それからそれをまた脇にはさみ、ケースのストラップを肩に担いだ。

—— 目的の物は手に入らなかった。

だがソレよりも遙かに充足感を得られるものを、衛士は胸に抱いていた。

大切に使う。まだ技術的にも十分とはいえないし、この能力が無ければ上位互換ではピカイチのザコだ。ならばせめて、期待にだけは……。

「そいじゃ有難く貰って行きます」

「おうよ。一応ここらじゃ品揃えは一番だと自負してっからよ、ひいきにしてくれ。整備<sup>メンテ</sup>も弾薬も安くしとくし——と、安くするにや名前がわからにやな。俺はブレ・ステイ。あんたは」

「時衛士。よろしく、ステイ鉄砲店の店長さん」

まだ日が高い。

とはいえ、この地下空間では何故だか夜という時間帯が無いのだからそれが当たり前なのだが——どのみち時刻的にはまだ午前十時が少しばかり過ぎたところである。担ぐ荷物が少し重い、それでも武装をしている訳ではないから別段苦労だというわけではない。去り際に渡された紙袋には、弾薬が入っている紙箱がいっぱいに詰まっていて、むしろそっちの方が重い程であった。

「あ、やつべ……カービン銃買うの忘れた……。携行マガジン増やしたいからチェスト・リグも欲しいんだけどなー、いや、狙撃兵にはいらねーか。でも買つというて損は……。金はあるんだし——」

気だるげに空を見上げて歩いていると、不意に横から飛び出してくる影を”視た”。

そして長い金髪を翻したまま胸に飛び込む、胸の大きな少女が胸に飛び込むまでの展開を理解し、衛士は回避することなく、前を見据え眼差しを鋭く歩き続けた。

すると視界の端から飛び出てきた黒い影が、衛士目掛けて猪突猛進気味に勢いづいて襲いかかり、

「きゃっ！」

などと、まるで急に飛び出てきた何かに思いがけずぶつかってしまった際のような悲鳴をあげる少女が、弾けるようになるけふためく中で手を伸ばし、力強く衛士のシャツを掴んだ。

が、勢いと体重、それらが合わさった加重に耐え切れぬただの布で出来た長袖シャツは、絹が裂けるような———というか絹が悲鳴を上げてその身をボロ布へと瞬く間に変えてしまった。

どすんと鈍い衝撃が大地を走り、彼女は短いプリーツスカートから桃色と白とのストライプ柄のショーツをあらわにする。一方で傷だらけの肉体を日の元に晒された衛士は身体前面を無防備にしている、この場合は一体どちらの恥辱的ダメージが大きいのかわからない状況となってしまう。

少女は慌ててスカートを股間部に押し当てて下着を隠し、衛士は為す術もなく呆然と立ち尽くす。

「み、見ましたか……？」

彼女の開口一番は、驚くことにソレだった。

頬を赤らめ、いかにも生娘の居で立ちで女の子座りでその場にへたり込む。上目遣いになるその瞳はキラキラと宝石のように輝く琥珀色。透き通るように白い肌は、絵画の中から出てきたようだった。「見たけどお前その台詞なんか違うだろ、お前わりとマジで」

短く息を吐き、弾薬の詰まった紙袋を落とす。それから重いものを持っていたせいで上手く指が開かない手を彼女に差し出すと、少し躊躇ったように顔を背けた後、どこか不機嫌そうに手を取り、体重を掛けて立ち上がる。

服についた埃や砂を払い終わると、彼女はそれから、また上目遣いで衛士を睨みつけた。

「衛士さんは、暫く合わない内にえっちになりましたね。失望物ですよ、これは。いけませんよ、ほんとに」

「おい冗談は行動だけにしてくれ、”ミシエル”さんよ」

——久しぶりに会ってみれば、随分とくだけた風の少女は記憶の中の存在と食い違っていた。

「あの時よりは強くなっただかも知れませんが、それでも私はあの時の衛士さんの方が好きでした」

何よりも悲壮感がない。儚さがない。喋れば、何処にでも居るような少女だった。

身体のラインを浮き立たせるぴっちりとした黒のタートルネックを着て、彼女は胸元で手を組む。対する衛士は、やはり代わる事のない胸に腹を丸出しにした格好で立ち尽くすばかりである。

「あの時って……？」

最後に会ったのは、衛士と出会った事、起こった事すべての記憶を喪失した彼女だった。だからそんなミシエルの前で格好良い姿を見せた覚えはないし、意識した事はない。ただただ、この機関の卑劣で無情で残酷なやり方に怒りしただけだったのだが……。

「忘れたのですか？ 貴方がまだ平和な世界にいた時の頃……私が全ての発端となってしまうた、あの接触以降の事です。私が貴方を見つければ、その才覚に気付かなければ貴方はこの世界に——」

まるでそれが無かったように、彼女は語り始める。

——今まで衛士を選んだのはこの機関の長たる人間だと思っていた。ソレが、その上層部（おおいへ）が選別し、派遣員（はんぱん）を使って適性や才能のあ

るものを連れて来る、あるいは資質を見極めるための試練を課すのだとばかり思っていて、疑うことを知らなかった。

それはある意味で純粹だったのかも知れない。純情だとも言えるかも知れない。

言い換えれば単純で愚かだ。この上なく。

彼女が衛士を選び、彼女が衛士の平和で平凡だった人生を狂わせた。

血に濡れ、血で血を洗う、血に渴く、血に飢える、血生臭い戦地に追い込んだ――そうした人物を、そいつだけを恨み死に至らしめようと考えていたのに……。

「アンタが……アンタが、オレを……？」

「そう、私が」

見据える瞳。琥珀色の、猫のような瞳が衛士を捉える。

先程のふざけたような口ぶりは捨て、言葉には熱がない。口はきゅつと結ばれ、胸元に当てていた手を降ろしてスカートをたくし上げる。すると女性はみなそうすることが義務なのか、太ももに括りつけられているデリンジャーを彼女は抜いた。

「これまで、様々な過程を経てようやく私はこの記憶に戻りました。それは貴方を、様々な事象によって心を揺るがし精神的に追い詰めることが目的でした。貴方を、特異点にするために」

「……そうか。オレがここに来た時から、オレがこの能力を得るのは決まってたってわけか」

だからアレほど酷烈なものばかりが襲いかかった。これなら戦争に参加したほうが遙かにマシだと思えるものばかりが、重点的に、ゲリラ豪雨のように降り注いだのだ。それが意図的なものなのだから、最早返せる言葉も無いほどに脱力してしまう。怒りを通り越して、呆れるくらいだった。

「結果的に貴方が特異点となったきっかけは……。貴方にも思うところがあるでしょう？ 覚悟は出来ています。貴方のすることなら、なんでも受け止めます」

彼女は衛士が落とした手を両手で掴み、その手のひらにデリンジャーを握らせる。

冷たいプラスチックの感触が伝わり、指を絡ませ、その引き金に指を引っ掛けさせた。

後は撃鉄を上げるだけ。それで弾は人の命を奪える発砲を簡単に行える。ただ指に込めるだけでソレまでの人生を台無しに、のみならず関わった人間に様々な影響を及ぼすであろう死を与えられる。この手のひら大の小さな武器は、そうすることを簡易化したものだった。

「ああ、そうか。よく分かったよ」

道には珍しく人気がない。

まるでこの地下にはミシエルと衛士しか居ないようだった。

腕を引き上げる。曲げた肘を伸ばしきるよりも早く、握った銃の発射口は前髪で隠れる額に触れた。

「こうされたいんだろ？」

引き金に込める力を少しだけ強める。するとカチリと金属が擦れる音がして、ミシエルが力強く目を瞑った。まぶたを閉じると涙が溢れ、まつげを濡らす。

そうだ。明らかな殺意を振りまいて無表情のままこうして、恐怖を感じぬわけがない。前線を引いていたのなら尚更怖いはずだ。

機関に自身の記憶を玩具にされ、既に頼るものが同様に機関の狗である友人でしかなければ安堵ができない。だからこそ皆が皆ではなくとも、力を求める。せめて翻弄されぬよう、機関に弄ばれぬよう、あるいは捨てられても生きていけるように。

彼女にはソレがない。抛り所がない。自分を自分で守れない。誰かに守ってもらおうとも、その誰かの足かせになることしかできない――。

「ミシエルさん。オレがアンタを殺しても、寝覚めが悪いだけだ。無抵抗な人間を殺すほど落ちぶれちゃいないさ」

手を開いて銃を落とせば、ソレは軽い音を立てて地面に叩きつけ

られる。撃鉄を起こしていないから暴発も起こらずに、静かに横たわって落ち着いた。

「そついや南アフリカって人買いがありましたっけ？」

衛士が問えば、彼女は眼を大きく見開いて顔を青ざめさせる。その顔に衛士は噴きだすように笑って、

「冗談だよ。オレは別に、自分が苦勞したから相手にも苦勞してほしいとか、くだらない事考える人間じゃないから」

「それで、いいんですか？」

「でも、それでミシエルさんの気が済まないなら持つて欲しいけど……コレを」

「こ、これですか……？」

彼女は指を指して示された紙袋を見て、衛士へと視線を戻し、笑顔で頷いた。

「ならば全力で！」

「し、死んだほうが良かったかも……」

体力尽きてもなお酷使された肉体は小刻みに震えて居る。彼女は衛士宅の居間の椅子にへたりこんで、差し出されたコップを両手で掴んでちびちびと水分を摂取していた。

十キロ以上ある弾薬が詰まった袋は玄関に置かれ、衛士は貰ってきた荷物を適当に寝台の上に置いて、彼女の対面に座った。

「はは、良かったなあ。笑い話にできるようになって」

「そ、そりゃあ衛士さんがそこまですれば……ねえ？」

「ったく。そんなんで本当にこの世界でやっていけないのか？」

「だ、大丈夫ですよ。これでもオペレーターとか、状況判断と説明、命令で役立ってるんですから」

「へえ、初めて聞いた」

「だって初めて話したんですもん」

「冗談っぽくバカにするように言うと、彼女はむくれて頬をふくませる。」

先程までのちょっとしたたいざござが嘘のようなこの感覚が、衛士には妙に心地が良かった。

「今度は南アフリカに行くんですよね。今日、午後一時までに、立体映像照射室に來いって言うてましたよ」

「……おいちよつとまって。もしかして、ミシエルさんはそれ伝えに來たわけ？」

「うん、まあそうですね」

なのに死のうとしたのか。

なんというか——随分と適当な人になったものだ。

もしあの場で衛士が引き金をひいたらどうなっていたのだろうか。伝えられるべき情報も得られず、あまつさえ彼女を殺害しているのだ。とてもタダで済むとは思えない。

訊いてみようと思ったが無駄に思えて、衛士は仕方なく口をつぐんだ。

頬に指を指すようにする彼女はそれから短く息を吐いて、それからニコツと首を傾げるように笑った。

「これからお隣さん同士ですよね」

「ああ、らしいね。これから一週間ぐらい部屋開けるけど」

「でも、もう大丈夫ですよ色々。ああ、なんだか嬉しくなってきました。衛士さん、私ね、すごくすごいなって思ってたんですよ？」

「何が？」

「だって強いじゃないですか。絶対挫けないし、諦めないし。なのに人を思えるくらい優しいし、カッコイイと思いますよ。同年代でこんな人、見たことないです」

胸の前で小さくガッツポーズをして、彼女は本人の前で衛士の良さを熱弁する。

ただの高校生だったのに死にかけても三人の不良を打ち倒し、またいくら手加減をしていたとはいえ、耐時スーツを装備した男に勝利し、そして百人の敵に囲まれても抵抗し続けた。

家族の二度目の死にも負けず心を砕かず、耐え抜いて今を生きて

いる。そして現在は決して自暴自棄にも放心状態にもならず、前と同じように過ごしている。これはすごいことだ。偉大だ。特異点たる所以なのだ。

彼女はそう言って、呼吸を乱して激しく肩を上下させた。

「そんな衛士さんは、私の憧れです」

ミシエルはそう締めて、コップに入った水を一気に飲み干した。「でもオカシイよなあ。いくら特異点で肉体だっていくらか影響受けて身体能力上がったってけど、真面目に戦ったらそこまでじゃないぜ？　なのになんか、期待しすぎじゃねえ？」

「いや、そんな事無いですよ。実際聞く限りじゃ、衛士さんとは絶対戦いたくないって思いますもん」

「へえ、なんで？」

「だって技術、力じゃ勝てるとしても下手に体力あるから中々倒せないし、絶対に勝てないってわかってても絶対に諦めないし、だから疲れてほんの少しでも隙を見れば狙い撃つし、食い尽くし小手先鬱陶しいしでちょー面倒ですよ」

「……褒めてんの？　それ」

「すつごく！」

自信満々に拳を握りしめて鼻息を荒くする。ミシエルはそれから水を催促してきたから、衛士はまだ口もつけていない自身のコップを突き出した。

どうやらそれだけで随分と疲れてしまったらしい。衛士は、水を一気に飲み干してからテーブルに突っ伏した自由な彼女を前にして腰を上げ、伸びをして全身をほぐした後、ミシエルに背を向けた。

「どこに行くんですか？」

「もう十二時だし出発する。結構遠いから」

「ですねえ。じゃあ、行きましようか！」

ミシエルは飛び起きて素早く衛士の隣に並ぶ。

そんなまさかの行動に、衛士はまさかと目を疑った。

「まさか」

「ふふ、そのまさかですよ」

腰まである長い金髪を翻して、彼女は大きく頷いた。

お前もかと落胆する衛士は——思い出の中で随分と昇格されていたミシエルが地に落ち大分気分が落ちたところに追い打ちをかけた気がして、肩を落とす。

返答はなく、彼の口からはため息しか出なかった。

## そろそろ非日常

時衛士が早足で道を歩き少しばかり鼓動を早くして、人通りの多くなる中心街の路地。その奥地の突き当たりにあるコンクリートの壁を目の当たりにする頃。ミシエルは既に転送によって一足先に目的地の中に居た。

——もう少し情緒あるように共に行動すると思っていたのが恥ずかしくなる。少しは自分に気があるのだと勘違いしていたのが、顔から火が出るほどに恥辱的で悶えてしまう。衛士はその感情を、身体を動かすことによってうまく濁らせごまかした。

壁に埋め込まれる鉄扉、そのレバー式のドアノブを掴み力強く引っ張る——その最中で、不意に扉から音が発された。

『めんどうだ。一気に転送する』

光が瞬いた。

そう認識した瞬間には、既に身体の自由は奪われていて——。

その闇を塗りたくったような空間は、体育館のように高く広く何もない場所だった。

ただその中心部に円形の、カメラのレンズのような装置があつて、そこから照射される映像が綺麗に巨大な人の影を映し出す。故に、衛士が転送されて見たのは茶っばいジャケットのボタンをその膨れ上がった腹で引きちぎらんとする、老いた男の姿だった。

『五分早く始めることが出来て、嬉しいと思う』

しわがれた男の声が、この空間内に無数に設置されているであろう外部スピーカーによって大音量でこだまする。暗すぎて壁も天井の境目もわからぬその場所は、それでもプラネタリウムのように天井に小さな豆電球をつけて星を演出させていた。

「遅かったな」

小声で衛士の肩を叩くのは、横に立つ男。着れば肉体と一体化し

てしまう為に二度とソレを脱ぐことが出来なくなる”耐時スーツ”  
を装備する彼は、ミシエル同様に以前から色々縁がある『祝英雄』  
だった。

生地が分厚い”つなぎ”のような外観は、そのとおりに肉体の強化をしてくれる。さらに彼が着るのはもつと特別製で、身体能力のみならず身体全ての機能を超人化させるために、どれほどの怪我を負っても自己治癒能力でその殆どがすぐさま完治してしまうのだ。  
「お前が先に来るってのは珍しいな」

「てめえさまが遅えんだよ」

くつくつと押し殺すように笑う彼は、どこか愉快そうに見えた。  
坊主にした髪をそのまま好き放題に伸ばしたようなツンツンにウ二のようになる毛先が揺れて、影が動く。

するとそのイワイの隣に立つ影が、ちらりと二人を一瞥した。

声無く、うるさいと注意するような視線が貫いた。

最もそこに眼はなく――鼻筋から上、額までを革の帯で巻かれる顔があるだけだ。また身体には毛布のような生地で闇と同化する漆黒の外套を羽織り、その下には衣服は無く、顔面同様に肢体に、胴にとベルトを巻くだけの格好だったが、足は腿まで伸びる長いブーツを履いていた。

『今回はこの四人を基本メンバーとして、ミシエルをこちらで遠隔援護として起用し、他メンバーは現地での活動を――』

彼女は一度だけ衛士、そしてイワイと任務を共にした事がある『アンナ』という女性である。

その身体に巻き付けるベルトを鞭替わりとして敵を拘束、あるいは斬撃じみた打撃を主とする戦闘方法を得意としていた。

「……珍しい組み合わせだな」

「だよな、すげえ久々」

「だ、だからふたりとも……！怒られちゃいますよ！」

アンナの隣で真面目に休めの姿勢で直立していたミシエルが、さすがに我慢ならないように口をはさむ。それにイワイが、茶化すよ

うに言葉を返した。

「マジメっ娘が。いいんだよこんなジジイの話なんざ」

『良くない。その判断が貴様を死に陥れるというか貴様をメンバーから外しても良いのだから？』

出し抜けに向いた矛先に、イワイは思わず驚きに肩を弾ませた。

衛士に向いていた視線を上げて立体映像へと眼を向ければ、上層部ホログラムの男『ゼクト』がイワイを見下し睨みつけている。怒気を隠しきれぬ雰囲気と、そしてスピーカーによって漏れる息遣いによ

って肌に伝わるようだった。

『仮に今貴様が聞き逃した情報に今回の作戦の根底たる部分が含まれていたらどうするつもりだった？ その、貴様に話しかけられて少しウザったい反応をした年下の少年に尋ねるか？ いい歳をした貴様ががが？』

『知らないことを訊くのに歳は関係ないんじゃないですかい？』

『……ああ、そうだな。だったら二度手間にならぬよう黙って私の話を聴いている』

『はいはい、りょーかい』

気だるげにわざとらしい敬礼をとって、イワイはようやく後ろに手を組み落ち着いた。

衛士とゼクトは殆ど同時に嘆息して——ゼクトは揃っている四人をそれぞれ一瞥し、言葉を続ける。

『改めて以降の予定を発表する。先に説明した通り、ミシエルは二十四時間体制で随時現地メンバーの位置情報、衛星映像から周囲状況の確認。また目的地への誘導が主な仕事となる。専用端末配布後は翻訳ツールを登録し、遠隔的に使用可能な状態に調整だ』  
メンテナン

『りよ、了解です』

『時衛士、祝英雄、アンナ・ベネット三名はこれより七時間三〇分後、二〇時三〇分に自動転送装置前に集合。簡単なミーティングの後、二一時に東京羽田空港より香港国際空港を乗り継ぎヨハネスブルグへ。それ以降の行動は現地に到着し次第ミシエルを介して指示

する。それぞれパスポートと旅費、支給装備は自室へ転送済み。だが武装は現地調達、あるいは状況次第で転送で支給する……以上だ」  
「ちょ、ちよつと待ってください」

ゼクトの台詞が終えたのを見計らって口を出したのは、衛士だった。

「パスポートって……。なら直接目的地に転送すればいいじゃないですか。裏で暗躍してる機関なら権力でねじ込めるでしょう？」

『航空券とは話が違うのだよ、時衛士。何も知らぬ愚かな警官に不法入国扱いでボロ布のように扱われ一週間の軟禁生活をしたくなければ従え。それに改めて言うておくがな、その気になれば国連総出でこの機関を潰すこととて可能だ。生かされているのは極めて重要性の高い機密技術を保有しているからだ』

「重力子を利用した全ての技術の事ですな」

『うむ。単純な話、この重力子を猿でも分かるように兵器に例えば――爆弾、弾頭に使用したとしよう。そいつを投下し衝撃によって作動した瞬間、つまり爆発を起こしたとしてだ。その際に重力子が火薬のようにエネルギーを消耗し、凄まじい炎と激しい衝撃、爆散する超重力が次元の歪みを起こし周囲に拡散。また爆発に吞まれ触れた質量を持つ物体が壊裂、粒子レベルに分解され続け、その反応が終わるまで爆発域が拡大する。また同時に影響を及ぼす周囲に異常重力が発生し、爆心地は半永久的に”死の土地”となる』

重力子はどこにでもある、重力を司る粒子だ。それを作るとして、およそコストは原子爆弾を製造するより遙かに低く抑えられる。彼はそう言っ、どこか悲観するような笑いを漏らした。

『奴らの目的は絶対的な軍事力の保持だ。それさえ叶うのならば誰の靴として舐め回す……そんな連中ばかりで蔓延る世界だ。貴様等の目的はそういったこの上なく愚かな連中に力を誇示し無駄だと知らしめる事。だがそれを阻む連中も居る……と言っても、国連に加担しているわけではない。単純に我らのやり方が気に食わぬだけだ。どこへ歩けども居るのは敵ばかり。そんな時、貴様等はどうすれば

いい？』

「邪魔は排除だ」

漏らすようにイワイが言った。

——その迷いのない返答に、衛士は思わず戦慄する。

まるで異質の空気。洗脳された信者の、人間ならざる者のような  
雰囲気は衛士は感じていた。

戦士とも勇士ともつかぬ感覚。それが一体なんなのか——これが  
この機関に居る人間なのだろうか、衛士はそういったものなのだ  
と無理やりに理解した。

ゼクトは感情もない顔で頷き、一つ咳払いをする。

『分かればいい。では作戦内容の説明に移る』

男はまたいつもの調子で言葉を発し、イワイはどこか真剣な顔つ  
きでそれを見据えていた。

衛士はといえば、彼もまた変わらぬように話を聞きながら、感づ  
かれぬように短く息を吐き捨てた。

スケアクロウ

『今回はとある付焼刃<sup>スケアクロウ</sup>への接触を目的とする。付焼刃といっても現  
在判明されている方法で能力に目覚めた者ではなく、特異点のよう  
に特殊な条件を満たし、また元よりその才覚を持ち得た人間が己の  
みの力で自然的に特異能力に目覚めた者だ。故に全てが不鮮明。お  
そらく付焼刃に於ける特異点と呼ぶのが正しいだろう存在だ』

そもそも特異点とは、正式名称を『超自然及び超常現象干渉能力  
に於ける特異点』としているのだから、副産物によって進化し個人  
で副産物以上の能力を扱える人間のみを対象にする言葉ではない。

つまりまとめれば、特異点は通常では説明のつかぬ程の能力を有  
する能力者に充てられる名称であった。

「目的が接触……だけ、ですか？」

ミシエルが問う。

ゼクトは頷いた。

『協会の人間となっている。そして恐らく機関に怨念を抱いている。  
これだけで戦闘は必至だが、今回は極力戦闘は避けた方がいい。な

にせ付焼刃の歴史が浅い上にその特異点なぞは初めてだ。何が起るか、分かったものではない」

「危険があれば転送で、という……？」

「次元干渉の才能が無ければ問題ないとは思うが……最良なのは行きと同じ交通手段で帰ってくることだな」

「ったく面倒クセーな。なら何で三人も必要なんだ？ 一人でいいだろ」

「原則として個人での行動は制限させてもらう。が、目標に接触するのは一名だ。そして最悪対峙した者の命が散られた場合、残りの二名が逃避。それが不可能と判断された場合は一人が足止め、もう一人がその間に転送によってこちらへ送還する予定となっている」

言い終えて、ゼクトは胸のポケットからタバコを取り出し、慣れた手つきで火をつけ、口にする。

彼は暫くメンソールのたばこを味わってから、吸殻を携帯灰皿に突っ込んで、大きく息を吐いた。

「今回は異例で特殊なミッションだ。選ばれた貴様等は誇りを持っている。——そしてこの説明に質問や異議申し立ては？」

ゼクトの問いに、並ぶ四人は皆口をつぐむ。それを確認して、彼は指を鳴らした。

「なら解散だ。いいか？ 違えるな、二。時三。分に自動転送装置の前へ、だ」

再確認のようにそう告げると、徐々にその身体を薄くしていく彼はやがて消え入る炎のように姿を消した。

「共通点は”日本人”か。ま、あっちの方じゃ”いい力モ”に見えて仕方がないだろうな。なにせ俺が居ないから、体格的にはお前等は比較的まとまだな」

衛士の一回り半程巨大な体軀が目の前に立ちほだかる。角刈りの頭を撫でる腕は丸太が如き太さを持ち、見るだけで首が痛くなる高さ顔があつた。されど穏やかな表情は、彼が幾度も安堵に駆られ

たにこやかな笑顔であつた。

「だけどさ、『船坂さん<sup>ふなさか</sup>』なんか予感がするんだよ。これまでのとは違う、なんか良いのか悪いのかも全然わからないけど、妙な、何かが起こるっていう漠然とした感覚が」

人通りの多い道の端に立つて二人は話していた。帰り道にちょうど見つけたから声を掛けたという次第であり、どこか店でも寄ろうかという衛士の提案に、彼はこれから仕事だからと断っていたからだ。

——衛士の直感はまだ外れない。

それはこの世界に踏み入れる前からそうだった。

誰かの危機、それが命に関わったものであるだけ胸を焼くような言いようのない嫌悪感が襲いかかってくる。奇妙な苦しさ、危険が近づくにつれて強くなる。だからこそ、時衛士はこれまでを生きてもこれと言つても過言ではなかった。

「トキ、そいつはたぶんいい風だ。これまでがコレまでだったから、ようやく神サマがお前を救済してくれんだろ？」

「んー、ならいいんだけど……」

「おっと、悪いな。そろそろ時間だ」

「あー、呼び止めてごめん。それじゃみんなに宜しく言つといて」「ハッハッハ！ 大袈裟だなア、たかが一、二週間空けるだけで」

船坂はそうゴキゲンに笑つて衛士の背を叩き、その耐時スーツも着用していないのに激痛を与えるバカ力に衛士は思わず顔をしかめた。

だからお返しにとばかりに力強く胸板を叩けども、その分厚いゴムでも殴ったかのような手応えが、彼に一切の痛みを与えられていないことを教えてくれた。

「だーから、予感がするつて——」

「分かった分かった。お前がたんまり土産話持ってくるから期待してろつて伝えとくよ」

「ったくもつ……仕事、がんばれよ」

「おうよ、そつちもな」

船坂とはそこで別れ、それぞれ背を向けて道を歩く。一歩進むごとに、なんだか奇妙な虚無感に襲われながら——今日もらった武器は、一先ず分解して持参していこう。

彼はそう決めて帰路についた。

時間が経ち——午後八時三〇分。

場所はこの地下空間<sup>ジオフロント</sup>の突き当たりたる壁の前。だが、そこには壁としての存在感は無く、立体映像によってこのまま真つ直ぐ延々と続く道路の景色が映し出されていた。

この壁に触れると装置が作動し、様々な認証過程を終えた後に壁が開き、エレベーターのような箱の中に乗り込む。するとようやく転送準備が開始し、間もなく転送が完結する。その装置の前に並ぶ四人は、褐色の女性を前にして直立していた。

「これより貴様等は特殊ミッションとやらに就くわけだ。正直私が選ばれなくて良かったと思っている」

「エミリー不器用だもんね」

衛士が冗談っぽく口をはさむと、『エミリア』はその宝玉のように赤い瞳で彼を睨み、大腿で彼の前へと肉薄した。

長い白髪が左目を隠し、対照的に暗い肌が日照によって艶やかに照る。戦闘服に身を包む彼女はそのまましなやかな指先で衛士の頬を摘むと、白い歯を剥き出しにして噛み締めた。

「そのあだ名で呼ぶな、特に貴様は！」

「しゅ、しゅみましえん」

「分かればいい」

引きちぎる勢いで手を離す彼女は、それから衛士の目の前から離れることなく、言葉を続ける。それが何かおかしいように残る三人はどこか楽しげに表情に笑みを携えていた。

「説明は既に済んでいるようだし、皆準備は終えているようだな」

彼女は並ぶ全員を舐めるように眺めていく。

革のジャケットを着こむ衛士に、脱げぬ耐時スーツを装備するワイに、黒いレオタードの上に帯を巻き直したアンナはその上にいつものように外套を羽織っている。ミシェルはここには居ないが、それでもそれぞれが持つ通信端末、あるいは背負っているバックパツクにしまつてある筈の受信専用端末から情報提供を行う手筈になっている。

「今回の任務は恐らく、協会にとっては”特異点”の有用性をどれほどか見極めるテストにもなりうるだろう。だがコチラにとっては、それよりも遙かに大きいリスクとメリツトが付きまとう。貴様等を失いなおかつ情報を奪われる事と、付焼刃スケアクロウという存在をよりこちらが分析できることだ」

重要な任務。

コレまでには無かつた、機関や協会が良くも悪くも動いてしまう仕事。

鼓動が心地い早さで拍動する。

丁度良い緊張感が身体の中に巡り始めた。

——いい感じた。

右目が疼く。今回の任務では恐らくこの能力が雌雄を決するだろう。だからこそ選ばれたのだ。

この実力を認められたのだと思ひ上がるほどにこの頭は間抜けでも気抜けでも無かつた。

だが今回上手くやれば、あるいは——。

「以上だ。航空券を忘れた者は居ないな？」

彼女の問いに、全員が一様に首肯する。

エミリアは満足気に一步引いて、装置を作動させるために壁に触れた。

そうすると、既にそれは転送準備段階にあつたのか、認証も無しにその入口を開けて、

「健闘を祈る」

——ここは軍ではない。故に上下関係など皆無だ。

初めて会ったときにソレを強調していた彼女が、珍しく敬礼をした。

そしてその行動は、なんだかとても大切な儀礼に思えて、皆が同様に敬礼で返す。

まるで訓練兵が学校を卒業し、初任務に就く所を上官が見送るような、変な充足感に見舞われた。

やがてそれぞれが現れた箱状の空間内に足を踏み入れて、最後に衛士が一步踏み出す。その最中に、エミリアは、事実彼の上官だった彼女は力強く衛士の肩を叩いた。

「上手くやれよ」

「ええ、誰よりも」

仲間に背を向けるように中へ入る。すると間もなく扉は緩慢な速度で閉まり、空間内は何処からともなく溢れ出す輝きに満ち始め――。

――そして時衛士の、運命の歯車が狂い始めた。

## 非日常、始動

「ったくよー、ケツが痛くて仕方がねえぜ」

イワイは耳にワイヤレスイヤホンを嵌めて不平を漏らす。ハンドルの片手で握り、左手はガラスの無い窓から放り出されていた。そんな彼は辛うじて道と呼べるその整備されていない道路に四輪駆動を走らせている。

その口、そして同様に装備するイヤホンから重なる声を助手席で聞いた衛士は、手にしていた水のペットボトルを口にして、大きくため息を付いた。

——日本から飛ぶこと約一日。時差マイナス七時間であるヨハネスブルグについたのが、現地時間で午後二時、日本時間で午後九時であった。それだけで疲弊していたのにも関わらず、すぐさま端末に指示が走り、電子メールで与えられた『適切な手段を用いて北上せよ』との命を執行していたのだ。

選んだのは車をレンタルするという事。が、手続きが面倒なことであつて結局は中古車を購入することになった。

それから半日ほど車を走らせていると、やがて想像以上に都会的だった景色は一転、西部劇にでも出てきそうな荒野へと変異する。衛士はその見慣れぬ光景を眺めながら、足元に置いてあるバックパックスク内の狙撃銃をどのタイミングで組み立てようかと考えていた。

「おいエイジくんよお、運転変わってくんねえか？」

イワイの提案に、衛士は簡単に首を振って拒否をした。

彼は暇そうに首元から股間部まで伸びるジッパーを上げ下げして辛うじて肌が露出する部分に新鮮な空気を当てる。が、その部分が僅かに開くだけで、結局は完全に癒着している腕や足、首周りからその生地が離れることはなかった。

「だってMTだろ？ 車に触ったこともないのに無茶言つな」

「おいじゃあアンナ、お前変われ——」

後部座席に居る彼女をミラー越しに睨みつけようとして、その存在が写っていない事に気づく。イワイはまさかと不穩に思つて振り向けば、そこには彼と彼女のリュックを枕にして猫のように丸くなつて睡眠を貪るアンナの姿があつた。

それを見てイワイは大きく嘆息し、減速、徐行しやがて延々と真つ直ぐ伸びる道路の路側帯に停車させた。

周囲には道路と区別のつかぬような乾いた黄土色の大地。風が吹けば砂が舞い上がり、生ぬるい空気が全身を襲つてくれる。

「なあエイジくん。銃火器は持つてるか？」

「狙撃銃を持つてきたが弾は無いし、道具使わなきゃ組み立てられないレベルまで分解したから使えないんだな、コレが」

「ったく。この馬鹿女は放つておくか」

——停車して間もなく、背後から大地を揺るがすような激しい振動を伴つて走行する大型トラックが近づいてきた。

イワイはミラーでその姿を確認しながら首を鳴らし、また大きく息を吐いてうんざりしたように口を歪めて目を瞑る。衛士はソレを見て、やはりあのトラックは強盗の類なのだと理解した。

こちらの方面での犯罪率は極めて高いと聞いている。それが旅行者ならば尚更だろう。

「てかさ、ここまで食いついて来るかア？ 普通うよお」

「はは、そういう文化が築かれてんだろ」

「うち。さすがに一般人に負けてくれるなよ、てめえさまよ」

「相手が”一般人”ならな。軍人崩れとかだと分かんない」

「……心臓に悪い冗談だ」

イワイはつくづく不幸だと嘆くみたいになだれて——やがてトラックが緩慢な速度で四駆を追い抜き、その直ぐ前で停車したのを見計らつて、彼ら二人は車を飛び出した。

「どうやらお望み通り、ただの強盗らしい」

「これで武器の文化レベルが石器時代から現代まで一気に引き上がったな」

ボンネットに肘を付くようにもたれかかるイワイは、トラックの影から小銃を構えてゆつくりと狙いを定める一人の男の出現を見て、たはたと軽く笑った。

「なあエイジくん。残念ながら彼らは”敵”のようだ」

「……？」

「つまり——協会の連中が早速殺しに来たって事だな」

衛士よりやや長身の男がそう言って逆立つ髪を揺らして重心を落とすのとほぼ同時に、敵が構えた突撃銃の銃口が火を噴くのを、彼は”視た”。

フロントガラスが割れて周囲の飛び散り、怯んだ隙を突くようにして数人が突撃してくる——それらを認識した衛士は、行動を起こされるよりも早くイワイへと咆哮<sup>さけ</sup>んでいた。

「そいつに撃たせるな！」

囲まれば抵抗の手段を失う。いくら個体でかなりの戦闘能力を有していたとしても、銃を装備する複数人を相手にするのは些か骨が折れる。そして今は、こんなところで労力を割いている場合ではないのだ。

「分かってるってえ！」

イワイが屈み、小石を手にする。

衛士が言葉を失ったのは、その瞬間の事だった。

——衛士が視た未来が変異する。

顔を覗かせた男が発砲する筈が——トラックの上から肩に何かを担いでいる影が、衛士らを狙うものへと移り変わった。さらに質が悪いくことに、ソレが三秒先の出来事となっているのだ。

予知は続き、放たれた榴弾が炎を吹き出し凄まじい速度で肉薄する。やがてそいつは鎮座する車体に衝突し——。

時間がない。焦燥に駆られた衛士は右眼の眼帯を剥ぎとりながら後部座席のドアを強引に開けた。

「上だ！」

叫び、イワイの注目をトラック上のRPG-7へ向けさせる。そ

うした頃には、されど時既に遅し。鈍く大気を激震させる発射音が轟くのを、衛士は現実で聞いていた。

一言も声を発する事が無いのにもかかわらず酷く呑気に穏やかな寝息を立てるアンナの足を力一杯掴むと、そのまま引きずるようにして引つ張り出し、そして車外へと勢い良く吹き飛ばす。衛士も倣って車から離れると、間もなく榴弾は車体の屋根を叩き潰し、同時にその身をひしゃげさせて、爆発。

鼓膜を破裂させんとする凄まじい破裂音と爆発音が入り交じり、また激しい閃光が網膜を焼き尽くす。衝撃波が衛士の身体を蹴って、彼の肉体はもんどり打って倒れ転がってしまう。その最中で、襟首を掴んでその転回を止めさせてくれる影が、前屈姿勢で大地にしがみついていた。

「不味いアンナ、イワイのところに！」

硝煙が立ち込め、加えて砂嵐が視界を完全に喪失させる。だが衛士の右眼はその程度で潰れるほどヤワな眼力を持っていなかった。上空から見下ろす視界をイワイの頭上に移動させると、彼は爆風によってよろけた所を狙われ、既にその頭部に銃口を突き付けられていた。

衛士が立ち上がり、彼女の前へ移動する。アンナはどうする？

と言うように肩をすくめるところに、衛士はただ親指を立てて微笑んだ。

「オレの言うとおりにしてくれば良い」

「衛士さん！ 衛士さん——ッ！ ダメ、応答しない！」

モニターに移る映像は、対戦車擲弾発射器から放たれた榴弾がガタが来ている旧式の車両を撃ちぬき爆発したがゆえに、煙にまみれて状況が不鮮明になっているものだった。

「ダメです、こちらにも反応がありません！ たぶん——爆発の衝撃によって機器に不具合が生じたのかと……」

——そう広くはない空間。壁際に並ぶ作業机の上にはモニターが

置かれ、それが四つ並び、それぞれ四人が遠隔支援たるミシエルの補助となつて働いている。

主な作業は映像、音声のデータ化、バックアップや状況の確認などとなつていて、ミシエルはそれらから得た情報を取捨選択し必要なものを直接現地組へ伝え、また即座必要となる適切な判断を彼女は下さなければならなかった。

ミシエルは彼女らの後方に鎮座する机に座り、並ぶ三つのモニターから映像、それぞれ三名の被害状況、電波状況などを確認していたが――やはり先の爆発以降、映像以外のそれらが一切遮断された事によつて、彼女の為す術は失われていた。

電波妨害でもされているのかと思われたが、にしては映像が生きていることが不自然だ。そもそも仮に敵が協会連中だとして、上位互換の人間は一覧化してその殆どを把握しているはずだ。ならば支部からの命令で一挙手一投足を選んでいるとは、いくら何でも考えないはず。であればこの電波妨害は無駄な行為だ。

ならばやはり機器の故障が有力候補なのだろうか。

いや、だが何か引つかかる――。

「確認してみても、周囲十キロ圏内には電波妨害を起こせそうな装置はありません。やはり至近距離での爆発が原因だと考えるのが妥当です」

「……だとして、時さん方がこの戦闘を切り抜けて、故障を修理できるかしら」

「まずこの奇襲から逃れられるかが問題ですね」

「――信じましょう。戦いはこれからです！」

ミシエルが意気込んでガッツポーズを作ると、それぞれ嘆息が漏れて聞こえる。

その狭い即席オペレーター室は、間もなく沈鬱な、早くも通夜の雰囲気包まれた。

硝煙を引き裂く弾丸が、まるで視界が鮮明であるように衛士の急

所を狙つて切迫する。が、既に自身の死を予知した衛士が、素直にその鉛弾を喰らつてやる義理も無い。軽く上体をひねれば、弾は簡単に背後の虚空に吞まれていった。

バチバチと未だ燃え盛る車両。開けっ放しのドアから押し出されたりしいバックパックが、ボロボロでまたその表面を焦がしながらも無事のまま転がっていた。拾い上げればそれは衛士の私物で——彼はそれを背負つてから、

『動くな』

煙の中から現れた気配に、銃口を突き付けられてしまった。

『手を上げる』

ぎこちない英語はそう告げた。

「はは、異国情緒溢れる歓迎だなあ」

衛士は言われるがままに両手を頭の後ろで組むと、駄弁る暇もなく膝裏を蹴飛ばされ、崩れた関節はそのまま折れて地面に膝をつく。身動きは出来ず、武器はない。こういった場合の対処法は耳にタコが出来るほど、飽き飽きするほどに習つたし身体が覚えているが、敵の戦力が未知数である限り下手には動けない。

だからどうしようもなく捕らわれて、

『安心しろ。ヘタをしなければ殺しはしない』

「……協会か？」

『何を言っている。我々は——』

衛士を拘束する男の言葉を遮る様に、甲高い破裂音が辺りに反響し、旋風が波紋のように広がった。同時に熱風と、再び衝撃が辺りに撒き散らされて、燃え盛る車の付近に居たらしい敵の絶叫が響き渡った。

どよめきが生まれる。故に垣間見えた隙が、衛士には好機としか受け取れなかった。

衛士は振り返りざまに背中に突き付けられる銃口を弾き、鋭い裏拳を男の顔面に叩きこむ。

悲鳴。

うつろたえ怯む男の手の中から小銃を引き剥がすと、衛士はすぐさま安全装置を確認する。そのまま相手の太ももに銃口を突き付け、発砲。瞬間的に肌が裂け肉が千切れ、血が液体ではなく霧状になって飛び散った。

絶叫。

倒れこむ男の頬をストックで殴り飛ばし、衛士は——ガソリントankの破壊を終え、さらにその手から伸びる帯にイワイを巻きつけて連れてきたアンナへと向き直る。彼女はどこか嬉しそうな微笑を持って、またどうする？ とでも言いたげに肩をすぼめた。

——敵のざわめきはまだ生きている。

それもそのはず、車両のさらなる爆発に乗じて体勢を立て直しただけなのだ。劣勢から逆転したわけでも、また優勢に立てているわけでも勿論無い。だが出なおすことが出来たのは、上出来と言えた。「イワイ、連中はなんか、協会とは違うみたいだ」

「ああ、俺もそー思った。さっき捕まったときに探ってみたが、隠してるって風には見えなくてな」

「じゃあ何なんだ？ 通り魔？」

「無差別で攻撃してくる辺り、みたいだがなあ……目的が不明瞭すぎる。わけわからん」

アンナは飽くまで声を出さずに頷いた。

「たく時間も無いし」

「く、車も……壊れちまつたし……なあ。あれ自費だぜ？」

「あんな何時代の米軍の払い下げか分かんねえジープなんだからいいだろ」

日本円で二十万ほどの安い車だったが、この国では割とぼったくられた方だろう。なにせただのAK-47が日本のおもちゃ屋でモデルガンを買う感覚と値段で手に入る地域なのだ。それほどの治安が悪いとも聞いていたが——通り魔が、まるで紛争が如き勢いで攻めてくるとは夢にも思わなかったのだ。流石に。

最も、通り魔というのさえも仮定で、目の前の集団は本当に正体

が不明すぎた。

「他人事だと思いやがって……」

「お、なら丁度いいのがあるぞ」

「ン？ どれどれ」

「ほら、あのでつけえトラック」

おおいいねえとイワイが呆けた声を上げたところで、気がつく。

舞い上がっていた硝煙は既に薄れ、敵の散らばっている影がよく認識することが出来ることに。

衛士はポケットから眼帯を取り出して右眼を隠すと、それからまた、指ぬきグローブをしっかりとめ直した。

「どうするリーダー」

イワイがそう言つて衛士の背を叩く。

彼は鬱陶しそうに肩を回して首を振った。

「仕掛けてきたら叩く。つまり誘つて、ぎりぎりのトコでカウンタ―気味に行けばいい。さっきので実力が大体分かったからな」

「だとよ、アンナ」

イワイが目配せすると、アンナは手に帯を巻きながら頷く。

衛士は小銃を構え、敵の突撃を待ったが——少しばかりの沈黙の後にやってきたのは、予想外の反応だった。

『降参だ』

バラバラと銃を落とすと、それぞれが音を鳴らして地面に転がる。総数十人の彼らはやがて、皆が両手を上げて整列した。

『君たちが”機関”の人間だというのは知っている。何、機関というのを知っているのは何も政府や協会だけじゃない。裏の世界に居てソレを知らなければ、そいつはモグリさ』

衛士に足を穿たれた男は跪いたままそう言つて——呆気無く、その手荒な歓迎は終幕した。

## 喧騒の昼

大量の火器類が収まっているトラックの箱状荷台から降りると広がるのは、荒野にテントが二列になって並び、その中央に道を作る光景だった。

最もそこは人が住まいとするテントではなく、ただ屋根がついたけの骨組み、その手前には箱が並び、雑多な果物、野菜から生鮮食品、少し奥まった場所に進めば火器類が販売されている『市場』だった。

賑わい、人通りが激しい場所だ。そこに来て、衛士等は本当にこの連中が何者なのかわからなかった。

アレから車両を破壊してしまった俺びにとここまで運んできて貰ったの良いが——通信端末の電源はつかず、また受信専用端末イヤホンも漏れ無くイカれていて通信できない。故に、ただ北上せよとの命をつかまっただけで目的地など、住所は無論、大まかな場所さえわからない。

手がかりは”協会”と”超強い能力者”というものだけだが、いくらなんでもこの全てに霑がかかる連中にそれを漏らせる筈もなかった。

「何だこりゃ、スラム街か？」

『まあスラム街だな。この街を統率するのは左遷された警察連中。お布施さえこなしときや目をつけられる事はない』

小銃を肩に担ぐ男が告げる。イワイはそれに反応して振り返ると、背後では荷台から箱から溢れる大量の装備をおろし始めていた。

衛士に左の腿を撃ちぬかれた男は止血を施したまま、顔色が悪そうに三人の近くで手持ち無沙汰になっていた。

『俺たちはそんなサツどもに雇われたPMCだ』

「PMC？」

『民間軍事会社……簡単に言えば傭兵だな』

「つまり、その警察がオレたちを連れてこいつて？」

『実力を見てからって契約だね。だが、まさか一度でも巻き返される事があるとは思わなかったさ』

——少し話がおかしい。

否、それは少しなどではなかった。

そもそも民間軍事会社は独自に動いて、自ら攻撃を仕掛けるなんて事はしないはずだ。

するとしても雇用者の指示の元。下っ端が自ら赴き、不確かかも知れない機関の人間にテロ行為などは考えられない——衛士の知識では、少なくともそうだった。

最も、様々な会社があるからそうする可能性もある。だが衛士が一度だけこの南アフリカ共和国で対テロとしてPMCと肩を並べた際、彼らは戦闘が下手で率先してRPG-7を使うような事はしていなかった。

が、同時にそういった民間軍事組織が虐殺行為を行っているというニュースが耳に入るのもまた事実。

この場で判断できるのは、彼らの言葉は素直に鵜呑みにしないほうが良いということだけだと理解した。衛士は静かに肩に掛けた突撃銃を構え、安全装置を弾いて外す。

『な、なにやってんだ？』

男がうろたえる。

青年は構わず、無事である左の腿を銃弾で撃ちぬいた。

——発砲音がこだまし、硝煙が鼻先をかすめた。男はそのまま悲鳴を上げながら足を押さえ、崩れ落ちていく。同時に舌打ちが聞こえ、運んでいた荷物からそれぞれ装備を手に手にとって彼らは再び衛士らを囲み始めた。

「馬鹿が、まだ泳がせてたって遅くはならなかったろーが。てめえ様よ、見かけによらず短気だな」

「拘束されて身動きできなくされた後で始末される可能性があったのに、悠長に構えてられねえってんだよ。何よりも、上手く嵌めら

れたって思われるのが気に食わねえ」

街を前にして止まるトラックの背後に衛士らは並び、車両の前に並び彼らはそれぞれ同様の突撃銃を構えて照準を合わせ始めた。

『その色々キレてる奴は生かしとけ。今はそれだけが命令だ！』

自称PMCと衛士らに挟まれるようにして伏せる男が命ずる。

そして連中が弾幕を作ると同時に、衛士は引き金を引いていた。「来たらカウンター気味に撃て。弾くらい避けられるだろ？ アンタ等ならさあ！」

「たはは！ 無茶言うぜてめえ様は、いつもよぉ！」

イワイはそう言つて衛士の肩を叩き飛び出す。アンナは手から解いた帯を鞭のように振るつて彼の尻をなぶつた。

射線上の敵は肩口から血を吹き出してよろめき、切迫したさらなる弾丸が腹部を叩くが——強い打撃を受けたように、彼はそのまま地に伏せた。

向かってくる弾は衛士の腹のすぐ脇を掠めていく。走りだした二人は器用にそれらを避け、あるいは受け流しながら九人へと肉薄した。

——アンナが何かを投擲するように手を振るうと、上空から薙ぐように払われる帯が鋭く迫る。迎撃が難しいその攻撃は思惑通りに敵の一人に迫り、彼女が手を引き帯を掴んで引つ張ると、反動が付くその先端部分のたわみが失われ、弾けてピンと伸びる。振るわれた帯はよく確認しなければわからないが、先端に向かうほどに細くなる。それは故に、そういった目的のために作られていた。

だから手元は腕を動かす速度に等しいが、先端部分に近ければ近いほど、速度は加速度的に加速する。故にその打撃はいつしか斬撃のように、鋭利な刃物のように働いて——対象はその肩口を抉られ、間もなく肉体自体にかかる凄まじい衝撃によって意識を手放した。

「ヒュー、おつかねえ」

イワイは漏らし——向けられた銃を、振り上げた足先で蹴り飛ばした。

軸足で肉体を弾いてさらに肉薄。うろたえる事しか出来ず、また反応が間に合わない周囲の仲間には徐々に弾を、あるいは鞭を受けて倒れていく。彼はそれを視界内で捉えながら、防弾チョッキの上から腹部を拳で穿たれた。

ただの打撃だ。本来ならば鈍く伝わり通ずる筈がない。のにも関わらず圧迫された内臓はそのまま血の巡りを緩慢にし、言葉も出せぬまま男は膝から力が抜けていくのを感じて、崩れ落ちていった。イワイはそんな彼の腕を掴むと、そのまま軽く持ち上げて吹き飛ばす。すると傍らの男がなぎ倒され、彼は倒れた所を狙ってまた腹を蹴り飛ばす――。

衛士の命令も聞かず、カウンターというよりは見て明らかに攻めの一手だった手段のお陰で、一分と待たずに辺りからは喧騒が失せ、静寂が訪れる。

「今更人殺しなんざ厭わないんでね」

清々しい笑顔を向け、唯一意識が確かな両腿を負傷した男の額に銃を向ける。

唯一この戦闘に参加しなかった男はそれまでの惨劇に震え上がりながら、その歯を揺るがしカタカタと歯を打ち鳴らしながら、小刻みに頷いていた。

「とりあえず、アンタらは何者だ？ 何が目的だ？」

英語での会話は既に慣れたものだ。訓練兵時代にみっちり一日十二時間続けてきて、さらに個人での海外渡航で否応無しでの英会話。日常会話が成されぬが故に一苦勞だったが、その苦勞が実って今では殺気混じりに脅すことができている。

衛士が唯一実感できる、努力が報われた結果だった。

『お、お俺たちはきよ、きょうか――。ち、違う！ 誘い出そうとしたんだ！ 嫌だ、死にたくない俺はまだ死にたくない嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だあああつ――』  
ぼん。

そういう音がして、頭は爆ぜた。男の頭部は見事に内部から爆発して、脳髓から血液からをはじき飛ばしてまき散らした。衛士はそれを全身にかぶりながら、銃に手を添わせ、安全装置がしっかりとかかっていることを、そして銃身が発砲故の熱を持っていないかを確認して、自分がその引き金を引いてこの男を殺害したわけではないことを理解した。

強い血の匂いに、生暖かい液体が振りかかる。また肉塊が肌に触れ、血が肌に沿って垂れるのと一緒に地面へと流れていった。

それから誘発されるように、同様の、ビンの口を手のひらで抑えつけるように叩いたかのような鈍い爆発音が鳴り続け、やがてその場に居た機関の人間以外の頭が余すことなく吹き飛ぶと、爆発は止んだ。

袖で顔の血を拭い、衛士は一つ嘆息する。

「んだコレ……何だ、コレ」

「時限式の爆弾を埋め込まれてたか、特定の言葉を起爆装置として爆発する能力か……あるいは手動で、監視してた所で情報を漏らさないようにってヤツだな。リーダーさんよ、そんなくらいでめえの頭で考えてくれよなあ？」

声は出さぬのに、アンナは呆れたようにため息を付いた。

彼女は血のりの付いた帯を男の服で拭いながら腕に巻き直し、それから腰に手をやって片足に体重を掛ける立ち方をする。イワイは不意に興奮が下がり冷静とは言いがたい程に静になる衛士をその傍らで見守りながら、周囲を警戒する。

衛士は突然の出来事に混乱しながらも、通常の何倍もの時間をかけてイワイの説明を理解した。

「そんな限定的な能力ってアリかよ」

「超能力だからな。拡大解釈すりゃ」なんでもアリ」だわな」

「……だがコレで協会が関わってる事が判明した。やっぱ何処からか入国が漏れてたんだ」

「ならこの街に居るとかか？」

いや、と衛士は首を振る。

ここに來ること、否、ここまでおびき寄せる事を想定しているならばこの街の反対方向に目標が居ると考えて良いだろう。だが少なくとも、ここまでの衛士らを監視する役目も必要な筈だ。そしてソレが居るとすれば、この爆弾魔の能力者だが……。

「まあオレの所持金が五万ランド……日本円で四捨五入して約六。万だから、当分は節約しながらの生活だな。何があるかわからないし」

「たはは、強盗に気を付けろよ？」

イワイが言いながら肩を叩く。すると傍らで、袖を引く感覚があった。

顔を向けると、相変わらず表情が分からぬように鼻筋から上を帯で巻き、長く黒い黒髪を下ろすアンナが衛士を見つめていた。

「いわゆる婦女暴行的な問題なら関係ないだろ。中距離なら鞭、近距離なら肉体強化で徒手空拳があるんだから」

「おいおい、女の子はいつでも誰かに守ってもらいたいもんだって雑誌で読んだぜ？」

「アンタはいい加減女性向け雑誌を卒業しろ」

イラついたようにイワイのスネを蹴るとほぼ同時に、鞭がまた尻に襲いかかる。

そんな折に、不意に街の方から無数の足音が駆けつけてくるのを衛士は聞いて――。

――かくして衛士たちは、幸先の悪い騒動を経て、駆けつけた警察官に連行されたのであった。

「漫画とかゲーム見て思ってたんだけどさあ、やっぱり留置所にブチこんでも服装はそのままなんだよな」

錆びた鉄格子が外と雑居房を隔てる。凄まじい汚臭が蔓延する五畳程の狭い空間に、三人は両手を後ろで組まれその上で手錠をつけられ、また足をがんじがらめに縛られてぶち込まれていた。

天井近くの窓ガラスの無い、また鉄格子のみで塞がれている小窓からは早くも赤い日が入り込んでいた。

ブンブンと飛び回る羽虫は鬱陶しく、アンナは特に肌の露出が高いせいか、虫に刺されぬように外套で身を包んで壁により掛かる衛士にさらに寄りかかっていた。

「発展途上国なんてこんなもんだろ。不当逮捕はお手のものだ」

しかし衛士らがあの惨劇を行っていない証拠が無い以上、説明は単なる言い訳に終わる。そもそも爆発以前も大層な騒ぎだったから街の人間もそれを見ていたはずだ。突然頭が爆発したなどと、超能力のちの字も知らぬ人間に言っても狂者扱いされるだけである。

また反対側から、イワイが肩を寄せる。

没収されたものと言えば、あの協会に雇われたであろう連中から奪ったM4と、バックパックだ。バックパックの中にはネジまで外された狙撃銃の部品に、火薬に薬莖。そして狙撃銃を組み立てるために使うドライバー等の道具だ。およそ彼らに理解できるものは銃身と薬莖、そして火薬程度だろうが、そこから連想できるのは銃火器であるのは確定的。

「……心配だな」

処分されないことを願うだけだった。

「結局はここに来る運命だったんだろうな。今んな事考えても無駄かもしれないが」

「ともかくココから出なきゃ。ミシエルさんから連絡が途絶えたのも気になるし」

「お、んじゃまたド派手に騒ぎを起こすのかあ？」

「面倒事は嫌だけど……この世界での職務を全うする警察官が相手じゃ、いくらか話も通じる筈だ。ともかく……」

静かな空間に響き渡る足音を聞いて、衛士は口をつぐむ。

下手な所を聞かれても困るし、何よりも誤解が生まれる事によつてすんなりと通る話が通らなくなる事が嫌だったからだ。

やがて甲高くこだまする足音と共に、その影は鉄格子の前にやつ

てきた。

衛士らをこの留置所に入れてから約一時間が経過した頃合いだった。

『あー、”エイジ・トキ”出てこい。貴様に幾つか質問がある』

「……オレだ」

『だから、出てこいと言っている』

「質問だけならここで良いじゃねえか」

衛士が平常心で吠えて見せれば、しゃくれた顎を引く男はグレーの制服の腰に付いているホルスターに軽く触れた。そこに収まっているのは、ニューナンプと呼ばれるリボルバーの拳銃だった。

短く舌打ちをして彼は立ち上がり、ぴょんぴょんと跳ねるようにして鉄格子へと近づく。同時に南京錠の鍵を開ける男は、鉄格子の一部をドアのように開いて衛士を外へと誘った。

衛士の手錠の鎖を掴み、男は片手で器用に南京錠を施錠し直す。

青年は引つ張られるようにして薄暗い、水銀灯が明滅する廊下を連れ去られる最中、じっと静観する二人を一瞥するだけで彼はその場を辞していった。

刑事モノのドラマで見るような狭い部屋、取調室に衛士は入れられた。小さなデスクと向かい合う椅子に座らされ、腕は勿論背もたれの向こう側へ。

対面する男は衛士を連行した青年とは違い、まだ若々しい好青年といった風貌だった。

『機関には私たちも散々恩恵にあずかっている。無論、君たちは知らん、間接的なものだがね』

木で出来たデスクの上には衛士が持っていた通信端末ケータイが置かれていた。

——清潔には欠ける部屋だったが、唯一まともな設備を持っている場所でもあった。

蛍光灯は明るく室内を照らし、いくらか狭い空間であっても空調

が涼しく快適な湿度に保ってくれている。また内部からの施錠を可能としているお陰でいくらかは安全であり、また直接外に出られる扉も備えられている。

ここは留置所だったが、同時に隙を見せれば看守の命さえも危うい。

ここは日本とは違う世界なのだから。

『君の名前は端末こいつから得た。ここまで話せば機関に所属する君なら理解できるか？ いや、そもそも英語は出来るか？ 中国人？』

小汚い印象を与えるクセツ毛を掻き上げ、男はその薄い目で嫌らしく衛士を視線で嬲る。

衛士が睨み返すと、青年は薄ら笑いを浮かべた。

『いいのかいその態度は。君のお仲間は私たちの手中に居るんだぜ？』

「どうでもいい話はそこまでだ。オレたちだつて時間があるわけじゃない。慰安旅行で来てるわけじゃねえんだよ」

『アハハ、いい度胸だね君いくつ？』

「十七」

まくし立てるような質問に堪えると、看守長らしきこの男は不意に黙りこむ。と思うと、直ぐに目を見開いて衛士をじつと見つめた。

気味悪げに視線を返すと、衛士の背後に立つ、彼を連行した男が突然その後頭部に銃を突きつけた。

『貴様、下手な事は口にしないことだ』

『——手を引け』

間もなくその行動を制する看守長は、鋭い視線を衛士の背後に向ける。と、すかさずフロアのつもりで行った所作を無かったことにするように、銃をホルスターに収め、休めの体勢をとった。

色黒の肌を持つ男はそれから暫く考えこむようにして組んだ両手を机の前に置くと、それからまた部屋の奥に、あるいは衛士へと視線を右往左往させてから、やがて口を開く。彼はどこか緊張した面

持ちだった。

『やれ』

男の言葉と同時に、衛士が座る椅子の足が強く蹴飛ばされて——世界が傾く。沈んだ身体がそのまま横転して、身体が傾いたまま重力に吸い寄せられる。身動きが出来ぬ故に受け身が行えなかった為に地面に叩きつけられた肉体は、激しい衝撃を受けて視界を、全身を揺さぶった。

その間に看守長たる男は帽子を目深にかぶって、倒れた衛士のすぐ横にたつて、持ち上がったその革靴で衛士の顔を踏み躪った。それは痛みを与えるというよりも、より屈辱を演出するための行為のようだった。

『なるほど。この若さでこの胆力、育て甲斐があるってもんじゃないかい。協会が機関から引き抜きたがるのも頷ける。わざわざこんな辺鄙なスラム街の警察に話を持ちかけたりしてまでね』

キレイな靴の裏が衛士の頬を穿つ。

衛士は息遣いすらも押し殺すように微動だにしない。どういった事であれ、相手にしてやっと思ったのが死ぬほど気に食わないからだだったが——不意に腹部を力一杯蹴飛ばされた際には、思わず呻きが漏れてしまった。

『アハハ、抵抗すればいいだろう？ 最も、抵抗したならばその分、いや、幾らか倍にして君の仲間にお返しさせてもらうがねえ？』

「……了解<sup>わか</sup>った。話を聞こう。アンタの目的は……？」

『協会、機関もろとも秘密裏に作業をしてもらうことが前提だ』

「オレには無理だな」

『なら協会に突き出そう。その前に色々と楽しませてもらうがねえ？』

——下手に動かない方が良いと思っていた。

それは何のために？ 衛士が問えば、答えは湧きでるように染み出てきた。

物事を穏便に済ませ、早急に目的を済ますためだ。

だが動かなければ全てが済むというわけでもない。とりわけ今の状況はそうなのだ。柔軟な発想が重要だ。それに気づいていない筈がない。このオレに限って。

ならどうすればいい？ 自分が訊く。

混沌とする感情の渦の中で際立つ孤独が、衛士の中にすつと染み込んで吸収された。残るのは不条理な扱いに生まれた怒りと憎悪、そして何よりもこの男の氣に食わぬ思考回路に対する抵抗、そしてそうすればどういった反応が帰ってくるのかという好奇心。

爆発させればどうなるだろうか。

衛士は考えるよりも早く——首を捻って、頭に乗る男の足を滑らせた。

——というよりも、考えるのが面倒になったからかも知れないのだが。

『ぬわあッ?!』

「さつさと来いよ、お前等あつ！」

拘束する手錠を引きちぎろうとして、さすがに自身にはその腕力がないことを理解する。衛士はすかさず側近の看守が拳銃を抜いたのを察知してぬるりと滑るように椅子から身を引き剥がすと、素早く立ち上がった。

『き、貴様——』

起き上がりざまにパイプ椅子を振り上げ、手元を打撃。すると運良く拳銃を打ち上げ、手元から僅かにその存在が離れてしまう。

衛士はそれを感覚で認識しながら、男の目の前に移動し——跳躍。看守に迫る衛士はそのまま彼に接触し、またそのまま押し、壁に叩きつける。さらに自由になる頭だけでヘッドバンギング。鈍器と化す後頭部はそのまま男の鼻筋を叩き、へし折り、また浮き上がった所をさらに叩いて壁に頭を強打させた。

容赦のない頭突きが、男の意識を奪い去る。

看守はそのまま崩れて——拳銃を拾った看守長が、両手でそれを構えて対峙した。

「貴様のは、敗因は、調子づきすぎた事だッ！」

「喋る暇があったら撃てよ三下」

——不意に、衛士のすぐ横にある扉が吹き飛んだ。

蝶番がひしゃげて扉を固定出来ず、外側から一点に激しい攻撃を受けたように扉は凸型に突きでていて、それはまるで飛び道具のような素早さで拳銃を構えた看守長へと特攻していく。そして思惑通りに鉄扉は彼をなぎ倒し、また背後の小さなデスクごと看守長を押しつぶして——。

「結局こいつらの正体が分からなかった」

「てめえ様は頭が回るようで短気だからな。どうしようもねえよ全  
く」

装備する耐時スーツが耐時スーツだけに常人の十倍以上の身体能力を持つイワイに手錠を破壊してもらいながら漏らすのは、自分の役割を果たせなかったことに対する懺悔だった。

しかし協会に繋がっている事は確実だと判明した。恐らくこの留置所がそうなのだから、警察も同じくそうだろう。が、自称PMCとここが繋がっているかは不明のままだった。

だが——多くの政府に精通していると思われる機関が、まさか発展途上国ではここまで無力だとは思わなかった。衛士は手首に残る違和感をさすって誤魔化しながらそう考えた。

たぶん協会が直接的、実質的な援助を——いわゆる賄賂を渡しているのだろう。そうして協会は名ばかりではなく、徐々に協会としての形を作っていく。この成長速度から考えれば、軍事能力や資産は置いておくとしても、規模は世界抑圧機関と同レベルのモノとなるのも時間の問題であるのは明らかだった。

そして準備が整った所で叩く。衛士の視点から言えば叩かれるというのが正しいところだろうか。

だからこそ、今回の”付焼刃の特異点”という存在がこれからの能力者育成に大きな影響を与える。この特異点の有無によって戦力は激しく上下すると考えても間違いない。故にこの任務は、機

関のコレまでの仕事に比べれば特殊で、そして重要な任務であるのだ。

——何処かへ姿を消していたと思われたアンナは、何処からか衛士のバックパックを担いでやってきた。その手には、なにやら雑音らしき音が喚かれるイヤホンと、そして電源の付いた通信端末が載せられていた。

「おお、ありがとな」

衛士が手を差し出す。すると彼女はリュックではなくイヤホンを衛士の耳に装着させ、そして差し出された手を包むようにして、彼女は端末を握ませた。

『——ジさん！ 応答、お願いします！ 衛士さん、応答を——』

途端に鳴り響く甲高い、どこかヒステリックな悲鳴は、鋭く衛士の頭の中を切り裂くようだった。

「こ、こちら時衛士。どうしたミシエルさん」

『え、衛士さん！ やつと繋がりましたよ！ かれこれ一時間くらいずっと呼んでたんですよ』

「あ、ああ。まあ色々あってな」

『色々と説明したいこともされたい事もありますが、全ては移動しながらお願いします』

さすがプロと言ったところだろうか。

彼女の声調は瞬く間にいつもの調子に戻って、冷静に状況を判断する。そして今一番必要なものを適切に選び、衛士に告げた。

『今回の舞台はどうやらそのスラム街のようです』

「……まさか」

『ふふ、そのまさかですよ。標的の潜伏先はそこでまず間違いないようです』

衛士はこの上なく深い溜息をついて——まだ終わらぬこの一日は、まだまだ死ぬほどに長くなりそうだと肩を落とした。

突然反応の無くなった通信先に慌ててまた応答を願い始めるミシエルの悲鳴を聞きながら、衛士はうんざりしたように、また端末を

口元に持っていった。

——取調室にある窓の外は、既に薄暗くなりつつある。  
治安の悪いこの世界での裏の一日、その始まりだった。

## 夜の序章

夜になると街は一層賑わいを増していた。

立ち並ぶ街灯が照明のようにあたりを照らし、入り口から奥まった場所へ進むと、そこには鉄筋で出来た建物が身を寄せ合うようにして、ところ狭しと詰め込まれている。特に目立つのが、五、六階はありそうなマンションらしき建物が増築に増築を重ねているらしく、横に恐ろしく長い上に継ぎ接ぎが前面に出ている建物が多い事だった。

そんな光景を見ながら、衛士たちは留置所の裏から抜け出し外を回って街の中腹辺りに忍び込んでいた。

そこら一帯はトタンで出来た平屋が多い。どうやら富裕でも貧民でもない一般階級の間人間が住まう区画であるらしい。

手前と奥に比べていくらか人通りも少なく静かなそこで、衛士たちは一旦足を止めていた。

『つまり、衛士さんは最低でも二手にわかれたほうが良いと……？』

「ああ。あの騒ぎでは確かに付焼刃スケアクロウの動きが確認できた。だがその場にいたかは不明だ。しかしアレから半日が経過してる現在いま、どうあれ起こり得たあの爆発を協会連中が知らないはずがない。昼中に動いていないとすれば夜。夜動いてしないとすれば昼。どちらにせよこの時間帯は、くまなく調べつくしたほうがいいと思うんだ」

『殆ど法政が機能していない街で良かったと思います。人の生き死にの観念が軽いほうが、貴方達には動きやすいから……ですが受信イヤ端末ホンと通信端末ケータイが一式ずつしか無い現状では別れるという選択はま  
ずありません。ただでさえ、個人での活動には制限を掛けているのですから』

既に組み立てられている銃はケースに収まって肩に担がれる。二発分の弾丸が装填されているが、些か不安があった。

この銃を使う機会があるだろうか。いや、無いほうがいいのかも

知れない。誰かのためにも、また、自分のためにも。

「だが三人で動けば目立ちやすい。顔を覚えられてる可能性はそう高くないだろうが、”妙な三人組” つつー情報はあると考えていいだろう」

『一番目立つのはイワイさんとベネットさんですね。衛士さんは力もられそうな日本人です。と考えれば……どの道嫌な予感しかしません。別行動は許可できません』

バックパックは既に空同然。血に汚れた革のジャケットを洗ったお陰で乾かぬそれを脇に挟んで、衛士は黄色のロングシャツ姿で少しばかりの暑さを感じていた。

もう十月であるはずなのに、やはり南の方は気温、湿度共に高い。それを同様に感じているらしい二人は、それぞれ汗を拭うような所作を見せていた。

「イヤホンと端末はイワイに。んで、アンナはイワイと行動してくれ。オレは手ぶらでも機関に位置が分かる。そういう身体をしてるから」

——機関が作る副産物は重力子と言われる、重力を司る素粒子を利用して作られ、故に特殊な能力を有することができている。簡単に説明してしまえば、そういった道具を利用できる適性者に於いての特異点の原理は似たようなものだ。

その肉体が特異点に進化する時点で、全ての遺伝子に重力子を感じずる能力が加えられた。最も細かくより正確に説明するならば、重力子自体がある種のウイルスとなつて遺伝情報に強制介入、そして”次元干渉能力”を強化した。

その際に起こりうるのが、特異点が特異点たる為に必要不可欠な副産物の肉体と一体化する事象。その副産物の保有していた能力によつて、個体が持つ様々な影響——たとえば性格だとか、持病、身体能力——を受け、生命の選別をされて特異能力が決定する。

——そして機関はそれぞれが持つ通信端末から人工衛星を利用したGPSで位置を把握する。が、それと共にそれぞれが持つ副産物

の重力子を検出して位置を把握する事も可能だ。

異常に圧縮される重力子。それを固定する方法、また他に影響を及ぼさぬ制御は技術の賜物だが、扱いきれているというわけでもなかった。

だから特異点が生まれる確立もごく低い。重力子を異常に保有する個体は、それ故に副産物と同じような存在となっていた。

「了解。それで、時間と集場所は？」

端末をイワイに渡す。イヤホンをつけると、衛士の名と制止を幾度となく呼びかけるミシエルの声がやや耳に痛いようで、顔をしかめる。

衛士はベルトに付く鎖を引っ張ってポケットから懐中時計を取り出すと、それから時計に視線を落とし、またポケットに戻した。

「午前四時に入り口前でいいだろ。五分遅れた時点で有事と判断するってトコで」

『だ、だから話を勝手に進めないでください！　なんで、何のための遠隔援護オペレーターだと思ってるんですか！　今回の任務は特に——』

「えー、あー、こちらイワイ。異常なし」

彼は口元に端末を持って行くと、冗談交じりにそう呟いて通話を切断する。

「ん、ってかお前、そっぴや俺の事嫌いじゃなかったっけ」

「ああ、まあ……引きずってるわけじゃないけど。嫌いっていうか、こいつには負けられねえなって感じだな」

「そうか。ま、どうあれ仕事上は信頼してくれよ？」

「仲間なら、アンタ以上に頼りになる奴をオレは知らない」

「たはは！　ありがとよ」

イワイはそれから背を向け、軽々しく跳び上がると——その常人ならざる身体能力で簡単に屋根の上に乗り上げた。ボコ、と音を鳴らす屋根は今にも穴が開きそうだったが、上手く骨組みの所に立っているらしい。

無言で彼に倣って跳び上がるアンナは、それから見上げる衛士へ

と軽く手を上げ、一先ずの別れの挨拶をして見せていた。

「んじゃ、上手くやれよ」

「ああ、アンタよりもな」

言葉を最後に、その身軽な動作で素早く衛士の視界から姿を消した。

それを見送った青年は肩の荷が降りたように一つ息を吐いて、それから額の汗を拭うようにしながら髪を掻き上げた。

「さて」

まだ生乾きの革のジャケットは袖を通すと酷い不快感をもたらした。だが、着ていればいつか乾くだろう。手袋も同様につけて、衛士はそう考えた。

「行くか」

「先ほど、何やら騒ぎがあったらしいのですが……。強盗騒ぎは日常茶飯事なのに、それ以上の事が起こっているとは思えません」  
「いえ、神父さまはお気にする必要はありません。我々が始末しますから」

やや広めのマンションの一室で、窓から外を眺めるスコール・マントニアはそう漏らしていた。

簡素なベッドが置かれるだけで、後は冷蔵庫やコンロと水道が一緒にあったシンク台があるだけの部屋。その窓際に立つスコールの背後には、その碧眼が特徴的な華奢な男が腰にナイフを、そして肩からはおよそその細い腕では扱えないであろう大口径の対物狙撃銃を担いでいた。

「人の生き死に……アレ以来、私はよりそこに深く関わってしまったようだ。元より近しい立場に立っていたが、それとは違う、その現場のような場所に」

以前は茶髪だった髪も、機関の人口調整に出くわした際に白く染まり上がってしまったている。そしてあの時に得た『神通力』も、使えば使うほどに器用に、そして多様に変異していた。

神父が振り返ると、男は女性に人気が出るであろう優男な笑顔で出迎えた。が、対照的に着こむタクティカルベストにチノパン姿が、妙に場違いのようだった。

——協会の拠点キャンと言っても、この国で展開される協会は酷く小規模だった。

主にここを活動拠点としているが、特に目立つ行動はない。その上でこの十数人規模がこの国に来たのもわずか一ヶ月ほど前の事らしく、また近々この場所から退く事も示唆していた。

一体何が目的でここに来たのか——神父が考えられるのは、先の人口調整によつて生まれた”特異点”の回収しか無かった。

何かを誘っている様子もない。特に目立ったこともない。故に、彼らの妙な動きも、特に口を出さずに目をつむっていたのだが——。「だからこそ、その加担者と成り得るなら知るべき事もある筈です。でしょう、『ディーノ』さん。貴方もその筈だ」

「……ええ確かに。スコール神父にはこれから、恐らくこれからより狡猾で大胆な作戦に参加してもらうかも知れません。まだ予定するらないですが——協会が名だけではなく、しっかりと形をなす為に、そして機関に対峙出来る為に。貴方は、我々にとっても重要だ。故に、機関にとつてもね」

ディーノはそう言つて、彼の向こう側にある闇に吞まれた街を見下ろした。

最上階であるために光景は壮観だが、絶景とは言いがたい景色だ。背の低い平屋やテントが街灯に照らされる。そして明るい道を人が群れをなして流れていく。あるいは買い物、あるいは強盗を、あるいは強姦を。様々な光景が入り交じる、混沌としたこの環境が、この街での日常だった。

力が無ければ生きていけない。金が無ければ生きていけない。どちらかを持っていなければ、街を訪れたその日に命を落とす——地図上ではただの荒野として描かれるこの街の歴史は、そう長いものでもなかった。

街を出ざるを得ない人間が自然に集まり作られた街。

つまり掃溜めだ。<sup>スラム</sup>

まともに身を隠せて、政府の目自体が届かない場所が他にあれば、何も好き好んでこんな場所には滞在しない。なにせ、今直ぐにでも協会に戻りたいのだから——ディーノは本拠地である某国に想いを馳せて、スコールには察されぬように短く嘆息した。

これほどまで機関の手が早いとは思わなかった。

この特異点を回収してからまだ二日。移動時間を考えて、あの数万人を排除してから二十四時間以内にはこの神父の、否、付焼刃に於ける特異点という存在は機関に発覚されていた。そして恐らく準備万端で法の下に従って飛行機で来た三人は、確実にこの神父を狙っている。

適性者の特異点と同様、やはり”特異点”という存在が特別なのは代わりがないことを親切にも教えてくれる行動だった。

「ではスコール神父。少し、話をしましょうか」

「話……ですか？」

男は重そうに銃を下ろして壁に立てかけると、そのまま壁に背を添わせるように座り込む。片膝を立てて、棒立ちになる神父を見上げるようにして口を開いた。

——神父らしい格好で、神父らしい優しい顔つき。眉は八の字に眉尻を下げ、どこか子犬のような優しい瞳は暖かく全てを見つめてくれる。整った顔は万人に受けいれられそうな甘いマスクであり、また高い身長が弱々しさを見せてはくれなかった。

平凡な世界に居れば幸せな生活を育めそうなルックスは、されどこの世界に踏み入れてしまえば無意味の長物となる。

さらに神父であるのにも関わらず、自ら手を血に染める事になる。一度それを目撃したが、果たしてまともな自意識を保つ次回以降、またそれが出来るだろうか。

不安になる。

だが、今はこの男を信じるしか無いだろう。

残された手段は、時間はもう、そう長くはないのだから。

「と言っても、ボクから自主的に伝えらる事は特にはありません。

質問コーナーとでも名づけましょうか」

「質問——今動いている機関は、やはりわたしを狙っているのでしょうか」

「十割方そうと考えて、まず間違いは無いでしょう」

「仮に接触したとして、やはり殺害されるのでしょうか。協会に入るにあたって、やはりそれは機関にとって邪魔になるから、と」

ブラウンの瞳はどこか怯えた、というよりも悲しみの色を見せていた。

それはこれから起こるであろう事を心配してなのか、はたまた感情も熱もない自身の瞳を見ての感想なのかはデイーノ自身わからなかった。

「あるいは拉致つて支部へ連行。後に実験体として様々な実験をなされるかも知れませんか。我々協会の会長は機関から抜けだしたが故に様々な情報を得ていますが、向こうにとっては全くの未知数。付焼刃が、どうして付焼刃たる能力を有しているのかすら判然としていません。そこでどうして我々、この街に居る我々の存在が、正確には貴方の存在が知覚されたのかはわかりませんが、ね」

彼の言葉を聞いて、神父は思わず背筋を凍らせた。

異質な発想。まるで人を人と思わぬようだ。彼はそう感じて、非人道的な世界に足を踏み入れてしまったことを改めて実感した。そしてまたこれ以降、人と戦うという機会があれば——本当にこの世界に飲まれてしまうだろう。

最早この非日常が日常になってしまふ。それが妙に恐ろしい事に感じられて、スコールは言い知れぬ焦燥感に駆られていた。

「はは、大丈夫です。貴方を守るために、我々はここに居るんですから」

それを察知されたのか、笑顔でデイーノはなだめてかかる。

スコールはそれが少しばかり恥ずかしく感じられて、顔を逸らし

てまた窓の外へと目を向けた。

「この荒んだ世界が、本当なのですよね」

「……本当の世界ってのは、ボクが思うに——その人が見る世界だ  
と思うんですよね」

「その人が、とは」

「例えばただ平凡に過ごしている学生がいれば、ソレにとっては見る感じる全てがソレにとつての世界だし、我々のように死と隣合わせにいれば、その全てが我々の世界です。本当も何も有りません。平和かどうかなんて、それぞれが持つ、それぞれを包む世界にどのような影響を与えるか、程度でしか認識されてませんし」

「善悪と同じ様なものですね」

「ええ、ですね」

デイーノはそう言つて立ち上がる。

ストラップもない大型の対物狙撃銃をまた担ぎ直すと、デイーノは出口に向かいざま、ふと立ち止まつて振り向いた。

「今日はもうお疲れでしょう。ボクは外を回つてきますので、お休みください」

「……わたしも同行しても？」

「といつても行くのは屋上ですけどね。狙撃銃<sup>これ</sup>でちよつと周りを見るだけです」

デイーノ以外の四人は、昼から夕方にかけて起こつた、PCM連中と対峙しそして警察に連行された機関の人間の動向を探っているというより、留置所に入れられて以降姿を見失つてしまっているのだ。

何を起こすか分からない以上、早急に見つけ監視に戻らなければならぬ。

「たまには外の空気でも吸いたいですよ」

「わかりました。くれぐれも気をつけてくださいね」

そういつたやり取りの後、二人はその部屋を後にする。

夜はやがて更けていき——されど終わることなく、まだ夜の長さ

を実感させられる出来事を見る羽目となっていた。

## 波乱の夜？

自分に向けられる視線なら、強い殺気立った気配なら仲間と別れてからずつと感じていた。

だが振り向こうとも、周囲を伺おうともその主の姿は影すら見えない。暑苦しさと緊張とが相まって心労が重なり、警戒がおろそかになりつつある。なにせ、今日ここに付いてから戦闘はあれども小休止すら許されなかったのだから——そんな間隙<sup>かんげき</sup>を狙うような狡猾さに、衛士は思わず舌打ちが漏れた。

おそらく敵は付焼刃<sup>スケアクロウ</sup>。

既にこちらが”特異点”を狙っているというのが察知されていると考えるのが妥当だ。

ならば早急な処分が必要である筈。だが、未だこちらを監視するだけで手を出さないのは何故だろうか。

機関<sup>タイミンク</sup>だと分かる決定的な瞬間を待っている？ 泳がせて戦闘に最適な機会を見計らっている？

何にしろ、手を出してこない今のうちにするべき、あるいは出来ることはしておくべきだ。

——そう考えた矢先だった。不意に腰に突き付けられる、硬くて冷たい違和感を感じたのは。

「動くな。妙な動きをしたらぶつ放つぜ？」

声は背後から突き刺さると共に、複数の気配は衛士を取り囲むようにして肉薄した。その内の一つの影がぬるりと滑るようにして衛士の眼前に現れた。

衛士の一回り大きい巨漢。見るだけで戦意喪失してしまいそうな頑強な肉体は、薄手のタンクトップから隆々とした筋肉を見せつけていた。闇に溶けそうな褐色の肌は街灯に照らされ、辛うじて姿が視認できる。男は其中で浮き出たような真っ白な歯を剥き出しにして、さらに続けた。

「手を上げな。アブねえモノを持つてるかもしれねえから身体検査だ」  
ボアイチエック

鋭い視線。下手をすれば、すぐさま動かなければその凶太い腕が襲いかかってきそうな、威圧する空気に押されて衛士は思わず言われたとおりに行動をしてしまう。

肘を曲げ、手を頭の横に持つてくる。すると、男はにこやかな笑顔で短く舌打ちをした。

「違う違う。腕をピンと伸ばすんだ。お天道さんに向かってなあ」

男は両手を伸ばして、肘を手のひらに乗せるとそれを持ち上げるようにして衛士の腕を伸ばしてやる。

軍人崩れなのか、手馴れた様子でそれから脇に、ジャケットのポケットに手を沿わし、流れ、全身を確認してから手を離れた。

「そいつは銃か」

「……ああ」

「この街では火器類の携行を基本的には禁止している。お前さんが観光者であつてもだ」

——協会が一般人に金を掴ませて機関の人間を探しているという可能性もある。

この街の実権を握る警察の崩壊など、仮にあつたとしても街にはなんの変化もないだろう。この街は限りなく自由だ。だからある程度の事はなんでもできる。そもそも治安という物自体が存在せず、暗黙のルールというものだけでソレが確立している世の中なのかも知れない。

だから仮に、こういった場合に突然発砲されて人が死のうが、周囲の人間は気にしない。とはいえ、道を歩いていて小動物の死骸を見つけた程度の嫌悪感<sup>ちから</sup>は示すだろうが。

理想としては警察が持ちうる人材を全動員して街を駆るのが良かった。そうすれば協会の人間が動き易くなるし、故に確実に狙う瞬間が理解できる。それが出来る能力があるのだから——が、それは恐らく望めないだろう。

協会がそうさせはしない。最低限の人員で潰しにかかる。野うさぎを狩るために森に訓練された犬を放つイメージだ。

後ろの男がケースに手をかける。が、腕を上げたままであるためにそれを奪い取ることは出来なかった。

「アブねえってんだよ、お前さん。ここで起きた全ての惨劇に原因を作るとしたらまっ先にお前さんが挙げられる。ここで火器を持つてのはそういう事だ」

「オレの腰に突き付けてんのは？」

「ははっ！ こいつは”俺のマグナム”だがな！」

銃を突きつける男が叫ぶように言うと、周囲からどつと低い笑い声が漏れ出した。

目の前の男も同様に笑顔で肩を弾ませて笑うと、そうしながら衛士の肩に手を置いた。

「俺たちはこの街の平和を守りてえってんだよ。分かるな？ 中国<sup>チャイナ</sup>人<sup>ス</sup>」

「つまりオレをどうしたいんだ？」

衛士の返答に、男は驚いたように目を見開いて、それから面を上げると周囲の仲間を顔を見合わせた。

「んふー」だの「駄目だこりゃ」などとの言葉が漏れ、衛士はそれを聞きながらなんだか言葉の選択を間違えてしまったような恥ずかしさを感じて、頬が紅潮していく感覚を覚えた。

そして不意に――鋭い拳が頬に穿たれた。

凄まじい衝撃。予知していても下手に避ける事は出来ず、衛士はそのまま脳みそを揺さぶられながらたじろぎ、激動する視界の中で目の前の男を捉えようとして、またその胸ぐらを捕まれて拘束された。

「俺たちをこの街のクズ共と一緒に考えているようだがな、餓鬼。

俺たちやPCM連中とお友達で同業者なんだよ、分かるか？ お前さんが殺した連中のお仲間なんです、理解できますかアッ!?」

襟元を締め上げ、そのまま腕を交差させる。流れるように足を払

うと衛士の身体はいとも簡単に浮き上がって、宙を一回転。そのまま地面に叩きつけられて、その間に銃は回収されてしまった。

——何が、一体どう繋がっているか判らない。

単にこいつらは仲間の仇討ちに來たというだけか？　ならあの連中は何故協会の名前を出したのか。

分らない。警察との繋がりは？　なぜここに派遣されている？　わからない——オレはここで、今何をすればいいのか——オレに何が出来るのか。

全てが不鮮明なその中で、衛士の命は危機に晒されていた。

「銃は使うな。ただじゃ殺さねえぞ！」

脇に両手を通され、訳が分からぬ内に衛士は羽交い締めになされていた。

こいつらは本当に仇討が目的なのか。衛士はそうに疑う事しかできない。何よりも想像以上の衝撃が、混乱の渦へと陥れていたからだ。

答えが見つからぬ疑問を延々と繰り返す。その度に混乱は、不安は、恐怖は深まる。それは悪循環だった。

全身を鰐る堅い拳骨。脇腹に押し付けられ続ける拳銃の銃口。顔を伝い垂れる汗は、紅く滲み粘着質を帯びていた。

——コレも、この街では日常なのだ。

誰もが無関心に過ぎていく。そこにはまるで無いものとされているように、その惨劇は無視され続けていた。

「よくもこの餓鬼が！　あんな残酷な事を……ッ！」

男の咆哮。同時に衝撃、激痛が襲いかかる。

身体の骨が幾本折れたか知れない。抵抗できぬまま、まだ任務もろくに達成し得ぬまま傷つき、力果てるのか——。

「冗談じゃ——冗談じゃねえよ！」

ふりあげる頭。その後頭部は丁度羽交い絞めをする男の顎を打撃した。

鈍い手応え。

低いうめき声。

衛士を拘束する力にはわかに弱まった。

「奴らが考えて行動した結果だろうがっ！」

前方へ滑り落ちるように体重を掛けて腕から抜けると、そのまま握りしめた正拳を振り上げて、目の前の男に切迫。その最中に腕を掴まれる予知を参考に、身体をさらに沈ませた。

男たちの姿が、まるで頭上に聳える高層ビルのように感じられる。衛士はその隙をただすり抜ける事だけに集中して——目の前の男の脇を抜ける。その刹那に放つ猿臂<sup>エルボ</sup>は、狡猾に横腹を突き刺した。

巨木のような肉体がよるめく。が、僅かに揺らぐだけだった。

衛士が彼の背に回りこむ頃にはまた他の男達が衛士へと迫り——。

「さて……話を聞いてくれ……っ！」

懇願じみた台詞が、思わず歪む口から漏れ出した。

「お前さんの話なんぞ——」

この男たちを止める事が出来る一言は何だろうか。

気を引く、興味を引く、注意を引く決定的な言葉。

彼らの根底には何があつて暴力に走るのか。その怒りの根源には何があるのだろうか。

致命傷となりうる言葉。導き出せるだろうか。

暴力の引き金がまた引かれ、拳の撃鉄が落ちるより早く——。

「死体をッ！」

振りかぶる拳が、その最も高い位置でピタリと止まる。

扇状に展開する四人の男たちは、最初に衛士に声を掛けた男のその動作の停止に倣うように、言葉を止めて動かなくなった。

まだ戯言に耳を貸してくれる余裕があつて良かった——衛士はにわかな安堵を胸に、大きく息を吸い込んで続けた。

「あんたらは、ちゃんと死体を確認したか？ お仲間の死体をさ」

「確認だあ？ お前さんがしっかりドタマぶっ放してくれたトコま  
で確認したさ」

「ああそつだ。頭吹っ飛んでたよな、爆発したみたいに。ホントに

良く見たのか？ 銃じゃあんな飛び散り方はしないし、弾だって残ってないはずだ。爆弾じゃあんな綺麗に吹き飛ばない。オレは装備を隠す暇さえ無かった。銃だってまだ一度も使ったことがない新品だ」  
おニョー

「仲間が居るんだろ。他に、外によ」

血に濡れる拳を服で拭くと、男は大きく一步踏み出して衛士の直ぐ前にまで迫る。衛士が見上げるようにすると、男は同様に、顎の下にあるその顔を見下ろした。血に濡れ臉を晴らし青あざを作る、酷い顔だった。

「死体を動かした形跡がないまま警察が来た。現場はそのまま保管されて、だからこそ撃ちこんだ弾丸の回収は不可能だ。爆弾だってそうだ。どうやって？」

「……仮にお前さんが無実だって言いたいなら、誰があんな事が出来た？ お前さんは説明できるのか？」

「それを解くには情報が足りない。あの連中がオレ達と接触したのは、今日の昼間。ヨハネスブルグから半日ほど走った道路でだ。火器類が大量に載せられた大型トラックで強襲された」

「別れて行動していたが——早速穴が見えたな。アイツらは警察署長の護衛で外に出たが、武装の調達は頼まれていない。そしてその証拠の火器類は何処にある？ 警察からも聞いていないが」

やはりそうだ。

衛士は男の言葉でようやく合点がいった様に頷いた。

——あの連中は別れ町の外に出た際に協会と接触し、そして例の能力か、あるいは小型の爆弾を頭の中に埋め込まれた。そして一切の自由をなくし、さらにこのスラム街に潜伏している協会の為に武器を運ばせた。

街に到着してから彼らは一体、荷物をどこに運んだのだろうか。既に待ち構えていた配達ルートに乗せ、その時点で武装調達の仕事は終えたのではないだろうか。

そこで異変に気づいた衛士たちと戦闘になり——情報を漏らす寸

での所で、協会は始末した。

だから今目の前にいる仲間たちがそれらを知らなくても自然だし、同時に明らかに衛士達が手を下したとしか見えない状況を利用して追い詰める事も出来る。

なんとも狡猾な連中だ。

同時に漏れるため息を押し殺し、衛士は反論する。

「オレにはそいつの証拠は出せない。無いものはないからだ。が、アンタ達には死体の不自然な点についてどう答える？　こんな世界に居るなら死体くらいは念入りに確認するだろう」

街の護衛が仕事ならば、不安因子は極力減らす。死体がどういった経緯で死体となったのか分ければ、敵の武装の、少なくとも一部は判然とするからだ。

男は衛士の言葉に従うようにして斜め上の夜空を見上げ、顎に手をやった。

それらを注視する彼の仲間たちも、決して痺れを切らし襲いかかる事もなく、恐らくリーダーなのであるこの男を信用するような目で見守っていた。

「爆ぜていた……というのがやはり正確な表現か。確かに頭はぱっくり割れていた。骨は外側に開いてたが、だが焦げた様子も無かった……風船が破裂したみたいにな」

「オレだって濡れ衣で死にたくない。アンタたちはオレが犯人だって信じ込んでオレを殺してれば寝覚めは良かったかも知れないがな」  
「お前さんには心当たりがあるのか？」

「たったこれだけの説明で信じてくれとは言わないが——アンタ達とオレ達の敵は共通だ」

「ふん。確かに信じられたもんじゃあない。お前さんがアイツらの頭の中に爆弾を仕込んでいないとどう説明を付ける。他のあらゆる手段だってあるはずだ。アレを再現するにはな。だが——」

男は衛士の横に踏み出ると、同時に振り返る。

すると途端に、彼の仲間たちの視線は一斉に彼へと集中した。

「ジョン、ダーティ、お前等は留置所へ行け。隅々を調べて何か、始末されたものはないか確認だ。看守たちはノビてるだろうが構わん。コイツが出てきたってことはそういう事だ」

「了解！」

呼ばれた二人は、まだ若い男の二人組だった。短い金髪の坊主が幼い雰囲気を見せる白人に、対照的にドレッドヘアが陽気に見せる黒人。彼らは同様に腰にナイフを、そして肩からはストラップでカービン銃を降ろした武装で、綺麗に揃った敬礼を後に、街の奥へと駆け出していった。

「ダニエル、エミール両名は警察署地下へ。今日の死体はまだ処分されてないはずだ。くまなくチェックしとけ。……あと、アイツらの服装がヘンに乱れていたなら……そうだな。好きにしろ」

「……了解！」

パーマがかかったような金髪に、色眼鏡を掛ける男は理解が遅れたように、そしてスキンヘッドの威厳がある中年らしい男性は気が抜けていたようにワテンポ遅れてした返事は、奇妙に噛み合って重なっていた。

彼らは顔を合わせると気恥ずかしそうに笑い、先程走っていった二人の後を追うように走りだす。

残った男は、その角刈りの頭を撫でるようにして、微笑んだ。

首に腕を回し、肩を組む。だがそれは背丈が合わぬために、肘を置かれるような形となっていた。

「お前さんは”結果”が来るまで拘束。安心しろ、俺たちや快樂殺人者じゃない。真実が違っていれば詫びるし手を貸す。今回は特にだ……っと、いつまでもお前さんじゃややこしいな。俺はギャラング」

「ああ、俺は……エイジ・トキだ。よろしく、ギャラング」

「おお、宜しくトキ」

手を差し出すと、これまた一回りはありそうな武骨な手が衛士の手を容易に包む。いつでも握りつぶせてしまいそうな力はそれでも

加減され、しっかりとした握手と相成って、交わされた手はまた離れていった。

近場でペットボトルに入っている水を購入して待機している中で、ギョラングから様々な質問をされていた。

お前は中国人なのか？ 歳はいくつだ。ハイスクールには行っていないのか。なぜこんな場所に居るのか。なぜ銃なんて持っていたのか。なぜ歳の割には戦場で育ってきたような感性を持っているのか。なぜ割合に身体が鍛え上げられているのか——答えるのが面倒になる程の質問は、応酬にならず一方的に、彼の仲間が帰ってくるまで続いてしまう。

「隊長、戻りました」

「おお、首尾はどうだ」

ジョン、ダーティ二名は駆け足で戻ると背筋を伸ばして彼の前に立ち止まる。

夜も更に更けてきたからか、人通りは薄れ始めている。それはこの一般層の居住区だからなのだろうが、少なくとも人が少ないに越したことはなかった。

「元々人が居ないような場所だから探しやすいとは思ったんですが……鉄格子や手錠が”力任せに破壊”された形跡以外は特に何も……。掘ったとか、壁を破壊したとかの形跡は一切ありませんでした。火薬の臭いもありませんでしたし、看守長は怯えて話にならないしで……」

ジョンは肩をすばめて、うんざりするように首を捻った。ダーティは彼の肩に手をおいて、励ますように微笑んだ。

「そうか……じゃあ次は街の外。トラックが止まっている、現場付近を頼む」

「隊長、人をコキ使うのは一度までって学校で教わらなかったですか？」

「偉くなったら死ぬほど使えってのは教わったがなあ。文化の違い

じゃないか？」

「はは、諦めるジョン。タイチョーに余裕が無い時にだけ反論すりゃいいんだよ」

「っていうか、コードネームあるのに人前で本名で呼ばないでください」

「今は仕事じゃないから関係ねーっての。いいから行つて来い」  
ギャラングはそう言つてジョンの肩を力強く叩いて送る。ダーティはどこか気怠げな様子を見せながらもキビキビとした動きでそんな相棒の後についていく。

残る二人は、そんな彼らと入れ違いになるようにして戻ってきた。

「……なあギャング、明日の朝飯はスープだけにしてくれ」

「うへえ……もう肉は食えないっす」

腕を垂らし前屈姿勢で、とぼとぼと心底気分悪そうに歩いてきた彼らは開口一番にそう告げる。

死体を漁る命令だったのだからそれも仕方がない事だったが、その両手が真っ赤に染まり上がっている所を見ると、どうあれしつかりと確認してきたのだろう。

「それで？ どうだった」

「その坊主の言うとおりだ。弾痕は無いし火薬を抑えた爆弾を使用した気配も無え。火薬臭く無い上に焦げてもない。ホントに、中から破裂したみてえになつてた。全員な。しかも脳みそが零れたわけじゃなく、脳みそも粉微塵に吹き飛んでいるっつーらしいのが、なんとも悪趣味だよなあ」

「うう……こんなの、人が出来っこないですよ。小型でも、仮に何か道具を仕込んだとしても、外傷は一切ないし。顔とかにあったら、そりゃ分かんないですけど」

「いいや、ダニエル。そいつの可能性は低い」

「なんです？ と問う若い男に、エミールはその髪の生えていない頭を撫でるようにして汗をぬぐい、それから肩を大きく一度上下させて息を吐いた。

身振り手振りで、また衛士から取り上げた銃ケースのストラップをカービン銃と共に肩に提げて、言葉を返す。

「その坊主が気づくだろう。んな傷があったら。髪が生えてるトコでも、ましてや顔にあったら不審に思う。気付かないわけがないだろう？　なあ坊主」

「ええ、まあ。共通の傷つてのが引つかかるはずだけど、恐らく無かった。全員の顔を覚えていたわけじゃ無いけどさ、その時にオレが気になったっていう記憶がない時点でそれは無かった、と考えてるけど……まあ、信憑性は無いよな」

ここでまた評価が下がれば、拘束は続きやがて死につながる。

いや、ここまで不審な点があつて、現場の人間が確かにおかしいと感じて動いている時点で半ば認められているようなものだが、それが確実だと安心できない事も確か。

だがここでこの連中を味方に付ける事ができれば——恐らく大きい収穫となるだろう。

「まあお前さんは自分を信じろ」

ギャラングはそう言って衛士の肩を叩く。安堵させるための所作なのだろうが——いつまでも肩を組むせいで、酷く暑苦しい衛士はその行動が妙にイラついて仕方がなかった。

——事態の進展とは、心がやや安らぎ、あるいは落ち着き始めている際に、最も驚き易いタイミングでやってくるものだ、と衛士は学ぶことが出来た。

「た、隊長——」

丁度人が走り方を忘れれば、そういったものになるだろうと思わせられるほどおぼつかない、大股で飛ぶように、そして今にも転びそうになって走ってくるジョンは、酷く恐ろしいモノでも見たかのように叫び声をあげていた。

「だ、ダーティが、あ、あた、あた、たたたた、た、ばば、ばく、ばくは——」

言葉を遮る破裂音は、その直後に鳴り響く。

ぼん。と、音を立ててジヨンの頭は爆発した。

鈍く箆った音と共に、倒れざまに血肉が飛び散る。

——その刹那、確かに空間の時は停止したかに思われた。

ソレほどまでにジヨンの倒れ方は酷く緩慢になって、ソレほどまでに今起きた不可解な現象は現実のモノとは思えなかった。

脳症が飛び散りトタンの壁に付着する。頭を失った肉体は倒れ、ドロドロと中身が入った缶を零すようにして鮮血に大地を満たしていく姿は、衛士が昼間に見た光景となんら変りない、同一の場面だった。

吐き気を催すほど凄惨で残酷な光景だ。

まさか、と衛士は思う。

これは協会が立派に動いた証なのだろうか、と。

協会の存在は露呈し始める癖して、予期し得ぬ人間にその存在が知られたら、あるいは知られそうになったら抹殺しにかかる。そう考えれば今回の事には説明が付く。

が、同時に、既に死んでいる昼間の連中同様に、同時期に”爆弾”を仕込まれていたとしたら——衛士は最初から協会の思惑通りに、策に嵌っていたという事になる。

何はともあれ、これで確実に協会の存在は確認できたし——相互認識を終えたということを理解できた。

まさか初日にここまでやられるとは思わなかった。

だが初日である今日は、まだまだ続く。衛士はポケットから取り出した懐中時計で時間を確認して、ため息が漏れるのを抑えることが出来なかった。

——午前二時三三分。

夜は未だ更け始める所であり、そして最も避けるべき協会との、単体での戦闘が始まった時刻でもあった。

## 波乱の夜？

——目の前の男は一体何者だろうか。

ギャラングは街の外壁に身を隠して、その疑問を浮かべていた。トラックのそばに立つ影法師は月の明かりによって、闇の中にその姿を浮かび上がらせている。

見る限り武装はない。そして視線は街とは正反対の方向に向き、横顔を見せていた。

足元に転がるのは、頭が失われた人の形をする肉塊。抵抗の余地もなくそうなったのであろうと思わされるほど、肉体は怪我もなく綺麗に残っていた。

「トキの話が、まさか本当だったとはな」

何かを隠すために、一つ嘘を織り込んで説明しているものとばかり思っていた。

当然この世に”超能力”なんて非現実的なものがあるはずないと考えている彼だからこそ、衛士の説明を素直に理解することは出来なかった。だがどちらにせよこの場に居る男が、少なくともジョンとダーティを殺害した犯人だというのは、誰が見ても明らか。確定的。覆しようなない事実であり——敵だ。

相手がただの悪質なテロリストならいい。相手がただの凶悪な爆弾魔なら、快楽殺人者なら、優れた軍人崩れならどれほど良かったものだろうか。

ギャラングは考える。

超能力者などという人間は一体何を考え、どう行動するのだろうか、と。

念に念を入れているお陰で行動直前の作戦会議以外には、仲間と連絡をとる手段が無い。本来装備しているインカムはホテルだし、取りに行く余裕はなかった。そして何よりも衛士提案の作戦というのが、あまりにも不安すぎたのだ。

しかし——敵が実は麻薬密売組織で、時衛士が逆恨みをして逆襲にかかっているという線も拭いきれない。

超能力なんて、それほどまで考えられない事象だ。ギャラングは考え、胸に抱くように構えるアサルトライフルの引き金を人差し指の腹で触れた。

男の動きはまだ無い。門の無い壁の反対側に潜むエミールは、ギャラングの顔を一瞥してから、またトラック脇の男へと視線を投げた。

ダニエルは補欠であり、いざという時に連絡手段として待機している。もしもの時の命綱だ。

敵は残酷であり危険である。それには変わりがないのだから。

鼓動が高鳴るのを感じて、ギャラングはそこに自分らしくない雰囲気を感じていた。

つい先ほど会ったばかりの少年に命を託している。彼の提案した作戦に乗じるという事もそうだし、まず役割自体がそうだった。敵を引きつける囿となる。それが役目で衛士は安全な場所からの狙撃。

そして狙撃が失敗する事を前提に考えられた作戦は、さらに狙撃中にある程度の距離を稼ぐ両名が銃撃による弾幕張り。それまでで敵を仕留められれば成功。出来なければギャラング等は避難し、時衛士が全身に手榴弾を巻いた姿での特攻で終了する。

生存確率的には首謀者である衛士が一等高く、ギャラング達は限りなく低い。

だが何故彼らがそれに応じたかと言えば——彼我の対峙を、誰にも渡したくは無かったというのが一番正確だった。

どのみち戦う羽目になる。そしてどの道向かい合う事になるのなら、それを衛士に渡す訳にはいかない。これは俺達の問題だと口にしたが、作戦提案の始まりだったのかもしれない。

そもそもこれは作戦と呼べるほどしっかりとしたものではない。不実不確か、拙い素人考え丸出しの作戦だが——この場合ではいく

らか適切であると言えたから、採用したまでである。

だが何にしろ、と彼は細く長く息を吐いた。

敵が動かない。微動だにしない。呼吸をしている事を示すように胸は静かに膨らみ、そして戻るが——それはまるで人形であるように、月も無い虚空を見つめたままだった。

誘っているのだろうか。

いや、そもそも今を狙えば囷になる必要無く殺せるのではないだろうか。

ギャラングは考え、そして何かを感知したようにこちらを向くエミールへ指示<sup>サイン</sup>を行う。

左手でエミールを指し、それから弧を描くように手を伸ばす。それは”お前は左から回り込め”という合図だ。幸いトラックのお陰で姿が隠せるだろう。ギャラングは次いで人差し指で自身を指し、左手を右側に弧を作るように伸ばす。これは”俺は右から回りこむ”という意味で——出入口から直線上の位置に居る敵にそのまま突撃することを意味していた。

されどエミールは、理解出来ないと手のひらを見せ平行に左右に振る。危険を伴う役目が自分でないことが理解できぬように、彼は示した。

拳を握り肘を立てると、ピストンさせるように上下に動かす。急げ、という指示に、エミールは些かの葛藤の後、座り込むような低姿勢のまま音を殺して走りだす。彼の姿がトラックに近づいた所で——ギャラングは腹ばいになって、アサルトライフルを構えた。

——突撃の合図はこの射撃。

これで仕留められればいいのだが。ギャラングは考えながら備え付けの、覗き穴のような形をする、いわゆる照準器<sup>ビフサイト</sup>で影の狙いを定めた。

時衛士はこれを遙か数百メートル後方から行っている。狙撃<sup>スナイプ</sup>の経験が無いわけではないが、この蒸し暑く暗い夜に、集中力を持続させて狙いをズラすことなく敵を打ち抜く。それをやり遂げる自信は

無く、またこのわずか十メートル程度の距離でも弾丸を当てられるという確たる自信はない。

命を預かるという事には、同時に多大なる責任が伴う。決して失敗の許されぬたった一度の選択、決定を行うのは個人だ。小隊長として小隊レベルの人間を纏めてきたギャラングには、それだけはよく理解できた。

命はそう軽くない。顔を知っていれば、そいつを良く知っていれば、あるいは親しければ尚更だ。

果たして時衛士が威圧に押しつぶされずに上手くやれるか――いや、上手くやらなければならない。

俺たちはその為に、道を切り開いてやる為にここに居るのだから。そういった想いを込めた発砲は、思考が完結した直後に行われた。――生ぬるい風が頬を撫でる。辺りは砂が巻き上がるが、それでも敵の周囲はやけに鮮明だ。

（幸先がいいな、いくぜ……）

タン、と鳴る短い発砲。

衝撃。

そして銃口は明るく火花を散らす。弾丸は回転しながらその影、こめかみ辺りへと肉薄した。

が、弾は当たらない。顔の直ぐ横、額を掠めるようにして虚空へと姿を消した。まるで肩透かし。

ギャラングは舌打ちをしながら、既に立ち上がっていた身体を駆動して走りだした。

「くっ、やつろう！」

三点バーストで威嚇気味に射撃。同時にトラックの裏側からも同様の発砲音が響き始めた。

二方向からの攻撃は、故にグリッド線のように重なる所為で中々に手強い手段――である筈だった。

だが男は僅かなステップだけを頼りに、傷ひとつ無いまま華麗に弾丸を避け続けた。ポケットに手をつ込み、まるで余裕の様相で

弾丸が何処に来るのか、どうすれば避けられるのか見えているように動いて——やがて弾切れが、ほぼ同時に起こった。

タクティカルベストから取り出しておいだ弾倉<sup>マガジン</sup>を入れ替える。そのわずか一秒足らずの間に、その影は気がつくとも目の前に居た。

「こんなものか。期待はずれだな」

低い男の声。だがまだ若さのある質を持っていた。

影はギャラングより幾らか低かったが——ポケットから抜かれたその手のひらが頭へ伸びる光景を、不意に襲われた恐怖に為されるがまま吞まれている最中に、脳裏にとある記憶を蘇らせていた。

頭が爆ぜる光景。

内部から、何かの影響によって——。

手のひらが迫るのを見て、ギャラングがそれが危険だと理解できたのは殆どその僅かな経験則と、野性的な本能、直感が働いたが為だった。

弾倉を嵌め、引き金を絞る。途端に連続する射撃は、故に目の前の男に回避を余儀なくさせ——だというのに同時に、全身に異常なまでの負荷を感じた。

肩を、頭を誰かに抑えつけられているかのような圧力。異常重力が発生したかに思うほどの負担。

ギャラングが感じたのは、あまりにも不意すぎるそれらだった。

足が地面に根を張ったように動かせない。銃が十倍以上の重量を持つているのか、それを支えることすらも困難で——その為に、一度きりの三点バーストで射撃は終えてしまっていた。

「あんたらの敗因は、そうだな——下手に関わったって事だ」

「か、関わった……だあ……ッ?! てめえ等が勝手に来たんだろ  
うがよ……ッ!」

「少なくとも我々は、お前達には手を出さずに本国へ返してやる予定だった。だがなあ、そういった認識で我々を理解してもらっては困るというものだ」

膝が震える。

ただ立っているだけなのに、既にそれが限界になりつつあった。  
「残念だよ。だがまあ——みんなとおんなじ風に死にたいだろ？  
安心しろ」

男の手が触れる。

死へと誘う魔の手が、頬を優しく撫でたのをギャラングは確かに感じていた。

狙撃に於いて、わずか数ミリの誤差が目標に近づくに連れて大きなものになってしまうのは常識だった。だから狙撃兵は、その時に吹いている風や、その状況での空気抵抗などを考えなければならぬ。

距離にして五三〇メートル。7・62mmの、鉄も鋼も劣化ウランも使用していないただの通常弾<sup>ライフル</sup>。残弾は薬室に送り込んだ弾丸を入れて二発。まさかさっそくこの銃を使う羽目になるとは思わなかった。

いつものように左肩に銃床<sup>ストック</sup>を当て、自由な左目から照準器を覗き込む。備え付いているものではなく、付属品としてあの鉄砲店が付けてくれた望遠鏡のような照準器、テレスコピックサイトと呼ばれるそれは、スコープという名称が一般的だろう。それを覗き込み、四倍の倍率であるそこから、街の出口へと視線を伸ばした。

そこには昼間に衛士たちを襲撃した大型トラックが放置されており、その手前、外壁に背を添わせるように座り込む二つの姿を認識、そしてその両者がギャラング、エミール兩名であることを理解した。近場の三階建ての屋上。廃ビルであるそこは、人が住み始めれば恐らく傾くか崩壊するかしてしまうのではないだろうかと思えるほど老朽化している。恐らく今回の発砲音ですら、いくらか響くだろう。

だが、唯一そこだけが三階建てというわけではなく、付近にもまばらにそれらが存在する。これでまず狙撃が失敗し大まかな位置がバレた際に自動的に機能する罠<sup>トラップ</sup>が完成する。そして仮にここが攻撃

されて崩壊したとしても、派手な壊滅具合からまず無傷ではないだろうと推測させる。が、衛士は同時に逃げ道を用意していた。

まず二つ。簡単にいえば、敵に察知されやすい道と察知されにくい道。これも敵をかく乱させる為にある。

だが、ここまでしても使う機会はないだろう。

——恐らく、映像だけでもミシエルはこの動きを全て監視しているはずだ。ならば同時に状況をイワイ等に伝えていて当然。するとあの二人はごく自然にチャンスだと動きを活発にする。

協会の人間が一人戦闘状態にある。その場に居るのは確かに一人であろうが、されど水面下で動いているのは複数であるはずだ。

たぶん、罠が何かに誘っている。そして衛士が乗っている。協会にとつては、機関の一人を狩る絶好のチャンスだ。

そんな折に、さらにその裏から動けば……。

下手をすれば今夜で全てが終わるかもしれない。

そもそも付焼刃の特異点と言っても、人口調整の際には特に目立った動きはないという話だ。その時点で、まず”危険”という意識が除かれる。ただ”特別”で故に珍しく”貴重”で、協会にとつて何かの”きっかけ”になる可能性があるから、そういった不安因子は取り除けという任務なのだと衛士は大まかに理解していた。

誇張も甚だしい。

衛士は思いながら、同時に自分自身も他者に実力を買いかぶられている現状を思い出して、短い舌打ちを鳴らした。

（ギャラングが動くか、協会が動くか……）

スコープから覗いて見る男の姿に見覚えはない。そして動く様子は未だ無かった。

均衡状態が続くその中で、不意にギャラングが手を動かした。なんらかのハンドサインであることは分かったが、それがどういう意味であるのかは判らない。だがともかく、ギャラングが無謀な事を言い出してエミールが止めにかかっていることだけは、漠然と分かった。

それからややあつてエミールが動き、ギャラングが腹ばいに体勢を移す。右肩に銃床ストックを当て、トリガーに指をかける。銃身から僅かに突き出たレバーを引いて撃鉄を起こし、射撃準備は完了した。

衛士はそれから射線を変更。角度を変え、敵へ狙いを戻す。男は相変わらず素知らぬ顔でそっぽを向いていたが、衛士の目をこまかすことは出来なかった。

動く――それは射撃より数秒ほど以前。

風が吹く。彼らが居る周囲には北西から約十五ノット程の風が吹く。砂埃が舞い始めるくらいの強い風だ。

だというのに男の周囲約二十メートル、丁度男とギャラングからの距離にはその風が無論吹いているであろうはずなのに、砂は舞わず飽くまで静かだった。そう、おかしいと気付ける程にそこは視覚的に静か過ぎていた。

何かに抑えつけられているように。

「そうか」

衛士は思わず口に出た言葉を飲み込むようにして頷いた。

弾道の回転はどの程度に至るか。空気抵抗はいかほどか。装薬の燃烧速度は恐らく市販品より速くなってしまふのは、慣れぬ自作ハントロードの性だ。しかも持ち込みの量もさながら、作る時間にも余裕が無かったためにわずか二発。しかもマトモに作動するかも不明瞭な二発だった。

さらに様々多数、チェック表でも作らなければならぬほどの要素が存在する。だが敵の持つ超能力に”領域”が存在する時点で、そのすべての計算は無駄になる。

衛士は大きく深呼吸をして、その銃口から撃ち放たれる弾薬の弾道だけを精密に、緻密に想像イメージした。

スコープ内の十字線、その中央に男の頭を持つていく。が、どの道動くであろうからその狙いは無駄になる。

（重力……、いや、それだと流石にギャラングが感づく）  
なら何だろうか。

抑えつける力。抑圧——圧力か。

圧力を操作する能力。

そうすればいくらか説明がつくかも知れない。

頭の中の圧力を限りなく高めれば爆発する。そんな話は聞いたこともないし、到底、それだけの説明だとありえないと切り捨てられる。だが他の作用による爆破を考えると、既に選択肢は存在しないのだ。

——考える間に、射撃炎が短く散った。

弾丸は音速を超える速度で一瞬にして男へ肉薄。鋭い狙撃は、彼のこめかみに迫るが、だが銃口を後にして未だコンマ秒のうちだというのに、その回転数は明らかなまでに低下していた。

故に、本来真っ直ぐ飛ぶはずの弾丸が僅かに上向く。それに加え、タイミングを予測していたように頭を動かした事によって、弾丸は男の額を掠るか否かの距離を飛び、闇に吞まれて姿を消した。

トラックの裏に回りこんだエミールが男めがけて射撃する。同時にかけ出したギャラングも引き金を絞り続けた。

射線は交差するが、男は被弾せず、気味の悪いステップだけでそれらを避け続けていた。

まず自身の領域内の全てが知覚できている、というのが分かる。

衛士はさらにその光景を見守ると——男が跳ぶ。それだけで彼は一気に五メートルほどの距離を縮めていた。

口が動く。衛士はそれを確認し、彼の腕がギャラングへ伸びるのを見た。

照準器の十字線を男に合わせる。

不意にギャラングが発砲を開始し——そしてまた突然、猫背になって銃撃をやめた。

また男が何かを言う。

ギャラングの背が小刻みに震えるのが分かる。

伸びた手は、再び、丁度頭の高さが同じくらいになったギャラングの頭へと向かった。

——風が止む。

引き金に指を掛け、衛士は短く息を吸い込んだ。

この一発に全てを掛ける。

ギャラング達には失敗することが前提と説明したが、狙撃兵に失敗など許されるはずがない。位置が、存在がバレた時点でその価値の一切が失せる。さらに戦場ならば狙撃兵という役目だけで、敵に捕まってしまうえば捕虜にさえされずなぶり殺されるというのが定説だ。

故に、この一発はあらゆる意味を以てして外してはならない。

衛士の目は既に、男の額が緋弾した映像を見ていた。

「……ふう」

撃発。

撃鉄が弾薬の尻を叩いて信管を作動させる。信管はそのまま装薬に火を付け、弾丸はライフリングによって回転を初めて、やがて銃口から顔をのぞかせる。火花を散らし、宙を滑空。

つんざく発砲音と共に、衛士の肩に鈍い衝撃が襲いかかった。

それからの展開はまばたきが許されぬほどに早かった。

飛来した弾丸は一瞬にしてギャラングの頭上を掠めたかと思うと、その鋭いライフル弾は見事に男の額に激突。弾丸はめり込み、男は大きくのけぞって——。

「……っ」

未来は変異しない。

衛士は短く息を吐きながら、大慌てで鉄柵に乗り出し、そこに縛り付けられた縄を伝って下へと降りだした。

——男は仰け反った。

だが倒れなかった。

狙撃は確かに成功した。

弾丸は鋭く男の額を打撃し、恐らく頭蓋骨から脳を激しく振動した。

だがソレまでだったのだろう。

男は倒れなかった。

骨にはヒビすら入らなかった。

射撃が成功し、男が揺らぐ——だが彼が付き合ってくれたのはそこまでだったのだ。

血がでない。脳漿が飛び散らない。死なない。倒れない。

失敗だ。

衛士の心臓は今にも張り裂けてしまいそうなほど激しい鼓動を繰り返している。

ギャラングが死ぬ、エミールが死ぬ。

「オレの責任だ……」

壁を蹴って下りるのが嫌に焦らされているように思えて、衛士は二階部分から一気に飛び降りた。

「こんなものか。期待はずれだな」

男がそう口にするのは、この記憶が正しく、混乱していなければ確か二回目だった。

衛士の狙撃は成功した。

それは正に想定外、嬉しい誤算というものだが、対照的に全然嬉しくない、むしろ不幸な誤算も存在していた。それは額を撃たれた男が死なない事である。

撃ちぬかれた、では無いことがミソであるが、ギャラングにはそんな事などどうでも良かった。

額にめり込んだ弾薬を摘むようにして手に取り、そして手の甲で患部をさする。流石に皮膚が裂けているらしく鮮血が流れていたが、それがとても致命傷には思えなかった。

「な、なにを……どうやって……?!」

「ははん、言うわけ無いだろ」

男は拳を握り、振るうとそのまま脳天に落とした。

衝撃はまるで砲丸でも叩きつけられたかのような重さが伴って、ギャラングは耐え切れずに膝を崩し地面に伏せる。今度は異常な重

さが全身に広がって、完全に身動きができなくなった。

「つまん無いなあ。やっぱ一般人<sup>バンビ</sup>ってこの程度？　って思うよ。期待なんてしてないけど。それを遙かに下回る感じ。肩透かしってレベルじゃない。ホントなんにもできないよな、お前等」

しゃがみ込み、無理やりアサルトライフルを引き剥がすと、そのまま剥き出しの頭に銃口を突きつけた。

「どうせ吹っ飛ばし、こっちでいいわな」

発砲音。

それは異様なまでに近く響いてきた。

気がつく和不意に左の耳が焼けるような熱さを覚えたのを、男は理解する。

呆然としながら銃を捨て、耳に触れる。すると手にはべったりとした熱い液体が付着する。同時に、耳が半分ほど形を失っていたことを認識した。

「ぐう……っ！　なん、どこから！？」

視界の上に気配を感じる。同時に影が、丁度上から迫ってきた。

——能力のせいで、その影の落下速度は異常なまでに速く。

「うがあっ！」

振り下ろされた銃床<sup>ストック</sup>は、そのまま外壁の上から飛び降りた衛士によつて男の頭頂を力一杯打撃した。

重い衝撃。確かな手応え。

衛士はそれを感じながらギョラングを跨ぐように着地する。同時に、全身に掛かる圧力は一瞬にして消え去った。

「ここだよって、聞いてねえか」

男はそのまま後ろへと倒れ、受け身も取れずに大地に叩きつけられた。どうやら気を失ってしまったらしい。が、打ち所が悪ければ恐らく命を失ったことだろう。

——能力が解除されていないために、衛士の腕力に落下の速度、そこに加えて屈強な男でさえ身動きできぬ程の圧力が加わった一撃だ。その打撃力はおよそ想像を絶するモノだろう。

「まったく、教わんなかったのかよ。能力中心の戦闘はダメだって能力は便利だが、万能ではないし最強でもない。」

これは耳にたこができるほど聞かされて来た言葉だった。

しかし今回は、敵が場慣れしていない間抜けで良かった。

おそらく素人相手の戦闘が多かったために、そういった油断や隙が慢心となって現れてしまった。今回がその結果だ。どの道、あのままではそう長い命でも無かったことだろう。

衛士は感想づけて、ギャラングから一歩退いて手を差し伸べる。

すると、膝をかくかくと震わせたエミールが背後から近寄ってきた。

「な、なんも出来なかった……」

「安心しろエミール。俺もだ」

——衛士はそんな彼らの、安堵と共に吐き出される言葉を聞いて、今回ほど良かったと思う事はなかった。特異点故にささやかに肉体が強化されていてよかった、と。

身体能力は通常の一・五倍。五〇〇メートル程度の距離ならば、ただでさえ全力疾走で三〇秒とかからぬのだ。強化されていれば単純計算で二〇秒。男が発砲に驚き、無駄口を叩いている時間を計算すれば余裕が出る時間である。

最も、実際はそんな余裕綽々の思考が出来た筈がない。

死ぬ気で走って三メートル弱のコンクリートの壁に飛び上がり、手で掴んで這いずり上がり、そして飛び降りた。その結果は見てのとおりである。

「……トキ」

夢想していると、不意に頬を叩く男が居た。ギャラングだ。

「やつに止めを刺すのか？」

「あー、あんたらはそうしたいだろうな。だが生きているなら、聞き出したい情報があるんだ。たぶん、この状況をコイツの仲間も見てるだろうけどな」

「な、仲間がいんのか？」

エミールは口を挟みたじろぐ。

衛士は首肯し、続けた。

「数も武装も未だ不明。だがオレ達はその中の一人と接触するためここに來ている。極秘任務<sup>てい</sup>つて体<sup>てい</sup>でな」

「……そんな事を俺達に伝えても？」

「協会にもバレてるし、もう漏れたつて広がりようがないからな」

「そんなもんか……。なにはともあれ、だ」

ギャラングが手を差し出す。衛士は応えて、その手を握る。

「エイジ・トキ。心から感謝する」

熱い握手は、同時に男たちの熱い信頼を得たという証でもあった。人数は三人。そして恐らく彼らの援軍は望めない。

それでも、やけに心強く感じるのは、何故だろうか。

衛士はにこやかな笑顔に應じてにやけると、気味が悪いと切り捨てられて、思わず苦笑を漏らした。

「そいつを拘束してくれ。それと、あんたらはもう――」

「ホテルにや戻らないぜ？ まだ”これから”なんだろう？ 小僧！」

言葉を遮り、エミールは親指を立てた。

衛士は嘆息混じりに首を振って、仕方ねえなあと苦言を呈し、

「んじゃ拘束した後、四時までここで待機。目を離すなよ」

ポケットの懐中時計に視線を落として、そしてその意外な時刻に、また自然と息が漏れ、肩から力が抜けた。

——時刻は午前二時四五分。

既に一時間以上は経過していたはずなのに。

衛士は心のなかで独りごち、それからベストを腕を通さずに着せて拘束する男たちのもとへ足を向けた。

## 相違点

男を拘束してトラックの箱状荷台の中に放り込む。扉を開け放したそこで、一定の距離を開けてエミールが銃を構えて男を狙っていた。

下手を起こせば撃ち殺す。

そもそも素直に情報を提供するという可能性がごく低く、また得たソレが正確だと言える証拠がないために、それほど彼に固執する必要はなかった。

また今日のように街の構造を理解し敵に地の利を与えぬようにしながら、風漬しで探し続けられたい。

ビザが無いが、まだ三ヶ月近くの猶予はあるのだ。

仮にエミールの発砲でさえも男の能力によつて殺せない場合、というか、そもそも男がする”下手な行動”が”能力の施行”であるために、彼がうっかり間違えてでも圧力を操作してみせれば、その瞬間に問答無用でトラックの燃料タンクを、ダニエルが構えるRPG-7で破壊しもちも爆発させる手筈になっていた。

だがあらゆる意味で最も危険と言えるのが、男から情報を吐き出させる瞬間である。何にしても動くという事象が、均衡状態よりも遙かにチャンスを与えやすいのだ。

「なんだよ、結局そっちの収穫はナシって事か？」

『表向きは、ですね』

「イワイが居ない理由がそこにつながるのか」

『傍受されている可能性が否めないのではありませんが、まあの道バテてもプレッシャーかけることにはかわりないので、そうですね。ソレらしき人物を尾行中で、当分は私から一方的に衛士さんへ状況を説明させて頂きます』

イヤホンからミシエルは告げ、アンナが突き出す端末から応じて言葉を返す。

それからやがて通話は終えて、彼女は衛士が下ろす手を拾い上げるようにして通信端末を握らせた。

「しかし、尾行だとか潜入はアンナの方が得意だろうに。案外紳士なヤツだな」

衛士が言つと、アンナはそっぽを向く。何か気に触ったみたいだが、彼は気にせずトラックの荷台から飛び降りたギャラングへと歩み寄つていった。

が、彼は肩をすくめて首を捻る。顔は苦いものでも噛み締めたようにしかめて、うんざりしたような様子を見せていた。

「駄目だ、奴あ口を割るところか唾吐いてきやがった。だが抵抗できない奴に手を出すのもなー」

「そうか……ならオレが行く。アンナはここで待つてくれ」

「無駄だと思うがな。殺すなら俺達に任せてくれよな？」

「ああ、わかつてるつて」

耳に差したイヤホンを、アンナの耳に差し返す。顔に帯を巻く彼女だが、額から鼻先まで、そして耳を避けて居るためにそれが可能であった。

長い髪をかき分けるようにしてそうすると、彼女は鬱陶しそうに手を払う。

衛士はそれから端末に声を掛けると、すぐさまイヤホンから反応があったのか、アンナはOkのサインを出した。

「んじゃこれから話を聞きに行くから、頼むぜ」

返事は聞こえず、故に一方的に話しているような感覚になりながらも、衛士はジャケットのポケットにソレを忍ばせ、また手袋をしっかりと伸ばしてからトラックの荷台へと乗り込んだ。

——アルミの床は、歩くと軽い足音を鳴らした。

それによつて衛士の存在を察知したのか、目隠しされている男は後ろで縛られた両腕を振り回すようにして自身をアピールし、やがて静かに落ち着いた。

「分かる。お前は俺の頭をぶん殴った奴だ」

「まあタイミング的に分かるだろう普通」

しかし、猿轡やゐへつわを外したままなのか。

衛士はそれを見て、短くため息を付いた。

最初は齒向かう気など失せる様に、程良く一方的に傷めつけるのが定石であるセオリと衛士は考えていた。無論殴る蹴るの暴行だが、軽症程度に収まるものだ。痛みは派手だが怪我にはならぬ、といった攻撃のみである。

衛士は依然と立ったまま、見下ろす形で言葉を投げた。

「PMCはお前らが協会だつてのは知らないし、協会の存在も知らない。ただ超能力の概念だけは教え込んだ。この街で生きて行くためにな」

「ははは、せいぜい頑張れよ」

「とはいえ、お前らは知ってんだろ？ 機関が特異点を狙ってここに来たのは」

「機関ン？ 特異点ンン？ なんだそりやあ、しらねえなああ？」

衛士は足は振り子のように後ろに持ち上がったかと思うと、鋭く放ったそのつま先が素早く狡猾に、男の眉間を蹴り上げた。

男は仰け反り、短い悲鳴を上げて荷台の壁に叩きつけられる。それだけに留まらず転がる男は、そのまま奥の壁にぶつかつた。

音は反響し、耳にやかましい音となり果てた。

痛い痛いとい喚き全身をのたうち回らせる。衛士はそんな男の腹を蹴り飛ばし、そして首筋を力強く踏みつけた。

壁に床に、様々な場所に様々な箇所を打ち付ける。それだけで痛々しいが、最初の一撃で流れ出した鼻血が、その場面を残酷に見えるよう演出していた。

「吐かなけりや良しさ。お前の仲間を煽る為に生かしてやるよ」

つまりは拷問に見せかけた見せしめだ。

衛士は本で読んだ様々な拷問術を、瞬く間に記憶の海から引き出した。

爪剥ぎに鋸挽のこぎりき、全身に蜜を塗って自然の中に放置、指に釘を刺

したり、逆さ吊り。その他様々な方法があるが、それを行うだけでも一苦労だ。が、それで連中が寄ってくるのなら易いものだ。衛士には思えた。

「があ……っ！　は、手前の命を引き換えにして仲間を差し出せつてかあ！？」

「戦うつもりなんて毛頭ねえんだよ。お前は無関係な人間を殺しすぎた。だから因果応報的に、殺した連中の仲間に襲われたんだろ？　自業自得なんだよ馬鹿が、生きてる内に頭使えクズ」

細い首に掛ける体重を徐々に増やしていく。踏ん張るようにして強く踏むと、男はやがて言葉数を少なくしてきた。

「何が、目的だ……？」

「お前らが回収した特異点と接触することだ」  
接触して何を話せばいいのか、どんな事をすればいいのか。

それら全ては説明されていない。だから本当に目的が接触だけなのか、衛士にも分からなかった。

接触がイコール殺害につながるのかも知れない。それが暗黙の了解なのかも知れない。だが衛士はただ伝えられたままを行うまでであり、また仮にこの場が協会の連中に囲まれたとしても、相手が手を出さぬ限りはこちらも手を出さぬと決めていた。

「と、特異点……あの野郎か。接触してどうするつもりだ」

どうやら本当に特異点は存在し、そしてソレはこの街にいるらしい。男の様子は見る限り真剣で、素直に零れた言葉だということを認識して、衛士は話半分以上で聞き、そして頷いた。

その情報だけで、男の有用性は垣間見えた。

この街に居るならばこれからは門から出ていく人間を監視し、あるいは外壁を登るような不審行動に目を光らせればいい。その上で街を歩けばいずれぶつかる筈だ。

「接触し歓談。その結果によっては行動は異なるだろう」

「なら尚更言えるはずがない……しん——あの野郎は、簡単に揺らぐとは思えないが、だが……」

言いかけた言葉に、衛士は機微に反応した。  
しん。

不意に漏れた言葉は恐らく彼が常々口にするその特異点の呼び名だろう。しん、から続く名前だろうか。あるいはあだ名、とまでは行かぬが、外見的特徴から作る名称。しかし考えるには、それはあまりにも情報が少なすぎた。

せめてあと一文字あれば、と衛士は唸る。

ここで反応したと男に察せられるのは痛い。飽くまでこちらが絶対的優位で居なければならぬのだから、そういった弱みは男の追い詰められた精神に余裕を与えてしまうのだ。

そうすれば情報は引き出し難くなる。

それだけは避けたかったのだ。

「少なくとも人口調整、あの合法テロで野郎は全てを失った。それなのに機関を許せるハズがない。何も出来なかった己さえもまだ恨んで、ならせめてって積極的に俺たちの活動に関わってきてるくらいなのによ」

「聞く限りじゃ、そうだろうな。接触したとして、問答無用で殺されるのはオレたちかも知れないし」

「殺されとけ、ウジが」

「さて、雑談は終わりだ」

足を上げ、振り下ろす。男はまた呻いて、今度は血反吐を吐いてみせた。

「その野郎の特徴は？」

「……黒い服だ」

「取るに足らねえ情報で誤魔化してんじゃねーよ」

首に乗り、浮かび上がる片方の足で腹を蹴飛ばす。固定しているが故に動かぬ肉体は、それ故に鋭く穿たれたつま先を飲み込み突き刺された。また鈍い手応えに、ボキンと小気味よく響いた音が、アバラが幾本か折れたのを教えてくれる。

男は大口を開けて声にならぬまま悲鳴をあげる。空気が擦れて鳴

る音のような叫びを耳にしながら、衛士はいくらかやりすぎたかと思っただ。

だが無関係な人間を巻き込んで十数人を葬っている男だ。どちらにせよこの程度は生易しい。

あのギャング達に任せれば、怨念も相まってより想像するのも恐ろしいことになるだろう。

「し、神父だ。格好が、黒のロングコートみたいな。胸に白い枠で十字が切つてある」

「しんぷ？ 神に仕える神父か？」

「髪が真っ白で、坊ちゃんみたいな整った顔つきだ。まずこの南アに居るつてのがおかしいくらい、たぶん街にいれば浮いてる」

男は先程の一撃が余程効いたのか、堰<sup>せき</sup>を切ったように情報を垂れ流し始める。といっても特異点の外見的特徴だけであるが——必要な情報というのがソレだけなので、目的は半ば達成したようなものだった。

「それで、潜伏先は？」

「……駄目だ。それだけは……」

「ならお前等は何人いるんだ？」

「そ、それも——」

首元に突きつけたブーツのつま先が喉仏を押し上げる。途端に男の声は鈍く重く、やがて空気中に溶けるように消え失せた。

「黙秘は一回だけなんだぜ？」

今は飽くまで男が直ぐに答えられそうな質問を投げているだけに過ぎない。

明らかに時間を掛けねば、男をさらに痛めつけなければ抜き出せぬような情報は最後にとっておく。ソレまでの過程で彼が大怪我を負い、本来聞きだせるはずの情報が聞き出せなくなる場合があるからだ。

「んで、何人？」

「お、俺を入れて、九人……だけど、他五人は本国へのルートを選

んで、手段を入手したり、先行して戻ったりでここには居ない。当分戻らないし、来るのだって、一週間後。俺たちがここから出る日だ」

つまりこの街に居る協会連中は四人。そこに特異点である神父を加えて五人。

この男程度の能力者が居るとなれば、中々どうして、かなり苦戦しそうであるのが容易に想像できた。

彼は間抜けだが、過信が過ぎなければやり辛い相手だ。圧力を操作し、まず頭を爆発させるといふ発想からその躊躇がないことがよくわかる。能力を中心とした戦闘が多いのであろう。故に能力を使用することに於いては、十分に長けていた。

そこを逆手にとった手段で勝つことが出来たが、よくわかる例をここで出してしまったためにこの勝利は続かない。

敵は学ぶのだ。

ゲームのようにはいかない。

人は死ぬし、傷が出来れば痛い。現実の中でこれら全ては起こっている。

改めてそう考えると、なにやら感慨深くなる。

まさかオレがこんな所に立つ羽目になるとは、と。

考えると途端に現実感が喪失<sup>なく</sup>なったように思えた。意識が自分の外にあるような感覚。本の世界に没頭して、その主人公に感情移入し自身さえもその世界に入り込んでしまっているような錯覚。

だがそれらも、さらに深く考えると不意に実感が湧いてきた。

——何度も殺されかけた記憶。そして己の無力故に散っていった人の影。衛士が今ここに立っていられるのは、一概にそれらのおかげと言っても過言ではない。

衛士はそれを思い返し、そして決心をより強めた。

強くなる。誰よりも——誰にも負けないくらい。

実際彼が決意するように、時衛士の<sup>ホーム</sup>実力は機関の仲間が評価するほどのものではない。

その実、彼らは皆衛士の成長、その将来に賭けている。いや、正確には賭けるというよりも待っていた。

彼なら確実に上ってくるであろう高み。時衛士の本質を剥き出しにした能力。それを含めた戦闘能力、人格、その全てを。

短期間の内にあらゆる事象、喪失に襲われ、乗り越えたからこそ貰えた期待値。それはおよそ第三者から見れば異常なほどに高かった。そして恐らく、時衛士本人がその実力を研ぎ身につけ認めたその時、その力は完成する。

「も、もう良いだろ？ お、お前だって強いつてわけじゃあ無い。幸運が重なって上手く勝てただけだ——負け惜しみじゃない。あの状況からじゃそつだ。次を撃つてこなかったって事は、弾が無かつた。だろ……？」

「まあ、アンタの言う通りだ。だがコイツは不良のケンカじゃねーんだよ。人が死んでんだ。お前をどうするか、オレが決められるわけじゃない」

結局、例の神父の潜伏先は分からないし、これから彼を痛めつけようとも流石に口にはしないだろう。

こういった類は敵には非情で仲間想いが多い。といっても、自身が生き残った際の抛り所を守るための、本能的な自己防衛なのかも知れないが。

首から降りて、そのまま床を弾いて背後に跳ぶ。後退してそのまま入り口まで退いた。

「アンタがもし生き延びたら、オレはアンタに殺されるかもな」

恨み辛み。それがあることは勿論、この男にはそれを可能とする力がある。

能力ばかりに頼った戦闘は確かに頂けないが、得意なものに特化した戦闘となれば話は変わる。衛士はただ射撃の腕が普通ではなかったから狙撃の腕を磨いたのだ。それが彼にとっては、与えられた能力であるだけの話だ。

実際に懐に入り込んだ所でギャラングがやられたような圧力を掛

けられれば、仮に未来を視えていたとしても逃げられない。後は罅  
り殺されるだけだ。

「は、てめえの強さってなんだ……？」

「強さ……か。知らねえな、そんなもの」

「あははは！　なら良い、てめえは死ぬぜ！」

その言葉を聞きながら、衛士は床を蹴ってそのまま荷台から飛び  
降りる。

吼えるのを最後に見て、その場を後にした。全てを失い感情の抑  
圧が壊れてしまったように目を見開き歯を剥いて叫ぶその狂気じみ  
たその顔が、衛士には少しばかり印象的で——畏怖し、思わず身体  
を震わせた。

外に出ると既に白んでいた空は完全に蒼く染まり上がり、既に太  
陽が東の空に浮かび上がっていた。

トラックから降りた衛士に真っ先に寄ってきたのはギャラングだ  
った。衛士はポケットの中の端末を操作して通信を切断すると、そ  
のまま聞かれるがままに質問に応答する。

「情報は？」

「ああ、大まかだけどまあ十分。後は好きにしてい」

「とは言うがなあ……アイツの事、どう思う？」

「ん？　どうって……」

ギャラングは言い難そうに刈りこまれた頭を掻いて、さらに深く  
衛士へと踏み込んだ。口元に手で壁を擦るようにして、押し殺すよ  
うに言葉を紡ぐ。

「正直言えば興が冷めた。いや、飽きたって事じゃない。確かに仲  
間を殺されたのは頭にクるが……それがぶっ飛ぶ位ド肝を抜かされ  
たんだ。今回の戦闘は尋常じゃない。超能力つてのが良く分かった。  
アイツらは異常だ」

異常だ——その言葉が胸に突き刺さる理由が、衛士にはよく分か  
った。

それは同時に自身の事を言われているも同じだったからだ。能力がどういったものかは違えど、人が持つはずもない特異な力を持っていることは確かなのだ。たとえそれが予知能力だとしても。

衛士はその台詞に、即座に言葉を返すことが出来なかった。幸運なのは、ギャラングが不思議に思わず周囲を気にせずさっさと言葉を続けてくれたことだった。

「俺達は街のゴロツキでも、民兵でも無い。ここでは終わらない、次がある。俺たちはアクティブ・アームズ……PMCだ。この街に雇われて仕事に来ている……連中にも仲間は居るだろう。次狙われれば俺たちとて危うい。だが今回は何が何でも戦っていただろうし、お前が居なけりゃ死んでいた——が、冷静になってみれば酷く馬鹿な行動だ」

この男、ギャラングが弱音を吐露するのも無理がない。

そもそも弾丸飛び交う戦場で、知識、技術、戦略、経験、運等の生まれ持ってそれぞれが磨き上げた、平等に与えられたそれらだけで戦ってきた彼らには、特異能力という現象、事象はあまりにも突飛すぎたし異常すぎた。

対処法が判らない。さらに個人ごとに能力は異なり、人間ごとに戦闘力は完全に未知。死を決する自爆テロや地雷、狙撃兵スナイパーよりも程恐ろしい存在に、彼には思えて仕方がなかった。

故に口に出来なくとも、彼が何を思っているのかよく分かった。

ここでアイツを始末したあとが怖い。もう引き返せないのはわかるし、関わっちまった以上そうするつもりもないが——お礼参りが怖い。狙われるのが恐ろしい。出来ればここで手を引きたい——そう思っている。衛士にはよく分かった。

さらにそれを仲間と言い出せないのは、単に隊長としての威厳プライドがそうさせているのだろう。あるいは他に理由があるのかもしれないが——少なくとも彼は、ならば自分からと、ギャラングを突き放すことにした。

だから衛士は仕方なく嘆息すると、

「ごめん」

小さく謝罪した。

直後、振りかぶらぬ拳が、ギャラングが反応するよりも速く抜かれて飛来する。刹那にして顔面に突き刺さるパンチは、故に彼に大いなる驚愕と痛みを与えていた。

「オレに従えねーつつうなら失せろ！ これ以上何か言ってみろ、夜道を歩くときはビクビクしなきゃなくなるぜ！ あの野郎はオレが引き取る、これからの一切に二度と関わるな！」

同じ世界の人間だと思った。

心強い仲間が出来たと思った。

だが全ては違っていた。いや、恐らく仲間と思えたのはどちらも同じだったが——とても背を預けて戦える仲間じゃない。

彼らが弱いというわけではないし、実際衛士より実力が格段上なのは確かだ。が、相手にしてきた敵が違<sup>もの</sup>う。衛士ら機関の人間は付<sup>スッテ</sup>焼刃と幾度と無く戦闘し、あらゆる場面での対処を柔軟に、その場で考えられるように鍛えられてきた。

だがこのギャラングらは違う。

飽くまでただの人間と戦い、そしてこれからもただの人間と戦っていく。彼の実力が単純に、能力を使用する付焼刃を上回っていたとしても、能力が不安因子である限り彼は畏怖する。今回を回想し恐怖する。立ち向かえたとして、それが隙になり、死に直結する。それは衛士にも言えることだった。

彼と同じ戦場で肩を並べれば、また常とは違う雰囲気、戦略、行動に戸惑い、慣れぬ、学ばぬ内に殺される。

簡単に言えば、”畑が違う”という事だった。

だから無理に、感情に則って命を無邪気に晒すのも躊躇われる。仲間を統べた隊長ならば、そう判断できて当然だし、今回の命の恩人たる衛士にそれを口に出来るのは冷静な判断ができている証拠だった。

それが彼が慕われる理由でもある。

衛士はそれがなんだか羨ましくなりながらも、角度的に彼らの仲間には自身の表情が見えない故に、笑顔をギヤラングに見せていた。「なら直ぐに街を出たほうがいい。荷物はあるし車だトラックつてある。何、そのうち否が応でも街は……警察は機能しなくなる。オレたちの敵つてのはそういう連中だ」

最も、これまでと戦った付焼刃よりは幾らかレベルが高く冷静だという違いはある。が、本質的な違いは無いはずだった。

「以前のようまえなクズ」は居ないだろうが——それでも、協会やっくらとは戦わなければならない。任務とは別に、ごく私的な理由がそこにはあった。

「じゃあな！ しっぱ巻いて逃げるんだな！」

衛士は呆氣にとられるダニエルの横を過ぎると、銃を下ろして何かなんだか分からぬように光景を見守るエミールに視線で追われながら再びトラックの中へと戻って、

「ははあ、てめえらもう仲間割れ——」

水月を蹴りで穿ち、怯んだ所を拾い上げて肩に担ぐ。

衛士は再びトラックを降りると、今度は待っていたアンナを引き連れ、立ち尽くすギヤラング等に背を向け、ただの一瞥もすることなく街の中へと姿を消した。

終わらせた覚えのない今日は気がつくとも終わり——また新しい今日が始まる。

衛士はうんざりするようになため息を付いて、ようやく活気が失せ始める街の中を闊歩した。

## 奇縁

「アレが機関……あの少年と少女が。民間軍事会社の人たちと遜色ないんじゃないですか、アレは。まだ全然若い……わたしよりも」  
双眼鏡を降ろした神父の頭上では、また熱く鋭い太陽が上がり始めていた。

伏せるディーノは既に狙撃銃をケースに仕舞い、そして早くも帰りの準備を終えている。立ち上がりざまに、彼はその言葉に返した。  
「だって神父さまは見た目若いけどボクより年上じゃないですか」  
「いや、ディーノさん。今はそういう意味で言っただけじゃなくてですね？」

「まああの少年の方は、こつちの世界でも少し”有名”なんですけどね」

踵を返して階段に向かう。スコールは後続き、そして並んで疑問を呈した。

「有名？ まだ高校生くらいなのあの少年が？」

階段を降り、屋上の一つ下、部屋が並ぶ廊下の一室に入る。そこは先程まで彼らが自室としていた部屋であった。

ディーノは重そうにまた銃を壁に立てかけると、適当に置かれる雑多な椅子に腰を掛け、組み合わせのように置かれるテーブルに肘を付いた。些か喉が乾いたが、備蓄が無いために買ってこなければ潤せない。

彼は軽く喉をさすって、対面に神父が座るのを待った。

「それで、何故あの少年が……？」

「彼は日本人だね。機関でいわゆる勧誘スカウトされた人間です……貴方のようにね」

「もしかして——」

「はい。今は貴方と同じ”特異点”と呼ばれる存在です。最もこの呼び名は機関のものだし、種類が違いますが」

付焼刃の特異点、そして適正者の特異点。その違いは何か——端的に言い表すならば、空間に干渉するか、時間に干渉するかの違いだ。

炎、水、電気——その全てはどこにでもある要素を組み合わせることによって発生させられるものだ。そして恐らく超能力として思い浮かべるとしたら予知や念力に続いてそれらを上げる者も少ない。付焼刃は、言ってしまうと”酷く激しく強い思い込み”によって超能力を実現しているのだ。

自分ができる、その可能性が少なくともある。そういった思いが超心理による精神と空間の相互作用を起こし空間に干渉。そして念力などその他の超常現象を引き起こす。

ならば適正者に於ける特異点とは何だろうか。

彼らは主に重力子の影響を受け、使いこなせるか否かで副産物の使用が可能となっている。

そして重力子は重力を司る。現在機関では空間を歪め過去を、そして未来を前後一年以内ならば移動を可能としていた。

特異点はその重力子を細胞単位に、およそ想像を絶するほどの素粒子を詰め込んでいる。単体で時間を移動することはできないが、その干渉能力はおよそ想像を絶する。

触れて止める、未来を見る——これらは全て、ソレによる作用であつた。

恐らく特異点となる素体の素質にもよるが、さらに奇異な存在が誕生してもおかしくはない。それほどに機関は時衛士の進化から、様々なモノを学んでいた。

ならば今度はこちらの番だ——というのが協会の考えである。

「ただの少年から適正者、そして特異点……わずか半年未満で？」

「ええ、ボクは彼を見たことも会ったことはありませんが、ある戦闘で……特異点になる瞬間。それが彼が薄いものの、名を広げるきっかけになりました」

「ある戦闘……」

「ある一定以上の實力を持った超能力者を集め彼……時衛士を私刑するというものです」

その言葉に、神父はいくらか口をつぐんだ後に「なんて下衆な」と口にする。

遠慮のないその台詞は、いづらかスコールの心が動いたことを知らせるようだった。

「彼を特異点に仕立て上げるために全てを極限状態に追い込む。それが目的でした」

「な、なぜそんな……だって機関てきでしょう？」

「脅威は多い方がいい……協会の創設者、かつて機関の特異点だったホロウ・ナガレの命令です」

「ホロウ・ナガレ……特異点……」

引きこむという為ではなく、脅威を増やすため。そう聞いても神父にはわけがわからない。

わざわざ敵を増やす為。あるいは時衛士がこちらに歩み寄るとわかっていてためか。あるいはそのどちらでもなく……。

いや、流石にこればかりは実際に時衛士と会ってみなければ判らない。彼が何を考えているのか。果たして己と同じ心情なのか。

恐らく、同じく全てを失ったもの同士だ。

だが多分、彼にも新たな居場所が出来たことだろう。機関という場所ではなく、仲間。それらに認められることが。

彼が神父を狙う限り、必ず接触することがある。

ここまでのやり方を聞いて、少なくとも神父には協会と機関の違いがつかなくなっていた。

「五。人の社会不適合者。五。人の能力者。彼は戦い、まず前者を皆殺しにした。ですが圧倒できる筈もなく組み伏せられましたが、その能力者より実力が上である一人を殺害。怯んだ所をさらに攻めようとした時、実姉を人質に取られ——殺害され、覚醒。事の顛末はそれです。詳しく聞きたかったらサカグチに聞くといいでしょう」

「サカグチ？ あの炎を使う……？」

「彼は当事者でしたから」

「なら戦闘を終えた今——」

「可能性はありますね。一方的な因縁がありますし」

男を拘束している最中に渡された五発の7・62mm弾のお陰で、衛士のライフルは装填できる最大数の弾丸を孕んでいた。それが充足感というわけではないが、最低限の護身用としての役割を、アンナが肩に下げる狙撃銃<sup>スナイパー</sup>は果たしてくれる。その信頼は少なくともあった。

二キロほど歩くと到着する街の最深部。

衛士が狙撃に利用した廃ビルのような外観の、だが鉄筋故にそう簡単に崩れはしないし、爆発物を使用しなければビクともしなさそうな建築物の群れ。犇めき合うように寄り添って並び、広い通りから無数に伸びる路地にはそれぞれの暮らしが展開されていた。

また、そのマンションのような建物の中での商売も伺える。

弾薬や武器を売っているであろう店。あるいは酒場のような場所。無造作に人が寝ている空間は扉が開け放してあったが、恐らく遺体安置所として使用されているのだろう。ハエが飛び、また酷い悪臭が鼻についた。

「さすがにどつか部屋用意しないとだけど……」

隣を歩くアンナは疲れているのか、単純に眠いのか、足取りはいくらか不確かで危なっかしい。

早い所休ませなければ逆に足手まといになって危険だろう、が。

都市でもどの街でもスラムという場所に来たことがないために、何をどうすればいいのか、そもそもホテルがあるのかすら分らない。ならば情報収集するべきだが——この街である一定以上の情報が集まり、またある程度の信頼が持てる情報提供者が居る場所を、まず捜すべきだった。

「酒場、ですね。街を見る限りでは酒場以外にアルコールを提供している場所はないし、また警察も出入りしています。人が大勢集ま

る場所では何かが起きやすいし、情報が最も集まる……その店主さんに話を聞くのが一番でしょう」

端末の通信を切断しても、イヤホンからの声は決して途絶えることはない。

衛士はなるほど頷いて踵を返す。が、周りが見えていないようにそれでも前に進み続けるアンナの手掴んで誘導する。

数メートル歩いて木製の扉に『Cheap and nasty（安かろう悪かろう）』との看板が掲げられ、その下には小さく『Bar（酒場）』と油性マーカーで書かれていた。

ドアノブを捻り、押し開ける。すると蝶番が悲鳴をあげるように軋み、同時に中の薄暗い空間に外からの光が差し込んだ。

——空間は、天井からいくつも吊るされる埃の被った照明傘から間接照明程度の明かりが周囲を照らす。三十畳ほどの正方形の中にはいくつもの円卓が置かれ、大体一つのテーブルに五つ程の椅子が備えられる。

酒場にはまばらに、そう多くはない客が座り、チビチビと舐めるように酒を嗜む。十人に満たぬ彼らは酒が飲み足りないというより、来たばかりというような雰囲気だった。

まっすぐ進むと右端から真ん中辺りまで伸びるカウンター。その右側の壁にはトイレと記された扉があり、カウンターの奥にいる店主は衛士らを一瞥するなり、手を招いてみせた。

衛士は意識を失っている男を適当な椅子に座らせ、カウンターに寝かせるようにする。それから隣に座ると、アンナもその傍らに付いた。

「見たところこの街の新入りってわけじゃねえな」

頭にタオルを巻く男の肉体は筋肉の鎧で覆われているようだった。単純な骨格だけならギャラングにも勝るとも劣らない。そして壁に掛けられる散弾銃は飾りではなく、護身用なのだろう。

男の言葉を聞きながら後ろを振り返ると、円卓の足は念入りにネジで固定されている。そしてその配置は、扉からカウンターへ真っ

直ぐ道を開けるようになっていて、円卓の間は、丁度椅子を引けば人が通れぬ様になっていた。

否応なしに道が限定される。

散弾銃の効果はてきめんだ。

「ちよつと任務しごとでね」

「なら一先ず注文だ。何がいい」

「……水を二つくれ」

「しみつたれてんなあ、コークでいいだろ。水はねえ」

店主は言つと、そのまま背後の酒棚の脇にある冷蔵庫を開け、その中から缶を二本取り出して雑にカウンターテーブルに叩きつけた。衛士はポケットから財布を取り出し十ランド、日本円で千円ほどを出し、次いで口を利く。

「部屋を借りたいんだけど、どこに行けばいいのかさっぱりわからない。教えてくれ」

「お前日本人だな？ お前等はすぐ財布を出すからな、カモられても知らねえぞ」

「いいから教えてくれ」

「ったくよオ、日本人は親切って聞いてたのに……。情報は情報で交換だ。まずこちらから。お前を見る限り恐らく外で起きたドンパチに関わってた口だな。ライフルを携帯出来るってことはPMCにも目を付けられてない……。いや、今回のPMC殺害に於いて協力させられたってトコか？」

プルタブを起こし、口を開ける。中の空気が吹き出て音がなるが、思っていたよりも泡は出ず、衛士はそのまま口に運び喉を潤す。隣では既にカウンターに頭を叩きつけるようにして動かなくなるアンナを見て、衛士は自身が出した金額の半分を取り戻そうと手を伸ばす。

が、同時に紙幣を掴んでポケットに仕舞い込む店主は、さらにアンナに出したコークを自身で飲みだした。

衛士は顔を引き攣らせてからため息を吐く。

「PMCを狙った犯人の狙撃に加担したってだけだ」

「よくあの連中が受け入れたな」

「ちよつと借りがあつてな……というか、あいつらは何のためにここに？ 治安はクソ悪いけど、必要ないだろ」

仮に麻薬が蔓延<sup>クセリ</sup>していたとしても誰も雇わない。雇う必要な戦闘も無ければ紛争も無い。

彼らが戦うべき敵は居なかった。だからこそ何故わざわざこのヘンピでかつスラム街であるここに派遣されたのか。

「知らん。だがヘンな奴らが来てすぐ派遣されたのが肝つてトコか。警察が雇っているらしいが、両者ともどちらに介入するわけでもない」

「ヘンな奴ら？ そういやトラックが運んだ武装もどこに行っただか……」

「ン、武装なら街の奴らがこの奥にあるマンションに運んでいったのを見たつて奴が居るぜ。ダンボールに入った火器類だよな？ そしてそのヘンな奴ら、妙な五人組がそのマンションに居る……どれも似たような場所なんで、正確な位置は忘れたが」

——繋がった。

警察は協会と関与し、協会の使いつ走りとなるために警察に民間軍事会社を雇わせた。

そして武器を運ばせ、あわよくば機関の人間である衛士らを始末するよう動かした。しかしそれが失敗に終わり、かつ協会の存在を認知した彼らが殺された。

作戦が失敗した場合にと生かされたギャラングたちを使おうとしたが上手くいかず、結局ソレに直接関わっていたこの傍らの男が倒された。

衛士たちは確実に協会に近づいている。

それを実感した。

「そのヘンな奴らについて、いいか？」

「おいおい部屋はどうしたんだ？」

「いいから」

「あいよ」

男はそれからまた、残った内容物を一気に飲み下すと、勢い良くゲップをしてみせた。

「何をしてるかわかんねえ。ただ突撃銃や機関銃を持って街をウロついてるっただけだ。よく目立った神父みたいなのは、ここに来て以来見てない」

「いつ頃に来たんだ？」

「そいつらは三日くらいか。その一ヶ月くらい前に来た似たような連中の仲間らしいが……そいつらはどっか行っちゃまって、今はその五人組だけだ」

つまり彼らも援軍はない。

恐らくその一ヶ月前に来た連中は、この男が言ったように本国へ帰国するための手続きを行っているはずだ。彼らが戻ってくるのは、迎えに来るのは一週間後。

ビザが無くとも三ヶ月は滞在できると考えていたが、現状を考えるならばこの一週間以内に特異点と接触し、さっさと任務を終わらせたほうが良いと考えられた。

敵は能力者だ。それを知っているが、何の能力を持っているかは判らない。完全に未知数だ。下手をすれば初見のまま打ち倒され殺される可能性さえある。

大まかな方針は決まった、が——衛士は良くとも、休む場所が必要だ。

「とまあ、何も知らないお前に無償で情報を提供するのコレまでだ。実質お前から得られたのは騒ぎの原因だけか。んでその男は？」

「その五人組の一人」

「……面倒事は困るんだがな」

「大丈夫、すぐ出てくよ」

「部屋に入るのに特に決まりはない。空いてる部屋を適当に使えば良い。電気は通ってるし水は出る。まあ衛生面は保証しねえがな」

男は言つて手を出した。

情報を情報で交換できない場合は、金を払えということだろうか。一応この街でも貨幣には価値がある。だからこそ、どれほど治安が悪くても商売というものが成り立ち、人が住む、生きることが出来る。それは暗黙の了解となっているのだろう。

衛士はまた財布から十ランド紙幣を取り出し、手渡した。

「ったく。さつさで行け、この時間帯はアブねえからな」

「危ない？ 何が――」

言葉を遮る炸裂音が、静かな店内に響き渡る。

陽気なジャズも笑い声も聞こえない、だがどこか心地よい静かさを持つそこではその不景気な破壊音がこだました。

「ったくよ、災難だなあ小僧」

蝶番がひしゃげて扉が外れ掛かる。そこから二人組の男が現れた。衛士は何も聞こえないというように肘をついてコークを煽る。この騒ぎでもアンナは眠ったままで、また男の意識も途絶えたままだった。

「ワーグナーさんよ、まだこんなボロ酒場続けてたのかあ？」

男は振り上げた足でテーブルを蹴飛ばす。が、やはり固定されているために動かず、破壊することも出来なかった。

両者ともある程度ガタイは良い。本格的にスポーツか、あるいは訓練を行っているような体つきだ。

衛士はポケットに手をつ込んで、慣れた様子で端末を通信状態にする。そうすれば、本来ならば機関には聞こえない音声面での情報を通るのだ。

「奴らは警察がばら蒔いてる麻薬の売人でな。だがここでの取引を禁止しているからって、人が居ない時を見計らって嫌がらせに来てる次第だ。今下手に動かず、そのまま気配殺して難を逃れたほうがいい」

「なんでそこまで親切に？」

「俺の客が目の前でやられちゃ気分が悪い。それだけだ。他意はな

い」

「その人の言うとおりです。建物内なので状況が把握しきれませんが、協会との戦闘は辛うじて外だったのであまり問題にはなりませんでしたが……それでも戦闘、特に無関係ないざこざは極力控えてください」

どの道衛士らの存在はあの戦闘でバレていると考えてまず間違いない。だが下手な行動で隙を見せれば、ここぞと逆に攻め込んでくる可能性がある。彼女はそれを指摘していた。

「なーにをぶつくさ言ってる……ん？ 見ねえ顔だな、新顔か？」  
近づいてくる足音は衛士の直ぐ後ろで止まる。

上目遣いで見る店主の顔つきはそれだけで既に殺気立っていたが——恐らく殺す事に躊躇しないであろう彼がソレをしないのは、警察と繋がっているという事実があるからだろう。

そして腐つても警察。逆らえば何かがある。少なくともこの街では生きていけなくなるような何かがある。

この街でだからこそ出来る、独自の法政が。

男は肩に手を載せ、引く。と逆らわずに乗せられた衛士はそのまま振り返った。

そこには店主とは対照的な黒地の肌を持つ男。後ろに立つのは色違いのような白人だ。

頭のサイドは剃りこみが入り、またモミアゲ部分にラインが二本。頭には立派なトサカが生えている。武骨な手は肩に乗るだけで重く力強い。衛士はそれだけで、かなりのやり手だと理解した。

そもそも体術、武術の類には自信がない。見よう見まねで習った適当な技術しか持ち得ぬ故に、本格的な相手ならば恐らく一分と持たずに叩き伏せられてしまうだろう。

「ハハ、いい顔つきだ。一服どうだ？」

男は言いながら胸のポケットから剥き出しのままの紙巻きたばこを取り出し、衛士に差し出す。が、その腕をカウンター越しからワグナーが腕をつかみ、それを制す。

「やめてくれって言うてんだよ、分かんねえのかトリ頭！」

「んだとおテメエ、お前はコイツの保護者かあ？ 助けてパパって叫んだか？」

「ここに居る人間はテメエの客じゃねえ。俺の客だ。だからここに居る。手を出させはしねえってんだよ」

「ハハン、してみろ坊主。手を出したら最期、テメエの身内はみんな綺麗サッパリ売り捌いてやるよ」

「くっ、クズが……！」

唸るワグナーに得意げに笑む男はそれから、傍らに移動した仲間に肩を叩かれ表情を崩す。指をさして促されるままに目を向けると、その先にはカウターに伏せた外套姿の女があった。

だらしなく口を開けてよだれを垂らして寝ている格好。顔をベルトで巻いている所為で美人なのかブサイクなのかよく分からないが、外套から浮き出る身体は細すぎ程よく肉がついた、見ようによっては淫靡な肉体だった。

ジュルリと、溢れる唾液を嚙り舌なめずりする音が耳に障る。

途端に彼らの意識が、隣ですっかり寝こむアンナへと移ったのがよく分かった。

より厄介になったと、ワグナーが顔をしかめる。ミシエルはそれらが理解できているのだろうか、沈黙したままだった。

「なあワグナーさんよ、そんなに俺達に退いて欲しいんなら退くぜ。この嬢ちゃんを引き替えにな」

「だから言ってんだろ、ここ人間は俺の客だから——」

強い打撃音。瞬間的に両者の口を止まらせる音が、衛士がテーブルを叩いたことよって巻き起こる。

不意にしんと静まり返り、そして衛士は立ち上がりざまに傍らで寝息を立てていた男の目が剥かれたのを、見た。

腰を捻って振り返り、足先を男たちへ向ける。些か見上げる形となる彼らは何処か馬鹿にするように手を広げて驚き、衛士の言葉を待っていた。

「こいつはオレの連れだ。店は関係ねえ」

「へえ格好いいなあ。んでどうすんの」

男は手を上げ軽く握り、右拳を顎の右前、そして左拳をそこからやや出した左前方に置く。右足を前に出し、左足を軸に。そして軽く曲げた上体で、さらにそこから小刻みに揺れる。

それはボクシングの構えだった。

——完全な経験者だ。太刀打ちのしようがない。

衛士は思いながらも、つい言葉は口をついて出てしまう。

「そいつは好きにしてもらっていい。だが代わりに置いていってもらうぜ。てめえの命！」

その咆哮は殆ど自分を奮立たせるための様なものだった。

怖いものは怖いし、痛いものは痛い。男を殺さずただ追い出すためのだけの戦闘。そんなものの経験は無いし、どうすればいいかも判らない。故にこの結果はおよそ凄惨な物に終わる。

誰もがそう息を飲んだ。

「がっ……な、ん——手が、重えッ！」

男の身体が小刻みに震える。先ほどの揺れとは大きく異なる、凄まじい加重に堪えるような体勢。

両拳を胸に引きつけて、やや前屈体勢。顔からは余裕が失せ——何か床に叩きつけられたかの音がしたと思うと、男の背後でその仲間が床に這いつくばっていた。

そして同時に、両腕を通さぬベストで拘束される男が、のっそりと身体を起こして、怠惰な足取りで衛士に並んだ。

「敗けた事は事実だ。何も出来ない内にな……だつつうのに、こんな野郎共に負けるのが許せねえ。俺の名前を汚すんじゃないぜ！」

エイジ・トキ！」

「てめ、もう意識が……！」

「黙れウジ野郎！ 実力がねーのにシャシャるからこうなるんだよ！」

男が足を振り上げ、ボクサーの横腹を穿つように直線的な前蹴り

を撃ちぬく。と、彼は途端に大勢を崩したかと思うと、ソレほどの威力でも無かったのか、さしたる程動かずに、その場に倒れこんだ。彼らはもう呻くだけで言葉を発さない。

何も知らぬ者ならば、何かの冗談か、あるいは衛士らがこの男たちと組んでいたと見るだろう。後者の場合は目的の一切が不明だが、ともかくそう見えるはずだった。

「俺はテメエに負けてない。負ける筈がないんだ！」

「だからオレだって同意したろ。ありや幸運だ」

「だが戦場じゃ幸運でも何でも一度死ねば終わりなんだよ！」

「何が言いたいのお前？」

「知るかよ！」

そう叫んだ男は、それから男を踏みその上に乗って、今度は胸を張った。

「拘束を外せ」  
ベスト

「できない」

「じゃねえとこのゴミ野郎共を運べねえだろ」

「店主に頼む。だろ？」  
ワグナー

振り返って顔を向けると、されどワグナーは素知らぬ顔で衛士が残したコークを飲み下していた。

まだ帰るというわけではないのに勝手に飲む彼は、何やらうんざりしたように缶を傾け、そして顔を上げて完全に飲み干すと、また大きなゲップをしてみせた。

「そいつらはお前の客になったハズだろ？ 手前の後始末<sup>けつ</sup>くらい手前で拭けるようにならないとな？」

空になった缶をカウンターに叩きつけ、店主は綺麗な笑顔で言うてみせた。

衛士はどちらにせよこの距離ならば拘束などは無意味だと考えて、ジッパーを下げ、その紺色のタクティカルベストを外してやった。すると予想外に男はそれを着こみ、そしてしゃがみ込むと軽々と――というわけではなく、仲間の方の男の足を両脇で挟むようにす

ると、そのまま引きずるようにして出口へと向かっていった。

このまま逃げるのではないか。衛士は一瞬そう考えたが、どうしてだろうか。この男はそうするとは思えなかった。

「おい何ボーっとしてんだよてめえ！ 助けてやったんだから運べウジ！」

「わ、わかってるって」

衛士は同様に男を運び、そして外の、酒場に入る前に見つけた腐った死体が寝かせられる遺体安置所のような場所に放り投げた。

しかし男の行動は、それだけには終わらない。

外が明るくなる。人通りも、やや多くなりつつある。その中で、というわけではないが、その通りに面する、ガラスの無い窓から丸見えのその状況で、男は以前もそうしたように、両者の頭を吹き飛ばした。

仲良く並ぶ二人の頭にそれぞれ両手で触れたかと思うと、すぐさま部屋から飛び出して――爆発。

最早聞きなれたと言える鈍い破裂音が、空気を震わした。

血煙が舞う。強い血の臭いが周囲に広がる。

空間は腐った臭いにそれらが加わり悪臭が増して、死体に群がる蛆の動きが、より活発になったように思えた。

日差しが強くなりつつある道路で、呆然とする衛士に男は振り返って言った。

「殺さなきゃまた帰ってくる。嫌な目に遭いたくなけりゃ始末することだ……分からねえなら、いずれ分かる」

「いや、分かるさ。だからオレは、お前等を……」

「なるほど。ウジ野郎、てめえの戦う理由はそいつか。俺達、というよりは協会自体に恨みがある。誰彼構わずって言う感じか。身を滅ぼすやり方だ。力があればソレでいいけどよ……」そのまま「じゃテメエは死ぬぜ、エイジ・トキ。俺が殺す前に」

「そうか、だからお前は協会の存在を知ったPMCを？」

「怖いものは怖い。なまじ戦闘経験が豊富のプロなら尚更だ。奴ら

の適応力は正直異常。てめえらの適正者以下の戦闘員だって似たようなもんだろ」

男は言いながら、ベストから腕を抜いて、肩に羽織る。

衛士にはその行動が理解できなかったが、男は焦らしいように舌打ちをして、貧乏ゆすりをするように踵で幾度も刻むように大地を叩いた。

「不本意だがお前に興味が湧いた。ホントになんでここまでの、タダのザコが、なんで”有名”なのか気になってな」

男は裾から出した手でジッパーを腹くらいまで上げるが、ソレ以上は手が届かないらしく、放置する。

「てかさ、圧力かけるモノを区別して分けられるなら、ジッパーだつて下ろせたんじゃないのか？」

「……出来無い、とだけ言っておく。理由を教えるほど俺は間抜けじゃねえ」

衛士は手を伸ばし、ジッパーを下ろす。

男はその行動に、思わず眉間にしわ寄せた。

「何やってんだテメエ」

「付いて来たけりゃ勝手にしろ。この時点で貸し借りナシ、チャラだ。」

「俺を倒したのが、さっき助けたのでチャラってか？」

衛士が頷く。

すると、不意に衛士の視界外から抜けてきた手のひらが、鋭く衛士のこめかみに突き刺さる。

だがソレは平手打ちではなく、掌底。上手く力が分散されずに突き抜ける凄まじい威力。慣れていなければコレほどまで見事に撃てぬソレに、衛士は思わず意識を削がれ、身体を揺らす。

膝が震えて倒れそうになるが、それを許さぬ衛士は踏ん張り、立ち直った。

「俺の命が随分と安いじゃねえか……なあウジ野郎！ 良いだろう、良い度胸だ。今回は見逃してやるが、次に会ったら命は無いぜ、エ

イジ・トキ！」

男は衛士に背を向け歩き出す。

衛士はそれを見送るというよりは、ただどこか呆然とその背を見つめて、その足がピタリと止まるのを見た。彼は腰を捻り背後を見て、衛士をにらむ。

「俺はランドだ！ 忘れるな！」

名乗り終えると、また彼は前を向き直す。

今度は止まることなく彼は廃ビルの迷路の中へと身を溶かした。

結局何がしたかったのか、あのランドはよく分からない。衛士は考えながら、酒場に戻ろうと足を向けた。

次の瞬間、衛士の頭上から何かが落ちてきた。

巨大な、黒の塊。異様な雰囲気を持つソレが落下<sup>おち</sup>てきて――。

砂袋が叩きつけられるような音がする。

完全に気が抜けたその刹那を狙うような落下物は、人の形をしていた。

「エ、エイジ……か、に、逃げろ――」

肉の焦げる醜悪な臭い。

焼け焦げた肉体。

弱々しく紡がれる言葉。震える声。

最後に見た姿とは大きく異なっていた。だがソレは、決して見紛うことのない仲間の姿だった。

「イワイっ？！ な、何が……」

「ダメだ、ハメられた……、回復に時間が掛かって、とても攻撃に回れねえ――厄介だ、炎は……！」

イワイの弱い叫びは、その最後の一言を強い熱風に飲まれて消える。

衛士の前方に、今度はしっかりと直立する人の姿が降りてきた。その姿を見て、

「……っ！」

衛士は思わず息を飲んだ。  
知っている。

オレはコイツを――、

「てめえ……っ！」

――知っている。

「おうおうおうおう、居るじゃあないかい！ 時衛士！ 今日姉さんは居ないのか？」

炎の能力者。

親の、そして姉の――かたき仇敵。

「ひやははは！ ああ、死んじまっただけえ！？ 首斬られてさ！」

「やめる衛士、コイツには冷静になれ！」

『そ、そうです！ 少なくともベネットさんを起こしてからじゃなきゃ……』

無意識に拳に力がこもる。

情けない話だ――仲間が厄介な男たちに絡まれた時より、断然力が沸く。

弱気になれない。むしろあの時は、どこか”なんとかなる”と思っていたからなのかも知れない。

自分が良く知っているからこそ、油断できないと身体が反応していた。

アイツは生粋のクズだと。

殺さなければならぬ。全身全霊を以て、アイツを。

「少し黙れ。耳障りだ」

目付きが代わるのを、男――サカグチはしっかりと見た。

右眼の眼帯から透けて、蒼い鬼火が灯るのを確認する。  
いいよだ。

やっとあの能力めと戦える。

苦勞して仕立て上げてやったのに、その手前でお預けを食らったが――幸運にも、まさかここで出会うとは思わなかった。

縁も因縁も関係ない。

アイツならオレを試せる。

ならば存分に試してみるだけだ。

サカグチが踏み出す。

同時に衛士が躍り出た。

飽くまで静かな戦闘の始まりは――対照的に、多くに影響をもたらす戦闘の始まりでもあった。

## 熱い男

能力者同士の戦闘で何が鍵を握るのか、それを正確に理解し、また戦闘で活かせる人間はそう多くはない。それでも連勝を続ける人間は、単に力量が格上であるか、または幸運を味方に付けているとしか説明することが出来無い。

例えばランドのような、能力に領域が存在する場合。それらを逆手に取り油断、あるいは隙を招いて仕留める方法は教科書通りのやり方なれど、運と良きタイミングが無ければ成功する確率は割合に低い。

隙を撃つ、敵を欺くといった行動を卑劣な手段と呼べるかは――否だ。

勝てばいい。生き残りさえすればいい。

命を賭した戦いでは、規律や倫理は皆無だと言えよう。

衛士は深く屈み込む。その直後に――頭上を炎弾が、凄まじい速度で通過する。

炎が大気を喰らい勢いを増すものの、だが男の手から離れたそれがまた戻って衛士を狙うことはなく、遠くの路上に落ちると、徐々に勢いを殺していった。

倒れるイワイの背に沿って脇腹を抱くように手を伸ばし、彼の腕を自身の首に回す。そうして肩を貸すと、触れただけで火傷してしまいそうな光熱の肌を衛士に預けながら、イワイは呻いて立ち上がった。意識の混濁はないが、既に死に体と呼べる程満身創痍だった。「ダメだ、細胞が死滅してるから、回復が……」

「いい、ここはオレがやる」

「馬鹿が、あんなの喰らったら死んじゃうぞ……！」

イワイの言葉の最中に立ち止まる。そうして彼の背を押しを自身の前に送ると、無防備な背を蹴飛ばして前方の酒場の扉へと弾き、

同時に自身も背後へ飛び退いた。

彼は勢い良く、開け放たれた扉の中へと突っ込んで、衛士は同時に既に人の失せた路上の中央へと躍り出る。

サカグチは先程の火焰以降立ち止まり、衛士がその直線上に移動し終わると再びようやく動き出す。

彼はただ前へ歩き出すだけであつたが――衛士には、まだ前へ進むことは出来なかつた。

敵の炎は単純に考えても火炎放射器並の威力がある。

それは戦略、戦術を無視してもある程度のゴリ押しで戦闘を終了させられる力を持つ事を意味していた。

勢いで飛び出したが、この炎をどの程度操作出来るのか、また単純に面攻撃が出来るのか――判らない。

果たして勝てるのか？ 武器も無しに、感情のままにかけ出して倒せる相手なのか？

答えは否だ。

もう、そんな簡単な戦いは無い。

命を賭ければ無条件で勝てる相手なんて居ないのだ。状況によつて全てが変異する。ただ分かるのは――。

「おいおいおい、今のでビビつちまったのか？ なら奮い立たせるしか無いよなア、さっきの奴を殺せば怒るか？」

陳腐な台詞には純粋な悪意しか無い。

――この男が未だオレを狙うなら、殺すしか無い。

衛士が理解し、決めたのはソレだった。

『立ち向かうのなら一言だけ助言をします……相手が未知数な場合は様子を見て。死なないでね、衛士さん』

この男が一体何を考えているのか判らない。

ただ振りかかる火の粉を払いに来たのならはその圧倒的な能力で殺せばいい。

なら何故それをしないのか？ その疑問について、少し考えればすぐに答えを導けた。

この男は、戦うことを楽しんでるからだ。

「オレがお前と戦えばいいんだな？ 他に手を出すなよ——いや、出せねえな。死んだ後じゃ」

「……くつ、あつはっひゃっはっは！ イイねえ吠えるねえ、変わってねえな、謙虚に生きてりゃ、あの娘もキレイなままで死ねたかもしれないのによお」

「ははは、不特定多数の一人が何言ってるんだか」

「……、吠えるねえ」

不意に、サカグチの口数は少なくなる。

ただ一言の衛士の挑発に感情を動かされたように、サカグチの足は前へと動き始めて、

「あん時より強くなってるんだろうなあ！」

男は叫び、そして戦いの幕が切って落とされた。

衛士が扉のない部屋——遺体安置所に飛び込むと同時に、男の手のひらに灯ったかと思う火焰が増幅し、再び飛来する。その勢いは正に火炎放射器から吹き出された炎と同等か、ソレ以上の速度を持っていた。

弾丸のように鋭い、点の攻撃。

衛士は部屋の中で受け身をとって、殺されたばかりの死体の上で大勢を整えて——不意に腹部に突き刺さるような痛みが走った。

これはあの発火能力者から負った怪我ではない。恐らく、ギャラパイロキネシスングらに襲われたときについた傷。骨は折れては居ないだろうが、それでもヒビや打ち身の程度が酷いのかも知れない。

つまり、あまり激しい行動は控えなければ怪我は悪化し行動の障害となるということになる。

——だからランドも戦わずに帰ったのか。

衛士はこの状況で呑気に理解した。彼の肋骨を負ったのは何を隠そう彼である。故に、たとえ衛士に行動が出来ぬ程度の圧力バスカルを掛けたとしても、まだ何を隠しているか分かったものではないと考えた

のだろう。だからこそ退いたのだ。

自身の怪我さえも忘れていた衛士とは大きく異なる、冷静な判断だった。

「まったく、情けねえ」

——実力がねえのにシヤシヤるからこうなるんだよ。

ランドの言葉を思い出すと、耳を塞ぎたくなるほど胸に突き刺さった。

本当に情けない。この街に来て、一体何が出来ただろうか。

左目が五秒後に窓から業火が飛び込んできたのを見て、大きく息を吸い込み、それを寸前まで引きつけてからまた部屋から転がるようにして抜けだした。

「ちょこまかと……仕方ねえなアツ！」

炎が安置所を燃やし尽くし、また死体の肉がその勢いを一層激しくする。

それと共に、前方から緩慢な足取りでにじり寄るように進むサカグチは、両手を広げ、手のひらかを燃やす火焰は伸びて肩口までを包んでいった。その姿はまるで焼身自殺でもするかのような異様な光景だったが——何処か、炎で作る腕甲にも見えた。

なぜここに来てわざわざ肉弾戦を選ぶのか。

つくづく理解の範疇外にある行動を起こす男に、やはり衛士は応じることしか出来なかった。

「いくぜトキさんよー、コレならマトモに打ちあってくれるよなア？！」

「遠くでビビってたアンタに出来るのならな」

「お前さあ、お口だけじゃなく戦ってみせろよ！　ゴラアツ！」

火焰がサカグチの肩甲骨に突き刺さる様に吹き出した。対となるその槍が如き炎は、凄まじい熱エネルギーとなつて噴流を生み、運動の第三法則——つまりはその反作用で、肉体を前方に吹き飛ばす程の推進力を作り出した。

言葉にならぬ咆哮を上げながら、拳を振りかぶった体勢のまま男

が肉薄する。両腕の炎が、そして背中中の噴流が火焰の尾を引き、凄まじい熱によって激しい熱風を巻き上げた。

また遺体安置所からの業火が勢いを増してコンクリートを熱し、亀裂を入れる。崩壊するのも時間の問題に思われた。

全身に突き刺さるような熱を振りまきながら切迫した男の拳が振り抜かれる。構えも、打撃に於ける技の構造、その体勢が意図する意味もまるで理解できてないソレだが、ただ強い暴力での攻撃という点では恐ろしく特化している一撃だ。

男が迫る。既に初動動作が終え攻撃が開始する、その寸前。拳が耳の横を抜けて弾丸が如き回転<sup>スピン</sup>を以て撃ち放たれた瞬間。

衛士の身体はサカグチの視界から失せ——沈み、外側に大きく踏み込んだ足を軸にして、捌く。

軸足に全体重を掛けて、その身体は男に触れるか否かの刹那に回転。衛士が次にサカグチを見たのは、速度のピークに達した故に瞬く間に距離を離れていく彼の後ろ姿だった。

熱風が全身を拂り、また眼の粘膜を瞬く間に蒸発せしめる。衛士は思わず左目を瞑り、右眼の眼帯を引き剥がした。

視界は上空に移る。

すると、見送ったサカグチの姿は気が付けば空を舞っていた——その姿を捉えた。

「油断すんなよ、トーキーくんッ!!」

男の格好は至って変わらぬ、半袖のシャツに衛士と同じ指ぬきグローブを嵌める格好。ズボンはチノパンで、故に風を受けパラグライダーのように飛ぶ、あるいは滑空することは勿論、熱上昇<sup>サマール</sup>気流に乗って空高く飛び上がる事自体ができないはずだった。

だがこの男が空を飛び、そして垂直に衛士へ向かって落ちてきていることは事実。

ならば単純に考え、ただの跳躍が勢いと風圧によって伸びたというものだろう。

「くそ、せめて拳銃があれば……」

肉弾戦では勝ち目がない。そもそもあの勢いを利用してカウンタ―を打ち込んだとして、砕けるのはこちらの拳だ。とても重量、勢いに乗せられ利用した攻撃に骨が耐えられる筈がなかった。

だが無いものはない。しかし現時点での利が完全にサカグチにあると言うものでもなかった。

衛士には遠隔視と予知がある。相手が炎を扱うのであれば、それらを喰らってやれる自信がない。そうすればいずれ敵も体力が尽きる、あるいは隙を見せる事になる。

今回の戦闘は、まともに戦えば確実に負ける――それを理解できるからこそ、この鈍重な思考をできる限り早く回さなければならなかった。

激震。

大地が揺れ、その原因が着地した地点から衝撃が波紋となって周囲に広がる。

腰を落として路上に降り立つ男は不敵な笑みを浮かべ――。

「……くそっ！」

上空から火山弾が如き火焰が、絨毯爆撃のように空を紅く埋め尽くして降り注ぐ。

半径五メートルはあろうかという、建物への影響も被害も全く無視した傍若無人な攻撃だ。

このまま走りだしても恐らく完全な回避は不可能。距離にして、酒場の入り口よりもサカグチの方が近いくらいだから逃げ出してもたぶん妨害される。

「ならっ」

跳び込むようにして前方へ飛び出す。すると、まだ大勢を立て直していない彼の腹部にタックルを食らわせる形となってサカグチを押し倒した。

僅かに動揺する彼に抱きついて回転し、そしてサカグチを上に乗せると、丁度火焰は降り注いだ。

凄まじい熱。目を開けてられない程の熱量が全身を包み、そして

肌を焼く。ジリジリと染みるような熱さがジャケットを伝達して感じられる。が、革製であるお陰で火傷をすることはなかった。

馬乗りになるサカグチの腰に足を回してがっちりとホールド。故にズボンが燃え始めるが、力を緩めることはしない。

「くっ、炎は効かねえんだよ！」

サカグチが拳を振り上げる。

炎が降り注ぐその中で、衛士は躊躇することなく貫手を喉元に突き刺した。

「ゴユ……ッ」

さらに片手で男の首に手を回して固定すると、そのまま突き出る拳骨を右眼に突き刺した。

熱い、それこそ燃えるような温度が手に伝わる。途端に吹き出た血が、拳を伝って朱に染める。

——そこまですると流石に炎は止んで残るのは、凄まじい火焰に焼かれたが故に煙を上げてグズグズに溶け始めるアスファルトだけだった。

建物の悉くは表面を黒く焦がす。

その一帯は気温を通常の十度以上に跳ね上げさせる、酷く熱い空間だった。

男の額から流れた汗があご先から垂れて胸元を濡らす。衛士は、まるでシャワーでも浴びたように汗で全身を濡らし、また足に未だくすぶる炎を持ちながらも、攻撃の手を止めなかった。

再び正拳を作り、脇を締め、振り上げる。顎を撃ちぬく打撃が鋭く突き、脳を揺さぶる。

衛士は更に腰のやや高い位置に鉄拳を突き刺す。そこは腎臓、人体の急所の一つであった。

さらに脇腹、水月。加えてこめかみを強打すると――。

「ぐうあああああッ！」

ぼっ、と音を立てて、男の胸元の灯火が現れた。

衛士は慌ててロックを外してサカグチを弾くが、間に合わない。

灯火は増幅して瞬く間に男の肉体、その全身を包んでいく。真っ赤に燃え盛る業火はさらにその芯を白く焼き――衝撃。爆発のような、されど音のない凄まじい衝撃波が、サカグチが着地した際とは比べ物にならない勢いと威力を以て周囲に伝播した。

身体は低空飛行のまま、身動きの出来ぬまま滑空。視界が揺らぎ、空と地の区別がつかなくなつて、そのまま路上に接触、横転し、全身を擦つて肉を削ぎ、打ちつけながら、やがて停止した。

――足は、思った以上に軽度の火傷で済んでいた。

またジャケットのお陰で顔や手、足以外の傷は無いものの、全身を打ち付けたことによつて負つた怪我は割合に重い。

衛士は片膝を、そして対角の腕を地に降ろして倒れぬよう姿勢を保持すると、そのまま右眼を開いて状況を確認した。

「……っ！」

訳が判らない、というのが一先ずの感想だつた。

サカグチの肉体は今、熱された炭のような状態にある。

白く燃えるシルエットだけがサカグチを作り、そこを中心に轟々と猛火を携える。

まるで彼が持ちうる能力の極限を吐き出しているかのようなだつた。「アッハッハッ！　時衛士、もう油断しねえ。俺の全力でお前を殺す。いいなア――ッ？」

彼の周囲のアスファルトは完全に溶け、ぶくぶくと泡立ち始めていた。またその表面にも炎が広がり、蒼く燃える。さらに、サカグチを中心として巻き起こる熱上昇気流が、既に乱流の域にまで成長し、辺りは凄まじい暴風に飲まれていた。

果たしてあの白いシルエットは、本当に男の肉体を留めているのだろうか。衛士は不安に思いながら、腰を上げて強く踏ん張るようにして、風に飛ばされぬよう耐えていた。

恐らくあの炎は低く見積もつても二〇〇度以上あると考えて良い。触れれば死ぬ。それは決して過言ではない。

先ほどまでならばまだ倒せる余地があつた。

だが今はどうだろうか？

純然たる抗いようのない暴力を前に、戦略や運が通用するのだろうか。

答えは——断じて是。

肯定である。

「たく、熱いな……」

ジャケットの胸元を掴んで、服の中に新鮮な空気を送り込む。が、熱気のせいで汗を引かせる効果を規定することは出来なかった。

”もしかしたら”男はその肉体を炎と化しているのかも知れない。だが炎を纏っているだけかも知れない。

衛士がどちらかを選んで考えなければならぬとすれば、断然前者を選んだ。

ならばその炎をどう消すのか、問題はそこだった。

「いつ、痛う……」

ズキン、と頭の芯から弾けたような痛みが不意に現れた。気温の変化に、アスファルトが溶ける熱に頭がやられてしまったのかも知れない。

ならば、こいつの攻略にはそう時間はかけていられない——衛士は決断すると同時に右眼に眼帯を付け直し、男に向けて中指を立ててみせた。

「お口だけじゃなく、戦ってみせろよ」

口元を釣り上げ、歯を剥き出して笑う。

それに応じるように、サカグチは腰を落とし、前屈姿勢へ。

駆け出す予備動作を終えた男は、間髪おかずに、彼自身が火炎放射の勢いで宙を飛び、一瞬にして衛士に肉薄した。

横転するようにして紙一重で避けるが、ジャケットの腹部が刹那にして炭化する。衛士が立ち直ってまた傍らに飛び込むと、息をつく暇もなく、炎の槍が先ほどまで衛士が居た虚空を貫いた。

前方で、溶けたアスファルトを水しぶきのように弾けさせて、男の姿が再び現れる。大地を踏んでブレーキを掛けた軌跡を炎が描い

ていた。

「てめえこそ逃げてばっかでよ、都合が良くねえと戦えねえのか？  
臆病者が……あぁ、だから。そうだなあ、だから、だなあ、お前」  
くつくつと抑えるような笑いに、白いシルエツトが肩を揺らす。  
「だから姉ちゃんも守れなかったんだろ？ 目の前で犯されてんの  
見て、おっ勃たせて、ヒヤハハッ！」

——ようやく、右眼に鬼火が灯りはじめた。  
それが表すのは感情の昂り。集中力の高まり。能力の活性化、成長の兆し。

後者の二つはこれまで感じなかった。  
だが今なら良く分かる。

左目は五秒間の予知を、そして常人ならざる視力を持っていた。  
右眼は頭上数メートルの高さから、そこを中心に十メートルを活動する監視カメラのような遠隔視を持っていた。

その力が今正に変異する。  
脈拍と共にズキズキと痛む頭を抑えながら、衛士はそれを感じていた。

左目が見る世界——目を細めて、集中する。と、目の前の男の姿が消えて、向こう側の光景が見えた。

されど彼が全身に絶やさぬ炎は、まるで男の姿だけがなくなったように残っていた。

目を動かして深いヒビの入ったビルを見れば、大きくぽっかり穴が空いたようにして向こう側を透けさせる景色。

つまりは『透視』だ。

しかしこれが今回の戦闘に於いて何の役に立つのか——衛士はまた近くの、全体にヒビを入れる、内部から焼き尽くされているビルを見て、思いつく。

——とことん、姉さんはオレの背中を押してくれる。  
少しでも不安だった行動は大丈夫だと、優しく肩を叩いてくれる。  
眼帯の上から右眼を撫でて、衛士は嬉しげに微笑んだ。

「勝てる勝負しかないお前よりはマシだと思っけどなあ？」

「んにと……てめえはアツ！　口が減らねえ——今から殺すから、首洗って待つてろアツ！」

男が飛ぶ。

衛士はまた寸での所で避けてみせる。

サカグチは頭上を飛んで再び無数の火焰で絨毯爆撃を行い——衛士は為す術もなくその場でうずくまり、革のジャケットを頭に被った。

やがて業火が降り注ぎ、全てを焼き尽くす勢いで大地を打撃し、アスファルトを焦がす。

身体中を焼き尽くし熱に強い革製のジャケットも燃え、動くことの出来無い爆炎に包まれる。

全身を叩く炎もそこそこに、ジャケット越しに凄まじい熱を覚えながら、衛士はそれらが止んだ所を見計らって再びかけ出した。

頭上から落ちるサカグチが、再び路上に着地し大地を激震させる。横に飛んで直撃を避けるが、ソレによって巻き起こる衝撃波は防ぎ用がなくまた吹き飛ばされて——衛士はその出入口から炎を吐き出すビルの壁に背を打ち付けた。

その衝撃に、思わず意識が飛びそうになる。肺の中の空気が全て吐き出されて、衛士は細々と熱気を吸い込み、喉、肺が火傷しないようにゆっくりと呼吸をする。

その最中に、サカグチは狡猾に衛士の直線上に移動した。

自身が直線でしか動けぬことを知っている。さらに衛士の限界が近くなっている事を知っている。

熱くなる男は、それでも幾らかは冷静にそれを見出していた。

「口程にもねえ、テメエはここで終わりだッ！」

「……終わってんのは、お前の頭だ……、お前を殺すのは、この才だ！」

「ヒヤハハ、精々吠えてりゃいいさ！」

壁を頼りに、衛士は立ち上がる。

男はそうする間に、まるで意気込む様子も躊躇う仕草もなしに呆気無く宙を飛び——それとは別に、視界外から不意に、何かが飛来した。

衛士がそれがなんなのか、その形状すら認識するよりも早く、鋭く腕を叩いて力強く巻きつく。縛り上げるように締め付けるそれはまるで鞭のようだった。

それは衛士が横に飛ぶのと同時に、凄まじい力が衛士を引っ張り上げた。

アンナは路上の中心よりやや対面の酒場に近い位置に立っていて——衛士の為す術もなく、彼女の方へと釣り上げられていた。

炎の塊がビルの中に突撃する。ソレは壁を打撃し、また獄炎の勢いで火災の勢いを増幅させるサカグチの存在は、ビルの崩壊を促した。

ヒビが入り、また衝撃やら何やらに何とか耐えていたその廃ビルは、サカグチの特技によって止めを刺されていた。

まず手始めに二階の床、一階の天井が崩れ、二階部分が丸々下に落ちてくる。

緩慢な動作だが、呆気にとられればその速度は、近くに居れば到底逃げる事など出来無いと思われる程に早かった。

街の奥地、そのマンション街が大きく揺れる。

そして二階部分から上、屋上までが傾くと——そのまま、巨体が揺れて倒れるように、それは路上とは反対方向に、ビルが立ち並ぶ方面、つまり隣接するソレを巻き込んで崩壊していった。

——それらが収まり再び静寂するのに要した時間は約五分。

されどサカグチが残した傷跡は炎となって未だ残り、溶けたアスファルト、崩壊したビルによって、街の人間に、異様な戦闘が起こった、その存在が否応なしに認知され始めていった。

衛士は戦闘が終了したのと同時に意識を深淵に落とし、彼らの活動はこの国に来てから始めての休止が執り行われた。

## 小休止

周囲を焦がし溶かす炎はやがて消え失せ、また周囲を巻き込んだビルの崩壊も、民間人の死者を一人として出さずに済んでいた。

しかしどのみち、この街の住人は興味を示さない。

変わったことといえば、自らの保身のために誰が示したわけでもなく、その場に近寄る人間が極端に減ったことであった。

だからかえって、都合が良かったと言えるだろう。

「なんでおれが、こんな重労働をしてんだろうなあ」

顎を伝って垂れる汗は、止めどなく額から流れ続ける。

およそ十数人の屈強な男と重機を使用して片付けるべきビルの残骸は、道路側に大きく堤防を作るように積まれ、その中央部は随分とへこんでいた。

深く息を吐いて、背筋を伸ばす。使用していたスコップを杖にして一つ休憩を入れようと考えてみるが、場所が場所だけにそう長居は許されない。彼は思い直し、指を鳴らした。

するとその大型のスコップは一瞬にしてその場から消失した。

まるでそこには元から存在せず、それまで見ていたのは目の錯覚かと思わせられるほど見事なまでに刹那以下の時間での消滅だった。既に瓦礫の山は失せている。されどひび割れたコンクリートに阻まれ地面は未だ見えず。つまりここから考えられるのは、一階部分が崩壊して二階部分がそのまま落ち蓋のように被さっているということだ。

彼はそれを見下ろして、また深く息をついた。

「さすがに無理かな、死んでるわコレ」

腰に手をやり、挫折する。

そもそも死体を発見して確実に死亡確認しなければならぬなんて無茶な話だ。こういったビルの下敷きになったり爆発に巻き込まれたり、あるいは連れ去られて死体を損壊、バラバラにして捨てら

れたらとても探せるものではない。

いくら超能力者なれど発火能力者だ。ここから逃れ、あるいは生き残れる筈がない。

しかし諦めずに、瓦礫を掴み、引き上げる。そうすると瓦礫は起き上がり、そこからまた——ごく狭い空間を覗かせた。

支柱か、または崩れた天井の一部が重なって、それが縦に落ちて上から落ちた天井を支えたのか。

つまりはボロボロとビルが崩壊せずに一階が潰れ二階がかぶさった事が、かえって男の生存率をあげていた。

そして図ったように、サカグチはそこに倒れていた。

右腕を瓦礫に潰されたままの格好で。そしておびただしく流れた血は未だ乾かず地面に広がる。だが、まだ命があることを知らせるように小さな呼吸音が、背が小さく上下する様子が見られた。

男は飛び降りるようにしてサカグチの両脇の下に着地する。そのまま前屈して腕の様子を見るも、潰れるだけ潰れてちぎれていないために、ここから救出するのは困難に見えた。

なにせ、腕に乗っている瓦礫は流石にスコップと人力によるテコの原理では到底持ち上がりそうもないくらいに分厚いコンクリートの塊だ。無理にでも動かせと言われても、冗談じゃないと吐いて帰るレベルである。

「哀れなやつ。どうしてこう言う奴らは一対一に拘るんだろうな？」

手を伸ばして頬を叩く。ペチペチと音を立て、聴覚と痛覚に刺激を与え覚醒を促す。

するとそう間もなく、男は唸り、そして胸いっぱい息を吸い込んだ。

「……おれ、は、……ぐッ、いてえ！」

「アンタは負けたんだよ。熱くなりすぎて自分からビルに突っ込んで崩壊させた。見てたよ、一発も当てられないから焦ったんだな。負けるはずだ」

「うるせえ俺は生きてる！　生きてりゃ、何度だって……！」

「諦める。少なくとも右腕がソレじゃ、傷口が塞がるまで戦えない」  
「うるせー……ってんだよオッ！」

サカグチは叫びながら、肩を大きく引くようにして腕を引き抜こうとする。だが完全に挟まれ潰され固定されている右腕は、ミチミチと引つ張り上げる力に耐え切れない皮膚が音を立てて避け始める。既に碎けて結合していない骨は、それ故に筋肉や皮だけで腕の形を作っていた。

彼は歯を噛み締め、漏れ出るうめき声を押し殺す。

それを見下ろす男は、なんだか酷く哀れに思えて、頭の中にパソコンのツリーメニューを思い浮かべる。

それぞれ小火器、銃火器、擲弾、刃物、その他と並ぶそこから刃物へ。メニューに添うように同じツリーメニューが出現し、その中から手斧を選択。同様にメニューが展開し、手頃な一つを選択し、指を鳴らす。

直後に手の中にずっしりと重さが現れて、男はそれを握りながら、ゆっくりとした動作で男の脇に置いてやる。サカグチは動きを止めて斧を注視すると、それから顔を上げて男へと視線を移した。

再び指を鳴らし、手に拳銃持つ。それを顔の横で振って、おどけるように口にした。

「介錯は必要かな？」

「要らねえぜ、んなもんよ！」

男は手斧を握り、小刻みに震える己の拳を見つめる。

怖いはずだ。怖くない筈がない。未練がないはずがない。その決断を、僅か数秒で下せる余裕は無い筈だ。

己の命の為に右腕を捨てるか。右腕がないこれからの生活を想像してこのまま死ぬか。

二つに一つだ。

サカグチとて時間がないことは理解しているだろうし、だからこそ急がなければならぬと心を焦らされる。手が震えるのも、ただ純粹に怖いというだけの理由じゃない。

今ここでこの決定をして後悔しないか。

死ねばこの感情も記憶もともなくなるから、死んだほうがいいんじゃないのか。

心が揺らぐ。

彼の瞳が落ち着きなく揺らぎ、震えが腕全体に広がるのを見て、

男はそれを理解した。

仕方のないことだ。

そう、これは本当に仕方のないことなのだ。

運が良かったがためにこの選択を強いられる。運悪くビル崩壊に巻き込まれて下敷きになっていれば、こんな事を考える必要はなかったのだから。自分の幸せは生にあるのか死にあるのか、ただ戦うことでしか自己表現出来なかった男がそれを選択できるわけがない。

成長することのない、最初から最大限の発火能力を得て、未来のない限界が突破できない能力だけで満足し、されど諦めることなくさらに力の先を無謀に目指してきたこの男に、ただ腕を切断するか否かの判断はどの程度難しいものなのか。

いずれ同様にやってくるであろうこの無情な二択に直面する男は、そうやってスライドを引く事なく銃を構えていた。

「……よし、行くぞ」

声が震えていた。

サカグチは斧を持った手を振り上げ、右腕をじつと見る。

男は指を鳴らして拳銃を消すと、また今度は別に得物を取り出す。今度は手に余る大きさの、柄の長いハンマーだった。

「下ろしたらそのままで行け。その男気ある選択、おれが手伝ってやる」

「ははっ、優しいなあ」

「あの神父が来る前は一応年長者だからな。ディーノも静観しすぎだし」

「ランドは仕掛けておいてどっか行っちゃまうし……ダメだな俺ら」

「ダメダメだよホント。こんなんじゃ帰ったら怒られちゃう。それこそ、いい歳してさ」

「その前に、俺あアイツら……いや、アイツを殺してからじゃなきゃ——」

不意に怒りが蘇る。

そうだ。そもそもはアイツが元凶だ。

脳裏に時衛士の顔がよぎり、それを契機に男は勢い良く右腕の潰れた瓦礫の手前に振り下ろす。

肉を切り裂く音。血が弾ける音。そして、激痛故に自然に溢れる叫び声を抑えるサカグチの悲痛な咆哮。

斧は丁度肘のやや上を切断するも、まだ元気にその硬度を保つ骨が腕の半ばで邪魔をした。男は既に振り上げていたハンマーを、その手斧の峰の部分目掛けて振り下ろし——甲高い打撃音が鳴り響く。骨を断つ手応え。肉を裂く感触。斧の刃がコンクリートを叩き割いて突き刺さるが、それでも跳ね返る衝撃は、その為に手に痺れる程の衝撃を与えていた。

「ぐう……ううううッ!!」

サカグチは右腕の付け根を抑えるようにして上体を起こし、空を見上げるように身体を反らす。その間にも手の中に包帯を取り出し、彼の手をどかして力強く絞めつけた。

包帯を結び、適当な長さで切る。それから雑な切断面に清潔なガーゼを当てて、包帯で固定する。

彼が知りうる全ての応急処置を終えた男は、それから貧血と激痛故に頼りないサカグチを背に背負い、また指を鳴らして使用した道具を消失させると、緩慢な動作で、ゆっくりとその場から退いていた。

「適当な処置はここで終わり。火傷はそこまで酷いものじゃないし、すっかり休めばある程度は動けると思うけど……無理をさせちゃダメね。あと筋肉が張りすぎてマッサージが必要なんだけど……」

短く、ウルフカツトのように刈りこまれた後ろ髪を撫でながら女性性は言った。

彼女は上下一体となるロングドレス調の薄い衣服を一枚だけ着て、その胸元を大きく開けていた。しなやかに伸びる肢体は見るものの目を奪う程艶やかで、また穏やかなその表情も、濃い蒼色の瞳も、その全てが彼女を美女とする要因となっていた。

彼女の言葉に、アンナが自身を親指で自分の胸を叩いて頷く。アンナの格好にさしたる疑問を浮かべぬ美女は、「任せるわね」と言っ

て頷いてから続けた。  
「過労による気絶だから気にしないでいいわ。それと、貴方達の用が済むまでここを使っ

ていいから。主人も口には出さないけれど、彼があ

の男たちを追っ払ってくれたことには深い感謝を示してるわ」  
「だが同時に、そんな事なんて目じゃないくらい異常な戦闘を目の当たりにした筈だが？」  
衛士が仰向けになる寝台の前でようやく椅子から腰を上げて立ち上がると、衛士を挟んだ向こう側に立つイワイが言葉を返す。が、彼女は飽くまで冷静に首を振った。  
「あの店は来る人が来る店だから客足が遠のくこともないし、心配するなら近くの火器店だけれど……今の様子じゃ大丈夫ね。確かに火を出したりなんたりするのは驚いたけど……正直、それが何って感じよ」

「それが何って……」

イワイは哑然として、彼女の言葉を反芻する。

「銃口を向けられたって脅威になる。そりゃ火を出したりするのだって十分脅威って言えるけれど、私には直接関係ないもの。何も変わらないわ」

「肝っ玉がデケエな。あの店主も、随分とスゲエ女を貰ったもんだ」  
傷が完治したイワイは元気よさそうにそう言っ

て、感心するように頷いた。  
アレほどの戦闘を間近で見て、さらにその当事者を酒場

宅部分に招き休ませるといふのは中々出来無い事だ。それが出来るのは余程警戒心が無い間抜けか、随分と人を見る目がある者だけであり、彼女は恐らく後者に思えた。

「私も海兵隊の出身でね。最終階級は一等軍曹」

「……歳を聞いても？」

「見た目ほど若くはないけれど……三五よ」

どうみてもその美貌は二十代前半というものだ。

だというのに少なくとも十以上も実年齢は上回っている。これでは海兵隊では戦闘技術より若さを保つ技術を学んできたと思えない。

「てか、私”も”って？」

「ええ、彼も海兵隊出身。最終階級は少尉で、ブートキャンプでの教官を務めてたの」

「……どんな出会いだよ」

「そうね。長くなるけど――」

彼女は再び腰を落とし椅子に座る。それからどこか嬉しげに口を開くその最中、言葉を遮るように背後の扉が破裂音のような爆音を鳴らして勢い良く開かれた。

慌てて振り返ると、そこに居たのはワグナーであった。

「要らん事は話さなくていい」

「あら？」

「あら？　じゃない……まあいい」

店主は大きく息を吐いて肩を落とす。その妻は肩をすくめるようにして立ち上がると、パイプ椅子を畳んで壁に立てかけた。

「部屋は一応人数分用意できている。使いたい時に使えばいいさ。それと――つい今し方、お前等について訪ねてきた客が居た」

彼は壁にもたれ掛かるようにして告げる。

「ワイシャツの上に黒のベストを着た気取った男だ。眼帯の男は何処に居るかと訊いてきた。俺は宿に戻ったと返すと、奴はその宿の場所を続けて訊いた。入り口付近の宿だと堪えると奴は何も注文せ

ずに帰っていった」

「そいつは何処に行ったんだ？」

「すれ違いに来た客によれば廃ビル群の方へ行ったそうだ」

「……三人目か」

イワイが呟く。

圧力操作の能力者。

発火能力者。

それらに次ぐ、三人目の付焼刃スケアクロウだろう。

あと二人が残り、一人が付焼刃であり、もう一人が神父姿の特異点。今回の目標だ。

——しかし、あまりにも行動が早すぎるではないか。

まだこの街に来て一度目の朝だ。一日滞在して、既に二人の付焼刃を撃退している。そして両者とも向こうから仕掛けてきての結果だ。

奴らは何か焦っている。そう考えられる状況であった。

「どう思う？」

枕元の、床頭台のように鎮座する机の上に置かれる端末を手に取り、イワイが尋ねる。すると間もなく、耳につけたイヤホンから反応が来た。

『イワイさんの考える通りでしょうが……衛士さんを狙っているのが気になりますね』

「ただ特徴的なのが衛士こいつってだけだろ？」

『なら良いのですが。しかし衛士さんの意識が戻るまで、行動は控えたほうが良いでしょう。この際です、周囲の護衛は心強いワームナー夫妻に任せて、休める時に休むべきです』

「一理あるな」

視線を落とすと、既に寝台に座り込むアンナはうつらうつらと頭を前後に揺らし、船を漕いでいた。つい先ほどまで酒場で居所寝をしていたくせに、よく眠るものだといワイは呆れたように息を吐く。だが同時にイワイも疲弊しているのは確かだ。いくら自己治癒が

驚くほど高まり致命傷すらも時間をかければ完治すると言っても、自己治癒である限り体力を使うのだ。鍛えても、タフでも疲れる事は仕方がない。

そして恐らく近日中に事態は再び展開し任務の終盤に近づくだろう。

もしかすれば今を逃せばもう休めないかも知れない。ならば今、十分に休憩を取る必要があるだろう。

入り口は酒場の入り口しか無いし、ここは三階だ。敵の侵入が容易とはとても言えない場所である。

「なら、そういう事だ」

イワイはそれらを伝えると、二人は同時に頷いて、それぞれ顔を見合わせた。

表情は緩み、どこか嬉しげに――昔でも思い出すように、血を湧かし肉を踊らせるようだった。

「任せておけ」

「貴方達はその代わり、ゆっくり休むのよ」

夫妻はそう言って部屋を後にする。

二人を見送ったイワイは、やがて構わず衛士の隣で横になり、上に掛けるシーツを衛士からもぎ取って自身に巻きつけるアンナをよそに、自分に用意された部屋へと向かう。

――久しぶりの静かな空間を心地良く思いながら、イワイは静かに窓を開けて、外の喧騒の中へと身を投げた。

## 接触

とある廃ビル、この街で言うマンションの前で男は立ち止まった。入り口には大口径の狙撃銃を地に降ろして、どこか不機嫌そうな顔で居る幼顔の青年や、右腕を失い格好も正に浮浪者といった風にボロボロの男、そして神父姿の男が彼の帰りを待っていた。

「わざわざ招いて、なんのつもりですか」  
開口一番はソレだった。

視線は、正装のようにYシャツにベスト、そしてしっかりとネクタイを締める男の背後に向けられる。

漆黒の戦闘服を身に纏う、頭をツンツンに逆立たせた男の姿が隠すこともなくそこにあつた。

「いや、勝手に着いて来てさ。撒くのも面倒だったし」

「面倒だったって……あの再生力は結構面倒なんですが」

「サカグチいるし大丈夫だろ」

「おい冗談じゃねえぞ、こちらら立つてただけで十分辛いんだ」

軽口を叩き合うように、彼らはまるで敵に背後を取られている事を忘れていたようだった。

されどイワイは動かず静観している。理由としては簡単で――<sup>ランド</sup>圧力操作能力者の姿が見えないのと、単純にこの人数を相手にして勝てる見込みが皆無だからである。

まずサカグチが戦闘に参加しないとしても、残る三人は見事なまでに未知数。名も知らなければ勿論見たこともない連中。そしてビルの下敷きになったサカグチを救出できる程の連中だ。

およそ常識はずれ、というのは機関の人間が言うにはどこかフザケて聞こえるだろうか。

だが、イワイが感じているそれは少なくとも間違いいではない。大口径の狙撃銃。おそらくコレで全ては監視されていたと考えて間違いないし、そして実用していることも確実。彼が姿を消した時

点で、次の瞬間に狙撃されることを考えねばならない。

そして目の前の男。サカグチが生きていた事は恐らく奇跡的なのだろうが、”何も持たずに”あの瓦礫を排除し救出したという行動は目に余る。近接戦闘では特に気を付けなければならぬのは彼だろつ。

さらに神父姿の男——こいつが今回の目標だ。

その黒のロングコート風の神父服が無ければどこぞの俳優のような様相を呈すだろう美男な外観。だが人は見た目によらないというのは、衛士を見ればよくわかる。だからイワイが彼を警戒こそすれ、侮ることは決してなかった。

その上で、わざわざこの場に誘い込んだということはここが彼らのホームであるろつ。不利であるのは最早確実と言えた。

「ランドは帰ってこないしサカグチはこの調子。あの敵——確か、ヒデオ・イワイは近接格闘型。ボクは相手できない」

「お、おいおい。デイーノ冗談キツイぜ？ おれだつて近接戦闘得意じゃねーって。ボクサー前にして、素人がどうやって武器出して戦えってんだ」

——男が別の空間からモノを取り出す場合、それは先程の様に頭の中にリストを作り、そしてその中から彼が所持しているものを指定し指を鳴らさなければならぬ。ソレは、とても弾丸のような拳の連打を避けながら出来る程、易い集中力で可能なものではなかった。

「ならわたしが行きましょう」

そう言つてイワイに背を向ける男より一步前に出たのは、スコール・マンティアであつた。

「マンティアさん、そりゃいくら何でも。おれ達は一応アンタの護衛役としてここに居るんだぜ？」

「なんやかんやと屁理屈こねくり回すくらいならわたしの方がまだマシ、ではないですか？」

「ボクはかまいませんよ。一対一を明言していない以上、危なくな

タイムン

れば手を出せばいいだけです」

「……そこらへんはそちらにお願いします」

捨てるように返し前へ出る神父には表情が失せていた。

首から下を耐時スーツに身を包むイワイは暑苦しそうに手をうちわ代わりに風を起こすが、そんな焼け石に水以下の効果はかえって熱を上げさせていた。彼はそうしてから、神父が前に来たのを確認して、立ち直る。

「貴方が我々に害をなすなら相手を致します」

神父はぎこちなく構えた。武器も何も無く徒手空拳。その構えは、まるで喧嘩もしたことがないようなへつぴり腰だった。

イワイはそれを見て気まずそうに後頭部を掻いてから、まず「違うんだ」と口にした。

すると思っただとおり、スコールの頭に疑問符が浮かぶのが分かる。イワイは続けた。

「俺は何も、考えなしで突っ込む馬鹿じゃない。ただ——ウチの大將がそっちに恨みがあつてな、とても話が出来る状態じゃないこともあつて、わざわざ俺が来たわけだ」

「……つまり、貴方は我々と交渉をしに？」

「答えはイエスだ」

その言葉に、スコールはどこか疑わしげに——どこか関心を持つように頷いた。

だから次ぐ言葉は、いかにも興味津々といったようなものだった。

「貴方は何を申すというのです。これだけ我々の仲間を傷つけておいて」

「傷つけておいて……仲間って口にするのに、その仲間がどういった理由で怪我してんのかもわかんねえのか？」

「……？ どういう事です？」

「焚きつけるきてんのはそっちだ。こっちは降り注ぐ火の粉を払つてるに過ぎない」

その台詞に、スコールの視線は途端に鋭く変異した。

この言葉は嘘だと決め付ける心情の変化を表すようだった。

「ランドを襲ったのはそちらでしょう？」

「ランド？ ああ、アイツか——ありやPMCの作戦に加担しただけだろ。そもそも逆恨みされるような事をする方が悪い」

「逆恨みも何も、そちらからかかってきたのに……」

「アンタ馬鹿だな？ もしかして。それから死ぬほどお人好しか……  
アンタの知らない所で奴は関係のない人間を惨殺し、その仲間に恨まれてんだよ」

そしてめまぐるしく、神父の表情は変わる。

すべての言葉を、言動を真に受けているかのようで、その姿はどこか愉快で、だからこそどこか哀れだった。

この男には全てを適切に判断できる人間がそばに付いている必要がある。そもそも、持っていると言われている”特異点能力”や”人口調整”にさえ巻き込まれなければまっとうで平凡な人生を送っていたであろう男だ。

さすがに、それとはまるで正反対な非日常ですぐにそれを求めるほうが無理を言っているのだろうか。

「んでその発火能力者。バイロキネシスこいつは言わずもがな、そっちら仕掛けてきた。今回、こっちらから掛かったことなんざ一度も——」

「——その男！ それ以上妙なことを神父さまに吹き込んでみる次の瞬間、貴様の頭は肉塊となることすら許されず吹き飛ぶぞ！」

言葉を遮るような怒号は、いくらかの静寂を保つそこで良く通って響き渡った。

イワイが神父の向こう側、廃ビルの下で片膝を立てて銃を構える少年姿の男を見る。彼は先ほど手元にあった大口径の狙撃銃、その銃床を右肩に押し付け、付属するスコープの十字線の中央にイワイの顔入れて照準する。既に薬室には12・7mmの弾丸が送り込まれていて、あとは引き金を引くだけだった。

今度はイワイが、彼に向かって大きく吠えた。

「お前等は戦闘は上手かも知れねーけどよ、何も知らねー人間刷り

込むくらいはもうちょっと上手にやっても良かったんじゃないか？」

——ここであの狙撃は出来無い。

衛士のように機関で力を付けていつか抜けだしてやるといった様な場合なら機関に招くのもある程度簡単だ。

だが目の前の神父は違う。既に人に抗え、戦う程度の力は持っている。

だからわざわざ協会に従うことは無いし、機関に攻撃することも可能だ。最も、後者はとても賢いやり方とは言えないのだが。

故に、ここで明らかに邪魔だとイワイを殺せば、神父からの信用は確実に失せる。これまでの苦労は正に水泡、水の泡と帰す。

そして——神父は、射線上へと移動した。

「話を聞きましょう」

「その意気だ」

イワイが背を向け歩き出す。神父は迷うことなく、彼の後をついていった。

一般層が生活する区画。その中にある人通りの少ない適当な路地に誘導して、イワイは振り返った。

真剣な眼差しはこの上なく誠実に見え、どこか——衛士と重なって見えるのは、彼が特異点だからなのだろうか。

機関にも協会にも拠り所はなく、元々居た場所は失われている。共通点はここにあった。だが衛士は既に仲間を持ち信頼を得ている。機関とて、駒として見るが下手な事はしない。だから彼の居場所はもうあったのだ。

しかし実力、つまり能力の面ではどうなのか。イワイは果たして対峙して勝利できる能力なのか——願いながら、口を開いた。

「俺たちの目的はアンタと接触すること。戦うことじゃない」

「接触してどうするつもりなのです？」

「全てを教え、アンタ自身でどちらに付くか、あるいはどちらにもつかないかを判断させる」

「全て……とは？」

「今話す」

イワイは緊張したように大きく息を吐いてから、真剣なスコールに失礼にならぬようにと態度を改めた。

「まず機関——こいつの所業はアンタも知っているだろう。圧倒的なあらゆる技術を持ちながら、その力の誇示のために世界各国に根を回し擬似紛争……いわゆる”人口調整”を起こす。一方的な虐殺だ」

その目的は、やはり国連軍レベルの軍事力には純粹に火力的に太刀打ち出来無いために、これまでの一方的な関係から、人口調整という役割を経て徐々に対等な関係を作り、交友を持つことだ。

機関自体が一つの国のように均衡を持ち、それ故に攻め落とされぬよう、あるいは攻められたとしても決して陥落させられぬよう各国と繋がりを持つ。単純に言えば暗黙で了解される平和条約のようなものであつて、機関はそれを交友関係を深めることで作ろうとしていた。

「そうして、その先はあるのですか？」

「知らねーな。一応あるんじゃないか？」

恐らくそこに関わるのが時間逆行技術。そして重力子を利用した様々な道具、人材、技術。

「そうですか」

神父は飽くまで無関心に切り捨てる。それに頷き、話を移した。

「アンタは協会について何を知っている？」

不意に話をふられた彼はいささか驚いたような顔をしてから、考えこむようにややうつむき、返した。

「協会は機関に抵抗するため、その目論見を阻止するために作られた組織だと。だから全ての行動は機関に準ずる、と」

しかしイワイとの会話で得た情報はそれだけではなかった。

目的のためには手段を選ばなすぎること。そして現場での各自の動きがあまりにも自由すぎること。無関係な人間を殺すこと。そし

て――。

「ちなみに今警察が蒔いてる麻薬の出所って知ってるか？」

「おおよそを察しました。自分に都合の良い場所を作るために、協会が渡しているのでしょうか？」

「お利口さんだな、アンタ」

日常的に法律を犯し、またその街での日常をうまい具合に少し崩してしまう程度の影響を与えている。

機関のように大掛かりでまた死者数も圧倒的に少ないが、だが所詮同じ穴のムジナのように思えてしまう。創立者たる『ホロウ・ナガレ』には会ったこともないし聞いたこともないが、せめて全ては現場の間違った判断のせいだと思いたい。

――そして個人の實力差はあれど、機関と協会での行動がコレほどまでに変わる理由が、教育にあった。

機関は人材を新たに引き入れたとして、そこでまた半年程度の訓練を入れる。多くの人員はそれで戦闘員、研究員に振り分けられ、得た多くの知識、技術を利用し機関に支えられて生きて行くことになる。

だが協会は、言わば同人サイクルのようなものだ。各々が特異能力を与えられる代わりに命ぜられた活動を行う。なまじ戦闘能力――主に攻撃に関するもののみだが――がある分、経験が無くともある程度戦える所が恐ろしい点だった。

「とりあえず話すことは話した。考えて選択するのはアンタだ。これまでアイツらにどんな恩義を感じたかは知らないが、一先ず今の場では真っ白。何も無い。現場に居なかった俺が口にするのは憚はばかられるが……人口調整直後のアンタだ。今は」

「そう、ですか……。しかし今のわたしにはまだわかりません。あまりにも突飛すぎて」

「だな。これからの人生を大きく動かすんだ。抑考えたほうが良いが――絶対に自分で決めるんだ。いいな？ ……えっと」

「スコールです。スコール・マンティア。前の街では神父をしてい

ました」

「はは、見りや分かる。俺は祝英雄……いや、ヒデオ・イワイか。近いうちにまた来る」

イワイはそう言つて背を向け、路地を後にしようとするその刹那に、スコールは呼び止めるように声を上げた。

「すみません……、あの、帯を全身に巻く少女、そして眼帯の少年——彼らは何者なのですか？」

「ああ、あいつらは」

そうだな、とイワイは一つ間を置く。

どう説明すれば良いのだろうか。彼らに至つては機関（こゝろ）に来るまでが少しばかり複雑だから面倒なのだが……。

少し考え、彼は言つた。

「女の子の方は戦災孤児でな。両目を斬られて全盲。その際に負つたPTSDのせいで失声症を患っている」

対人面では何年にも及ぶりハビリのお陰で問題はないが、直感が鋭くなり、人の内面を見抜く能力が格段に上がっている。だから懐く人間には極端なまでに懐くし、嫌う人間はまた極端に嫌う。

「野郎は……そうだな。アンタと似たようなもんだよ」

そうとしか言いようがない訳ではないが、気を引くにはコレが一番だろう。そして的確でもあつた。

イワイは今度こそ、とその場を辞す。

スコールはその背を見送つて、ようやく動き出すのはそれから暫くしてからだつた。

「やつちやつたなあ」

声はすぐ後ろ、息が首筋に掛かる位置から聞こえた。

「アレでも随分警戒心が高いから苦労したんだけどなあ、今となつちや遅いかもしれないけど」

されど、腰に銃を、刃物を突きつけるなりしてくる様子はなく、やがて声の主はその傍らに付いた。

イワイは顔も見ずに廃ビル群の方へ歩みを進める。男はそれも構わず言葉を続けた。

「俺は呼ばれたから来ただけだ。恐らくもう——手遅れだろうし、俺はお前等には手を出さない。見てたぜお宅の少年、特にアイツに目を付けられたら怖いな。一生追っかけまわされそうだ」

「へえ、いいのかそれで？ そっちの狙撃役だって結構敵しそうに見えたが」

「良いんだよ。お宅らは組織絶対かも知れないけどよ、こっちは自分が一番。長いものに巻かれる主義だし。出来ればおれもそっちに行きたいくらいだ」

「そいつは無理な話だな。なにせアンタらの所為でウチの大將はこんな機関（機関）に来るハメになってんだからな」

押し殺すように男は笑う。

イワイが立ち止まると、彼はその先を数歩分進んでから停まり、振り返った。

気がつくとも雑踏は薄れていて、まばらな通行人だけが景色となる、継ぎ接ぎだらけの廃ビルが群れる場所だった。

「本当だったらここでお前を始末するべきなんだろうけど……」  
とんおれは、特攻要員が苦手だからな。返り討ちにされるのが目に見えてる」

「だったらさっさと逃げ帰ることだな。大將が目え醒ましたら、どこに居ようと問答無用で突っ込むぜ」

狙撃兵として二ヶ月、みっちり休みなく訓練を受けていたと話を聞いたのに——実際に会えば、確かに狙撃技術は向上していたが、何も変わっていない。カッとなって目の前が真っ赤になれば構わず手が出る。

さっきの戦闘では銃が無かったから仕方が無い事もあったが、あの展開になるのが早かったか遅かったかの違いにしかないだろう。

男は軽く手を上げて、背を見せさらに奥地へと歩いて行く。

イワイはそれを見送ることもせず、短くため息を付いてから、僅か一度の跳躍で自身が飛び出した窓の枠に足をかけ、そしてそこから勢い良く飛び降りて部屋の中に着地する。

そこでようやく少しばかり安堵して——気が抜けたせい、か、間抜けに腹が空腹を知らせるように音を鳴らした。

——太陽は、丁度頭上に登り上がるその最中。

時刻は正午にまで進んでいて、道理で腹が減るはずだと、イワイは苦笑しながら容易された簡素な寝台に身を投げた。

接触？

虚しいほどに寒々しい。

暗闇はどこまでも続いて、出口のないトンネルを彷徨う——ありのままに言えば、衛士はそんな特に意味も空想も無い夢を見ていた。もう慣れたものだ、衛士は咳くでも無くそう思った。

あの日——特異点になった時から、眠れば夢は全てこういったものに成り代わっていた。

今日感じたこと、今日あった出来事、昔のこと、好きだったこと、嫌だったこと、その全てを夢で見ることにはなくなったし、起きていてもそれを思い出す暇は無かった。ただ一度も忘れたことがなかったのは、姉の存在であった。

もうこの世にはいない。彼女の死を以て、この能力を得たのだから。ちから

悲しくはないと言えば嘘になるかも知れないが、いつまでもメソと動き出せなくなるような悲しさではない。言わば、心の影の部分。誰にも出せない、自身の中で消えることなく燦る火種のようなものだ。

そして時衛士の特異点たる能力は、そこを原点としてさらに成長を続けている。

彼を語るには外すことのできない、大切な一部となっていた。

そしてここ最近、寝覚めは酷く悪いのだが——。

「……何だ、コイツ」

ふと傍ら、肌に触れる何か柔らかくも温かい、包まれるような感触を覚えて首を回す。

するとそこには、衛士の身体をまるで抱き枕のようにして腕を回し足を乗せるアンナの姿があり、帯ベルトが外された、初めて見たその顔は息が掛かる程近くに置かれていた。

さらに逃げられぬようにと考えたのか、単に偶然なのか。その肉体はうまい具合にシーツで包まれていて、身動きが出来無い。

つまり不意に便意に襲われたら死を覚悟してここでぶち撒けるしか無いという事になる。想像に易い地獄絵図は、ここを開始点にしていた。

「はいはい分かります。こういう一見幸せラッキーと見せかけてうつかり妙な情動に駆られると理不尽に打ちのめされるパターンね。知ってるよオレこれ漫画とかで見たことあるもん」

だから仕方なく、アンナ・ベネットのその珍しいご尊顔を見つめることにした。

長く、またこの状況でも綺麗に保たれている艶やかな髪は、良く戦闘時に邪魔にならないと思う。

そして眼は――瞼を閉じた上から深く抉られたような痕があった。左目から右にかけて一直線、そしてダメ押しとばかりに右眼上部、眉のやや上から頬にかけての弾痕のような傷。恐らくこの怪我を負ってから何年も経過しているようなモノだが……その衝撃を、禁じ得なかった。

胸に突き刺さるような、どこかショックを受けたような感覚。

そうだ、と思い直させられる。

ケガをするのも、死にたくなるほどの場面に遭うのも、何も自分だけではないのだ。

自分が自分である限り、自分の人生では主人公だ。だが、だからといってその他の有象無象が幸せというわけではないし、平凡というわけでもない。自分のように精神面に影を持つ人間もいれば、彼女のように無骨で物々しい帯を付けて物理的に隠さなければならぬ痕を持つ者もいる。

不幸なのは自分だけじゃない。わかっていても、それを確かに目にするまで理解はしていなかったように思う。

そして、彼女はそれを伝えようとしたのではないか。そうとも考えられた。

衛士が目を覚まさぬ事を考えないわけがない。そして同時に、自分からそれを晒すのはどこが引けたのだろう。だから眠っているうちに、自分の知らない所で自分を知ってくれというような考えからの行動だったのかも知れない。

そう考えれば、やはりこのシャツによる拘束は偶然ではなかったのだろう。

衛士はその姿を思い浮かべて、どこか無邪気な子どものように思えてふっと、笑みを漏らした。

心が穏やかになる。

これは久しぶりの感覚だった。

——少しだけ、前向きになれた気がする。

「ありがとう、アンナ」

起きているのか、眠っているのか。いや、恐らく彼女のことだからすっかり夢の中にも堕ちているのだろう。猫のようにどこにでもどれほどでも眠るアンナの事だ。そうに違いない。

衛士はひとまずそう言っ、てもぞもぞと身体を滑らせるようにしてシャツの拘束から脱出。寝台から降りると、足に妙な違和感を覚えた。

締め付けられるような圧迫感、その窮屈さを感じて足を見ると、包帯を巻かれていることに気づく。そしてそこから、衛士は自分がパンツ一枚だけの格好になっていることに気づいた。

衛士は何事も無かったように包帯を解き、そして——火傷の痕が残るスネを見てから、大したことがないと頷いた。服は寝台近くにて鎮座する小さな机の上に置いてあり、されどインナーの通気性の高い長袖のシャツはなくなっていた。

なかなかに着やすくてお気に入りだっただけに少し残念だったが、恐らく誰かが洗濯でもしてくれているのだろう。

この部屋が多分、酒場付近か、酒場の上階にある部屋だから、店主が気を効かせてくれたのかも知れない。衛士は考えて、素肌にジヤケット、そして何故か真新しくなっている紺色のジーンズ、靴下

を履いて、そしてくたびれたブーツを履き終えて、ようやく落ち着いた。

——窓から見える外はまだまだ明るい。

恐らく午後二時から四時辺りなのだろう。そうなれば眠っていた時間もおよそ半日近く。

活動時間は夜だとしても、時間は未だ持て余していた。

「もう一眠りといきたいところだが……」

アンナは既に寝台を我が物顔で大の字になって眠っている。

流石に、ここを先ほどの彼女のように寄り添って眠るつもりにはなれず、衛士は大きくあくびをしてから部屋を出た。

——どうやらここはマンションやアパートの一室のような場所らしい。

無遠慮にそこをブラブラと探索した衛士はそう結論付けた。

部屋は全てで三つあり、その内の一つを衛士とアンナが、そしてもう一つをイワイが利用している。打ちっぱなしのコンクリートが外観的に寒々しく感じさせる通路を進むとそこは居間部分であり、その反対方向に進めば玄関になっていた。

「危険を顧みずってわけか……ありがたいな」

ワグナーもあの戦闘を見ていなかったというわけでもない筈だ。だというのに、窓から見える景色を見る限りここは酒場の上階。匿ってくれているということになる。

この街でも一、二を争う器の広さだ。そして命知らずだ。最も、そうでも無ければわざわざ酒場なんて営めないだろう。

衛士は部屋に戻って机に立てかけられている狙撃銃を肩に担ぐと、そのまま玄関を出た。

息を飲んだのは、玄関を開けて現れる外付けの階段——その踊場に出た瞬間だった。

異常なまでのざわめきが、大気を震わして尋常ではない騒ぎを伝えていた。連続する発砲音が、なぜ部屋の中に居た時に聞こえなか

ったのか不思議なくらい、透き通るように良く耳に届いていた。

そして何よりも、その音は酒場の直ぐ前で響き渡っていたのだ。

ただ事では無いのは勿論、それが自身に迫る、ソレ以上に自身に関わったがために、よりにもよって己らに親切にしてくれた善良な人間に危機が迫っている事——それを即座に理解出来た。

ここでどういった行動をすべきなのか。また敵の数は、武装は、攻め方は、今現在何処に何人にて死者がどれほどで店の被害がいかにほか。衛士はそれらを考え、あるいは予想、推測するよりも早く、その外付けの階段に付属する鉄柵に飛び上がり、その向こう側へと身を投げた。

状況を理解するのは、その三階部分から飛び降り着地するまでの時間——二秒にも満たぬその時間で十分だった。

敵はおおよそ三〇人近くだが、その内の三分の一、つまり十人程度が肉体のどこかを破損した格好で倒れていた。そして荒くれ者達はただポケットに雑に弾倉を突っ込み小銃を構える格好で続々と酒場の中へ突撃して行くその最中であり、安心すべきか——ワグナールの姿はそこにはなかった。

また、そこに残る連中もいる。

大体五人くらいが入り口を見張るようにして、緊張を禁じ得ぬような堅い表情で武器を構えていた。

そしてそれら全ては恐らく協会の私兵、あるいは金で雇った街の住民。民兵となり果てた彼らは一体幾らでその命を投げ売ってしまったのか些か興味が湧いたが、平静を装って雑談をかます理性は、今の衛士には到底無かった。

——鈍く鳴る着地音。同時に頭上から落ちてきた影に、五人はほぼ同じ刹那に驚愕した。

だからこそ、その場では誰よりも速く動いていた。

衛士は肩に担ぐ狙撃銃の銃身を握ると、そのまま立ち上がりざまに銃床ストックを突き上げ、男の顎下部を鋭く打撃。そして銃から手を離して滑るように銃身を沿って銃床を逆手に握ると、手前に力強く弾い

て半回転。今度は銃口が男の側頭部に突き付けて、発砲。

側頭部は焼け焦げて尚ぎこちなく穴が開く。吹き飛ぶ脳漿は、弾丸が貫きもつ片側から開けた穴から吹き出していた。

狙撃銃のストラップを腕を通して肩に掛けると、倒れ始める男の小銃を奪い取り、衛士を囲む四人へ振り返った。

「て、てめ——」

跳び込むように跳躍。

瞬時にして懷に飛び込んだ衛士は、また喉下に銃口を突きつけ発砲。

敵が構える銃はその役割を果すよりも速く役割を失った。

頭から鮮血を浴びるようにしながら、まだ倒れぬ死体の背に回りこみ盾替わりにしつつ、また射撃。

既に動きを読まれている三人は、それぞれ眉間、額、眼に一発ずつの弾丸を撃ち込まれて間もなく絶命した。

—— 呆気無い。そう一言で片付けるのも勿体無くなるほどに容易かった。

衛士は死体を蹴飛ばし、さらに店内へ向かおうとするその最中に視線を感じた。今にも射殺されそうな鋭い純然たる殺意に思わず振り返れば、ビルが崩壊し瓦礫となり果てたその手前に男の姿が二つ。一つは妙な正装姿の男であり、もう一つは驚くことに神父服を纏った男であった。

「やっぱ、こいつらか……」

何の目的があつてか知らない。もしかして純粹に時間がないのかも知れない。だがどちらにせよ今回の事を仕組んだのは協会であり、そして手を出すこともなくこの無様な姿を高みの見物に来ているという次第だ。

神父という事もあつたし、何よりも組織に所属する過程が些か似ているから興味があつたが—— 所詮、同じ穴のムジナだ。

衛士はその怒りや昂りを右眼窩に燃ゆる蒼い鬼火で魅せながら、彼らに背を向け、鋭い射撃音がつんざく酒場の中へと飛び込んでい

った。

「いつもそうだ」

咆哮。発砲音。断末魔。悲鳴。怒号。硝煙。血煙。  
それらが埋め尽くされる空間は混沌としていた。

「いつもこうだ」

散弾銃を撃ち終えるワーグナーは、ポケットから散弾を取り出し  
装填する。その間の援護は、ジャンパーのようなジャケットを着こ  
む女性が拳銃一挺で前面に立ち、迫り来る男たちに狙いを定め足止  
めをしていた。

「いつもてめえらは——」

だが無数の敵が迫るのにたかが拳銃のみでは心もとなく、いくら  
か体術に覚えがあろうとも、単純に体格が己より圧倒的に上の男が  
相手では容易に組み伏せられてしまう。

だからその女性は、運悪く弾切れを起こし、またワーグナーから  
の援護が間に合わなかったために男の拳をモロに顔面に喰らい、あ  
つと息を呑む暇も無くよろけ、さらなる追撃とばかりに肩を捕まれ、  
腹部に鋭い打撃をもらう。

呻き、膝から崩れていくその最中に彼女は乱暴に服を引き裂かれ  
て、そのしなやかな肢体、この強い日差しの中でも焼けることのな  
い白い肌をあらわにした。

「オレの周りから……関係のない人たちばかり」

彼女の援護が失せたがゆえに、ワーグナーにも隙ができる。

彼はそこを狙われ、小銃によってその右肩を弾丸に穿たれた。

ワーグナーはそのまま呻きながらカウンターにもたれかかり、片  
腕で発砲。そうすると瞬時に目の前の男の頭が吹き飛ぶが、同時に  
そのあまりにも堪え切れぬ衝撃によって肩が弾かれ、腕は弧を描く  
ように背後へ。関節が外れ、その間に彼の心臓を狙う男は、舌なめ  
ずりをするようにゆっくりとトリガーを指の腹で撫で——。

次の瞬間、震えるように一度ビクリと揺れてから崩れ落ちるのは、  
その男だった。

「もう失わせねえ……てめえらは、一人残らずブチ殺してやらあつ！」

凄まじい活気。激しい熱気。それ故に、背後に立つ衛士の存在を誰もが気づけなかった。

それ故に、衛士が得た透視の能力で全てを見ていたことに気づけなかった。

それ故に、時衛士の感じていた可能性を試させる機会を作っていた。

——『透視』した障害物は、まるでその瞬間衛士の為に道を作るかのように失せていた。だから弾は通つて男を撃ち殺していた。

簡単に説明すれば、衛士に見えないものは実際に衛士によって存在していない様に扱われる。だから衛士が透視した際には目の前の”肉の壁”は存在しておらず、故に弾丸は素直にワーグナーを狙っていた男を殺すことが出来ていた。

彼が得た透視という力は、そういう物だったのだ。

さらに一発。

今度は女性の乳房を揉みしだき、獣のようによだれを垂らす男の側頭部を弾く。

途端に彼は崩れ、彼女の上に力なく覆いかぶさった。

そしてそれ故に——その空間内に居る全ての人間の興味が、注意が、余すことなく衛士へと向けられた。

「なんだお前？」

大柄な男は緩慢な動作で歩み寄り、そして対峙する衛士に額を打ち抜かれて膝から崩れ落ちた。

発砲、発砲、発砲。

全ての行動が開始するよりも速く、衛士は一寸の狂いもなく一撃で無数の男たちを死に追いやり、バタバタと円卓に挟まれて作られる通路が死体で埋め尽くされていくのを、見つめながらさらにそれらを増やしていった。

稀に反撃とばかりの弾丸が飛来するが、予知する衛士にソレが当

たる筈もなく。

まるで新兵以下の赤子を相手するかのようになり、戦闘は一分足らずで終了した。

——静寂は果たして再び訪れる。

血に塗れるワグナーに女性はそれを啞然としながら、その中心から瞬く間に外側に追い出されたことさえも理解できていないように焦点の合わぬ瞳でそれらを視界に収める。

その中で衛士が小銃を床に叩きつけると、そこでようやく意識が蘇ったように衛士を認識するが、

「ワグナーさんの怪我、早めに治療した方がいい」

そう残して店を出る少年に、声を掛けられる者は居なかった。

こうなることは予定通りだった。

何がしたいのか。結果的にそれがどう動いたのか。簡単に言ってしまうえば焦燥故の錯乱による行動であり、相手も十分民間人を無情に殺している場面を神父に見せてやりたかった事。そして結果的には、神父がどう思うか以前に明らかに失策であり、スコール・マンティアの心は完全に協会から離れる事になった。

デイーノはマンシヨンの屋上からそれを眺めていたが、その最中にスコープ越しにスコールと目が合い——その瞬間、レンズにヒビが入り、同時に引き金がその半ばからへし折れた。

直線距離にして二〇〇メートル。それほどの距離を置いても尚彼の『神通力』は届いていた。

恐らくこれでは狙撃をしたとしても、彼を殺す事は出来無い。

皮肉なことに、この協会に対する不信感がスコール・マンティアの超能力をより強めてしまったのだ。

彼はそこで肩をすくめると、スコープを外し狙撃銃を担いで階下へ降りる。向かうのは、彼の元であった。

「——てめえが神父か」

衛士が吠える。

スコールの傍らに居る男が拳銃を差し出すが、彼は手で制して前へ一歩出た。

「貴方がエイジ・トキ……思ったより汚れた目をしている」

イヤホンも無いし通信端末もない。仲間皆、防音性の高い部屋のせいで未だ眠りこけている。

故に動き出す時衛士を止める者は誰一人としていなかった。

「てめえも所詮、薄汚え野郎だ」

聞く限りでは共通点はあった。

だがこの有様だ——許す訳にはいかない。

連れて帰れなんて命令はない。ただ接触しろとの話だ。

ならば殺してしまっても仕方が無いことだ。

衛士はボルトハンドルを引いて排莢すると、そのまま弾丸が薬室に送り込まれる。しかし彼は立つたまま右肩にストックを当て、そのまま片手で狙撃銃を構えていた。

「わたしは何も言えない。止められる力があつたのに、止めなかった時点でわたしにはその資格がない」

「そんな事は良い。もう良い。良いからかかって来い。てめえの全てをさらけ出せ。かかって来いよ……かかって来い!!」

「ええ、行きます。貴方になら、全力で——」

その接触が、両者の人生を大きく歪曲させ変異し変えてしまうものだと気づくのは、その戦いの最中であり——そして誰も首をつっこむことができない、熾烈を極める戦闘の始まりでもあった。

## 離反

スコールが勢い良く腕を前に突き出すと、凄まじい力場が発生したかのように、自身へ向かってくる時衛士の肉体を勢い良くその反対方向に吹き飛ばした。

衛士は突風に巻き込まれたように地面から引き剥がされて背後に飛ぶも、その最中に構えていた銃の引き金を引く。

つんざく射撃音と共に痛烈な衝撃が肩を叩くが、その弾丸はそんな粗悪な状況で発砲されたのにも関わらずその軌道を神父の胸元へ駆けた――が、彼が突き出した腕、その手首がスナップするようにして裏拳を弾丸の腹に触れた。その瞬間、先ほどの力場を一点に集めたかのような力が弾丸を弾き飛ばす。

壁に背を叩きつけられ、落ちるようにして衛士は地に足を付いた。気がつけば神父の頭上から無数の細かい瓦礫の破片が舞い降りていて、

「貴方にはこちらが好みでしょう」

両腕の側面に、それらは集まり腕にトンファーのように繋ぎ合わせるそれは刃となって腕を保護していた。

神父はやや上体を倒し、不安定な体勢をとったその中でつま先で地面を蹴る。そこから再び尋常ならざる能力によって勢い良く自身を前方へ吹き飛ばし、瞬く間に衛士へと肉薄した。

先ほどと同様に銃を構え、発砲。

それと同時に腕を振り上げるスコールは、腕に付属する刃で切迫した弾丸の切先に触れて――切断。Y字に弾ける対の破片は彼に傷ひとつ与える事なく飛び散った。

跳躍からただの一度も再加速することなく神父が迫る。衛士は腰に携える両の腕から繰り出される技を”視ながら”、ボルトハンドルを引いて弾丸を装填し、短く息を吸い込んだ。

打ち合いはその直後だった。

下方からの鋭い斬撃。肘をつきだして振り上げる攻撃に伴って巻き上がる刃が、衛士の脇から肩にかけてを深く切り裂く。さらに間髪置かぬ左方からの拳撃が同時に腕側部に随伴する斬撃を同時に巻き起こし、頬を殴り抜けた直後に顔面に横一閃に斬り抜いた。

鮮血が舞い、痛々しい傷が残る。

だが刃から鉤爪のように成り代わる刃は、”返し”の技こそがより狡猾でより残酷なものになる。

神父は正に、本気というより殺す気で衛士にかかっていたが、だがしかし、それは衛士自身も同じだった。

二つの攻撃が交差し、彼は腕を振り上げる状態となる。故に無防備なその腹に銃口はそつと突き付けられていた。

トリガーを弾き、撃発。

その直後に銃口は火花を散らし、同時にその鋭く尖った弾丸ブレットを撃ち出し——弾く事もままならず腹を裂き内臓はらわたを裂き骨を折り、その背中から抜けていく。

衛士は地面に沈むように体勢を崩しながら弾薬を装填し、振り上げられる膝に肘を撃ち対応。そのまま平拳——第二関節までを折り指の付け根を伸ばす拳で、立ち上がりざまに相手の水月を撃ちぬいた。

「うっ……ッ！」

スコールは喘ぐように息を吐き、腕を逆手に構え——自身の腹に肘を打ち込むように引く。すると懷に潜り込んでいた衛士の背に、対なる刃が鉤爪となつて鋭く突き刺さった。

「ぐああっ！」

衛士は力一杯振り上げるように顔を上げる。するとその頭頂部は顎下を撃つ。

神父はそれで腕を開くと刃を抜き、そのまま跳ぶことなく一步、二歩と後退した。

——目の直ぐ下、鼻筋に対して垂直に通る切創が高い熱を持ち、視界が瞬く間にして真っ赤になる。

また左肩に負った怪我也酷く、左腕が上がらない。

しかし同じように、神父もただこれだけの攻防でそれなりの致命傷を負っていた。

何よりも大きいのは、その腹部に受けた射撃。衝撃と物理的な軌跡が内臓をかき乱して腸が断裂。また肋骨を碎き背骨を掠った弾丸は、それ故に神父の動きを緩慢にさせる。

しかし衛士に容赦はない。

怯む神父に、先ほどと同じように銃を構えて発砲。

眉間を狙った射撃はそれ故に間もなくそこに肉薄、直後に頭部を撃ちぬく筈だった。しかし予想は、否、衛士が視た未来はそうにはならない。

腹を抱え、俯く神父を守るように射出された腕部の刃が、丁度その弾丸が飛来するタイミングで彼の前に立ちはだかつて受け止め、その腹に突き刺さる。されど勢いだけでスコールに迫るそれは、さらにもう一つの刃の射出によって相殺され、甲高い音を立ててから地面に落ち、転がった。

衛士のライフルに残る最後の一発は、狡猾な機会を得てその最中に発射されていた。

今度狙うのは心臓。僅か数メートルの距離ならば腕で防がれたとしても貫通して撃ちぬく事が出来る位置であり、外れたとしても致命傷になりうる場所だ。

しかし——”視えた”のだ。

衛士は走りだす。

その最中に見ると、弾丸は見事に無防備な胸に突き刺さった、かに見えた。

瞬間、弾丸は神父に触れるか否かの位置で停止していて——そしてスコール・マンティアの周囲の空間は、やや赤みがかかったように歪んでいた。まるで全身から特殊な力場を創りだして、あるいは今まで使っていた特異能力を全身に集中してそれ故に出来た力場を纏っているような姿だった。

役割を果たせぬ弾丸はそのまま落ちた。

そして衛士の右眼は、まるでその力に呼応するようにより激しく、より力強く蒼く輝きはじめていた。

「そうか……そうでしたね」

「てめえも特異点、だったな」

「わたしのこの力は、貴方のその力は果たして——」

「争うべきものじゃない。何かを守る為にある……だろ？」

「はい」

アレほど昂っていた感情は、いくらか落ち着きを取り戻していた。アレほどの罪悪感、いくらか和らいで穏やかさを取り戻していた。

だがそれと同時に、新たなものが胸中に生まれる。

それは感興だ。単純なまでの好奇心だ。

自分がどこまでやれるのか。自分がどこまで強いのか——ある一定の力を持つ強者と単純にぶつかりあったからこそ生まれた、初めての感覚。両者はまるで同時にそれを感じていた。

「しかしわたしはもっと貴方と」

「オレはもっとてめえと」

——ぶつかりたい。

力の尽きるまで。

体力の限界まで。

己の全身全霊を込めた闘いを。

その思いは同じだった。

「恨みつこなしだぜ、神父さんよ」

「神よ。この恩恵、忘れません」

衛士はその通常より遙かに頑健で、焦げたのにもかかわらず元通りに戻っている——恐らく耐時スーツなのであろうそのジャケットを。

神父はロングコートのような神父服を、脱ぎ捨てた。

「かかってこいなんてもう言わねえ。こっちから行くぜ！」

最早笑顔にさえなる。

その光景を見て、それを正常だと言い切れる人間が一体どれほど居ようか。

——衛士が走りだす。軽やかな足取りは、まるで手負いだということのを忘れさせるような全力疾走。なれどその速度は、それまでの中で随一の速さを持っていた。

しかしその速度さえも止まって見えるような、圧倒的な勢いで神父が肉薄する。

脇を締めて振り上げた拳が、半裸の男が打ち上げる拳と衝突し——あえなく時衛士は吹き飛ばされる。だがそれでも、切迫した神父の動きを停止せしめる威力は持っていた。

スコールは着ているタートルネックの首元を折り、そして腕をまくる。背を強く打ち付けたのにも関わらず怯むことなくまた走りだした衛士へと彼は相対した。

振り上げられた神父の拳は、そこでさらに肘を弾いて急加速する。豪速球が如きそれに常人が対応できるわけがなく——衛士はその右拳に沿うようにして対角の腕を突き出し、いなす。

手首に痛烈な強打を受けながらも衛士は怯まずスコールの手首を掴んで引き落とす。

そうすると勢い余った彼の身体は腕に応じて体勢を崩し、同時に衛士は彼の右側、衛士が落とす腕の外側に回りこみ——頭突き。その側頭部を頑強な頭蓋骨で強打してみせる。

激しい衝撃に、衝突音が直接頭の中で反響する。こたま

視界が一瞬白く染まって衛士は思わず手を離して仰け反るが、それはスコールも同様だったらしい。

「くう、痛いすね石頭」

「はは、思考は柔軟な方なんだがな」

また鉄拳が高速球で撃ち込まれる。

衛士はそれを紙一重で避け、今度はと構えた拳を神父の頬に穿つ。だがその応酬とばかりに未だ振り抜かない左腕が力強く下から上

へと、衛士の右腕を弾いた。

動かぬ左腕。そして挙手するように天高く伸びた右腕。

無防備になる肉体に、神父は左足をやや踏み込み、右腕を左上方向に振り上げる。そういった珍妙な構えを解くのはその直後であり、右腕で袈裟に裂く様に振り下ろすと、その反動に乗じて振り上げられた右足が、腿からというよりは肉体全体を巻き込んで振り上がり、放たれた。

衛士は膝を崩すと、その鋭い上段蹴りは空気を切り裂いて頭上を過ぎる。

緊張と疲弊によって激しく呼吸を乱しながら、衛士はそのまま振り抜き一回転する神父の懐へと飛び込んだ。

そのまま腰に抱きつき、地に立つその肉体を引き抜いて持ち上げる。バランスが崩れるように胸の中で暴れる彼を、今度は身体を回すようにして背後へと振り投げた。

神父はそれでも怪我すらないように上手に受け身を取り、そうして立ち上がった。

「……どんよりと、曇ってきましたね」

彼は貪るように呼吸をしながら、腹部の傷を抑えるように腹を抱えながら空を見上げた。

それに倣うように視線を上に移すと、灰色の分厚い雲が青空の一片も見せずに空を塗りつぶしているのを見た。そして肌に張り付くような暑さは、いつもより湿度が高くなっていることを教え、今にも雨が降ってきそうな雰囲気醸し出していた。

「ははっ、なら終わりにするか？」

「冗談。疲れて嫌になったからやめたいんですか？」

神父は自身の鼻筋を指して軽く笑う。衛士はそこから垂れ流れる血を腕で拭ってから、憎らしく笑った。

「天気なんて関係ねえよ、お前は——」

ドクンと、心臓が一度大きく高鳴った。

衛士はまるで示されるように、自然に顔を横に向ける。

その視線の先は瓦礫の前であり、さらにその手前には先程までは居なかった狙撃銃を構えた少年の姿があった。

腹ばいになり、二脚を立てて銃身を安定させる。スコープはないが、それでも狙撃を成功させるには近すぎる距離と言えた。

ソレを見て、さらに”視て”衛士が走りだしたのは己の保身のためではない。その銃口は衛士には向かず、神父に狙いを定めていたからだった。

ゴロゴロと、遠くの方で空が唸るのを聞く。

その最中に衛士はまた、先程と同じようにスコール目掛けて思い切り飛び込む――その瞬間、周囲を眩ます凄まじい閃光、稲光が一瞬だけ全てを飲み込みかき消した。

発砲音が、耳につんざく。

全身を痺れさせるような衝撃は次の刹那、衛士の背中に突き刺さった。

全てを理解するには、あまりにも多くの情報が一遍に溢れすぎていた。

大口径の狙撃銃が発砲された。それを受けて目の前の少年は背から血を垂れ流して倒れている。それだけならばまだ合点も行くが――なぜわたしは倒れ、その上に彼が横たわっているのだろうか。

この状況で奇跡的と言うならば、対物ライフルに分類されるものの射撃を受けてなお、時衛士の息が続いていることだった。

それでも激しく吐血し、大量の血を流し続けている。また被弾した箇所も不明であるために、彼が致命傷のために倒れているのか、また単に被弾の衝撃のせいで一時的に意識を失っているだけなのか分からない。が、それでもこの出血具合から見ても早く治療しなければそう長くないことは理解できた。

「トキさん……トキさん……ッ!」

神父は身体を起こして衛士の身体を抱く。耳元で名前を呼んでみるが、反応の一切はなかった。

——その最中に、先程まで戦っていた酒場の店主ら二人が駆け足で寄ってくる。狙撃手が目の前に居るというのに何の警戒もなく、あるいは命を投げ出すようにして。

そして彼は、瓦礫の前で伏射を取る男の姿を見た。

拳に力が籠る。

異様なまでに、自分が全てを失った時異常の怒りが身体の中から染み出した。

開けたままの口は、その顎を小刻みに震わせる。だがそれも強く歯を噛みしめれば気にならなくなった。

「エイジ……。ヤバイな、一先ず店内へ運ぼう」

「ええ。私は医者を呼んでくるわ」

「すまん、頼むぞ」

茫然自失とする神父の上から衛士が取り除かれ、彼を抱き上げた男は店の中へ、そして随伴していた女性は街の方へと走り去っていく。

狙撃手<sup>ディーン</sup>が狙うのは、その衛士を救出した男だった。

「止めるオッ！」

咆哮<sup>さけ</sup>ぶと同時に、ディーンが構えていた狙撃銃の二脚が碎け銃身が地面に叩きつけられ——さらに彼自身は、不意に地面に這いつくばった。

何か考えがあるというわけではないらしいのは、怨念でも込めているような怒りの表情を見れば直ぐに分かる。傍らに居た正装の男『ダン』は驚いたように飛び退くが、彼は何もせず、また何の影響も無いように——まるで自分には関係が無いように空を仰ぐ。

すると間もなく、空に大きな影が出来たかと思うとそれは徐々に大きくなって、やがて鈍い着地音と共に、それは現れた。

また物陰からは、片腕を喪失した男が——この街に居る付焼刃<sup>スケアクロウ</sup>の全員が、そこに集合した。

神父が立ち上がる。

——その時にまた、今度は二つの影……機関の二人が現れた。

「デイーノさんよ。俺は前からお前のやり方が気に食わなかったんだが……今回でハッキリしたよ。俺は協会なんか居られねえってな」

「は、はは……何も、ボクと一生組むわけじゃ、ないでしょう？ 今回の任務が終われば、晴れて解散だ」

「正確に言うぜ？ お前みたいなのが腐るほどいるから居られねんだよ——サカグチ、お前もな」

「いいぜ。俺もお前が大嫌いだ」

タンクトップ姿のランドは肩をすくめて、改めて目の前の三人から距離を置く。すると今度は、ダンがあからさまにサカグチとデイーノから離れていった。

「何だ、アンタもか？」

「いや、おれはまだ協会に居るつもりだけど……ただ協会ってだけで殺されちゃ困るんでね。とりあえず白旗ってことで」

「たく、なんでここまで協調性の無い奴らなんだ」

イワイ、アンナ両名は状況が飲み込めていないように、どう動けば良いのか手をこまねいていた。

まるでこの機会を狙ったかのような全員集合だったが、臃気な足取りで歩き出す神父には、もうデイーノの姿しか見えていなかった。

「なんで、なんですぐ奪うのですか……？」

機関連中の横を過ぎる。

祈りを呟くようにか細い声で漏れる言葉に、彼らはやや眉をしかめてから顔を合わせ、それからここには不要だと考えたのだろっ、二人は酒場の中へと引っ込んでいく。

「邪魔なら消して良いのですか……？ 何故貴方たちはソレほどまでに猿のように排他的な思考しかできないのですか？」

「神父……」

ランドを横切る。彼はただ呼ぶだけだったが、止める事などはせず、ただその哀れに見える姿に漏らしたけだった。

「所詮自分のテリトリーに入ってきた部外者を排除することしかで

きない貴方達は——ああ、もういいです。郷に入れば郷に従えと言うものですね」

「おい神父、テメエはすつこんで——」

サカグチがスコールの前に割って入る。

彼はその瞬間に鉤爪のように作った指を男の喉元に触れ、爪先が鋭く柔肌を切り裂いた。

鮮血が、まるで水が入る袋に穴を開けたかのように吹き出し、スコールは微動だにせずその中に指を突っ込む。さらに指を喉奥へと突き刺し、さらに構わずそのまま顎に指を引っ掛けると、力任せに地面に叩きつける。

呆気無く横たわるサカグチは全身を小刻みに震えさせながら、喉から絶える事なく流れる鮮血は泡を作りながらも池を作り出すも、それは強くなり始める雨に色を薄れそして流れていった。

「邪魔は排除……いいですね、思考を棄てるのは簡単で。非常に下衆なやり方はなのは代わりませんが」

生暖かい血は未だ指に粘り付き伝って腕を紅く染める。

だが、衛士と殴り合った時とは遙かに異なる、不快な感覚。

怒りが消えずに、また妙に喪失感が胸の奥にこびりついているのにもかかわらず、満たされ無い。殺意はコレほどまであるのに、人を殺してもただ不快になるだけだった。

なのにコイツらは邪魔だからという理由だけで人を殺す。

理解ができない——まるで自分とは全く別の生き物を見ているようだった。

理解しようとするよりも、こういう生物なのだと納得したほうが早くなるような存在。

「ランドさん。もういいです」

「あいよ」

スコールが言うと、彼はどこか呆れたように返事をする。と、瞬間にディーノを拘束する圧力が失せ——途端に彼は弾けたように銃を構え、その銃口を神父に向けた。が、その間に振り上げた足が

力強く銃身を踏み、やがてそれは叩きつけられてしまう。

「見苦しいです」

「神父さま……随分と変わられましたね……」

「はい。お陰さまで、わたしはわたしに素直になりました」

トリガーとして使用していたらしい針金を『神通力』でへし折り、今度は手も使わずに彼の肉体を空中に浮かび上がらせた。

ポツリと、水滴が頬を叩く。

するとそれを契機きうかけにするように、無数の水滴はやがて群れをなし雨となって大地を濡らし始めた。

スコールはその中でディーノへと腕を突き出し、その手を徐々に握り始める。するとそれに応じるように、ディーノの身体は見えない力に締め付けられるように両腕を身体に押し付け呻き始めた。

そして同時に、彼は空間が鋭く一閃に歪むのを見た。

彼はすかさず首を守るために肩を抱くように腕を伸ばすと――左腕は肘からやや上辺りを綺麗に切断され、弾けるようになってくると宙を舞ってから地面に叩きつけられた。

「貴方がしていることは、軽蔑している我々と全く同じ事で――」

言葉半ばに、ボキリと鈍く骨が折れる音がして、ディーノの首は力なく垂れる。が、最早それをつなげるのは筋肉と皮しかなく、その頭はまるで舌でも垂らすように不自然なまでに長く下がっていた。それからやがて呼吸も失せる彼は地面に落ち、水を弾く音を鳴らす。興味が失せたように神父は自身の失われた左腕を拾い上げた。

彼はその切断面に斬られた腕を押し付け、眼を瞑り集中する。と、その切断面は大量に血を吹き出しながらもその勢いを徐々に薄れさせ、やがて瞬く間に、息をつく暇も無く出血は失せた。

その左腕は、たかがそれだけで結合してしまったのだ。

スコール・マンティアはそれからもう遺体となったディーノへと顔を向ける。その顔からは、また表情が失われていた。

「同じで良かったです。貴方が殺した人間と同じように貴方を殺せて」

「ふん、化物だな。アンタは」

今度はランドが神父の前に現れる。

悪態を付いて興味をもちうが、その姿がランドだと認識すると途端にスコールは彼に背を向けた。

「おい、良いのかよ？ 俺だって関係ねえ人間殺<sup>やっ</sup>してるぜ？」

「邪魔をするなら」

「ああそうかい。なら俺は機関の連中にでも仲間にしてもらうかな」  
「いいなー。おれもそうしたいわ」

鋭く睨んでみるも、ランドは先程を見ていたのにも関わらず怯えた様子もなく、酒場へと入っていく。そしてダンもソレについていくように後を追う。

スコールは最後にディーノを一瞥してから、また周囲の、彼に雇われた男たちの死体を眺め、深い溜息を漏らしてから、鬱陶しそうに雨に濡れるその白銀の髪を掻き上げ——その場を辞した。

——協会は殲滅。この街では事実上の崩壊をもたらしたが、今回はあまりにも死者数が多すぎた。

それ故にようやく警察は動き出し、協会、機関の全員がその日の内に指名手配。そして標的の捕縛は”生死問<sup>デッド・オア・アライヴ</sup>わらず”となっていた。

## 談笑

「何処に行きやがった？ あの神父」

「あっちだ！」

「よっしゃ、一人殺しや十万だからな！　いくぞ！」

血気盛んな男たちが過ぎていく。

男は路地の物陰に隠れながらそれを確認し、胸をなで下ろすように安堵した。

吐いた息を吸い込むような激しい呼吸に氣道が、肺が燃えるように暑くなる。心臓は今にも破裂してしまいそうなほど鼓動を繰り返していた。

彼はそうして一つ大きく息を吐いてから、自分を慰めるように腹を撫でる。弾痕はすっかり塞がり、今となってはもう昔の傷のように痕だけが残っている。さらに言えば、命に別状もなく、内臓も怪我なく健康だ。

「化物……か」

この傷痕を見て否定するつもりはない。

だが、コレを見てしみじみそう思うことは出来た。

本当なら致命傷と成り得た傷だ。なにせ狙撃銃をそのままゼロ距離で腹に受けたのだから。

「言い得て妙ですね」

ランドという男はどこか粗野で余り好きな人種ではなかった。しかし意外な事に彼が思っていたことは、自身が考えていたこととそう変わらなかった。

これは実に驚きである。

さらにもう一人のダンは長い物に巻かれる主義者であり、機関さえ認めれば彼らは機関に属することになるだろう。そして出来ればそうなってほしい。彼らは彼らが思う正しい道を歩くことが出来ればいい。

スコール・マンティアは親心のようにそう願っていた。

「トキさんは大丈夫でしょうか」

自分のせいで命を散らしてしまったかも知れない少年。

あのまま本気でぶつかり合っていたらどちらが勝ったか、その勝負は本当に分からなかった。

そして後腐れない、まるでスポーツのような清々しささえ感じる  
ことの出来る戦闘であつたのだ。

ならせめて警察の目を眩ませようとスコールは昼夜問わず、街の隅から隅までを動き回っていた。

現在ではそんな生活が始まって、およそ三日が経過しようとしている。

体力の限界も近い。

しかし何よりも衛士が早く目覚めなければ、協会の”迎え”がそろそろ来るかもしれない時期なのだ。

彼はそれだけを不安に思いつながら、休憩は終わりだと、立ち上がつて路地から通りへ飛び出した――が。

「へひゃひゃ！ ミエミエなんだよ、バァーカット！」

路地を囲むようにして扇状に展開された無数の男たちが、手に手に火器を取って彼の出現を待っていた。

「おれは武器しか持つてないの！ 距離短縮して空間つなげて、そこからモノを瞬間移動させる能力だけどさー」

「なんだよ、誰もそんな事聞いてないだろ？」

「おれの身の内さけ出さないとその女の子がずっと殺意剥き出しで睨んでくるんだもんよ！」

「にらむって、目隠ししてんのによく分かるなお前」

「分かるよ！ だって顔ずっとこっち向けてんだもん！」

ダンが今にも泣き出しそうに嘆いて喚く。それをいなすように対応するのは、鬱陶しそうに顔をしかめるイワイだった。

そしてそう騒いでいると必然的に――。

「おい、うるせえつてんだよテメエら。追い出すぞ」  
注意が入る。

低く脅し掛かるような迫力のある声はランドのモノで、そして声と同時にその二人を黙らせたのは肩に凄まじくのしかかる圧力だった。

小刻みに何度も頷く両名を確認してから、舌打ち、ため息をわざとらしくして解放。

彼はそうしてから窓のすぐ近くの壁に寄り添うようにして座り、ベッドの上で上体を起こし呆然と目の前の壁を見つめる少年を一瞥した。

時衛士の意識は丁度半日前に覚醒した。

応急手当が功を奏したのか、出血は限りなく致死に近い所で止められ、輸血によって回復する。また奇跡的というのが被弾位置だった。

いくら予知をしていたからといって背中から撃ち込まれる弾丸を、どの位置で受け止めるかなど――予想し操作したのだろう。彼ならばしそうだ、ついこの間まで敵だった男にそう思うのは不思議だとランドは思いながら考えた。

心臓を紙一重で避け骨も内臓も綺麗に避けた弾道は、彼の肉体を貫通していた。それでも神父に弾丸が届かなかったのは恐らく、そこまでである程度減速したがために彼自身の能力で無自覚に止めることが出来たからなのだろう。

鼻筋の傷は深く、縫合しても痕が残るという話らしいが、左肩の切創は見た目の割には浅く、ただ失血故の麻痺が少しばかり残るというものだった。

そして時衛士自身、あの多量出血の中で再び目を覚ましたことは最早奇跡というべくだったのだが……。

「おい、テメエ」

顔を向けて、声を掛けてみる。  
反応がない。

まるで、ただそこに鎮座する随分と存在感のある蠟人形のような  
った。

最も蠟人形はあるだけでその存在感が溢れでているからというのは、ランドは一先ず置いておいた。

輸血は終え、今は栄養剤を点滴でなんとか繋いでいるが、これが何日も続けば何が起こるか判らない。そもそもあと二日もすれば援軍が迎えに来る手筈となっているのだから——この四人余りで協調性ゼロ、恐らく一等の実力持ちと思われる神父の所在は不明の現在で相手に出来るとは思えなかった。

「しかしまあ、一週間もしない内につつーか、実質二日でこんな事になるとは思わなかった——よなあ？」

独りごちるようにぼやくと、不意にアンナと目が合った。

同意を促してみるとコクリと頷き、それから衛士の寝台へと腰を掛ける。が、彼女は何をするでもなく顔に帯を、そして身体に張り付くような黒のレオタードの上から全身に帯を巻く痴女的な姿のまま、彼を見つめていた。

「愛されてんなあ」

しみじみと呟く。

しかしアンナは、ランドを一瞥することもなく首を振った。

口を開けて何かを言おうとするも、少し思案するように止まってから、閉じる。

「仲間、だからとか？」

首肯。

「そうか。正直羨ましいな」

こういう関係は幼少期が最後だったかも知れない。昔を思い出して、彼はそう思った。

協会に来て何か変わるかと思ったが、結局はただ目的を持って暴れるだけだ。そこに、一般人では到底抗いようなない圧倒的な能力が加わったのだからタチが悪い。心底思う。

しかし、と。ランドは改めて周囲を見渡した。

「お、散弾銃、しかもイサカじゃねーか」  
ショットガン

「ウインチェスターもあるぜ」

「M1897か。いい趣味してるな。レミントンは？」

「M870しかないな」

衛士が座位をとる寝台を部屋の中心に置くその一室はそう狭くはない。寝台の脇には窓があり、そこからはまだ明るく日の光が入り込んでいるし、数人程度が集まってもまだ十分な広さがある。

だがそれでも、それぞれが目一杯騒いでいれば、うるさいものはうるさかった。

気がつけばアンナは衛士の隣で丸くなるように寝て――。

「なんだこの疎外感。つか見せつけやがって……」

まるで恋人同士だ。

ここで衛士の意識がまともであればどんな反応をするのか些か気になるが……そう願う間も無く、その喧騒を瞬時に打ち消し静寂を被せる姿が、扉を力一杯開け放ち壁に叩きつけるように現れた。

その手に散弾銃を携えて。

「匿われているという状況を再確認出来た人は手を挙げて貰えるかしら？」

変わらぬドレスのような動きにくそうな格好で、彼女は静かに送弾機シラに触れると、呆気にとられていたイワイは勢い良くその右腕を拳手した。

それに倣うようにダンは両手に散弾銃を持った格好のまま諸手を、白旗をあげるように勢い良く上げ、その後にランドは面倒そうに手を挙げる。

「警察が動いているんだから。頼むわよ？」

「ラ、了解」  
ラジャー

「もう一回」

「了解ッ！」  
ラジャ

疲れた様子を微塵も見せない彼女は嬉しそうな笑顔をつくって頷いた。

それから扉は静かに閉じられ、彼女が失せた空間は、飽くまで静寂が保たれる。

どこか気まずい雰囲気——まるで親や教師に叱られ、否定したいのにも関わらず自分に非があるのを自覚できているせいで何も言えないような感覚だ。逃げ出したくなるような空気の中で一人だけ幸せそうに眠るアンナがどこか羨ましくなる。コイツばかりは起きていた時にどんな反応をするのか正直気になった。

イワイはランドの前に移動すると、そのまま腰を落としてあくらをかく。

ダンも指を鳴らして出した無数の武器を仕舞い込むと、同様にその近くに座り込んだ。

「な、なんだよ……」

「いや、すげー堅ゆで卵……もといハードボイルド気取ってんなって思っ」

「ヒデオ、こいつは元々こんなもんだぜ？ 普通に心臓破裂させればいいところわざわざ頭爆発させるくらいだしよ」

「うへー、かつこいいー！」

突然小馬鹿にされたランドは同時に、自身が行った凄惨で狡猾な殺人術を思い返し、頬を紅潮させる。なぜ不意にこんな辱めを受けるハメになったのかは——恐らく彼らが暇になったからなのだろうが——ともかく、理不尽に恥ずかしくなってしまう。

確かにダンの言うとおりだ。心臓を破裂させるのは簡単だし、そもそもその血圧を跳ね上げさせて太い血管の総てを破壊せしめれば済む話だ。

何故頭を破裂させたかと聞かれれば、敵に脅威を与えるためだとしか答えられないが——原因不明でその解明に時間を掛けさせて尚脅威を与えるならば、ダンが言った通りのことをすればいいだけ。

つまり彼らが馬鹿にする論議は非常に的を射ており、反論の余地がなかった。

「て、テメエら暇だからって……！」

「んだよ、いいじゃねーか。こちとら衛士がしつかりするまで暇なんだ。お前も話相手居ないだろ」

「そんな孤独な事を口にしないでしょ見りゃ分かんたろ……」

「まあまあ。ランドだってそんな喰い付くなつて」

ダンはいいながらベストのボタンを外して脱ぐと、さらにそのままワイシャツのボタンさえも外し、上半身裸になる。見た目不相応に随分と引き締まるその肉体は筋肉質で、その体に思わず二人からの感嘆の声が上がった。

しかし、と。眉をしかめるのは当然その二人だった。

「何やってんの？」

「レスリングやろうぜー！」

「ああ、お前なんかアレだわ。『簡単さ！ 動きがのろいからな！』とかしたり顔で言いながら民間人殺しそうなタイプ」

「なんでおれがそんなドア・ガンナー的な事言わなくちゃならないワケ！？」

のりのりなダンに対して飽くまで静かに行ききたがる二人を見て、彼は肩を落として服を着ていく。

何にしても次は当てるつもりがなくとも発砲されそうな上、それが散弾銃であるから被弾の可能性が高い。何よりも彼女が匿う上でメリットは一切ないし、死体に変えて警察に突き出せば瞬く間に何十万もの金が入ってくるのだ。

ここに居られるだけで感謝するしか無い。

庇ってくれるであろうワグナー夫も今は平然と酒場の営業で忙しいのだ。頼れるものは、この身一つである。

「お前元氣有り余ってんなら罔になつてこい。ついでに神父探せよ？ あとこの場所バレたら元も子もないから帰ってくんなよ」

「んな、ひどッ！ ちょい待ち、何この扱い」

「テメエははしゃぎ過ぎなんだよ。長いものに巻かれたいんだろ？ お縄についてろよ」

「上手くねーよ殺すぞガキどもお前らいくつだこのやろー！ おれ

は二五」

「お前、二五ならもつと落ち着こうぜ？」

「と、歳言えってんだよー！」

力一杯叫ぶ声は、それでも極限までに押さえられていて喉を掠れさせるような声となっていた。

イワイは苦笑を浮かべて彼の肩を叩き、ランドはどこか卑屈そうに膝を抱え静観する。

「俺あ、アレだな。二二」

イワイは指を折るようにして数えて言った。

「俺は……つか知ってるはずだろ？ 十九」

ランドは睨みつけるように吐き捨てた。

「おれは二五」

「知ってる」

「むしろお前ら知らなかったらかなり重度の馬鹿だけだな？」

「馬鹿ってレベルじゃないだろ、落ち着け年長者」

「ちなみに神父は二七だそうだ」

「マジかよ衛士より十も離れてんじゃねーか」

「うっそアイツ十七ア？！俺より二つも下じゃねえか！」

「見た目二十歳やそこいらだぞあの白髪頭。どんだけ若作りしてんだよ」

まるで先ほどまで敵同士だったとは思えないほど、三人は溶け込んでいた。

話せば笑い、怒った様子も見せるがそれが冗談と分かっているから本気にしない。

下手に初対面の人間と仲を深めるよりも容易に彼らは、友人関係を持ち始めていたが——機関が彼らを認めるか。正確には、招いた上で実験材料とせず共に肩を並べ、あるいは背を預けあう戦闘員、その仲間として受け入れてくれるか。そこだけがイワイにとって不安だった。

しかし幾人か居る上司の中には特に衛士やイワイに目をかけてく

れる一人の老人が居る。苦々しい選択だが、それを頼れば、あるいは――。

そう考える最中に、再び扉は力強く開け放たれた。焦燥を抱くように顔を引き攣らせる彼女は、それからややあつて、搾り出すように口にした。

「神父…… スコール・マンティアが警察に捕まったわ」  
刹那、衛士の肩がビクリと弾む。

「しん……ぶ――」

そうして、それがきっかけとなつたのであろう。

時衛士は肘の内側に刺さる点滴の注射針を引き抜くと、そのまま寝台の上に立ち上がり、そこから飛び降りる。

顔をうつむかせ、何かに取り憑かれたように、されどしっかりと足取りで女性の脇を通り過ぎていく。そんな彼女は衛士の顔を見て、思わず背筋をすくめ立ち尽くしていた。

衛士がその場から姿を消したその直後に、イワイが付けるイヤホンは久方ぶりに音をたて言葉を紡ぎ始めていた。

『上からの命令です。衛士さんを”手放さないように”との事です』

全てを奪われた。

だから今度は、これからの全てを守ろうと思っていた。

力がなければ出来なかったソレも、今では十分に力がある。自分にできないはずがないと、根拠なくそう思っていた。だというのに――。

あの目だ。あの憎らしい目だ。

己の事だけを考えて己の利になること、己の鬱憤晴らしでしか行動できないあの目。

容赦なく躊躇なく人を殺す。それはこの世界では仕方ない事だが――ならば、なぜオレはアイツを許せないのだろうか。

考えてみる。やつとオレに一体何の違いがある？

考えてみる。ヤツとオレは何も変わらないじゃないか。

困惑する中で拳を交わした。

だから分かったのだ。ああ、コイツとオレは全く同じだ、と。

だというのに外野が首を突っ込んだ。そんな奴らも、オレとは何も変わらない殺しに慣れた野郎共だ。

しかしなぜかこの身体は気がつく走り出して、神父を守っていた。

そうして気がつけば、なぜか衛士は半裸のまま、裸足のまま廃ビル群のさらに奥——袋小路にある警察署へと走り出していた。

——神父が警察に捕まった。

その言葉だけは、頭から離れることがなかった。

奥へ行けば行くほど、景気が良さそうに笑顔で話しあう男たちの表情が一時硬直する。そうした後には彼らが襲いかかってくるのは、もはやこの世界では常識となっているようだった。

逃げた衛士は、ついに囲まれてしまう。

男たちは皆火器を構えて前後左右、その全ての退路を断っていた。「……お前たちは社会不適合者だ。この街にいてソレを否定できるわけねえよな？ だけどさ、そういう事じゃないんだよ。ここに居るからとか、場所がどうか、理由にはならねえんだ。な？ お前等は人を殺すことに躊躇がない」

だがこの世界に居るのだ。仕方がない。

少なくとも衛士にはそれを見下したり、クズだのなんだのと蔑んだりすることはできない。

男たちはその言葉に反応するように声を荒げ言葉に口を挟むが、衛士は構わず続けた。

「法律の前じゃ人殺しは悪だ。だがこの街じゃ、オレたちが居る世界じゃ違うだろ？ 悪だの善だの、そんなものは存在しねえしな事言ってるのは堅気だ。この世界の人間じゃない」

その最中に、背後に位置する男の一人が先走って引き金に手を掛け——衛士はそのまま一気に背後へと跳躍。彼は軽い身のこなしでその男の傍らに飛び込むと、そのまま銃身を掴んで制止した。

「あと少しで終わる。頼むから待ってくれ」

「て、め——」

男が拳を振り上げる。

だがそれよりも早く、衛士はすり抜けるようにして集団の中央へと戻っていった。

「お前たちは持つてなきやならねえのが覚悟だ。この選択をして後悔をしない、何をされても構わないという決意。お前たちの銃は今オレを殺そうとしているな。ああ、別に構わない。どんと来い」

諸手を広げる。その姿はまるで熱弁かます政治家のようだった。

「だがな、オレは死にたくないから手を出さない。手を出したらやり返されるさ。この人数じゃ尚更だ——だけど、オレは死にたかねえから、お前たちが撃てば相応にオレも相手をする。自己防衛、それも正当すぎるな」

「てめえは一発で終わるがなあ!？」

「だったら良いんだけどな。いいか？ オレが言つてんのは死にたくなけりや道を開けてくれってんだ。最も、お前たちはこいつを挑発と受け取っちまって、誰かが、それか自分が死ななけりや分からねえ。みんながみんな大馬鹿野郎の馬鹿揃いだ。惚れ惚れするぜ」

ついに発砲は、前と背後から行われた。

タタタンという軽い、金網を揺らして鳴らすような音が連続する。同時に衛士は軽く横に飛ぶと、その直後。三人の男は胸を押さえ、それぞれ倒れ始めた。

「大の大人が、雁首揃えてよ」

怯む間もなく、今度は一斉に銃声が鳴り始めたが——衛士はまた駆け、跳び込むような跳躍と共に倒れた男を飛び越え、一人の背中に回りこむ。

今度は数人が、まるで学ばずに味方の射撃を受けて倒れる。

衛士は背に回りこんだ男の後頭部を力一杯殴り飛ばし、怯んだ隙に銃を奪取。壁を背にするように跳び、未だ残っている数人目掛けて射撃。

肩に鈍い反動を残して、たったそれだけの行動で総数十六人はそう広いとは言えない路上で呻きながら倒れてしまった。

死者は数名。だがあの中での人数としては奇跡的でもあった。

「ホントに、馬鹿だよ……」

衛士は大きく嘆息する。

そうしてからその中で、一番軽傷そうな、腕を抑えて倒れこむ男の首元を掴んで無理やり起こした。

「警察署に案内してくれ」

知らぬ間に留置所に入れられ、そして裏口……街の外から脱出した衛士には、警察署の場所は見当付けることすら出来無かった。

## お開き

——事態は思ったよりも簡単に済んでいた。

「おお、トキ！ 遅かったじゃないか！」

「はは、やつときました」

「ったく。そもそも現地の警察ノして……ただじゃ済まないんじゃないか？ 俺たち」

「終わったことに嘆くなよエミール」

三人組の男の周囲には制服姿の警察が撒き散らされるように倒れていた。

血まみれで、されど息はある。腕が妙に気味の悪い方向にへし曲がったり、足が反対方向に折り曲げられたり、顔を血に汚していたりするものの、その全員は息をつないでいた。

そしてその屈強の二人に細身の男一人の妙な組み合わせの中に、疲弊しきった顔でギャラングにより掛かる神父が居た。

「なんでアンタ達……帰ったんじゃないのかよ」

「おいおい、いくら何でも恩も返せずに帰るかよ。そりゃダニエルはビビりすぎて失禁するくらいだったけどな？」

「ししし、失禁なんてしてませんよオ！」

「気に済んな、俺も膝笑ってた位だからよ」

がっはっはと豪気に笑う三人の中で、神父は眠っていたのか、一度強く眉を顰めるとそこから静かに瞼を開けた。ギャラングは彼の背を支えてから一人で立てるのを確認すると、

「悪いな、さすがにこれ以上はマズいかも分からねえから帰るわ！」

「おうよじゃあな少年！」

「さよなら、トキ君！」

何か騒動でも起こしそうな三人組は嵐を起こしたかのような現場を後に、そそくさと警察署が背にする街壁の方へと走り去っていく。恐らくそこにも裏口があり、トラックはそこに止めてきたのだろう。

元気が有り余る子供のように手を振って走り去っていく彼らに、衛士は応じて手を振る。彼らの姿が完全に消えると、大きく息を吐くスコール・マンティアは薄ら笑いを浮かべるように衛士へ向いた。「分かりました。とことん、分かりましたよ、わたしは」  
彼は胸いっぱい息を吸い込むと、それでもうつむき加減で口にする。

「わたしは——戦いたくない。自分が生きるために人を殺すことをしたくない。でもわたしはまだ生きたい……ふふふ、こう考えると不思議ですね。全然、何もわかってない」

ボサボサの白髪頭ごと頭を抱え、ヨタヨタと心許ない足取りで衛士の元に歩み寄ってくる。彼はそれを見守り、飽くまで自身から寄っていくことはしなかった。

「わたしがあの時死んでいれば良かったのかも知れない。気付かなければ良かった、こんな矛盾だらけの気持ちに……自分も守れる誰でも守れる、人さえも殺せる力を持っているのに……わたしは失った失ったんです。もう取り返しがつかないんです。全てが遅すぎた……失った代償がこの能力<sup>ちから</sup>じゃ、あまりにも皮肉すぎる……！」

やがて彼は衛士の前に立ち止まる。

同じ目の高さ。衛士と同じように身体はボロボロで、瞳からは光が失せている。

見開く瞳からは溢れる涙が留まらずに流れ始める。それでも彼は、まっすぐ衛士を見つめていた。

その姿だけ見れば、その華奢さはどう見ても女性のようだった。所々を穴だらけにする神父服から伸びる腕は長く、どうも男にしては幾らか細い。その頼りない腕は胸に伸び、痛みを堪えるように服を掴んでいた。

強く目をつむれば、涙がこぼれ落ちて頬を伝う。

衛士は彼を見守りながら、これからなんだ、と理解した。

自分が乗り切ったアレは彼にはまだ来ていなかった。支えてくれた協会の人間が居たからまだ強く居られた。

しかし自分にはもう何もないと認識した現在では、あれほど強かったスコール・マンティアはもう居ない。今にも崩れてしまいそうな男がここに居た。

「わからないです、わたしはどうすれば良いんです……？」

確か歳は十ほど彼のほうが上のハズだ。臆気な意識はそれを聞いて、記憶の片隅に置いていた。

だというのに、今ではスコールも同年代かその下に見えてしまう。儚げな彼は衛士に縋り付く。

衛士は――”あの時”自分がそうされたように、彼を優しく抱きしめた。

「トキ……さん……？」

「カタク考えすぎなんだよ。生きちゃいけないとか、でも生きたいとか、死んでおけばよかったとか。アンタは今、死にたいのか？」

「……い、生き、たい……です」

「なら生きればいい。でも一人は嫌だよな。寂しいよな……なら、オレと一緒にいこう」

言うつと、もつと強く力を込めて衛士に抱きついた。肌を剥き出しにするその肩に顔を埋め、その中で幾度も強く頷いた。

彼はそうしてもう一度強く目をつむると、顔を上げる。大きく息を吐いて衛士の抱擁から離れて、一步退いた。

――温かい。胸の中に、何かが芽生えたようだ。

神父はそれを感じる。

目の前の男とは命のやり取りをしたはずなのに、今では泣き言を聞いてもらって励ましてもらいさえした。客観的に見れば、酷く笑える話だ。酷く三文的で、目も当てられない。だけど、それでもスコールは彼が居てよかったと思えた。

彼となら何処にでも行ける。

彼とならわたしは生きていける。

彼ともつと同じ時間を過ごしたい。

この能力ちからの使い道も、決められる。もしかしたら衛士の為に使う

ことになるかも——と考えて、何故かそんな考えが非常に恥ずかしくなって頬が熱く、紅潮していくのがよく分かった。

ちよつと強引で、でもそれが嫌というわけではない。力強さが心地よく、何も考えてないように見えて、それでも彼ならと思わせられる。そして何よりも、あつという間に拠り所となってしまうた。

わたしの居場所は、物理的なものではなく、心のつながりなのだと——たったこれだけで再認識させられてしまった。

だから——。

「わたしは、貴方と一緒にいきたい」

改めて言つと、衛士は快く微笑んでくれた。

「ああ。よろしく、神父——」

「申し遅れました。スコール・マンティア、スコールと呼んでください」

「よろしく、スコール」

衛士が手を差し伸べると、彼はソレに力強く応じる。

その中で、衛士は何かを言いたそうに口を開けて、しかし何も言えずにつぐむ。

「どうかしました？」

神父が指摘すると、彼は気まずそうに苦笑してから、実は、と続けた。

「スコールがこうなつたキツカケって機関の人口調整だよな？ ソレじゃ、オレ達を憎むこそすれ、何をされるか分からねえのについてくるなんて……」

「ふふ、堅く考えすぎなんですよ。トキさんは」

「え？」

「わたしはトキさんと一緒に行きたい。なら何処へ行こうと、場所なんて関係無いです」

神父は自分が思う出来る限りの笑顔を見せて言う。

すると——涙に濡れたまつ毛は艶やかに伸び、ただでさえ中性的なその顔つきはそれ故に魅力的に見えてしまった。

つまりドキリと、衛士はしてしまったのだ。

だから衛士はどこか気まずげに視線を外すと、何か不味い事でもしたのかとスコールは心配になって顔を覗いてくる。それがまた気まづくなつて、衛士はわざとらしく苦笑してから彼に背を向けた。

「帰ろう。もうこの街には用がない」

「未来が……変わった……？」

薄暗い空間。無造作に付けて放置されるパソコンは、彼女の遠隔操作だけで全ての処理を行っていた。

この前まで居た補助係の数人はもう休憩の時間で、みんないつペんに休んでしまっていて、その部屋の中で一等大きいモニターの前に鎮座するミシェルは、ここ数日、その椅子から立ち上がっていなかった。

「エイジさんはこのことを……いや、彼が視るのは五秒先。ならばこの未来を理解できる筈がない——ですが、自然的に？ 何の影響もなく？ しかし否定できない。未来が変異したなんて、どう説明すれば……」

上司であるゼクトから聞かされた”推測”は、神父と共に衛士が街を離れ、協会、機関ともつかずに個別に行動するものだった。

しかし結果は見ての通りだ。ただ単に推測が外れたと考えれば簡単だが、この推測のお陰で付焼刃スケアクロウに於ける特異点能力者、つまり今回の神父の発見が早かったのだ。この機関の技術を使用した『未来推測』を卑下し蔑ろにすることは出来無い。

だが鵜呑みにすることもこれが”予測”である限りできないのだが、現時点ではこの技術を利用する全ての人間はそれが確実だと思っていて、ミシェルも漏れ無くその一人だった。

——そしてこの状況で、たかが特異点二人が個別行動するという事は修羅の道だ。

時衛士と神父。この組み合わせならば、あるいはと考えさせられるが、機関よりの刺客や単純に神父を狙う協会からの敵が一人一人

来るというわけではない。同時に十人、あるいはそれ以上。なんにしる彼ら二人では対応しきれぬ数を用意し、一度で仕留める。学習する間すらも置かずに回収する。

だからこそ、その選択はあまりにも無謀だったし、これまで築き上げた全てを無駄にってしまうものだったが――時衛士が、無意識にそれを感じ取ったと考えれば幾らか合点がいく。

何にしる特異点となる前から直感が鋭かった少年だ。

それが他者の命に関わるものとなれば尚更。だというのに、自分の命に関わるものとなればてんで発揮せず、みすみす命を散らすはめとなる事も多々あった。

今回はそれが良い方向に向いたらしい。

彼女はそれで、一先ず安心することが出来た。

推測が外れたことは驚きだが、残念ではない。むしろ非常に嬉しいくらいだ。

せっかく記憶が戻って再開したのに、こんなところで別れるなんて真つ平御免だ。恐らくイワイも、アンナもそう思っているだろう。彼と付き合いが長い者は――過剰評価かもしれないが――みなそう思っているはずだ。

彼が特異点という特殊な立場にあるという事も理由の一つだが、ともかく目が離せない。

まるで赤子のように無鉄砲に走るくせに、妙に苦悩し、その癖して呆気無く解決する。

それらを見れば馬鹿だと思いかも知れない。だが何故だか、ソレが妙に癖になる。

抱えきれないくせに抱えようとする。それを助けるのは、それまで抱えた彼の仲間だ。

私も、いつかは。

そう思うと、なんだか頬がほころんでしまう。

彼の任務はもう終わっただろう。

特異点一人に、付焼刃スケアクロウが二人。

検査や実験に協力的ならば恐らく衛士らと同じように生活することが出来るだろう。

そうなれば、衛士も喜んでくれるだろうか。思索すると、妙に今すぐ会いたくなってきた。

彼女はそうして机の上に置いてあるヘッドセットを装着すると、そのままマイクに声を発信した。

「イワイさん。これから一時間後に転送しますので、準備をお願いしますね」

頭上から見下ろすような景色。彼女はそこで衛士の姿を捉え、そつとモニター越しに衛士の頭を指先で撫でた。

「なんか、ホント申し訳ない上にホント有難う御座いましたっ！」衛士が地に頭を叩きつける勢いで頭を下ろす。

そうされたワグナー夫妻は、互いに顔を見合わせて困ったように笑いあった。

——彼らはこの機会を利用して街を出ていく。

理由は何も、衛士らに巻き込まれて生活することができなくなつたというわけでは無いのだが、彼は責任を感じてそうしていた。

やがて膝を折って正座し、そのまま本当に地面に額を擦り付ける。ソレを見てワグナーの妻は慌てて屈み、無造作に衛士の髪を掴んで頭を引き上げた。

「や、やめてよ。まるで私たちがすごい虐めてるみたいじゃないのよ」

「いやだって、ワグナーさんたちが居なかったらオレ死んでたし。みんなだってオレに足引つ張られて命があつたかどうか……。しかも、ただ客に来たってだけで」

「なら、次の店の従業員になつてくれる？ 罪滅ぼしで」

「いや、あの、なんか……ごめんなさい」

愛想笑いをするように頬を釣り上げるも、眉間によったシワは隠せない。

衛士が言つと彼女は応じるように、その頭を地面に叩きつけた。  
「いつてえええっ！」

額を両手で包み、衛士は叫ぶ。彼女はそれを見下しながら、それでも懇切丁寧に説明をしてくれた。

「キミがその神父さんを助けたのはなんで？ その上で一緒に行こうって誘つたのはなんでかしら？」

「な、なんでって言われても……」

アレは別段、勢いで口走つたというわけではない。

だからといって、彼の力を自分の味方にすれば圧倒的に有利になると利己的に考えられたわけでもなかった。

ならば何故か？ わざわざ彼を助けあまつさえ居場所を作つてやる義理はなかつたはずだ。

なら、一体――。

衛士がこまねいていると、彼女は噴きだすように「ぷっ」と可愛らしく笑う。それから大きく息を吐いて、また屈んだ。

「理由なんてないけれどね、強いて言うならば”そうしたかったから”が一番近いんじゃないかしら？」

「あアナルほど」

「こんな時につく相槌じゃないと思うけれど……まあいいわ。ちょっと寂しいけど、行きましようか」

彼女が立ち上がる。衛士は倣うように膝を立たせ、腰を上げた。

すると今度は入れ替わるようにワグナーは前に出て、衛士の肩に手を乗せる。

「お前のせいで商売上がったりだったがな。次の店では金を落としてもらうぜ？」

無骨な手は硬く重い。だが力強さがあつて、安心する手だった。

「次って、どこに行くんですか？」

「祖国アメリカに帰るんだ。サンディエゴに」

「機会があれば行きますよ」

「機会があれば、また会つてみるのもいいかもな」

最後に力強い握手を交わし、かくしてその二人は街の一つしか無い出入口へと向かっていった。

その場にいる全員はそれを見送ってから――衛士はそこでようやくインナーの長袖を着て、さらに革のジャケットを羽織るなどの支度をする。それが終わると、後は弾が切れた狙撃銃を担ぐだけであつた。

ふうと息をつく。

振り返ると、各々はまるでいつもの調子で談話していた。

スケアクロウ

付焼刃の二人はついてくる気満々である上に、イワイに訊いてみればミシエルの了解を得ているらしい。これには少しばかり驚きだが、どちらにせよランドがPMCと接触せずに居た事には少しばかり安心したし――殺意を抱かずに敵意だけを向けてくる事には、少しばかり残念だった。

確かに拷問時はやりすぎたが、アレは敵だったし……。そう言い訳しても誰が聞くわけでもなく、そうする中で手持ち無沙汰になっていたアンナは衛士の前に回りこんできた。彼女の背後に追隨するのは神父である。

彼女は不意に衛士の胸に指を突き刺すと、今度はその人差し指を折って親指を突き出し、己の胸に突き刺した。

男らしい仕草だが、どうやらここの治療はやってやったんだから感謝しろという意味らしい。

器用で結構。衛士は頷き、言つてやる。

「なら痕も残らなそうだな？」

その言葉に、彼女は空気を切り裂く勢いでブンブンと首を振った。「痕を残せて？」

首肯。

どうやらこの感謝を永遠語り続けというらしい。というのは流石に人格を疑う事になりそうなのでその旨を尋ねてみると、彼女は不満そうに唇を突き出して首を振った。

ああ、と思いついて手を打つ。

「わたしを忘れるなよ、的な」

首肯。その上で親指を立てて前につきだしてくる。

いわゆるグッジョブをコレほどまで元気よくやって来る人は初めて見た。

「ふふ、アンナさんと仲が良いんですね。憧れますよ」

「仲が良いってどうか猫になつかれてる感じがな」

なんて冗句混じりに言ってみると、神父との間を割って入って目の前で意気揚々と中指を立ててくる。

「い、いや冗談だつて。でもお前何処でも寝るし人のベッドでも寝るし、マジに猫みたいじゃない？ いいじゃんか、猫かわいいし」

暗にアンナも可愛いよ、という風にご機嫌を取ってみると、彼女自身言われ慣れていないのか、帯の下に露出されている頬が徐々に桜色に染まっていくのがよく分かった。そして相対的に彼女の素行は悪くなつて、衛士の水月にはあまりにも見事過ぎる掌底が叩き込まれる羽目となった。

「ぶべらっ」

更に追撃が顎下から迫る。

死角となるが為に避けることすら出来ずに打ち上げられると、衛士はそんな間抜けな言葉を漏らして、思わずよたよたを後退した。

同時に、全身の傷という傷が唸り声を上げるように、痛みを再熱させ始める。

さすがに——未だ病み上がりというわけだ。

衛士は短い呼吸を繰り返してから、手をつきだして制止を願った。「無理だ。死ぬぞ、リアルに……！」

懇願は、されど腰に手を当て偉そうな態度のまま首を振る彼女に却下される。

彼女はそれから大股で歩み寄ると、今度はなぜか、優しく背を撫でてくれた。顔を見ると、心配そうに口元は歪んでいる。

どうやら先ほどの態度は冗談で、やりすぎたことに反省しているらしい。

「はは、気にすんな。今回は出番がなくて、残念だったのはまあわかるけどさ。でもビルが崩壊した時に助けてくれたる？ アレはホント、助かったんだ。感謝してる」

引きつりながらも無理に笑顔を作って、頭を優しく叩いてみせる。すると彼女は下唇を噛むようにしてからうつむき、それから衛士の前にまた回りこむと、今度は大きく胸を張った。外套を羽織る所為で胸の形、大きさははっきり分らないが、外套を押し上げる程度のポリウムはあるらしい。なるほど、と衛士はその意味で頷いてから、また彼女の意図を汲み取ってまた頷いた。

「また頼らせてもらうよ。でも頼ってばっかじゃどうしようも無いから、オレも頑張るけどな」

とても男らしい返答とはならないが、彼女にはコレでいい。するとアンナは頷いて、自然とその傍らに付いた。

ロケットペンシル的に押し出されるように前に来るのは、神父だった。

「やっぱ新天地っていうのは、心配……ですか？」

「ヤダな、今更敬語って無いですよ」

「はは、やっぱそうだよなあ。でも十も年上つてのにため口つてのもさ」

「トキさんは気にしなくていいんですよ。わたしはただ、この口調が根付いてしまっているだけです」

スコールは言って笑う。

これから行く新しい居場所はそれに加えて元々敵地である、という神父の様子は、心配ながらもそこまで重度な緊張も無い所を見て、衛士は安堵するように笑った。

「でも、口調はまだしも身体を少し鍛えて——」

「おおい、衛士！ そろそろ転送するらしいからこっちへこーい！」

「おう、わかった」

言葉を遮るイワイの声に応じて、衛士は神父に背を向ける。が、彼はしっかりとその横、アンナとは反対側の傍らについてイワイの

元へと集まってい——。

『転送準備完了。転送を開始します』

「開始するってよ」

イワイの報告の直後、カウントも無いまま不意に周囲が明るく真っ白に塗りつぶされ始め——。

ソレがおさまる次の瞬間。

先程まで居た六人の集団は、その場から綺麗に消え去っていた。

——様々な戦闘、思いが行き交うスラム街での任務は、その街に深い傷跡を残して終えた。

されどやはり、その街の住民は復興をしても、その復興に至る過程に関わらない。

良くも悪くも、その街の日常が崩壊することは、決してなかった。

## それぞれの混迷

機関を訪れたランド、ダン、スコールの三名はエミリアに連れられて研究施設へと誘導された。

健康診断と特異能力の検査、それからこれよりの研究に対する協力を要請するために一週間程そこで生活をしてから、それぞれ適正者のように一般の生活が出来るようになるとのことだった。

衛士はその怪我や衰弱のために一時入院。アンナは通常通り帰宅し、そして気を使うように見舞いをしているらしい上に、毎日その見舞いがアンナに限らず、絶えることがないという、随分と羨ましい状況となっているらしい。

彼はそれらを思い出して、もう心配はないか、と息を吐いた。

——暗く、なお昏い。

空間はいつものように闇に塗りたくられていて、その中でしわがれた老人の声だけが彼と繋がっていた。

『今回も特異点へは進化できなかった……推測が外れて残念か？  
祝<sup>イワイ</sup>』

意地悪そうに押し殺した笑いが外部スピーカーを擦るような音を鳴らす。

イワイはそれまでの気安そうな笑顔を喪失し、一切の感情を排他した顔のまま後ろで手を組み、何を視るでもなく闇を凝視した。

押し殺すでもなく、されど叫ぶでもない声には熱がない。

まるで別人のように”何か”と対峙するイワイは、やがて口を開いた。

「機会<sup>チャンス</sup>は後一度……そうだったな。ゼクト」

そう言つて、彼は自分が握りしめていたカードの存在を思い出し、暗闇の中でそれを目の前に持ち上げる。

見えない。

光のないそこではそれが当たり前だった。

されど、それを幾度とも眺め続けていた彼の網膜にはそれがどのような形でどのような硬さで何を描き何を示しているか、それを照明の下で見るが如く認識できていた。

——自分の無愛想な顔写真。

その上には『祝英雄』という名と、その隣には三月一日という取得した日付。顔写真の隣には『特異点となるまで有効（残機・一）』と示される文章。

まるで運転免許証のように作られるソレは、イワイがこの地下空間<sup>ント</sup>にて機関の一員として活動するための許可証でもあった。

これを手に入れてから既に経験的には一年以上が経過したが——  
実質的には、未だ七ヶ月。

そして後一度の任務で特異点となることが出来なければ”処分”される。

イワイはそれを承諾した上で二度と脱げぬ耐時スーツを身につけ、この地下を訪れていた。

『そのとおりだ。しかし思い返せば——くふふ、あの程度の交渉で領いてくれるとは思わなかったがな？』

「藁をも縊るさ。しかしお前はソレすら反故にした。お前の所為でヤツがどんな目に遭い強くならざるを得なくなっただか、わからんだろうなあ。あまつさえ俺をこの状態に、な。特異点矯正サポーターだったか？」

手のひらを胸に当て、指でなぞる。

アレほど分厚かった生地は今となつてはタイツが如き薄さとなっている。これでは肉体と癒着というより、完全に一体化してきている。そうしてあらわになるのは、より強調される、昆虫の腹のように割れた腹筋や、筋肉柄のシャツでも着ているかのような肢体だった。

その姿はその肉体自体がパワードスーツと化しているようなもの。それと引換に得たものは、単純なあらゆる能力の強化だった。

『本来、耐時スーツとは強制的に特異点へと進化させるための副産<sup>とっ</sup>だ。』

物だったのだが、これではあまりにも効率が悪いというので単純な強化スーツへ移行させた。貴様に与えた理由なぞは、直感的に”コイツならいけそうだ”と思ったただけだ」

「アイツも、か？」

「ふうむ……アイツとな？」

「衛士だよ。時衛士<sup>ときえいじ</sup>」

「くふふ、どうだったか……年寄りの頭では思い出せんかう」

「だとすればあの時は随分と豊作だったろうな。衛士と同期だった、あの女の<sup>センス</sup>才能が跳び抜けてるんだろ？」

「ああ、あの”耳が良い娘”か。そうだな、あの娘も随分と良い線をいっている。貴様のように、下ごしらえだけは済ましておくべきか？」

下卑た笑いは、わざとそうしているのだろうか、ともかくその笑い声が耳に障った。

特異点——そうなるためには後は何が必要なのか。

イワイにはソレが分からなかった。

副産物は既に肉体と一体化しているし、その実力だって平均的なものを遙かに凌駕している。

あと一つ。あと何か一つだけが必要であるのは理解できるが、それが何であるのかは判らない。

衛士に訊けば早いのだろうが——こうなった経緯を聞かれてしまえば、恐らく彼はまた暴走する。そうすれば、奇跡的に今回回避できた展開を再熱させ、ここを離れることになるだろう。イワイはそれだけは、どうしても防ぎたかった。

取り戻せぬとも再び築いたそれらを、今度は己の手で崩すことなどさせることはできない。

その為に、この命が消えよう事になっても。

「だがまだ早い。まずは貴様だ」

「わかっている」

「トキ・エイジは参考にならなかったか？」

「いや……ヤツと居ると俺が昂ぶる。何かを掴めそうだった……実際、アイツが離れた場合、俺は特異点になれたんだろう？ アイツと戦って、よ」

イワイは踵を返し、出口へと向かう。

己の問いの答えを聞くつもりなど最初から無かったのだろう。

彼はそうして、飽くまで静かな足取りで、鉄扉を押し明け、その空間から出ていった。

残されたのは、扉から差し込む照明の残渣。

モニター監視していた男は、それから外部スピーカーを切らずに、誰にともなくつぶやいた。

『英雄<sup>ヒーロー</sup>にでもなれば良いのだがな』

重力子含有量は個体が持ちうる量を遙かに凌駕し、衛士が持つソレすらも超えている。つまり実質的には特異点となっても良いはずなのだが……。

あるいは、未だ知らぬまだその先があるのか――。  
ゼクトはそう言って、空間との繋がりを断絶した。

「大事にならなくて、ホントに良かったですよ」  
目を覚ますと既に居たミシエルは、椅子から立ち上がってそう言った。

不眠不休で丸五日間サポートし続けた彼女の方が体力的には限界を上回っているであろうはずなのに、彼女はその透き通るような金髪を乱し、また目の下に深くまを作りながらも笑顔で居た。

「ミシエルさんが頑張ってくれたお陰……っていうのは、白々しい？」

「ええ、とつてもっ！」

頬を膨れさせ、絶対的優位を表現するように拳を作って腰に当てる。

彼女はそうして、本当に泣き出してしまいそうに眉尻を下げて、崩れるように椅子へ腰を落とした。

「指示の全てを無視するんですもん。すぐ解散するし、聞くだけ聞くとかすぐ飛び出しちゃうし……結果オーライって言えば、そりやそれまでかもしれないですけど……」

現在が現在いまだけに、一概に彼を責められたものではない。

結果的には衛士の行動が一番最善だったのかも知れない。ミシエルの指示を聞いてそれを従ってしまえば、恐らくは神父がそのまま協会を離反するだけで終わり、結局は何も進展しなかっただろう。

今回に於いて、スコール・マンティアが機関に来たことは大きかった。

そして彼が時衛士と深い親交を結ぶことは、それ故に時衛士と神父の機関においての立場を確立させることになっていた。その為に少なくとも元協会員という事で戦闘員から差別されることはあるとともに、機関が彼らを蔑ろにしたり、いわゆるパワーハラスメントを行うことがなくなったわけである。

——ここに来て既に機関の主力となる実力者を籠絡していた。最も、ただ無自覚に凄絶な人望を持っているだけなのだが、これはこれで恐ろしいほどにすごい事だ。

今日で既に二日目となる入院生活。

つい先ほど目を覚ました彼だが、それまでで既に数人の見舞い人が訪れている。

あの堅物のエミリアを始めとして、アンナ、ナルミ・リトヴァク、そして船坂。加えてどこから話を聞きつけたのか、適正者ですらない一般戦闘員が三人ほどグループでやって来さえした。一体どこでどうやって出会ったすら不明だが、初日でコレほどとは、さすがにミシエルも驚きだった。

しかし、出会った当初は、才能センスはある程度ありながらも結局は発芽せず落ちぶれてしまうものだと思っていた。そうなったら、責任持って引き取ろうとさえ考えていたのだが——思ったより上手くやれていて、彼女は親心のように良かったと思えていた。

そう思う反面で、少し不安にも思う。

彼を誘い、そして彼が不幸にのたうちまわってしまった責任を感じていた事を赦された。だから、最初から出会い、全てを知っているのは私だと言う思いが、どこか彼を一番身近な、それこそ身内のように考えさせてしまう。

だから、誰かに取られてしまうのではないか。せつかくまたお話できるのに、どこかに行ってしまうのではないかと不安に思っただけ。手放したくはない。

されど窮屈な思いはさせたくない。

彼が私に興味を持っていることは知っている。それが恋心なのかどうかはわからないが、そうであって欲しいと思うのは——傲慢だろうか。

——黙りこむのを見て、衛士はミシエルが本気で怒ってしまったのかと思っただのか、オロオロとうろたえる。彼女はそれに対して吹き出すように笑って、目尻に溜まる涙を手の甲で拭い去った。

「いえ、怒ったわけじゃないんですよ？」

衛士が離れていくかも知れない。

なぜかそれだけが頭の中で消えることなくグルグルと巡り回り不毛な考えを繰り返えし始めていた。

通信で地下から援護していた時は少なくとも、不安だったがこういった考えは無かったはずなのだが……。

「ああ、でもまあオレも心配をかけ過ぎたってトコかな。いい加減独りじゃないって分かってたんだけどな。今回でよく分かったよ、みんなオレの事を認めてくれてるって——」

その言葉に反応したのは、正直ミシエル自身よくわからなかった。

みんなが認めている——自分の所有物であり独占をしているというわけではないことは、勿論わかっていたはずなのに。

何故胸が、締め付けられるように痛くなるのだろうか。

——彼女は不意に立ち上がると、即座に我に返る。が、驚いたような衛士の表情を見て、なんだか居たたまれなくなっ

「私はもう休みます。エイジさんもご自愛くださいねっ」

両手で顔を覆うようにしながら足早に、ミシエルは病室を後にした。

「手前さまは女心ってモンを分かっちゃいねえのよ。誰が自分に気があるのかは分かるくせにな？」

すれ違いざまにやってきたイワイはそう言って、先ほどまでミシエルが座っていた椅子に腰をかけた。

手土産に持ってきたのは手軽に食べられるリンゴやミカンなどの果物類と、適当なミステリー小説、クロスワードパズルの雑誌だった。

あと一週間もしないうちに退院なのにいくらか大袈裟な気もするが、気持ちとはとても嬉しかった。

衛士は有難くそれを受け取って床頭台に置くと、それからイワイに返答した。

「お、女心って……今関係無かったろ」

「複雑なんだよ」

「今の流れからそんな展開に行くくらい？」

「複雑なんだよ」

「なんか、こう、恋愛的な？ 要素ゼロだったのに？」

「複雑なんだよ」

こいつとりあえず複雑って言うときゃいいと思って……。

衛士は失望したように肩をすぼめて深い溜息をつくとき、それからコンビ二袋からミカンを一つ取り出し、膝の上で皮を剥き始めた。イワイはそれを見て倣うように、自身が持ってきたリンゴを肌——というか、全身タイツのような耐時スーツで磨き、噛り付く。

というか、コイツの耐時スーツってこんなに薄かったか？ そういった疑問が浮かぶ一方で、そういえばコレは肉体と一体化しているという話を思い出した。

これを装備し見事に扱えるのはほんの一握り。そしてイワイは現

在残存する、その『旧・耐時スーツ』の使用者の最後の一人だった。そもそも”旧”と付いている時点で、もうその使用許可が下りていないことは明白なのだが。

だから、恐らくその耐時スーツはいずれ完全に肉体と化す。脱げなくなるのは、普通の肌、肢体、肉体と同様になるからという意味なのかも知れない。最も、実際に現時点で脱げなくなるという事もあるのだろう。

「どの道部屋は隣なんだろう？ 適当に取り繕っとけ」

「まあ、フォロー的な事はする予定だったけども」

「……なあ、衛士」

「ん、どうした。急に」

上体を前のめりにして、膝に肘を置く。彼はそのままうつむいて、何やら搾り出すように声を出した。

——今日見舞いに来る奴は妙なばっかりだ。

衛士は思いながら、ミカンをまるごと口の中に放り込んだ。

鼓動が早くなるのを、イワイは感じていた。

緊張する。腹の奥底に鋭い、電撃でも走ったかのような痛みがあった。

血中に混じって全身を駆け巡る痛みが自分を苛む。これから口にしようとしていたことを、まるで止めると制止するようだった。

「おいおい、どうしたんだよマジに。病院で具合悪くなってるじゃ世話ねーぞ」

衛士は寝台のすぐ近くにあるゴミ箱に皮を捨ててついでに、寝台の外に足を放る。そのまま立ち上がると、イワイの前に近寄って――またミシェル同様に突然、彼は立ち上がった。

思いつめたような表情だ。

まるで何か悩んでいますよと言っているようなものであった。

「ワリいな。何でもねーよ」

が、それが錯覚、幻想だったかのように彼は晴れたように笑顔を作る。引きつったようにも見えない、自然なソレだった。

イワイは背を向け、退室しようとする。衛士はそんな彼の後ろ姿に声を掛けた。

「言えるようになったらいつでも言ってくれよ。オレたち、もう友達だろ……？」

「……そう、だな」

一度立ち止まる。そうしてから返す言葉はそんなそっけない一言で、彼は再び、開け放たれていた扉から姿を消した。

「何なんだよ、アイツら……」

見舞いに来たのか、不安や焦燥を駆り立てに来たのか判らない。そのくせ一丁前に自分の苦悩だとかを隠せたと思っっているのは甚だ不愉快だ。こちらら、なぜだか嫌でも直感的にそれを察することが得意なのだから。

衛士は缶コーヒーと小銭入れを手に、ロビーの椅子でため息をついていた。

どうにもあの個室に居ると悶々と立ち込める負の思考に飲み込まれそうだったし、かといって既に肌寒くなる外に出るのも嫌だったからだ。

その病院は、一般的な病院よりも割合に大きい。

この地下空間でも商店や工場、建築や土木、その他の様々な職種が純粹にこの地下で生活するために、殆ど普通の街と変わりがない。だから何もしない老人も居れば、されどかといって働かない若者が居るというわけでもなかった。

この街で生まれこの街で死んでいく者がいる。既にこの地下空間というものが作られてどれほどの時間が経過しているかはわからないが、少なくとも一世代分以上はあるらしい。

学校は一応あるらしいが、高校まで。望めば戦闘訓練校への入学も可能であり、また就職は機関が全て手ほどきをしてくれるため、あぶれることがない。

だからこの街、この関東圏ほどの広大な土地を持つ地下空間で道

ジオフロント

をゆけば普通に若者が歩いている。衛士よりも遙かにこの街での、この機関での、この地下空間での自分の在り方を理解した者たちが、つまり地上とは余り変わらないのだ。圧倒的に違うことと言えば、夜がないこと。常に日中であることだ。

だから衛士が静かにその待合室でゆっくりしていても、辺りは騒がしい。最も、この適度な騒がしさを求めきたのだから、むしろ助かったのだが。

衛士は大きいため息を付いてから、缶コーヒーを一気にあおった。「隣、良いかしら？」

苦いブラックコーヒーを飲めば頭が冴える。そう思っずと飲み続けていたが、ただ舌に染みこむような苦さが余韻として残るだけだった。

もう二度とブラックコーヒーなんて飲まないぞ、と心のなかで決意する中で、そういった声が頭上から降り注いだ。

顔を上げると、真っ赤に燃えるような髪に、同色の縁を持つメガネ。そして白衣を着こむ女性は返答を待たずにとりの椅子に腰を落とした。

「ああ保健医……っと、アイリンさん……でしたっけ？」

「好きな方で呼んでもらって構わないわ」

彼女はそう言って手にもつミネラルウォーターを手渡した。口直しにということらしいが、そのペットボトルの蓋はすでに開いていて、水も半分ほどしか残っていない。つまりは飲みかけだ。

しかし彼は構わず受け取り、一口含む。そいつを手渡すと、彼女は疲労の色濃い顔で深く息を吐いた。

「付焼刃<sup>かれ</sup>らは貴方<sup>あなた</sup>の看病より手厚くもてなすから安心して頂戴ね。下手に誤解を受けて攻められても、辛いのはお互いだけだし」

「ええ、なら安心しました」

「でも敵であつた筈の付焼刃<sup>スケアクロウ</sup>が味方になるって言うのは、少なくとも適正者や上位互換<sup>アップグレード</sup>には衝撃かも知れないわね。いい歳だし、まさかいじめとか言うことはないかも知れないけれど、中立に立てるの

はあの任務に就いていた貴方達だけなんだから……ね？」

「わかってますって。……大丈夫ですか？ 随分疲れてるようすが……」

彼女も彼女で深くまをつくつて、頬は以前見た時よりこけている。

まるで残党狩りから逃げている敗戦兵のようだった。

「あと少しで新しい副産物（てくさんぶつ）が完成するつて所で、付焼刃に、付焼刃に於ける特異点が来たから……なおさら休む時間が無くて。今は部下から無理やり追い出されて、お昼ついでに見舞いに来たのよ」

フィルムのような包装容器で作られるゼリー飲料を、彼女は眉にシワを寄せながら飲み下す。その表情はまるで苦手なものを無理に食べるような風だったが、恐らくもう身体が疲弊しすぎていて食べ物を受け付けなくなっているのだろう。

一刻にそういう経験があったから、衛士にはよく分かった。

そしてこれを治すには、精神的なストレスを緩和することは勿論、肉体を十分に休ませてやらなければ始まらない。

「ふう、元氣百倍つてトコかしら」

げっそりした顔でアイリンは微笑んだ。

「その笑顔でオレが元氣になりました」

「あら。どこで覚えてくるのかしら。そっいうの」

彼女は研究者だ。

この街で生まれ、その素質を見込まれて幼少期からその世界に踏み込んでいる。

今では全ての研究、技術開発に於ける責任者たる位置に立ち、また実際に指導し加わるまでに至っている。

衛士にはとても考えられない世界だが、彼女にとっての戦場（げんば）が衛士にとっての研究現場なのだろう。そう思うとなぜか対等になれたと思えるのだから、つくづくこの頭は単純だと思ふ。

「特異点たるキミに一つ質問！」

なんだか気分が落ち込んでくる。そう思う最中に、彼女は少女つ

ばく元気に手を挙げた。

「なんです?」

「未来の”音”を聞く時って、どうすればいいと思う? キミは実際に”未来の経験”を記憶に刻んで、それを改変する選択をするわけでしょう? その説明が面倒だから、予知ってことにしてるけれど」

「ええ、まあ、ですね。しかし——音ですか。オレの場合は目なん  
で、こう……集中するときは手で枠を作って、カメラのレンズを覗くようにすれば段々慣れてきましたけど……そうっスねえ」

「形としては携帯音楽プレーヤーみたいな物で、それで受信してイヤホンから聞くみたいなものにしたんだけど……どうも、上手く受信しないのよ。普通の音楽プレーヤーはイヤホンを受信機アンテナにして  
いるわけでしょう?」

「漠然と未来お音を聞くんじゃ、そりゃ無理な話ですよ」

衛士は思いついたように、自分の腿に平手打ちをした。

スパン、と小気味良い甲高い音になる。

アイリンはそれに食いつくように体勢をずらしてより衛士に向かう。それを見て彼は、少しばかり注目を引きすぎたと顔を引き攣らせた。

「いや、あの……素人考えなんで流し聞いてくれればいいんですよ。期待しないでください。戯言です。うわ言です。妄言ですから」

「素人の考えが虚を付くこともあるのよ?」

「んん、じゃあ——ほら、受信機って言っても、結局重力子を集めて歪めて、その僅かな時空間の歪曲から未来を受信するわけでしょう? だけど、ソレは道具だから、時間指定やら空間、位置指定までは出来無い。オレはほら、考えるのが人間ですから。殆ど意識せずとも自動なんですけど……」

「つまり?」

「ラジオって流れてる電波を拾うわけじゃないですか。どこそこの何とかっていう、既に流れてる情報。でもその未来を聞くんって言う

のは、結局、受信して集めてるのは重力子。未来を受信できてるわけじゃない。そして道具である限り——パソコンでその操作が出来るかもしれないが——指定ができない」

衛士はふうと息を吐く。

前座が長すぎて、自分から期待させてしまった。

まあいいどうにでもなれ。彼はやけくそに言ってみた。

「電波塔的な、まず未来を受信している物、人が必要なんじゃないですか？」

「たとえば？」

「そうっスね……たとえばオレとか、たとえば機関の『未来推測』だとか」

「やっぱり、そう思うわよね……。だとすると、既に取得された”未来”というデータを転送して音声に変換。副産物に送信すれば良いだけになるわ」

「やっぱり、独自に未来を取得したほうが良いんスカね」

「機関の推測は、”展開”しか推測できないから、ね。貴方のように正に秒刻みの未来を読むわけじゃ——」

言って気づいた。

彼女はそういった顔をして指を鳴らす。

そして伸びた人差し指は、そのまま衛士を指していた。

「ああ、居たわね。生ける電波塔が！」

「なにそのノッポの代名詞みたいなの」

「貴方が視た未来を受信すればいいのよ」

「それじゃソレ使うヤツは俺と行動しなくちゃいけませんね。現場でもみっちり」と

衛士がカラカラと笑いながら、どうせコレも彼女の思いつきで採用されることでは決して無いと思っていた。

が、アイリンは思いの外真顔で、衛士をどこか見下すように、哀れなように眺め、

「うん。そういう事」

「え？」

衛士が使うことになったのか。

あるいは使用者が衛士に追従することになったのか。

「そういう事だから」

「でもオレ、音以前に未来が完全に見えますけど……」

「そういう事になっちゃったから」

どうやら後者らしい。

きっぱりと言い放つと、彼女は清々しい笑顔を振りまいて立ち上がる。まるで悩みが一つ消えたような清々しさだ。

全身の筋肉を解すように両手を天高く伸ばして伸びをする姿は、何やらこちらまで気持ちよくなつてきそうなものだった。が、

「貴方は三月にエミリアと、あるいはイワイと一緒に任務に出たわね？」

「え、まあ。オレは特別実戦多いし、ここに来る前も殆ど実戦みたいなもんだったからって」

「これからは貴方、エミリアやイワイとおんなじ役目ね。次からは”イリス”と行動を一緒にすること。いいわね」

アイリンは一方的に告げると、衛士の返事も待たずに軽い足取りで、そのまま出口へと歩いて行つて――。

「あ、でもまだ決定したわけじゃないから！ できれば他の方法も考えてくれると嬉しいわ！」

捨て台詞のようなものを叫んで、彼女はされどざわめき続ける病院を辞した。

衛士はそれから幾らかの時間を放心状態で過ごし、時刻が夜になった頃、看護師に連れられて自室へと戻されていった。

## ナルミ・リトヴァク

時衛士の退院は、目を覚ますと同時に許可された。

理由としては、健康状態としてはこの上なく良好なものになったからという簡単な理由であり、医師や看護師がその急激なまでの回復具合に追求してくることはなかったが――さすがの衛士も、それを素直に言葉のまま受け止めるわけではなかった。

昨日の今日だ。

おそらく機関が無理に退院をさせ、そして休む間もなく任務に就かせるつもりなのだろう。最も任務と言ってもこの間のような死闘を繰り広げるわけではなく、今回は多分、技術向上に関するものだ。しかしやはり――久しぶりにゆっくり休めたような感覚だ。

それだけは確かに分かる。ただ単に休暇を貰って自宅でダラダラするよりも、十分に骨休めすることが出来たような気がした。

衛士は病院の前で、大きく伸びをした。荷物が無いから手ぶらであるために、着の身着のまま、随分と気楽な恰好だ。

着こむのはまだ新しいジーンズに革のジャケット。任務から戻ったそのままの恰好だが、綺麗にクリーニングされていたらしくシワ一つ無く清々しい気分で着ることが出来ていた。らしくシワ

そして――狙ったように”彼女”はそこに立っていた。

「お弁当作ってきたんだけど、食べる？」

少し伸びて目に掛かる前髪を気にするように指で払いながら、寒そうにトレンチコートを羽織り、チェック柄のマフラーを巻く彼女はそれでもスカート姿だった。いくら下にタイツを履いているようだが、寒いのであればズボンを履いてくればいいのに、と衛士は思う。胸に抱くのは、竹や葦などで編みこんで作られた琥珀色のバスケット。彼女が言うお弁当はそこに入っている。

「ああ、有難く。近くに公園があったから、そこに行こうか？」

喋れば共に吐き出される息が白く染まる。

少し外の外気に触れていれば直ぐに頬が火照ってきそうなモノで、実際に彼女、ナルミ・リトヴァクもその頬を桜色に染め上げていた。

——少し歩いて到着するそこは、木々が天井のように葉と葉を重ねあわせ木漏れ日が影に見事なコントラストを醸しだす緑の多い公園。だが、季節が季節、既に十一月も間近ということもあって葉は枯れ果てたものが数枚残るばかりで、木はその殆どが丸裸だった。

まだ朝だからか、人は居ない。衛士は適当なベンチで彼女を座らせて、近場の自販機へと向かった。

「……わざわざ迎えに来た、って訳じゃないよな」  
そんな雰囲気ではなかった。

いつもどおりの風を装って入るが、どこかよそよそしい。あの顔の火照りようはただ単に寒いからという理由だけではないだろう。

衛士は小銭を投入し、適当な缶コーヒー二本を手にして、なぜか強張る表情を深い嘆息で緩めてから、ベンチへと戻っていった。

「——ミルクの無糖と微糖があるけどどっちがいい？」

「そ、それじゃ……微糖」

「あいよ。熱いから気を付けろよ」

衛士はナルミの隣に座りながら手渡すと、まるで大事なモノを手にするかのように両手で受け取り、ふうと息を吐いたのか、大きく白いもやが吹き出て流れた。

彼女は唐突に現れ唐突に行動を起こす節がある。

いつもそうだ。どうにも気分が上がらない時や不安が募る時には  
かり現れる。

まるで何処かで監視されているかのようなタイミングだったが、それでもこうやってわざわざ来てくれるのは彼女なりの気遣いなのだ。だが、ただ無条件に与えられる好意に吞まれるだけでは男ではない。衛士はそう考えていた。

「今日は腕によりをかけて作ってきたんだよ。病室で食べさせてあげようと思ってきたのに、外だとちょっと寒いけど」

バスケットの蓋を開けると、肉や野菜やら乳製品やらが綺麗に彩

り豊かに挟まれるサンドイッチ。それは訓練兵時代にうんざりするほど食べさせられた、クラブサンドであった。

「エミリーからきいたよ。クラブサンドをくれてやると毎日残さずに食べてたって」

ひどい誤解だ。

衛士は辟易したように、細く息を吐いた。

毎日残さず食べていたとはいえ、あの時はエミリアからの差し入れがクラブサンドだけであつたし、その上で食事は全てエミリアが差し入れてくれるものでしか取ることが出来なかつた。外に出る暇もなかつたし、また出ても何かを買う金がなかつたのだ。藁をも縋るとは言うが、生きるためには出されるものを食べるしか無かつた。正直言えば、食い飽きたというほどであつたが……。

「あ、ああ……よく分かつたな」

「エイジは——そうやって、すぐ嘘を付くんだね」

「え？……な、なん」

「エミリー不器用だもん。どうせクラブサンドしか差し入れてなくて、それしか食べられなかつたんでしょ？ エイジは優しいけど、相手の想いを肯定してなんでも受け止めれば良いってわけでもないんだよ……？」

ナルミは口走る。しかし衛士には、彼女が何を言っているのか——そして何故また突然に、こんなことを言い出すのか理解できなかった。

ならばあの時に食べ飽きたから食えるかと突き返せばよかったのだろうか。そう考えれば、どう思考しても答えは否だ。いかにそうであっても、好意を踏みにじることはしてはならぬはず。

最も、これは時衛士個人の価値観からの答えなのかも知れ無い。ナルミはただ単純に、強引で自分を強く出す男が好きだけで、彼女はそれを衛士に期待しているのではないか——と。

考える間にも、彼女は言葉を続けていた。

「暖かいよ。エイジの優しい気持ちは、このコーヒーみたく暖かい。」

だから好きなんだ。こんな僕にも、いつでも、みんなみたいに平等に扱ってくれた。”僕だった僕を”認めてくれて、だから今の僕がある……だから、今現在、こうしてエイジに話しているナルミ・リトヴァクはエイジの為に在るって言っても過言じゃないんだよ?”

——いや。

そうではない。

色恋沙汰の話ではない。

彼女の言葉で、衛士は正気に戻ることが出来た。

これは飽くまで前座である。本題を切り出すための助走距離。その予備動作であり、初動動作だ。

時衛士は無意識にそう考えていた。

なぜ色恋沙汰ではないと思えるのか、その根拠の一切はない。

しかし彼の頭はどうしてだろうか。そういった方面の話題にはまるで理性が自動的に作用してしまうかのように避けてしまっていた。

「なら、お前は——」

「ナルミって、呼んで」

胸を射ぬくような鋭い眼力が、有無を言わさない。

「……ナルミは、オレにどうして欲しい？」

「ちよつとだけ、僕の話聴いて欲しい。みんなの話も聴いたんでしょ？ 僕だけ、不平等だよ」

悲しげに言う彼女は、ふくれっ面で衛士をにらむ。

そうして缶コーヒートのプルタブを起こして蓋を開けると、そのまま勢い良く内容物を口に含んで——。

「あちっ！」

勢い良く零す彼女は、そのまま純白のコートに乾ききった血痕のようなどす黒い色のコーヒートを汚して——しまいそうになる。その寸でのところで手を出した衛士はうまい具合にその全てを受け止めた。

”視えた”が為に可能になった行動は、まだ卸したてに見えるその服を汚さずに済ませていた。見事だ、と自画自賛できる行動だった。

たが、それでも意識的に行えた行動ではない。気がつけば動いていた、脊髓反射に近いソレだった。

しかし如何せん、買いたてのそれはやはり熱かった。

衛士は慌てて手を引っ込めようとする中で、それを制止する手が彼の手首を掴んでいた。

「早く処置しないと火傷が悪化しちゃうよ！」

彼女はポケットからハンカチを取り出すと、それを手に押し当てるようにして水分をさっぱりと拭き取る。そうしてからハンカチを離して手を見ると、充血するように紅くなる手は、火傷をしたというよりも湯に浸けて温めたかのような外観をしていた。

どうやら思っていた以上に手の皮膚が熱く、火傷には至らなかったらしい。

されどやはり熱いものに触れたせい、その表面は麻痺していて——手のひらをなぞる柔らかい舌が、不意に鈍くなる感覚の中で鋭利に感触を覚えさせていた。

「な、何してんだよ……っ!？」

「唾液には消化酵素っていうのがあってね、これだけでも消毒替わりになるんだよ。と言っても、飽くまで応急処置だし、エイジにはその必要もなさそうなんだけどね？ 一応だよ、一応」

彼女は言って、ねっとりとした感触を手の中に落とす。

手相に舌先を沿わすように舐め上げ、繊細に動いて麻痺する皮膚を刺激する。艶やかに動くその舌はまるで別の生き物のように滑らかに、かつ細かく動いて——そのくすぐったい妙な快感が、衛士の頭の芯を圧迫するように熱くさせていた。

緊張、興奮が入り混ざる本能たる反応。

眼球が眼窩から圧迫されるように苦しくなって、呼吸は何をしているわけでもないのに荒くなる。

衛士はそれをひた隠そうと息を押し殺すが、上目遣いにその表情を見た彼女は、意地悪そうに口角を釣り上げるように笑って、口を離した。

さらにナルミは手のひらにハンカチを押し付け、その上からさりげなく手を握る。指の股に指を挟み、そのしなやかな指が絡みついた。

「なに、してんだよ……」

ベンチに片膝をついて、彼女は衛士の胸に寄りかかるようにして耳を当てる。抱きつくほどに密着する彼女の身体が、コート越しに、それこそ火傷してしまいそうな程に熱い体温が伝わった。

激しく脈打つ要因となつてゐる鼓動は、それこそ今にでも破裂してしまいそうな程に心臓を弾けさせ、力強く繰り返している。ナルミのその行動は、それに一層の拍車を掛けた。

顔から湯気が出そうなほど暑くなるのを感じる。どうしようも無く恥ずかしいはずなのに、衛士は彼女を拒絶することが出来なかった。

「エイジの胸、すごいドキドキしてる」

「ナルミが、そんなひつついてるから……」

彼女は、衛士の手持ち無沙汰になつてゐるもう片方の手首を掴むと、おもむろにその手のひらを己の胸に押し当てた。

コートの上からの接触。分厚い生地が素肌を阻むが、強引に押し付けるためにそこにある確かな弾力を衛士は感じていた。ゴワゴワと、生地自体の感触しかない。柔らかさも然程感じない弾力であったが——ただそれだけで、衛士の理性は吹き飛びそうになつていた。こんな事は始めてだった。

この先は在るのか——あつて良いことなのか。

彼女は受け入れるのか。受け入れていいのか。果たして——。

考えは纏まらない。考えが考えとして形作る前に、こぼれ落ちてしまふ。

そんな衛士の脳みそは既に沸騰寸前だった。

「僕もこんなにドキドキしてるんだよ。こんな事してるけどね、すごい恥ずかしいんだ……でも、君なら、エイジなら、エイジだけにしか、こういうことはしないんだ。僕は、エイジが好きだから」

乾いた唇を、彼女は艶やかな舌使いで舐める。

押し上げるように身体をさらに起こす彼女の顔は、気がつくすぐ目の前にあった。

色っぽく濡れた唇が、その潤んだほのかの蒼みがかかった瞳が、朱に染まる頬が——その全てが、衛士を待っていた。

「もう、応えてくれるよね？」

眼下、顎下で声が、気配が迫る。

ナルミと衛士との距離は既にゼロであり、しがみつくように服を掴む彼女は依然と彼の答えを待っていた。

彼女のアプローチは夏の終わりから始まっていた。しかしそれは幾らかの冗談だと思って、半分に聞いていたのだ。そしてどちらにせよ、友人同士の関係を壊したくないと逃げていたからまともに聞かぬ理由でもあった。

そして何よりも、衛士は誰とも交際をしないと心に決めていたのだ。

相手が、たとえ自分が好意を寄せる者であろうとも。

——己に関われば不幸になる。この世界に住む屈強な戦士となる女性を前にしても、衛士はついそう考えてしまっていた。

下手に巻き込みたくはない。

彼女のように好意を振りまいてくれる事は嬉しいが、それを見るたびに心臓が締め付けられるように苦しくなる。

嫌な予感がよぎるのだ。

だからここで首を振れば、ここまでしてくれた彼女にどれほど恥になつてしまうのかとわかっていても——。

「すまん、ナルミ……」

殴られてもいい。

どれほどの罵詈雑言を頭から浴びせられても仕方がない。

思うと同時に彼女の熱が身体から引いていくのを感じて、衛士は女々しく目を瞑った。それは恐らく反射的に、ナルミの悲痛な、あるいは怒りに満ちる表情を見たくないと考えたからなのだろうか。

気配は、思ったよりも動かなかった。

否、正確には近づいてこなかった。

何が起きているのか、何故起こらないのか。それを確認するために、重く落としたその瞼を、薄く開ける。ただそれだけで胸に突き刺さるような罪悪感を感じていた。

「やっぱり外は寒いや。お弁当は、ウチで一緒に食べよう?」

バスケットをまとめて立ち上がった彼女は、先ほどとは打って変わった——そのいつも通りの笑顔で、そう声をかけて背を向けていた。

——女心は複雑だ。

その言葉を思い出すが、恐らく今回の事は関係ないように思えて仕方がなかった。

原因は自分だ。

考えながら、彼女に手渡した缶コーヒーが踏み潰されたようにひしゃげ辺りに内容物をこぼしているのを眺めながら、促されるままに衛士はその重い腰を上げた。

そこから少しばかり離れたマンションの一室が、ナルミ・リトヴヤクの自宅だった。

可愛らしい壁紙が一面に広がる、いかにも女の子らしい部屋——というものでは、決してなかった。

打ちっぱなしのコンクリートが、その特に家財のない部屋の殺風景さを増幅させる。

在るのは簡素な寝台と、その足元に置かれるパソコンデスク。そして鎮座するデスクトップパソコンだけ。十畳ほどある広さにはそれ以外が無く、また玄関からその居間兼寝室らしき空間に通じる通路に台所、そしてトイレ、浴場の扉があったから、恐らく部屋はこの一室だけなのだろう。

彼女はマフラーを外しコートを脱ぐと、それを綺麗に畳んで寝台の前に跪く。その土台部分である引き出しを引き抜いてそれらをし

まうと——長袖シャツにスカート姿という簡単な格好になる彼女は、そのまま寝台に座り込む。

ただその部屋の前で立ち尽くす衛士を手招きして、彼女は自身の隣を叩いて促した。

「驚いた？」

彼女は意地悪そうな笑みを浮かべる。

そんな言葉に、ひたすらにぎこちなく笑い返す衛士は、ナルミの隣に座ってから言葉を返した。

「ああ、お前にしては——」

「ナルミ、つて。ね？」

発作のように頬を赤らめて身体を寄せる。

——ここに誘った目的は、本題へと移行するためなのだろうか。衛士は未だ落ち着かぬ心臓を激しく弾ませながら、小刻みに震えるように頷いた。

その時に見た彼女の目は、酷く据わっていた。

「随分と、片付いてるな……」

「何も無いでしょ？ 僕の心と一緒に。でもね——君が、やっと来てくれたんだ。ね、エイジ？」

——彼女が勢い良く抱きついてくる、その刹那。

振り抜かれた白刃が衛士の腹部目掛けて振り抜かれた。

「これからも、ずっと……ッ?!」

予知をする衛士を前にして、それが無駄であることも忘れたように。

衛士は情け容赦なく手首をひねると、そのまま彼女がナイフを握る腕を押し戻し勢い良く柄尻で水月を撃ちぬく。するとナルミは短く悲鳴を上げてよろめき、彼はすかさず背後へ回りこんで両腕を拘束した。

「やだッ、痛いよエイジッ！ 離してッ、離してよオッ!!」

パン切り包丁が床に落ち、軽い金属音を鳴らす。

叫ぶように喚く彼女は、何の遠慮も無く全力で暴れて拘束を力で

解こうとする。全身を左右に捻って揺れるが、衛士が腕を引く、掴む力をより強めると、途端に暴れ馬のような猛々しい抵抗はすぐに止んだ。

その代わりに全身が脱力したようにベッドにもたれ掛かる。衛士はそんな彼女を支えながら——同仕様もなく、自分を責めることしか出来なかった。

自分が彼女のアプローチを無視したせいで焦り、そして先ほどの告白すらも無下にした。

ナルミが衛士を支えにしていたのは誰が見ても明らかだった。その関係が、単なる友人関係だとしても微笑ましいと、誰からも言われていた。誰一人として彼らの交際を否定するものはおらず、むしろ勧める人間が殆どであったのに、ただ一人それを拒絶したのが衛士本人だった。

相手の望むものすらもたたき落として、漠然と、確定したわけでもない不幸を視て諦める。

弱者が弱者なりに生きるための処世術を、彼はいつのまにか人間関係にて会得してしまっていた。

ただ力を求めているがために、すっかり鈍っていた人と人との繋がり——どうやら一方的、衛士に向かって来るものだけだったらしい。

彼はそれを、たった今認識した。

しかし加えて言えば、時衛士自身がそれらを蔑ろにしていたわけではない。

ひとえに、ただひとえに独りよがり過ぎただけなのだ。

ならば今、どうすればいい——考える間もなくすぐに判る答えは、受け止める事だった。

これほどまでに、己が精神を削りまでして好意を寄せてくれる彼女に。

そしてソレを受けて尚、心が揺らがぬほど純粹無垢な男というわけでもなかった。

思考すると同時に、気付かないふりをしていた、ひた隠していた気持ち胸の奥そこからじみ出ていくのがよく分かった。

「エイジ……ねえ、聞いてよ……。僕さ、君が居なきゃダメ、なんだ。エイジが誰かのモノになるなんて考えられないんだよ……ッ！」  
瞳はすぐさま涙で潤い、まばたきをすれば溢れて溢れる。

構わず、彼女は嘆くように喚き、続けた。

「エミリーだつて僕より早く君に出会つて、しかも教官だつた！  
今じゃ同僚……エミリーは不器用だし乙女だから自分でも気付かないけど、情がわかないわけがない！ ミシエルだつて腹の底で何考えてるか分かんないし、君と初めて出会つたんでしょ？ 君だつて、彼女の事が好きな筈なんだ！ だけど、僕は、エイジが居なきゃダメに——」

言葉を止めたのは、彼女の身体が人の体温に包まれたからだつた。背後からの抱擁。優しく、しかし隠し切れない急速な鼓動が背中越しに伝わる。

顔の脇から現れた衛士の顔は俯くが、彼女にはその行動が、何を意味しているかすぐに理解することが出来た筈なのに、頭は真っ白になって、身体は考えることを放棄した。

「エ、エイジ……？」

「オレは多分、この気持ちを忘れちまつてたんだ。あの時を境にしてオレは少し変わった。でも分かつたんだ。お前……ナルミのお陰でさ」

愛するという、人を好きになるという事がピンとこなかった。

しかしよく考えれば、その代わりに誰かを守りたいという気持ちが強くなっていたのだ。

ならばなぜ守りたいと考えるのか、深く掘り返せばすぐに判る。ソレが守りたい人だからだ。

なぜ守りたい人なのか？ 問いは生まれるが、同時に答えも生み出される。

好きだからだ。

——確かにミシエルは十分に魅力的な女性だ。ひとめぼれして、これまで引きずっていたのかも知れない。

されど、今、その気持が最も強いのは目の前の少女だった。

「こんな曖昧な言葉で悪いんだけど……その。オレ、ナルミの事が——好き、なんだと思う」

力強い脈拍が、脳みそを強く圧迫する。どうしようもなく緊張するこの全身は小刻みに震えて、どうしようもなく格好悪く思えて抑えようとしますが、結局はナルミをより強く抱きしめるだけになってしまった。

「は、はは……なんだよ、ソレ……エイジ、君は——人の心を、弄んでエツ！」

振り上げる頭は、衛士がいつもそうするように拘束する相手の顔を強打する。

そしてよろめいた隙に、力が弱まった瞬間を見極めてするりと拘束を抜け、そして振り向きざまにナルミは衛士を押し倒した。

両腕を両足で抑えこんで馬乗りになる。

見上げる彼女の顔は怒りに満ちていて、とても先ほどまでのナルミとは思えぬものに変わっていた。

喘ぐように涙を流すナルミはそのまま拳を振りかぶって、力一杯衛士の顔面に振り下ろした。

「人が、一生懸命頑張ったのに断って……なのに、自分がピンチになったら御機嫌伺いで告白？　いくらなんでも、僕を馬鹿にしすぎだよ、エイジ……」

鉄拳が頬を穿ち、口内を切り裂く。

さらなる拳は対面の頬を撃つと、その拳骨が皮膚を裂き、鮮血を滲ませた。

「僕がどんな想いで君の事を考えてるか知ってるの？　僕がどんな想いで君を見てるか知ってるの？　今日だって君が退院するの知ってて待ってたんだよ、それで、君はたった一週間でちょっと変わったみたいになっちゃって、でも実際はいつもどおりで、僕も、君も

緊張して——幸せだったんだ。でもね、フラれてもしょうがないって思ってた」

だって一緒に過ごした時間がそう長いわけではないから。

印象が強いわけでもないが、だからといって忘れられるというわけでも無い。

つまり恋人関係となるにはより濃厚な出来事がありにもなさすぎた。一方的な想いだけで好き同士になれば苦労はないのだから、もっと頑張ればいいだけだと思っていた。

「だから、せめて部屋で一緒にお弁当食べようと思ったのに君は——」お前” って……名前で呼んでくれなかった。それで、なんかもう、エイジが届かない場所に行ったみたいに思えちゃって、君が、もう僕の所に来てくれないって、考えちゃって」

だからカツとなつて、気がついたら衛士を殺そうとしていた。

彼がここで死んでしまえば、ずっと自分のもののままで居られるから。

誰かに取られるよりも遙かにマシに思えたから——。

ナルミはその全てを吐露し終えると、そのまま崩れ、衛士に覆いかぶさつた。

「エイジ……お願いだから、僕には正直な気持ちでいてよ……」

感情の爆発は終え、疲弊しきつたのか語尾は殆どかすれて聞こえなかった。

そうすると間もなく、衛士の顔のすぐ横に落ちたナルミの頭は、すぐに静かに繰り返す単調な吐息を始め——寝てしまったことを教えてくれた。

衛士はそのまま目を瞑り、片手で彼女の頭を優しく撫でる。

「ナルミ……ごめんな」

自分で自分を殴つてやりたいほどにダメ過ぎた。まるで狙つてやっているかのようなタイミングだ。コレでまた、もっと自分が嫌になるが——なんだか、一つすっきりしたような気もした。

ただ力を付けるだけでは強くなれない。

強いとは戦闘面で負けないことだけではないのだと、学ぶことも出来た。

——彼女が起きたらまた改めて「好き」って言おう。  
オレの気持ちはもう変わらない。

衛士は頷いて、胸の底から息を吐いて、意識を深淵へと突き落とした。

## 躊躇

——意識は、まるで身体が鉛に包まれて海に投げ込まれたかのよう  
に、深く落ちて浮かび上がらなかった。どれほどの刺激が外界から  
与えられようと、時衛士の覚醒は、精神内にて体感する時間  
にして数日分を要していた。

その間に見ていたものといえば、特に無いというのが正直なところ  
だ。

空虚で、何も無い闇。いつもどおりの孤独。時間の経過を感じな  
がらにして、それを気にすることも、暇だと、窮屈だと嘆くことな  
く一点を見つめている。されど、酷く寂しいだとか、強い喪失感だ  
とかは気が付けば失われていた。

あれほど感情の暴発、激流を真正面から受けたというのに、その  
心は穏やかなまでに静かであり、またどこか安堵したように落ち着  
いていた。何かを得たような充足感、さらに奇妙なまでの満足感さ  
えある。

起きたら、嫌われていたとしても今度はこっちからナルミの元へ  
歩み寄ろう。アレほどまでに崩れた信頼を取り戻すのは容易なもの  
ではなくとも、それをやってやろうという燃ゆる情熱がそこにはあ  
った。

それは償いという意味でもあるし、何よりも、それが彼女と己の  
為のように思えたからだった。

「……起きろ。起きろ、時衛士」  
頬を叩き覚醒を促す。

既に空間内の異臭には慣れたものの、彼女はいわゆる”男臭さ”  
には眉を顰めるしか無かった。

やがて眉間にシワを寄せる衛士に少しばかり安堵する一方で、視  
線が自然に少年の股間部へと泳ぐ。

屹立した一物は一糸まとわぬ姿でそそり立ち、そして”そういった行為”があつたことを教えるように彼の全身はしめ縄で雑な簀巻き状態で拘束されていた。

殺風景な一室。

そこに居るのは時衛士のみ。

コレを、彼にどう説明すればいいのか……考える中で、衛士はおよそまる一日ぶりに目を覚ました。

慌ててぎこちなく、不自然に寝台の前にある壁を注視する。熱くなる頬を、そして網膜に焼き付くその幻影シルエットを振り払うように頭を振って、衛士に対応した。

言葉にならぬまま呻くのは、全身を締め付けてなお鋭く食い込む縄によつて与えられる痛みもそうだし、起き抜けということもあるからだろうか。

彼女は肩から滑り落ちるタンクトップの肩紐を持ち上げながら腰のナイフカバーからナイフを抜き、縄を切断し始めた。

「んん……エミリア、さん……？」

——肌寒い。

まず始めに感じたのはソレであり、強い気配を覚えた衛士が視線を流せば、そこには鈍い照明に照らされる褐色の肌が見て取れた。

「ようやく起きたか。現在の時刻は午前八時。恐らく、一日ほど経過している筈だが」

声は下の方から聞こえてきた。

一度では、短時間では理解しきれぬその情報は、単に寝起きだからという理由だけではないはずだ。衝撃とも言える時間経過。ただ、仮眠とばかりに目を瞑っただけなのに、気が付けば丸一日に届く時間……。

「状況を見れば、ただ無作為に過ぎたわけではないという事は理解できるな？」

思考の先を、エミリアが口にする。

一本の縄のいくつかの箇所を切り裂くと、痛みはようやく軽減さ

れて窮屈な拘束が解けて肉体は解放される。そのおりに気づいたのが、自身が全裸でいるという事と、そう広くはない寝台に寝ているのが自分一人という事だけだった。

ナルミが居ない——それに、妙なほどに嫌な予感を覚えていた。

心臓が高鳴る。胸が、チリチリと焼けるように焦燥していた。

「オレは……、そ、そうだ！ エミリアさん、ナルミは一体どこに？」

適当に投げられる布団で衛士の局部を隠す彼女は、それから縄を床に捨ててナイフをしまう。彼の質問を受けながら背を見せたエミリアは、思った通り”何も知らない”という事実、短く息を吐いた。

「彼女は”副産物に近いもの”を肉体に取り込んだ上で、恐らく特異点へ進化する条件を満たした。現在では貴様がそうなったように高熱に侵され、病院にて絶対安静されている」

「ふ、副産物って……どうして、また」

「知っている筈だ。貴様の肉体はいわば副産物の上位互換、人という個体に副産物能力を併せたような存在。つまり、特異点とは副産物と変わりがない。彼女はその一部を体内に取り入れてしまった。最も……やはりと言うべきか」

彼女はそこで言うべきか否かと迷った言葉を、結局飲み込むことにした。

台詞を流し、されどそこまで説明すれば衛士にも理解することが出来た。

布団を剥いで寝台<sup>ベッド</sup>から飛び降りる。そうしてそれまで自身が寝ていた寝台を見れば、乱れたシーツの一部に、まるで垂らしたかのような数滴分の血痕があった。それが、それまでにあった”行為”の事実を示していた。

それは覆しようがなく、されどこれまで一切記憶はおろか意識すらなかった自身に、ただ驚愕し、また失望するしかなかった。

そして注意すべきは彼女の言葉。その続くであろう空白の部分。

衛士が勢いよく振り向くと、その胸元に勢い良く下着とジーンズを投げられた。彼はエミリアに背を向けせめて下半身だけは衣服に包むと、それはともかくと告げる。

「ナルミは、オレが入院していた病院に？」

「訊いてどうする？ トキ、貴様が行った所でどのみちリトヴァクは眠っている。仮に起きていたとしてもあの熱だ、意識がまともに保たれるわけでもなし、判別、認識とて曖昧な筈だ。それに……」

これで生き残れば、ナルミ・リトヴァクは晴れて特異点となる。しかし女性が特異点になったという前例は無く、現時点での彼女の状態に持つていくことはある程度適正と才能、精神的なタフさがあれば容易であつたが、それ以降が問題だった。

あの高熱。肉体を蝕む発熱は、細胞一つ一つを風潰しにかかるように殺していく。ソレに耐えられた女性は未だかつて存在しない。その多くが、早くて一日、長くて数日に及ぶソレの中で力尽きていくからだ。そしてまた、その苦痛の中で生きることを諦めてしまう事もあった。

これほどまでの苦しみを乗り越えて得た能力で何ができる。否、正確には、そんな能力を得た所で一体何がしたいのか。全てはそう考え、その力に固執する必要がないことに気づく。そうやって己を追い詰めていく彼女らは自害か、あるいは衰弱などで命を散らしていった。

ならばナルミは大丈夫なのか？

そうにエミリアが問うても、衛士は即答することが出来なかった。——気持ちは伝えた。しかし結果的には限りなく彼女を追い詰めてしまった。それ故に起きた行動によって現在に至るのだ。

それまでが拒絶だったがために、勘違いは解消されていない。その為の失望は恐らく想像を絶するものだ。だからこそナルミは……。

考えは堂々巡りに至って、衛士は深くため息を吐いた。

「仮にここで生き残れたとして、仮に後遺症も無く元の生活に戻れたとして、果たしてリトヴァクは戦場に戻るのか。精神的にも健

康なままであったとして……トキ、貴様のように戦場に、力に固執するわけでもない。だというのにわざわざ危険に身を投じる覚悟が、再び持てるだろうか。たださえ、今回のような行動を起こすほどに不安定だ」

「望まないならわざわざ向かわせなくたっていいでしょう」

「ならば生活ができないな。特異点としての研究に加担するだけだとしても、だ」

「オレが責任をとります。どっちにしろ、そうしなきゃいけないんだ」

好きな人は守らなければならない。

それはある種の使命感のようなものだった。

「ソレを望まないとしたら？」

「……っ、そうか、オレはまた独りよがり過ぎて……」

「貴様は、本当に日が増すごとに、いや、分刻みで腑抜けていく。少なくとも、ある起点——たえばこの機関を訪れた際だったり、特異点になった際——の前後の方が随分と信念があった」

しかし人と親密になればなるほど、何かを失えば失うほど行動は慎重になり、他人の顔色を伺うようになっていた。本質的には特に変わったことは無いとは言え、人付き合いは随分と下手糞になってしまっているのだ。

それが招いた事と言えば……。

ろくなことは、一切なかった。

「正直私はよく分からないがな。以前も言ったが、そういった事は全くの門外漢、さっぱりだ。しかし彼女、リトヴァクは貴様が嫌がったら、その雰囲気、顔色を伺い機微に感じ取って身を引いたか？」  
彼女はどれほど、心から鬱陶しそうに表情を歪めても付いて離れることはなかった。

それは、単に冗談で嫌ったフリをしているのだからと、衛士はそう認識していたのだが——それはどうやら甚だしい思い違いであるらしいことを、いま理解した。

「私は貴様のこれまでの選択を望まないとっておくが……。貴様  
は、一生をこの機関で終えるつもりなのか？　これまでの貴様がそ  
う思っていたとはわけではないだろうに、今は違う。周りに取り繕  
って必死に馴染もうとしている。確かに、自分の居場所を作らなけ  
れば生きて行けないだろうし、そうするとは言わない。だが、な  
……らしくないな、時衛士」

肩をすくめ、彼女は首を振った。

らしくない。それを受けて、衛士は自分がなんなのかよくわから  
なくなってしまう。

らしくないって何だろうか。今の自分が自分らしくないならば、  
今の自分は一体何なんだ？

オレは何をすべきで、何をどうするべきなのだろうか。

これ以上失って、そのせいで皆が離れていくのをただ呆然と見送  
るだけなのか。

ようやく作ったこの居場所で、せっかく自分を認めてくれた仲間  
たちの期待を裏切って、ならせめてと取り繕ってきたのに、その全  
てが水泡、水の泡になってしまったら――。

考えられない。そんな事態になってしまったら、もう自分がどう  
にかかってしまいそうだ。

もし彼女が示して理解したとおり、己の想いを尊重したらどうな  
るだろうか。

それが男らしい、自分らしい行動だったとして、それが全て良い  
方向に向かうとは……。

思考して、そして苦悩して、それらを包むもやもやとした不快感  
を覚えながらも、衛士はその中に一筋の光たる答えに触れた気がし  
た。

良い方向に向かうとは限らない。

それは当たり前のことだ。だからこそこんな状態にもなるし、だ  
からといって、これ以上悪化するとも限らない。

失敗は誰もするし、それを恐れていては前に進めない。

生きる上では基本的なことだし、何よりもこの日常は任務などではない。失敗してナンボなんて事も多々ある。

その事を、今まで忘れていたように思う。

己の思うとおりに動けばいい。もちろん場合にもよるが、それが自分が一番後悔しないやり方だ。

——エミリアは、濁っていた時衛士の瞳がいくらか澄んだのを見て、安心するように息を吐いた。

どうやら腐らずに済んだらしい。よかったと、胸をなで下ろす。

誰と交際しようが彼の勝手だし、誰を孕ませようとも——それが可能で、その上で責任をとれるのならば——勝手にすればいい。しかし、責任を取るといふ決意はして、実際にそれが出来たとしても、ウジウジと過去を振り返り後悔するような男には同僚、友人を渡すことはできないのだ。

認めない。

それが例え眼前の少年だとしてもだ。

ここまで言ってもまだ分からずに、前に進む方法さえも忘れて気を紛らわせるためか、あるいはそれが正しいと信じてがむしゃらに走るようだったら仕方なく鉄拳制裁しかないと思っていた。

今の彼は何よりも弱い。

技術的なものではなく、精神的なものだ。

一度乗り越え鍛えた刀剣のように頑強になったと思われた心は、気が付けばサビつき脆くなっている。その原因と云えば、まだ完全に正常になったとは言えない心で下手に特異点能力ちからを得て、この機関での立場が確立したからだと言えるだろう。

不安定な中で己の居場所が出来て、また自分にとって一番適切な技術を向上させることが出来た。それ故に、自身の強みが彼の中で生まれ、確かにそうだと納得すること、理解、認識した。

しかしそれを周囲がどう思うか、どうしようも無く不安に思う。だからこそ取り繕った。だからこそ、周囲に合わせた。まだ整っていない精神状態で得たその環境は、時衛士にとっての全てになっ

てしまったから。

それを失うことは、全てに於いて何よりも優先的に防がなければならぬと、無意識がその選択をしていた。

それによって得たのは協調性。

それによって失ったのは自我。信念。

残念な結果だと思う。

時衛士に至っては、他者との連携をとって戦闘することは確かに大切だろうが、その実力の殆どが個人活動の折りに発揮される。それ故に協調性などは無駄の極み。あつて良いことがあつても、それに寄り縋って中心に考えてしまえば本末転倒だ。

もつとも任務ではそういった事は無いのだが——機関の中でしか生きられず、従うしか無かった者たちが時衛士に惹かれた理由は、その機関など知らぬというあからさまな”不敵な態度”だ。

消されても、殺されても構わない。機関に生かされているのではなく、機関に来てやったのだというその姿勢が、どうにも印象的で斬新に見えたのだ。

今ではその為に、そうそう関連のない一般の戦闘員にも愛好者<sup>ファン</sup>が居るほどである。

最初から今までを見守ってきたエミリアが考えるそれらは、恐らく間違っていないだろう。だからこそ、周囲に失望させるよりも早く、眼を覚まさせることが重要になっていた。

ただ、彼女がここに来た理由は単に、重力子の反応が極端に強くなったから見てこいと命令されたからなのだが。

「ま、正直な話、ミシェルよりリトヴァクを選んだのには驚きだがな？」

「冗談っぽく言ってウインクをする——と、彼女はなぜウインクまでしたのかと自分に疑問を抱いた。

これではまるで背中を押しているようではないか。これではまるで、彼を思つてわざわざここに来たように思われてしまうのではないか。彼を大事に思っているように思われては、甚だ不服だ。元の調

子を取り戻すのならまだしも、調子に乗られてもイラつくだけなのだ。

「オレ、ナルミの所に行つてきます」

しかしそんな心配もよそに、彼は真つ直ぐな瞳でエミリアを見据えた。

まるで娘の父親に婚約の許可を貰いにきた男のような雰囲気醸し出す彼だった。

「行つてどうするつもりだ？」

「一人つてのはやっぱり不安なんですよ。仮にナルミがオレの事を見えなくても、分からなくても、オレはずっとナルミのそばにいる」  
「ふふん、結局それも独りよがりだな」

「ええ。ですけど、前よりもずっと前向きです」

「ああ、そうだな。それでいいんだ——」と、勘違いしてもらつては困るがな。私は貴様ではなく、純粹に同僚であり後輩でもあるリトヴァクを心配しているだけだからな」

「ははっ、エミリアさんでも心配つてするんですね」

「……やはり貴様は」

調子づくると面倒くさい。

彼女は今更それを口にするのも煩わしくなつて、肩をすくめて嘆息した。

最早言うべきことは何一つとしてないだろう。これもまた面倒だが、アイリンに報告してからまた一寝入りでもしよう。

彼女は踵を返して玄関へと向かう中で、背後から深く頭を下げる気配があつた。

「ありがとうございますっ!!」

——訓練過程は終わったというのに、もう同僚だというのに、この少年にはまだ教えることが腐るほど在る。

どうにもあれほど嫌だつた教官役というのが、今更になつて板についてきてしまったらしい。

エミリアは自然に口元に浮かんだ笑みを携え、振り返ることなく

手を上げ、彼に応じた。

## 交錯

「ナルミ・リトヴァクの病室はどこにあるんですかっ?!」

自動ドアの開門も待てずに、僅かに開いた隙間に両手を挿入して押し広げ、そして跳ぶように大股でまっすぐ受付までやってきた少年の開口一番は、まくし立てるようなソレだった。

彼女はこの少年が誰であるかがすぐに理解することが出来る。ソレは、つい先日機関からの達しがあつてさつさと退院していったからで、そういった人間は、五年近くここに務めているが初めてだったからその分印象強かった。

しかしその——時衛士が言う”ナルミ・リトヴァク”という名前には覚えがない。

「少々お待ち下さい」

彼女はそう言つて、念の為に脇に置いてあるモニターを操作し、キーボードで名前を打ち込む。が、仮にそれが一ヶ月前の患者の名だとしても、そうそう忘れる筈がないというのが彼女の特技のようなものだった。

ナルミ・リトヴァク……女性、だろうか。血相を変えている彼の様子を見れば、ついここ最近に入院しているようにも見えるが、もしそうならば尚更忘れるはずがない。

キーボードを叩いて、文字列を入力。ナルミというのは日本名のようにだが、リトヴァクはロシア名らしい。この少年は機関リリースの戦闘員だから、おそらく同僚かそこいらなのだろうが、これまででその情報が入ってきていないとなれば、別の病院という事になる。

受付嬢は映しだされる検索結果を見て、それから申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「申し訳ございません。ナルミ・リトヴァク様に関する情報は、この病院には存在しません」

「……どういう事です?」

眉をひそめる彼を見て、彼女はいささか簡潔に答えすぎたかと息を吐く。

見て判るほどに彼の気は立っている。そんな少年に、全ての情報を一度に与えても理解できるはずがなかった。

「ナルミ・リトヴァク様が入院した、また診察を受け付けた記録はございません」

それでも、やはり彼はそれを理解出来ないようだった。

正確には理解しようとしてない、という所だろうか。

「に、二十四時間以内に運び込まれた人、あるいは入院が決定した人は？」

言われて、また検索する。

が、それに至っても該当件数は完全なゼロだった。

「残念ながら……」

謝るでもなく、彼女は言った。

さすがにこの年なら感情に任せて怒鳴り散らすだろうか。彼女はそう不安に思ったが、予想外に衛士は表情をなくしたように、あるいは何か考え事に没頭したように黙りこみ、

「そうですか……ありがとうございます」

世話になったと礼を口にし、彼は病院を後にした。

男たちは、これほどまでに気が進まない仕事を引き受けたのはこれが初めてだった。

ストレッチャーで運ぶ少女は、熱にうなされ喘いでいる。全身をゆでダコみたいに真っ赤に染め上げ、その眼球すらも血走らせ充血する姿は見るだけで痛々しい。

彼は救急車を装うその車で、固定したストレッチャーに添うように座り込んで、大きく息を吐いていた。

ナルミ・リトヴァクという本名で病院に担ぎ込まれた彼女は、その時点でその全てを病院に任された。しかし実際にはリリスの研究機関がすぐ後ろに構えていて、病院である程度の検査や状態を診た

後、いくらか安静にさせ容態が少しばかり落ち着いた所で、その研究所に搬送する手筈になっていた。

現在は、その運搬の最中。

彼が知るかぎりでは、この成人すらしていなさそうなこの少女は、これから実験体にされるそうだ。

理由は”原因不明の病原体”を持っているからだそうで、だから彼らは皆、防護服を身に纏っていた。

「うう……エイジ……、苦しいよ……」

うわ言の中には、必ず『エイジ』という名前が入っている。

ソレは、彼でも知っている”適正者”の中でも有名な一人の名前だった。

それを理解してしまったからこそ、男はどうしようもなく彼女に、そして衛士に申し訳なく思ってしまう。

ナルミとて、好きでこのような状態になったわけではないはずだ。そして病院にだって無菌室があるし、研究設備だってある程度は潤っている。だからわざわざ、中心街に近いそこへ連れて行く必要など彼には考えられなかった。

ラボに連れていかれれば恐らく、時衛士でも面会をすることはできないだろう。そもそも生きて、あるいはまともな身体で帰れるかすら不明である。

さらにナルミがうわ言に名前を呼ぶということは、つまりそういう関係のはずだ。何も知らぬ衛士の裏で、そういった事が横行してしまう現状がなんだか悲しくなってきた、衛士が駆けつけこの車を止めてくれる事を祈る程だった――。

車が止まる。慣性のお陰で身体は進行方向にやや傾いてから、落ち着いた。

運転席、そして助手席が開いて仲間が降りてくる。適性も何もない、単なる戦闘員の仲間だ。

男はその最中に、ストレッチャーの骨組みに巻き付くマジックテープ式のベルトを外し、手早くその拘束を解いていく。勿論ナルミ

の方は落ちないように側面と側面からそのベルトを伸ばし、拘束するだけでそう窮屈ではない。

両開きのバックドアを開けて、二人は協力してストレッチャーを引っ張り、折りたたんだ脚を伸ばす。傾けて地に下ろすと、その高さは大体腰よりやや上辺りになった。

男は援助し、頭側をあまり高くしないように注意しながら送っていく。そうして難なくストレッチャーを降ろし終え、彼は簡単な後片付けにとりかかるが――その最中で、仲間たちのどよめきを聞いた。

「何だ、この右腕……」

「ヤバ、なんか、これヤバイぞ！」

男が振り向く。

そうして見た光景は――。

「う、あ……なん、で……？」

ストレッチャーの上には、誰も居らず。

黒く変色する棒状の何かが、仲間の腹を貫いていた。

純白の防護服が裂けて全身に血を散らし、そして口元を覆うマスクが紅く染まる。

彼の背中からは鋭い鉤爪を持つ”腕のような何か”が生えていて、腹からの一撃が貫通している事を知らせた。それは到底助かるような怪我などではなく、即死レベルの一閃にも思えた。

「うあああ、わああああッ！！」

残る一人が後退して、小石に躓く。

尻餅を付いて見上げる少女の姿は、とても先ほどまで見ていたものとは思えなかった。

金髪の綺麗な髪が漆黒のように黒く染まり上がっている。刺青のように、額から右眼を通って黒い一閃が走り、右肩を通って右腕へ。服を着ているからソレ以上はわからないが、それが右腕のその漆黒化に繋がっていることは容易に想像できた。

男は必死になって抜けた腰を引きずるようにナルミから距離を取

る。彼女はそんな男を見下ろしながら、己の右腕が貫いている死体を、その彼の背中へと放り投げた。

「あああ——」

鮮血で軌跡を描き、死体となってしまった男は放物線を描いて仲間の背に衝突。覆いかぶさって叩き潰される男に外傷はないものの、それが想像を絶するストレスとなって、脳内の処理、そして理性が程度を超えてしまったらしい。

そんな情け無い悲鳴を上げて、彼は気を失って倒れてしまった。

「エイジ……、助けて……くる、くるしいよ……ッ！」

血に濡れた手で頭を抱え、彼女はよたよたと不確かな足取りで自身が殺した男の元へと歩き出す。車内に残る一人は四つん這いになって、ただ呆然とその光景を見守ることしか出来なかったが、その光景さえも、直視できるものではなかった。

吐き気を催す。いや、既に床が薄い黄土色に汚れてすっぱい臭いが立ち込めている時点で、自覚も無しに既に嘔吐していたようだった。

「ぐうっ……、ごめん、ごめんね……僕が、僕が悪いんだよ……」

その華奢でありながらも一人の男の命を刈り取った右手で、腹の風穴に触れる。

刹那、彼女の両目は一瞬にして大きな目の、その白目が黒く侵される。そして風穴付近の肉が蠢いたかと思うと、途端に血液はそこから溢れ出して——それはまるで粘土細工でも作るかのように、傷口は瞬く間にふさがっていった。

彼女はそうしながら、空を仰ぐ男のマスクを外してやる。

すると彼は咳き込むように激しく吐血しながら、ヒューヒューと風切り音のように喉を鳴らして呼吸を繰り返した。ナルミは手のひらを胸に当て、力強い鼓動を感じた所で立ち上がった。

「ごめんね、エイジ……僕は、ホントは嬉しかったんだよ……」

徐々に意識が確かに覚醒していくように、一言が長くなり、息継ぎの回数が少なくなる。

ナルミはそうして男を”蘇らせた”後、また先ほど変わらぬ不確かな足取りで、暫く彼らに後ろ姿を見せながら、血だらけの恰好のままで道を戻っていった。

——男が啞然とする中で、車両を横付けする建物の扉が勢い良く開かれた。

中から現れたのは、真つ赤な髪と純白の白衣を持つ女性だった。

「……やっぱりね」

アイリンは顎に手をやって頷くと、まるでそれまでの全てを監視モニタしていたように微笑んだ。

「上位互換を一人派遣して頂戴。誰でもいいわ。九時。一現在、ナルミ・リトヴァクが戦闘員を”殺害”し逃亡。これを”逃走”と判断し、処刑を許可するから」

ポケットから通信端末を取り出した彼女は、当たり前のようにそう告げて、また建物の中へと引ッ込んでいった。

機関が何かを隠している。

人通りが極端に少ない往来を歩きながらそう考える。

ナルミが病院の記録に残っていない事を考えれば、それが正当な結論だった。

ならば彼女は一体どこに”運ばれた”のか。今はそこが問題となっている。

エミリアに訊こうと思ったが、彼女は知っていたならばあの時点で伝えている筈だ。そんな器用な意地悪が出来る女性でないことを彼は知っていた。

しかし、病院に一切の手がかりが無いとなれば、まさかのノーヒントでの出発だ。

こちらは急いでいるというのに。

「おい、そのアンタも！」

いよいよ無数の選択肢の中の一つを決さなければならないと、恐らくたった一つしか選べぬそれを決めかねるその中で、罵声じみた

叫び声が衛士を呼んだ。

若い男は焦ったような声で衛士の元まで走り寄ってくる。そうしてから、強引に彼の腕を掴んで引つ張った。

「ちょ、何すんだよ！」

「アンタ聞いてないのか？　ここらへんで”処刑が執行”されるって、今公共放送で言ってたんだぞ！　外に出てれば巻き込まれるから、建物の中に居ろって！」

「公共放送……？」

「ラジオとかテレビだよ。処刑の時はいつも強制的に割り込んで放送するんだ。だから携帯を義務付けられてる」

男はそう言つて親切に近くの、恐らく彼の自宅の中へと招こうとする。が、衛士はその腕を勢い良く振り払って、男から距離を置いた。

なるほど。

いかにも機関リリスがやりそうな事だ。正確には上層部……いや、アイリンが考えそうなものだが。

女性の特異点はその誕生率がゼロと言つて良いほどに限りなく低い。だが、現在発熱——つまり肉体に重力子操作能力、時間干渉能力が付加されている現状ならば、特異点としての能力ちからを持つていてもおかしいことではない。

そして実際に処刑人が動いているのだとすれば、能力は確認されたと考えて間違いないはずだ。

どうせ死ぬのならば実験に使つてやろうではないか、という魂胆。ただでさえ貴重な特異点だ。いくら朦朧もろろとしていてマトモな戦闘ができないにしても、その通常人間が持ち得ない特異能力の発現、その原因や作動過程などを確認する事は決して無駄にはならない。だからこそ、たとえ一方的になろうとも戦闘に於ける情報サンプルが少しでも多く得られれば、ソレでいい。

彼女ならばそう考えているだろう。

恐らく同じ立場なら、何の感慨もなくそう出来るのならばそれが

最善だと、衛士自身思うことが出来る。そして思いついたのだろうと、衛士は否定しきれぬままに考えた。

「親切にありがとう。だけどオレは、コイツの当事者だ」

ぽかんと、訳のわからぬように口を開け衛士を見つめる男に背を向け、衛士は走りだした。

奇跡と言ったべきだった。

衛士の進行方向に研究所があつて、ナルミ・リトヴァクはそこから歩いてきた。そういった関係で、両者は無自覚に、またそう知るよしもなく互いに向かつて進んでいた。だからこそ、時衛士は誰かが接触するよりも早く、その誰もいない路上で、鮮血に濡れる彼女の姿を発見することが出来ていた。

「ナルミっ！！」

右眼が、溶けてしまう程に熱くなる。

蒼く輝く鬼火が、全身の毛が逆立つ気配が、彼女が特異点である、あるいはソレに限りなく近い存在であることを教えた。

腕を無造作に垂らし、また綺麗な黄金色だった髪が黒く染まつている。俯き加減で顔がよくわからないのに、時衛士はそれでも彼女がナルミだと認識できていた。

寒さなんて、その頃になると殆ど気にならなくなっていた。全身からの汗が湯気を立たせ、また吐息が白く染まるが、衛士は構わず彼女の元へと走って近づいていく。

その中で、彼女の顔が勢い良く持ち上がった。

「えいじ……？」

瞳孔しかないその眼球が、真っ直ぐに衛士を見つめる。

拙い舌がそれでも彼の名を紡ぎ、ナルミはおぼつかぬ足取りで、裸足のまま歩いていた。

——言いたい事がたくさんある。謝りたいことがたくさんある。伝えたい事がたくさんある。

だが何よりも、衛士は彼女を力一杯抱きしめたかった。

だから諸手を広げ、速度を落として歩く速さでナルミに切迫した。  
「エイジ……！」

瞳が収縮して一点に集中していく。白目が周囲に戻っていった、また艶のある黒髪は、その色を茶に、そして徐々に金に戻していった。その姿はまるで、失われていた正気を取り戻すようなものだった――が。

「邪魔だ衛士イツ！」

それを引く裂く影は、頭上から舞い降りた。

衛士は跳び込むようにしてナルミを抱き、その場から回避する。

そうするとつい先ほどまで彼女が立っていた場所には人影が低い体勢で着地していて、鈍く低い衝撃で地面を振動させる。そうして間もなく立ち上がり、衛士はそれに応じてナルミの体勢を整えさせながら、庇うように立ちはだかった。

「衛士、そいつは”逃走者”だ。事実、処刑の命令が下っているんだぜ？」

「”イワイ” あんた、見りやわかるだろ？ ナルミが、この調子でどういった画策が持てる？ どんな素晴らしい作戦でここから抜け出せるってんだ。そんな命令ナシだ、無し。勘違いだ。そんな事で処刑なんてあつていいわけがない」

イワイ・ヒデオはロングコートを羽織る恰好でそこに立っていた。袖口から見える手、その耐時スーツは既にフィルムを張り詰めたかのような薄さにまでなっている。彼の實力は、単なる肉体強化から考えても数段上がっている筈だった。

だからこそ、先ほどの飛び降りだ。彼自身、それに自信を持っているという事だ。

ナルミは衛士の背中にしがみつき、小刻みに震えていた。ジャケツト越しにもその高熱が伝わり、乱れる呼吸が、抑えようのない鼓動が彼女の不安を表すようだった。衛士は身体を捻って手を回すと、そのままやさしく彼女の頭を撫でてやり、そうしてまた向き直った。「絶対安静だ。これ以上ナルミに無理をさせたら、取り返しがつか

なくなる」

それだけは絶対に許されない。

下手をすればもう二度と会えなくなるところだったのだ。掴んだこの奇跡を決して逃がすことは出来無い。そんな事は、考えられなかった。

「いいや、どの道手遅れかも知れねーがな」

「そんなの、特異点でも無いお前に判るわけがねえだろうがっ！」

衛士の叫びに、イワイが反応する。

薄ら笑いを携えていた彼の表情に、仄かな怒りの炎が灯ったような気がした。

「……ああ、そうだな。こんな副産物ものを着てるクセして特異点にすらなれねー男だよ。俺は……」

だがな。

そう、だが、だ。

イワイは心の中で呟いた。

ここでお前と戦えば何かが得られる。

もしかしたらが、あるかも知れない。

希望だ。あの時、あの任務の終了時に起こらなかった展開のツケが、今になって巡り巡ってやってきたということなのだろうか。

考えれば、妙なまでにソレに対して真実味が強まるのを感じた。

「変わったのは、何もお前だけじゃないんだ」

だが俺は何も変われなかった。

正義感ぶって、時衛士をこの世界に巻き込まないと契約した。しかしそれが騙されて、だけど今までソレを誰に口にするともなく黙っていた。別段、わざわざ言いふらすことではなかったが、思い返せばそれが自分の中の唯一の誇りなのかも知れなかった。

徐々に追いつめられていく少年の背を見つめながら、それでも自分が居なければこの少年はここに存在することが出来なかったのだと嘯うそいた。

おこがましいにも程がある。

情け無いにも程があつた。

「なら、お前が戦ってくれよ……なあ？」

気がつけば口は勝手にそう告げる。

身体を射に構えて、右腕を上げ拳を顔に引き寄せる。垂らし気味の左腕をやや曲げて、拳を腹に当てるように位置させる。

なんの武術でも拳法でもない、ただのやりやすい構え。これを見せるのは初めてだった。

「なんで、そんなの意味ないじゃねえかよっ?!」

——そうだ。意味が無い。

衛士はそう口では否定するが、腹の底ではこれでいいのではないかと思えていた。

今回の処刑執行はそもそも特異点の戦闘についての情報収集だ。

それに於いて彼女が実験体<sup>サンプル</sup>として採用されただけに過ぎず、ナルミがそれに参加できないのならは同様に特異点である衛士が戦えば全てが丸く済む。

そしてそれと同じくして、彼の一言で衛士の魂がくすぶつたのもまた事実だ。

彼女を守らなければならない。全てに於いてナルミを優先しなければならぬ。そう考えていたはずなのに、イワイのただ一言、その誘い文句で、血湧き、肉が踊る。

そういえばこの機関に来て、彼と力競べをしたことはなかった。

アレが事実ではなく時衛士の勘違いだったとはいえ、本気で彼を殺そうと思っていた時期がある。恨んでいたことがある。だからこそ、少し前まで気まづかった。

だが今は違う。

彼は戦友だ。

今なら、ただひたすらに素直に、スコール・マンティアの時のように拳を交えることが出来るかも知れない。

もしそう出来たならば、この関係はもっと深くなるだろう。

何も、戦うことが全てマイナスに向かうわけではないのだ。

衛士の台詞に一切返さぬイワイを見据えてから目をつむり、それから大きく息を吐いてから、衛士はナルミに振り返った。

「ごめん、ナルミ。少し離れててくれ」

「……君は、こんな時までかい……？」

苦しそくに息を吐く。顔は真っ赤を通り越して真っ青に変異してしまっているが、鼓動は、呼吸は先程よりも遙かに落ち着き、熱は高くとも、もしかしたら治るのではないかと希望が持てるほど順調だった。

衛士が申し訳なさそうに頷くと、ナルミは力なく、添えるような風にその胸を叩いた。

「僕もたいがいだけど、君も、無理しないでね」

「ああ、約束する。これが終わったら一緒に帰ろう。ナルミの弁当もまだ残ってるしな」

「うん。ふふ、残さないでね？」

「クラブサンドは好物だからな」

微笑みながら、またナルミの頭を優しく叩く。

彼女はそれに嬉しげに頷きながら、踵を返し、適当なビルを背にした。

振り返れば、依然変わらぬ体勢のイワイが居る。瞳は闘気に満ちているが、その表情はどこか晴れない。なにか考え事、心配事でもあるかのような顔だった。

「準備はいいか、時衛士」

「祝英雄、あんたは？」

「いつでも来い」

「なら、そうしようか」

戦闘は、果たして開始した。

## 空虚

エミリアは帰宅途中で、アップグレード上位互換に所属する前、一般的な適正者時代の友人と出会って適当にお茶をすることになった。

話すのは近況報告と、世間話。どうやら他の友人らもいつもと変わらぬ様子で怪我もなく元気らしいとの話を聴いて安心し、うれしくなるのは何もおかしい話ではなかった。また、たまにはこうやって気楽に話すのもいいだろうと、どこか暖かな気持ちにさえる。

「あ、そういえばエミリーさあ”カレシ”とか居るの？」

「なっ……、お、お生憎ね。そういった者は居ないんだ」

不意に妙な話題への転換に彼女は思わず口ごもり、動揺を隠せぬままそう応えた。頬が熱くなって、それを誤魔化すように腕を組むが、もう手遅れだろう。

相手の女性は何かを察したようにいやらしい笑みを浮かべ、唇を突き出してストローを咥えて、もう寒い時期だというのにアイスコーヒーを飲み下していく。その飲みっぷりたるや、身体が丈夫であるのがいくらかの自慢であるエミリアさえも腹具合が心配になってきそうな勢이었다。

「へえ、じゃあ気になる人は？」

気になる人……言われて、まるで我に返ったかのようにエミリアは考えてしまう。

身近な男性は多いとは決して言えない状況だ。その中で、ふと頭に浮かんだのはやはり時衛士の顔だった。

果たして気になるのだろうか。

しかし彼にとってエミリアは未だ教官せんせいであり、彼女とて衛士を異性として捉えてはいない。ただ、その魅力やら、惹かれる理由にはまだ理解があつた。

時衛士は弱い。だからこそまずそこに親近感が湧く。さらに、弱いけれど必死に頑張る姿には胸が打たれさえする。そして彼は結局、

あらゆる戦闘で勝ちを収めてきた。そこであらゆる人間に、弱者でもやりようによっては勝てるという希望を与えてくれていた。

果てしなく弱いというわけではないが、だからといって眼を見張るほどに強いというわけではない。今の評価が過剰すぎるという程度だが、それでもその期待に答えようといきがる姿に、その背を支えて、守ってやりたい気持ちが生まれるのは確かだった。

また気さくな所にとっつきやすさが生まれ、任務では無感情に人を殺せるくせして、妙に純粋な所がある。また意外にも努力家で、トレーニングを欠かさないのも彼の良いところだ。

そこまで考えて、エミリアは思わず頭を抱えてしまった。

——こいつは重傷だ。

まるつきり”惚れている”症状ではないか。

彼のことを良く知ってしまったている。それは気になるからだ。何が気になるかと言えば、上記の通り。彼の魅力だ。

しかし時衛士はナルミに愛を告白した模様。

つまり残念であり酷く悲しく虚しいことに、無自覚の内に恋心を抱いて失恋してしまっていたらしい。

まったく、”らしくない”のはどっちだろうか。悲しいにも程がある。しかも相手が、三つも下の少年だ。

自分の将来が、少しだけ不安になった。

彼女は自分のジンジャーエールを一気に飲み干して、大きく息を吐いた。

「今は居ない」

「じゃあ前はいたんだ？」

「かもしれないな。私自身、よく分からないが」

グラスを持ち上げ、中の氷の一つを口の中にほうり投げる。ガリゴリと音を立てながらそれを咀嚼し、気を紛らわせた。

「それじゃ誰か紹介しよっか？ エミリアは”まだ”だから、優しい人がいいよねー」

「遠慮しておく。今は他の男に興味はない」

敢えてそういう事で、未練たらたらなのを覚えておく。理由は無い。ただ強いて挙げるならば――まだうら若き一人の乙女として、一人前の希望や嫉妬くらい、持っても良いと思ったただけだ。

「なんだ、諦めた恋ってわけじゃないのね。一途なのってエミリアらしいよね。ちよつと羨ましいくらい」

「ふふん。私はそんなのじゃ無いよ。ただ、どうやら独占欲が強いらしくてね」

独白してて自分が情けなくなる。

これまで築いたイメージが、ボロボロとその表面のメッキが剥がれていくのを自分でもわかるくらいだった。

「でも、あたしは良かったと思ってるよ。エミリーも人って感じがして」

「それはどういう意味？」

エミリアが言うと、彼女はほがらかな笑みを浮かべて誤魔化した。席を引いて立ち上がる友人に倣って席を立ち、氷が溶けて溜まった水を飲み下して、やがてそのテーブルからも彼女らは離れて店を後にした。

「じゃね、エミリー」

「ああ、また」

友人と離れ、また帰路へと付く。

騒がしくも楽しかった時間を過ぎて一人になると訪れる、ちよつとだけ胸に痛い孤独。精神的に満たされないからなのだろうが、こんな時に恋人でも居れば少しは違ったのだろう。

今となっては、少し遅かったのかも知れない。

そんな事を考えていると、ポケットの中の通信端末が小刻にに震える。着信を知らせるバイブだ。

取り出し、応答する。耳に当てるからやや置いて、発されるノイズ混じりの声は女性のものだった。

『エミリア、あたし……アイリンだけれど。時間大丈夫かしら？』

「なんだ。珍しいことに随分と通信状態が悪いみたいだが……」

『いや、ね。こちら一帯の重力……からね。今から来れる？ 大丈夫……送るから』

重力異常が起こっているらしく、それによる何らかの影響がこのノイズに、聞こえにくすぎる通信らしい。

「何が目的だ？」

『貴方にとつてもいい見世物があるの』

嫌な予感がする。

いや、殆ど確定的な予感だ。

衛士の脱走からあまりにも時間が経たなすぎているし、タイミン  
グ的にも恐らく合致している。

彼に関わっていない事で、アイリンがわざわざ連絡を寄越すこと  
自体がおかしいのだ。

「ああ、分かった。転送してくれ」

『了解。三〇秒まって頂戴』

両者が距離を詰めてから、その動きは完全に静止した。

動かないわけではなく、動けない。実力が近い者同士の戦闘は短  
時間で雌雄を決するために、下手に動くことはできない。そして先  
陣を切ることは恐らく殆ど、その初手以降を後手に回される可能性  
が高いために、動けずにいた。

人は居ない。故に静寂が支配するその通りで、二人の男はそれぞ  
れ構え、向かい合う。

——緊張に胸が張り裂けそうになる。

相手は経験豊富な男だ。たとえ予知を持っていたとしてもその先  
を見抜かれていたと考えると間違いはないはずだ。衛士とて、以前に  
忠告を受けていても己の攻撃手段の、さらに裏を持ちあわせること  
には未だ慣れない。

未来の情報を利用しての行動から、さらに相手の動き、思考をい  
くつか予想して攻撃、その反応をまたいくつか分岐するように考え、  
その場面に対応できる手段をその数だけ用意する……考えれば頭の

痛くなる流れだが、考えながらの戦闘などは致命的だ。

殆どその流れに乗って、染み付いた感覚で動くしか無い。

一対一は己の主張が力ギとなる。攻撃、テンポ、流れ、それに飲まれれば相手のなすがままにされるし、それを跳ね返し逆に飲み込めば自分の思い通りに戦闘の展開を運ぶことが出来る。相手が能力者であれば、さらにそれが重要となるソレだったが、今回に限ってはイワイに飲まれなければいい。

とはいえ、今回では特にソレが難しいのだろうが。

大きく息を吐いて、両腕、両足への力の流動を綺麗に振り分け、臨戦態勢へ。

いよいよ衛士の左目がするどくなった所で、イワイは告げた。

「先手は貰ってやるよ」

やや前屈体勢。空気抵抗を出来る限り低くする恰好であり――彼のその圧倒的な速度故に、意味のあるソレだった。

大地を弾く。その摩擦によって火花が散る程だった。

駆けるというよりは、跳躍。翔ける彼の肉体は、まるで巨大な投擲機によって前方へ吹き飛ばされたかのような勢いを持っていた。

息を吐く時間は勿論、構えを作りステップを踏む間すら許されずに、イワイは肉薄した。

突き出る拳撃。弾丸の如き速度を持って飛来する。それを寸で避ける衛士は、それでもその拳骨、堅い骨で頬の薄皮一枚を削られてしまった。

切り裂かれて一閃、鮮血が過る。吹き出すというよりは滲み出る血を振りまきながら衛士は拳を作り、応対する。

大きく全面に飛び出したイワイの身体は無防備だ。それ故に振り抜いたローキックは、思惑通りに彼の太ももを打撃する。が、効かない。効くわけがない。衛士はソレを放った直後に思い出した。

衛士が脚を戻す。しかしそれを遙かに上回る速度が、素早く彼の足首を掴んでいた。

「おらあっ！」

掛け声のような叫びと共に、衛士は頭上よりも遙かに高い空へと打ち上げられた。

「うわっ……！」

——イワイの耐時スーツは斬撃に限りなく弱い。その切先で撫でるだけで裂けてしまうほどの脆弱性を誇る、極めてヤワなソレだ。が、その代わりにというのだろうか、打撃などの衝撃耐性は異常なまでの強度を見せていた。

瓦礫の下敷きになっても生き延びられたのはその性能と、また強制的に引き上げられる自己治癒能力によって傷が随時回復していったお陰だった。

狙うならばむき出しの部分。つまりは顔だ。

今となつては、少しかり遅かった発見だったが。

妙な浮遊感に、決して動くことのない定位置落ち着いていた内臓が浮き上がって騒がしくなる。食道から全てが裏返って口から吐き出されてしまうのではないかという程の不快感が全身を占めたが、その中で見たのは、地上から力強く跳び上がってくるイワイの姿。圧倒的な速度だ。まるで背中にロケットエンジンでも積んでいるかのような勢いだった。

空気を切り裂く音が全てをかき消す。

内臓が浮かび上がる不愉快さは、既に消え失せていた。

動けない。空中での対処なんて考えたこともなかった。だが彼のような身体能力を持つていれば、こんな戦闘も当たり前なのだろう。南アフリカで頭上から落ちてきた彼を思い出して、そう思った。振りかぶる拳は、そのモーションが肉眼で捉えられていても避けられはしない。それ故に受けた強打は腹に喰らい付き、衛士の身体はくの字にへし折れた。

頭の中でミルクが零れた。そう思えるほど、思考は真っ白に染まり上がっていた。

苦痛が、激痛が血液に乗って全身に伝播する。でんぱ 圧迫される内臓は、今朝か夕べに何かを食べていれば確実にその中身を口からぶちまけ

ていたことだろう。

肉体は拳から離れて僅かに上空へ弾む。が、その後を追うように伸びた筋肉質な腕が、衛士の衣服を掴んで道連れに。イワイの体ごと、彼はそのまま地面へと向かい始めていた。

空気摩擦が全身を翳る。流れ星の気持ち少し分かった気がした。いつそのことならこのまま燃え尽きたほうがマシなのかも知れない。抵抗など出来るはずがない。

甘く見すぎていた。油断しすぎていた。何の準備もせずに、ただ漠然と”大丈夫だろう”なんて馬鹿げた考えだ。イカれ野郎としか思えない。

「くおらあつ！」

腹を掴んでいた手が背に回る。どうやら、そのままダンクシュートよろしく大地に叩きつけるつもりらしい。

為す術もなく、急加速。衛士の肉体はそのコンクリートで塗り固められた、壁なのか地面なのか判然としないソレを眼前に捉え——次の瞬間には、衛士から全てが奪われていた。

激痛。先ほどの打撃なんて比べものにならない痛みだ。

視界が巡りにめぐる。自分が上を向いているのか下を向いているのか、眼を開けているのか閉じているかさえも判然としない。現在、浮かび上がっているのか地面に落ち着いているのかすわ判らない状態は、酷く気持ち悪かった。

わけがわからない——全ては調子にのってローキックを打ったことから始まった。

ローキックなんてのは生まれて始めての体験だったから、これで大丈夫なのかと不安にもなった。でも、それが当たった瞬間は、始めてにしては随分とクリティカルだと自画自賛できる出来だった。

しかし効くか効かないかは、出来とは全く別の話だった。

意識が明転する。

「……い、おいっ！」

目の前から声が聞こえてきた。

首が苦しい。図太い腕が胸ぐらを掴み上げていた。脚が浮かんでいる。持ちあげられているのか？

「冗談じゃねーぜ、こんな所で終いなんてよ!？」

どうやらイワイが胸ぐらを掴み上げて持ち上げているらしい。感じたことが、そのまま現実を起こっていることだった事实に、なんだ可笑しくなってきた。笑えはしないが。

全身が痛い、が。腕を動かせばまだ動く。感覚もある。指先も、しっかりと失われることなくついていた。脚も同様だ。怪我はしているだろうが、骨は一切折れていない。

眼を開けると、イワイは突き飛ばすように衛士を離れた。彼はそのまま着地し、よたよたと千鳥足で距離を取る。それから大きく息を吸い込もうとすると、液体が気管に入ってしまったのか、激しく咳き込んだ。

びしゃりと、口から吐き出された液体が音を立てて地面を濡らす。見事に赤いそれは血液だ。どうやら吐血をしてしまったらしい。

衛士はソレから短い呼吸をいくらか繰り返して、ようやく視界が鮮明になってきた所で、本当によく分かった。

——そもそもオレは自分から仕掛けるタイプでも、しのぎを削るタイプでもない。

いわゆるヒットアンドアウェイ。相手の隙や油断を狙いそこを突くとか、相手の力を利用したカウンターだ。実力や経験が明らかに劣る衛士が生み出し身につけたのは、ソレだった。

純粋な打撃型ストライカーを前に、同じく威力で勝負しようなんてのは、その時点で勝敗が決している。自殺行為だ。

だが、ソレに今気づけた事には、命拾いしたのかも知れない。この状況から持ち直せるかは甚だ不安だが。

「準備運動は済んだか？ あいにく、オレはスロースターターでね」  
精一杯の強がり吐くと、イワイはにやりと笑った。

ボサボサの、丸刈りをそのまま伸ばしたかのような頭を撫でるようにして、彼はまた構える。

それにまたぞつとしたが、背筋を凍らせられたが、怖いものは怖いのだが――対処法はもう浮かんでいる。大丈夫だ。

言い聞かせて、衛士は叫んだ。

「怖気付いたか？ さっさと来いよっ！！」

仕掛けたのはやはりイワイだった。

また肉薄。弾丸よろしく、ノーモーションの拳が迫る。イワイが衛士の直前で停止したのは、その全ての勢いを左拳のジャブに乗せるためであり、それ故にその威力は重すぎる左ストレート級の破壊力を誇ることになる。

が、やはり避けた。それが出来たのは予知能力のお陰であり、予知しても避けられなければこの左目の存在価値は一切なかった。出来なかったら決り取る。そう脅したのが、効いたのならば良かった。

「ふっ……！！」

今度は紙一重ではない。数十枚分の距離。瞬間的に分厚い電話帳タウンページ程の移動を可能にし、それ故に衛士の振り上がる拳に最適なタイミングを与えてみせた。

イワイの振り抜いた腕の外側に衛士は逃げている。つまり拳を当てるには、その腕が確実に邪魔に思えたのだが、かえってその腕が障害となるのはイワイ自身だ。

衛士はうまい具合に腕の下を通して拳を彼の顎の、触れるか否かの、それこそ紙一重の位置へ置いておく。すれば、彼は勢いを完全に殺すことは出来ずに前進する。

イワイはそうして、自発的に衛士の拳で顎を打撃した。

「……っ！」

拳がイカれるかと思うほどの衝撃。だがその分、彼の顎にも十分痛手な強打が見舞われたはずだ。

だが一撃で済むとは誰も思っていない。

イワイは僅かに怯んでいた。ただ、いつもなら通り過ぎると同時に腰を捻って振り向く所を、一、二歩進んでから動きを止めようと

していただけの変化だったが、攻撃は確実に、僅かながらも効いていたことを知らせてくれる。

十分だった。

——仕留める。

イワイが両手を伸ばして振り向きざまに振り回すのを”視て”、衛士は深く沈むようにして切迫。振り向く最中の眼下に潜み、後ろを向いた瞬間に太もものバネを解き放つ。同時に急浮上させる衛士の右拳が、再びイワイの顎を捉え、撃ちぬく。

顎を穿たれ空を仰ぐイワイは、されど動く。

そのまま腕を振り回して、行動する余地を持たぬ衛士の顔面を、その屈強で頑強な肘で強打。よろけた所をダメ押しで膝蹴りを食らわせた。

衛士はそのまま、ひしゃげるように身体を捻り回転するようにして地面に倒れる。だが、よろめくイワイも十分なほど、その視界を濁らせていた。

いい闘いだ。

筋力、速度、威力、経験——それらが圧倒的に違うながらも、第三者は実力が近いと感ずることが出来るだろう。

押しつ押されつの戦いは、さすがに見ごたえがある。本当に先に何があるか、どちらが勝つか判らない……。そう思うだろう。第三者ならば。

「なんだ……こりゃ」

衛士は口から垂れる鮮血を手の甲で拭いながら、倒れた身体をようやく四つん這いに持ち上げた。

全然楽しくない。

充実感が全くない。

拳を振るうたびに、イワイを殴るたびに、なんでオレはこんなことをしているのだろうかという虚しさが襲いかかった。違う。思っていたのと、全然違う。

「へ、ははは！　そうこなくっちゃなーっ！」

だというのに、イワイは上機嫌だ。

戦いを楽しんでいる——ようには見えない。殺気立っている。人を殺す目をしている。

アレは狩りの眼だ。

殺しを楽しんでいる男の眼だった。

何かに追い込まれている者の、どうしようも無い状況に棚ボタ的に得た希望に必死に縋っている様な姿は、妙に痛々しく感じた。

何をどう考えても、イワイの思考には繋がらない。通じない。だが、今はどうして彼がそれほどまで闘いを——否、自分との闘いを求めているのかを知りたかった。

「待てよ、イワイ……こんなの、違うだろ。こんなの殺し合いじゃねえかよ……っ！」

「殺し合い……？ そりゃそうだろ、今は処刑の最中だ。生かすわけねーだろ」

「……は？」

聞き間違い、ならどれほど良かったらうか。

イワイのあの『ならお前が戦ってくれよ』という台詞は、そのまま『お前が代わりに殺されてくれよ』という意味だった。衝撃すぎる事実だ。

冗談ではない。

こんな重要すぎる事態での情報の食い違いは、明らかなまでに致命的すぎた。

彼自身、正気の沙汰ではない。言葉で止めることは無理だ。が、衛士は”闘う”ことが条件だったからこそ引き受けたのだ。

殺し合いで、あの祝英雄を相手に勝利を収められる未来など、視える筈もなかった。

「何勝手に暴走してんだよ、アンタ」

「暴走？ 手前様、こちらら従順に任務を執行してるだけだぜ？」

「だから、その任務が間違いだってんだよ！ ナルミが逃走できる筈がねえ！ リリスの思い違いなんだよ！ 今からだって、ゼクト

かアイリンさんに抗議すれば……」

「無駄だぜ、手前様よ」

呆れたように、イワイは首筋を掻いた。

「この地下空間を統べる機関が避難勧告までしといて、間違いでし  
たなんて言えるか？ 組織つてのは、そういうちよつとのボロから  
壊れてくんた。今は殺したって事実がなきゃ、騒動は収まらねえ」  
「なら、殺したって嘘の報告入れればいいだろ。リリースだって、間  
違いだってわかってんだろ？」

「だから言っただろ？ 間違いでしたなんて言えるわけがねえ。  
例外なく、俺らにもな」

「なら任務を放棄すりゃいい。それが、失敗したって——」  
それを軽口で言っただつもりは毛頭なかった。だが、考えなしに思  
いついたままに口にした意見だという事は確かだった。

イワイが力強く大地を鳴らす。地団駄のようなその一撃は、およ  
そ今まで浴びた攻撃よりも遙かに威力が高いものだったのだろう。  
イワイの右足の下を中心に、大地には広く蜘蛛の巣状に亀裂が入っ  
ていた。

逆鱗に触れてしまった感触が、これほどまでに確かなのはこれが  
始めてだった。

「俺には後がねーんだよ。手前様。だから俺は、衛士、あるいはそ  
の後ろのナルミを殺さなきゃならねえ……」

いや、殺したとしても”なれなかつたら”終わりだ。処分される。  
恐らく、今のように逃走者扱いされて。

だったらこの際、そんな”もしかしたら”に賭けずに彼らを逃し  
てやるべきではないか？ どうせ殺し損、死に損になる二人だ。こ  
んな事で死ぬべきでないのは、よく分かってる。見て判るほど、彼  
らはようやく幸せになれたところなのだから。

だが、そう思う心とは相反して、言葉は、眼は、肉体は殺気立っ  
ていた。

どうせなら衛士に全力で拒否されて、逃げて欲しかった。

だが何かを察してしまったのだろう。この律儀な少年は、この想いに応えるべく――構えてしまった。馬鹿だ。底抜けにいいやつだ。弱いくせにいきがって、だからこそ、コイツを守ろうと思った。

だけど――ああ、もう終わりだ。

もうどちらかが壊れるまで終わらない。

「なら……いい。やろうぜ、最後まで。アンタの気が済むまで！」

「そうだな……最期まで」

ならばせめて、希望に縋ってもいいよな？

俺だって死にたくない。

ただ一人の、この少年と変わらぬ人間なのだから。

## 離脱

研究施設内の一室にモニター室がある。外のどこにカメラがあるかはわからないが、その研究所からやや離れた路上で二人の男が血相を変えて戦闘をしている映像が、あらゆる角度からをあらゆるモニターに映しだされていた。

その場には、およそエミリアが知るかぎりの上位<sup>アップグレード</sup>互換と、そして顔も見たことのない男女が数名並んでいた。恐らくそんな彼らも、同業者なのだろう。顔も知らない仲間というのは、こういった仕事柄割合に多いのだ。

「揃ったわね」

横一列に並ぶ十数名の後ろで、アイリンが呟くように言った。されど、誰もソレに反応しない。というよりは、反応できないようだった。ただ皆が、目の前の二十以上はあるモニターのリアルタイムの映像に食いついていた。

ただ、エミリアだけは列の端から背後へと下がり、連中の後ろからモニターを覗きながらアイリンの傍らに移動する。薄暗い室内故に、そう目立った行動ではなかった。

「どういう事なんだ？ これは」

押し殺す声は、せめて周囲に配慮したものである。

天井に配置されるスピーカーからは、けたたましい打撃音や呻きなどが断続的に響いていた。

凄惨な光景。なぜこんな事が始まったのか、成り行きさえもわからぬ本気の殺し合いは、武器がその肉体一つであるためにさっさと終わってくれそうにはなかった。

見てて眼を逸らしたくなるのは、その両者をよく知っているからなのだろうか。

「イワイ・ヒデオは最後のチャンスを貰ったのよ。あの”耐時スーツ”は肉体に癒着するから、副産物を体内に取り込んだも同然。あ

とは何らかの条件を満たすか、きつかけだけで特異点への道が開かれる……。その相手に、彼は時衛士を選んだ。それだけの話よ」

「最後つて……なんでそんな事に？」

「そうねえ、簡潔に説明すれば――」

衛士がまだこの機関に招かれる前の、試練の最後に彼が選ばれた理由。その前後の出来事を彼女は簡単に説明してやる。

するとエミリアは驚いたように目を見開くが、そのうち何か自分の中で合点がいったのか、すぐに落ち着きを戻す。その視線は依然と、画面から離れずに。

「正直な所、あたしには闘いなんて良く分からないんだけど、トキくんが圧されてるわね。どっちが勝つと思う？」

「……奴は最後の最後に狙うタイプだ。勝負はわからないが……そう長くはない。おそらく五分以内に決着がつくはずだ」

エミリアは珍しい顔合わせの連中の背中を流しみてから、恐らく彼らもそれを理解しているだろうと思った。だが、それを理解して尚、何を考えているのだろうかと思議に思う。

本当にただの珍しいモノを見に来たのか。特異点の戦闘に興味があつてきたのか。それとも何か、もっと別の――。

最後に壁際の端で背中を丸め、両手を祈るように握るミシエルを見て、エミリアは静かに首を振った。

無粋な事は良い。ただ祈ることしかできないのならば、勝って欲しい方に祈るだけだ。

イワイには悪いが……。

彼女は深く息を吸い込んだ。

「どんな結果になると思う？」

尋ねると、アイリンは肩をすくめるようにして首を振った。

「分からないし、予測なんて出来たものじゃない。トキくんがそれをさせてくれないわ……だけれど、少なくともこれだけで何かが大きく変わる。その予感確かに感じるわ」

肉薄、強打。

避ける暇すらなく受ける拳は、重ねた両腕のちょうど交差点を打撃する。

身体は吹き飛び僅かに大地から浮き上がる。踏ん張ることすら出来ぬまま、さらに音速級の第二撃が到達した。

——食いしばる。奥歯がじんと痛みを發した。

イワイの振りかぶる拳は、肉体と同時に切迫。衛士の股に入り踏み込むその右足は、その全ての力、勢いを流動的に右腕に付加させた。

そして抜かれる突きの一閃。

着弾。

凄まじい衝撃が衛士を多角から襲いかかるようだった。

衛士はさらに宙を搔つ切って吹き飛ばされる。意識が僅か一秒も時間を数える事も許さぬ速さで、衛士の肉体は勢い良く壁に激突した。

後頭部を強打し、意識が飛ぶ。胸を押し潰されたように、肺の中の空気が強制的に排出され、吸う事もままらなくなる。喉が詰まる。気管の内壁同士がくつつき、癒着してしまったかのような苦しさ。

鈍い、肉の中から全身に響く気分の悪い骨折音は最早聞きなれたものだった。

今度はどこが折れたんだ？ 腕か？ 足か？ アバラは困る。破片が内臓にでも突き刺されば、それこそ行動に差支えがある。苦しみが四肢の骨折よりも遙かに上だ。

慣性が失せ、衛士の両足は地につく。反射的に咳き込めば、口からは大量の鮮血が、まるでバケツをひっくり返したかのように吐き出された。

——あれから顔面へのガードが強固になった上、反撃の余地を許さぬ変幻自在の拳が一拳に押し寄せる。オンパレードだ。その攻撃がどれほどの速度でどの位置に放たれるか視えていても、避けるこ

とができない。衛士には、その身体能力が欠落していた。

「これっぽっちかアツ？ ああッ！？」

「んなワケ、ねーだろうがよっ！」

しかしまだ、動けないわけではない。

力をいければ拳は作れる。腕を上げようと思えば、簡単に構えは作れる。苦しいが、歩くことも、走ることにもまだ出来る。

そう考えればまだ十分すぎた。

痛いだの苦しいだの一切は切り捨て。最優先事項は目の前の男。それが、この男が望むものに応えようと最後に衛士が決めたものだった。

喘ぐように息を吸い込む。

視界は未だ鮮明。イワイが再び肉薄するのを見て、衛士の身体はついに感覚が染み込んでいた。

息を吸う。その最中に、滑るように横へ移動。その直後に、イワイの肉体は衛士が張り付いていた壁へと到達した。

振りかぶる事なく脇を締め拳を振り抜く。壁を抑えこむように停止したイワイのその横つ面に、衛士の鉄拳がようやく炸裂した。

そうして、跳ね返される反動を利用して後退。イワイの身体は、衛士の全体重を掛けても決して揺らぐことなく止まっている。

——高速が招く弱点は、細かな機動が不可能な所にある。

ひたすらに、一途なまでに一直線。その威圧や読めぬ速度に圧倒されてなぶられ続けた衛士でも、さすがに数十回と食らえばいくらかは理解できていた。最も、その速さに慣れたのがちょうど今ということなのだが。

だからこうして、僅かに横に移動すればイワイの攻撃は完結しない。

しかし、それが素晴らしいアイデアには到底思えなかった。

誰もが思いつく手段だ。それを、これまでであまりにも攻撃を受けすぎたのが、逆に恥すべき事であるほどに。

しかし——。

肉体がそのまま兵器級の武器となりうるイワイを相手に、これまでに銃やナイフを媒介にして人の隙を突いて戦ってきた衛士が裸一貫で闘いを挑むなんてのは、少しばかり、否、ひどく不公平である。衛士はそう毒づきたかった。ここまで耐えたのだから愚痴の一つや二つくらいは許して欲しいものだと思った。

だが、衛士にはソレが出来無い。

右眼の眼帯を撫でるようにして、それを示した。

「イワイがどれほど強かろうとも、衛士には”未来が視える”という随分なハンデが設けられている。むしろ、これで不公平などとは吐けぬ程に有利な状況なのは衛士の方だった。

衛士は嘆息し、イワイの姿を捉えながら背後へと全力疾走。その最中に眼帯に手をかけ、そいつを剥ぎ取った。

途端に、衛士の右眼には両者を見下ろす視界が広がる。

これで移動は、少しばかり有利になったというところだった。

背を向け、これより全力疾走。頭上からイワイを監視すれば、彼はちょうど衛士へと向きを替えたところだった。

衛士は同時に横に飛ぶ。情けない回避行動。恰好もつかぬが、格好いいだとかどうだと言える状況ではないし、今はコレでよかった。

腹で大地を叩く。自発的に鳩尾を衝撃で穿ち気分が悪くなるが、それでもマシな方だった。

その直後、衛士がつい先ほどまで走っていた軌道の軌跡を描くようにイワイが走り去っていく。その後に吹き荒ぶ旋風が、暴風となって襲いかかった。

たったそれだけでも、体力が尽きかける。呼吸が乱れ、肩が激しく上下した。

視界を注視。イワイは勢い良く通りの奥へと過ぎていく中で、大地を削るようにブレーキを駆ける。まるでドリフト走行のようだった。時速に換算すれば、およそ二〇〇キロ程は出ているのだろう。

「くそ……！」

弱音が零れる。

コレばかりは、本当にどうしようもなく自然に落ちてしまった。ふがない。コレほどまでに実力に差があるとは——いや、わかつては居たが。認めたくはなかった。

今しつかりと思い知らされる中で、ちよつとした絶望が心のなかに広がってしまうのを、衛士は抑えることができない。困った、ちよつと勝てないのだ。

それが頭の隅であっても思ってしまったえば実現してしまう。人が想像できることに不可能はないから。

衛士は立ち上がりざまに大きく息を吐いた。空気を胸いっぱい吸い込めば水月辺りに鋭い痛みが挿し込むが、この際気にしてなんていられない。

勝てないならば負けなければいい。最低で相打ち、引き分けだ。

捨て身を覚悟できれば後はなんてことはない。

ちよつとだけやる気が出てきた。

本当に、死ぬ間際まで粘る。もう五体満足で生き残るなんて甘い考えは切り捨てよう。

こんな所での闘いは無意味に思えたが、それでも今は真剣な殺し合いだ。手を抜く、生き残る願望なんてのは邪魔なだけ。かえってイワイに失礼になる。これで負けて、彼が勝って、本当にイワイが満足するとは思えない。

衛士は胸いっぱい息を吸い込んだ。

やってやろう。

衛士が視る視界では、すでにイワイはこちらに向かって走ってきていた。

そしてある一定の距離まで縮まった所で両足を揃えて大地を蹴り、跳躍。幅跳びの要領だ。

——衛士の右眼が、瞬く間に蒼い輝きを増幅させた。膨張だ。その反応は、スコール・マンティアと対峙した時さながらの勢いを誇っている。

まさかナルミの状態がいよいよ危険になっているのか。あるいは彼女が覚醒したのだろうか。そう思って頭上から彼女を見下ろすが、ナルミは至っていつも通り、弱々しいながらも身を抱くようにしながら離れた位置で戦闘を観戦していた。

ならば、一体？

衛士が半歩横に逸れる中で、イワイとの距離は既に数メートルにまで縮まっていた。

輝きが増す。

イワイの突き出した右腕が、コートを引き裂きトゲトゲしく変異していた。

勢い良く通過するイワイと、その通り過ぎざまに目が合う。視線が交差する。その瞬間に、衛士は理解した。

この反応の原因は、確実にイワイだということに。

「衛士イイッ！！」

大地に爪を立てて、火花を散らしブレーキをかける。鋭い鉤爪となるその腕は、まず肘から図太い刃状の何かを突出させていた。爪は伸び鋭利に細まる。まるで戦闘体形に変身したかのような姿は、恐らく肉体自体が変化しているのではなく、そのスーツを変形させているのだろう。

それまで肉体強化のみを可能としていたスーツの変容はすなわち、その能力を自由にしている、つまり操作を可能としている事を教えていた。

冗談だろうと、呟きたかった。零れそうになるため息をそのままに零したかった。

だがそれは当然不可能だろう。

衛士は飲み込み、対峙する。イワイは既に体勢を整えて走り出していた。

上に着る革のジャケットを脱ぎ、衛士はそのまま襲いかかってくるイワイに放り投げて横っ飛び。そのまま横転して立ち直り、そのジャケットに爪を立て切り裂けずに食い込ませる姿を頭上から視な

がら、衛士は走りだした。

これでおよそ数秒の時間稼ぎは可能となる。

だが時間を稼いで一体どうになる？ 死期を僅かに伸ばしただけに過ぎないではないか。

そうだ。ただ無闇に死ぬのを延期しているだけだ。

イワイはペース配分が馬鹿になってきている。いくら何でも、アレほど動き回ればいくらかスタミナは奪えたはずだ。後は狙うだけ。後はその致命的な隙、ミスを狡猾に伺うだけだった。

——考える間に背後から迫る。

凶暴な悪魔が鋭い爪を立てて肉薄。衛士の背に、その柔らかなそでで筋肉質な背筋に全てを切り裂く鉤爪を突き刺す。その瞬間に、衛士の姿は不意に眼前から消え失せた。

そして足元に、巨大な障害物が生まれ、転倒。イワイはそのままもつれるようにして地面に叩きつけられ、全身を削るように地面に擦り付けながら数メートルの距離を滑走していった。

横腹を力一杯蹴り飛ばされた衛士は、ついに五本目の肋骨をへし折られてしまった。喉の奥から鮮血が溢れる。意識が肉体から離れようとしている。だというのに彼の身体は何かに取り憑かれるように、無意識に立ち上がった。

イワイが跪き、臍気で緩慢な動作で起き上がる。倒れてしまった今、彼は自分自身の疲弊に少しは気づけたのだろう。

少年は精一杯走り、そして飛ぶ。直後に抱きつくのは、その悪魔の広い背中だった。

「が、てめえ様ッ！」

勢いに押されてイワイは前のめりになる。

「うるせえっ！」

その勢いを利用して右腕で男の首を包み、左腕で右腕を固定。素早くイワイの首を締め付ける恰好は、存外に易く成功した。

「はなせッ！」

が、彼は構わず力任せに暴れだした。両肩を、上半身を激しく左

右に揺さぶる。その激しさたるや、まるで何かのアトラクションにシートベルト無しで乗り込んだような感覚だった。

視界がぐるぐると回る。身体が物理法則を無視するように浮かび上がり、そして横に吹き飛ばされそうにもなった。だがそれと同時に、衛士の腕は如実にイワイの首に締めより続ける。

細く柔いビニール紐でも持ち続ければより強固になって喰い込むようなイメージである。が、

「うらアッ！」

一度イワイは静止する。ようやく意識を手放したかと安堵する瞬間、彼は腰を上げ、立ち上がり様に仰け反るようにして反動を付けた。

刹那、彼の上半身は綺麗なまでに振り下ろされる。凄まじい勢いのお辞儀は、それ故におぶさっていた衛士を、そのまま前方にはじき飛ばしていた。

滑空。その後にその素肌を大地で抉られ滑っていく。血が滲んだガーゼのような後を残す路上はその痕を視るだけでも痛ましかったが、肉を剥き出しにした衛士の右の半身はより凄惨だった。

「ぐ……うっ！」

燃えるように熱い。焼かれるように痛い。額から流れ出る鮮血が目に入ったのか、それとも眼球の毛細血管がちぎれたのか、視界が真っ赤に染まり上がる。確かで鮮明なのは、頭上からの遠隔視だけとなっていて――。

「え、エイジッ！」

飛び出してきた影に、少年は思わず息を飲んだ。

涙を流して心配し、駆けつけてくれたのはナルミだ。心が打たれるほどに嬉しい行動。この上なく、自分が幸せに感じる瞬間。

だというのに、目の前には行動を開始しおよそ数秒後に完結させる予定のイワイが、再びこれまでと同様に翔けていた。

違うといえば、やはりその異形の右腕なのだろうか。

――マジかよ。

思わずそう言いたくなった。

衛士は気が付けばナルミの肩を全体重を掛けて踏ん張り、押して突き飛ばしていた。それ故によるけイワイの軌道から外れた彼女は、その代わりとばかりに衛士をその場に置き去りにした。

踏み込んだからもう動けない。

イワイの姿は、既にその禍々しい右腕の照準を胸に当てて迫っていた。

ならせめて、カウンターだ。

衛士はみがまえ、拳を振り上げる。

その瞬間、イワイの作った貫手は見事なまでに衛士の胸元に突き刺さり、そしてまるで粘土細工を貫くように容易く、簡単過ぎるまでに貫いていた。鋭い爪先が背中から突き出した。真っ赤に、燃えるように紅く熱い鮮血が、胸から、背から、溢れるように吹き出した。

心臓が破裂したのだろう。また、折れてしまっていた肋骨が侵入を簡単にしてしまったのだろう。

衛士はまるで他人事に考えて、吐き気を催した。

構わない。吐いちまえ。そう思って口内に溜めた鉄の味をする液体を吐き出した。

イワイの顔面にソレが掛かる。彼は不快そうにも思わず、ただ無表情に衛士の目を見据えていた。

彼の瞳に反射する衛士の右眼の鬼火は、その勢いを薄れさせている。今にも消えてしまいそうな、風前の灯だった。

「なあ、イワイ」

声が出る。しゃがれた、喉が潰れたような声だったが、それは確かな言葉となった。

なぜ声が出せたのかは甚だ不思議だ。もしかしたら、頭の中で思っているだけで口からは出ていないのかも知れない。

それでも別に構わなかった。

「これで終いだ。いいだろ、もうお前は」

「……！ 衛士、てめえ様、まさか……」

虚ろな瞳を見て、イワイは我に返ったように声を出した。  
奇妙な台詞だ。まさか、総てを見透かしていたかのような言葉に、  
思わずぎよつとする。

「お前が悩んでたんだ。大層な事だとは思ったが…… オレには、よ  
く分からなかった。すまん、ごめん」

意識が暗転する。

保っていた全てが、その瞬間に崩れ落ちた。

——衛士が死んだ。

それを目の当たりにして、自分がこれまでにした愚かなことを自  
覚した。

自分の為に人が死ぬ。自分を友人だと言ってくれた、そして自分  
が”守ろう”と思っていた男が。

「衛士、てめえ様……」

呼吸が乱れる。

なぜ俺はこんな事をしているんだ。なんでこんな事になっている  
んだ。なんで、どうして、俺は、俺は——。

心臓が高鳴る。それこそ破裂してしまいそうな程に——今自分が、  
そうしてしまったように。

殺すことに、これほどまでの重圧が、罪悪感があるとは思わなか  
った。

まさか死ぬとは思わなかった、なんて言いわけにはならないだろ  
う。

イワイは衛士の肩を掴み、右腕を引きぬく。返しとなるような無  
数の刃が、その際に衛士の腸をズスタに切り裂いた。

彼が己の体重を支えていた脚は、その膝を勝手に折って倒れてい  
く。ベチャリと、水を含んだ雑巾を落としたような音がした。

少女の甲高い叫び声が、再び支配し始める静寂をかき消した。

「イワイ、貴様……！」

そこから少し進んだ所にある研究施設からまず飛び出てきたのは、エミリアだった。

その手には拳銃を、腰にはナイフを携える。だが、今の彼女には到底負ける気などはしなかった。

「遅かったじゃねえか。いや、”早かった”のか？」

いつもの軽口。右腕は、もういつも通りに戻っていた。

彼女は衛士の死体を一瞥し、されどそこから視線を外せない。顔を真赤にして、衛士の死体を抱いて泣き崩れるナルミを見て胸を打たれているのか、純粹に衛士の死を認められないのか。

仲間の死を幾度も見てきた彼女だから、まさか後者はありえないだろうとイワイは思った。

「助けたかったなら助けられたはずだろう。見殺しにしたお前に俺を責める義理はない」

声をかければ、彼女らしくなく肩を弾ませるようにして顔を上げ、またイワイをにらむ。恨みが籠るその視線を、彼には拒絶する理由がなかった。

「何も言えないなら口を出すな」

「——いいえ。大いに出させてもらうわ。イワイ・ヒデオ」

脇から大声を出して周囲の総てを持つていく声は、アイリンその人だ。

特に誰を連れてくるわけでもなく、特にこれといった武装も無く、ひたすらに無防備で、それでも酷く余裕ぶった表情で彼女はエミリアの隣にいた。アイリンは衛士の死体をちらりと見るなり、どこか哀れそうな顔をして、またイワイへと向き直る。

「まず言うておくけれど、ナルミ・リトビヤクの本質的な能力は”成長”よ。時間加速と言えば、特異点の性質にあうのかしら？ 彼女の能力がまたうまい具合に発動すれば時衛士は蘇生する……ま、五分五分つてところだけど。肉体の鮮度から見て一、二時間が限界かしら。それ以降の蘇生は確実に失敗するってことね」

最も、その能力は未熟で完全ではない。衛士のように確立され、

そこから成長段階に至る以前の状態だから、これ以上能力を使えば彼女の肉体が朽ちていくだろう。死ぬというわけではないが、能力故に限りなく高かった生存確率が低くなり、相対的に死の可能性が高くなるというものだ。

もしかすれば、半永久的な眠りにつくことがあるかも知れない。が、衛士が助かるとなればナルミとて望むべくだろう。

「……だから放置していたのか？ 結局、こうなることを見越して」「貴方からの質問は受け付けない。こっちは口を出すと言ってるの。一方的にね」

得意げに指を鳴らし、イワイを指さす。

どこか安堵したような、それでも油断ならぬ状況に複雑な顔をするエミリアを見て、アイリンはどこか申し訳なさそうにまゆ尻を下げた。が、彼女はその調子でも構わず続ける。

「貴方は限りなく特異点に近づけた。そのスーツの性質も、完全に把握し操作出来るほどまでにね。だけど特異点にはなれなかった……残念ながらね」

「俺を処分するのか」

「それは早計だし、今を見るには惜しい選択ね。愚かなほど。だから期限を一年間伸ばす事にした」

「……一年間？」

頷く。彼女は屈み、いつまでも泣きじゃくるナルミの頭を撫でながら返した。

「その間、機関リリスから追放し、そして機関の人間との接触を禁止する。接触した場合はその時点で回収、その貴重な素体サンプルを実験体サンブルに使用する」

「その一年間で、特異点になれと？」

「出来るでしょう？ 死ぬ気になれば、人はなんでも出来るのよ」

「そ、そんなの……」

「トキくんを見てたのに、それを否定するつもり？」

彼女の言葉に、イワイは思わず口ごもった。

そうだ。時衛士は何でも出来た。弱いくせにそう思わせる雰囲気があった。

「——そいつを、生かしておくつもり？」

怖氣が走るような声は不意に放たれる。

誰もがその声の主に注視すれば、ナルミは衛士の胸に顔を埋めながらつぶやいていた。

「エイジを殺したそいつを殺さないで誰を殺すの？ 生かすの？

殺すんでしょ？ なら私が殺すから。お願い、誰か、誰もとめないでね」

血に塗れる少女は、そういつて衛士の唇に貪るように吸い付いた。よだれが零れ、口の端から垂れて流れる。それは紅く染まり、見るだけで血の味が鼻腔を突き刺すようだったが、既に血のおいでで充滿しているせいで鼻は麻痺していた。

「エイジ、はっ……んんっ、お願い、勇気、ちょうだい！」

舌を動かし、衛士の舌を舐め尽くす。おぞましいカリバニズムにも見えたが、それが彼女なりの愛情というわけなのだろう。

イワイは背筋を凍らせながら、それを理解した。

その中でアイリンは、衛士の胸を指してエミリアに注視を促す。彼女は嫌々ながらもそこに視線を流せば——止まっていた血流は再び始まり、胸の血溜まりの中で何かが蠢くのを見た。

肉が、増幅する細胞が傷を塞いでいく。気色の悪い光景は、そのせいで当分は肉食を敬遠しなければなくなりそうだったが、同時に目頭が熱くなる。言葉にならぬ情動が胸の中で渦巻いた。

エミリアは目頭を抑えてうつむき、アイリンは肩をすくめた。相変わらず熱い接吻を交わすナルミを彼女は一瞥して、それからまたイワイへと視線を戻した。

「”暴走”したバツでもあるし、トキくん的气持ちをよく受け止める必要もある。貴方だってまだ、精神的に未熟なんだし」

「……だがな、俺は特異点になればこの組織には戻らない」

「好きにすればいいわ。本来トキくんが”そう”なる予定だっただ

けだし」

「なら伝えておいてくれ。衛士、俺とお前は確かに友達だった、とそれと、強くなったら会いに来い」

「ふふ、貴方、自分の立場を忘れてるでしょう？」

「知らねえな」

彼は言って、いつもの調子で嘯いた。

祝英雄の地上への転送は、それからおよそ五分後に開始される事となる。

## また日常

空間はあまりにも静かだった。

白を基調とする病室。置かれるは寝台、その脇には一定の感覚で同期音を鳴らす心電図。点滴棒から伸びる透明のチューブはそのまゝ、寝台に横たわる少年の腕に繋がっていた。

彼の生存を示すのはその心電図だけであり、他には脳波を測る機器だとかは装着されていない。あくまで眠り続ける彼への負担を最低限にするためだった。

妙な緊張感が肌を刺す。それでもイラつく事もなく、ただ素直に意外そうに、されどいつかはこうなるだろうと思っていた事に対する”やはり”といった心情が重なって特に感慨深くもなく見つめられたのは、一概に禁煙に成功しているからというわけでもないだろう。

ハーガймはその巨きな図体おおをパイプ椅子に押し込んで、脚を組んでいた。啞えるのは禁煙パイプであり、手持ち無沙汰になるその片手は膝の上に、そしてもう片方はオールバックの白髪頭を撫でていた。

「この小僧は……」

ふと漏らす言葉は、既に幾度ともなく繰り返した台詞である。

「『さつさと老人を労れ』って……何回言ったかわかってますか？」

彼が前にする寝台の向こう側に立つ巨漢の男ヤコブは、背後の窓によりかかってそう返す。手に握るスニッカーズが溶けかかっているのが心配だが、なによりもその窓が破れて外に落ちてしまわぬかが一番の心配事だった。

「十から先は覚えてない」

「五回しか言っていないのに」

鈍い箆ったような声は、それでも以前よりは通るようになってきた。それは彼自身がこの機関でのそう少なくない出会いを経て、変

わりつつあるからなのだろう。まだ若いのだから、良い傾向だと思えた。

「でも、畑の違う闘いで死ぬなんて理解できませんよ」

衛士自身、闘う理由やイワイがアレほどまでに深刻になっていた原因は分らないだろう。しかしそれを親身に受け止め真剣に対峙してくれたのは、ひとえに馬鹿だから、あるいはお人好しだからとしか言い用がない。

それで死んでしまえば最早かける言葉も見つからぬほどに可哀想な男である。

ハーガймはそう考えて、この上なく深い溜息をついた。

「自分の力がどこまで通用するか試したい時がある。拳を介してでしか意思疎通ができない連中がいる……もつとも、今回ではどちらでもないだろうが、一言で言えば馬鹿野郎だ」

「ぼくがあげたジャケットも、めくらましで捨てられました」

「似合わんのだからいいだろ」

「アレ耐時スーツですよ。使い方わかってなかったみたいだけど」

その効果には肉体強化や身体能力強化はない。というかヤコブ自身それを知らないし、特に興味もなかった。ただアイリンからついでに渡しておいてくれと頼まれただけなのだ。

「貴様もなー」

「だって使わないし。ギリスーツで十分ですよ」

残ったスニッカーズを一気に頬張り、我が物顔で床頭台に置いたペットボトルの飲料を一気に飲み干した。炭酸飲料だから少しは一拍置くと思っていたが、構わず飲み続ける彼の姿にはどこか男気すら感じた。

「というか、なんでわざわざお見舞いなんて？ 医者だって、いつも目が覚めるかわからんって言ってたのに」

言われてハーガймは首を振る。

理由なんて無いのだ。強いて言うならば、ただ気になったから。そして付焼刃に於ける特異点という男も見てみたかったからだ。

後者に至っては、彼が来るという保証はないが……多分来る。類は友を呼ぶとは、結構洒落では終わらない言葉だということを彼は知っている。

「特異点<sup>われわれ</sup>には自由に死ぬことも許されないというのを、確認しにそれに待ち人というのを……っと、噂をすればなんとやらだ」

この二ヶ月でさらに流暢になった日本語で彼は言つて、背後へと振り向いた。

扉が開く。スライド式であるが、酷くなめらかなその動き音が伴わない。まったくの無音でそれは可動する。

ドアの向こうにあった気配があらわになった。

出てきたのは、白髪頭の長髪がどこか、風俗の男性従業員のような風貌をもたらず男だった。俳優か何かと勘違いするほどの整った顔立ち。すらりと高い背に、伸びる四肢。

美男だと、ハーガймはまずそう思った。

華奢な身体。度が入っていないメガネをかけている彼はぱっと見て女性なのではないかと思うほど秀麗であつて、だからこそ、この男が時衛士と対等に渡り合ったソレなのだとは思えなかった。

時衛士は体術が特に弱い。それでも、素人相手に負けるような鍛え方はしていないはずだった。

が、同時に分かる。第六感だとか、そういったものが本能的に認識させた。

この男はそうだ。”そう”なのだ。

こいつは特異点<sup>ユニーク</sup>だ、と。

「あ、ど、どうも……」

彼は縮こまるようにお辞儀をする。

それに応じるように、ハーガймは一瞥して手を上げ、ヤコブは軽く会釈をした。

「面会謝絶なのに通されて驚きましたが……あなたたちも？」

「いや、むしろ止められずらしなかったからそんなの初耳だが」

スコール・マンティアが問い、ハーガймは振り返りもせずに応

えてみせる。その内に彼はハーガймの隣に移動し、視線を衛士に釘付けにした。

「驚いたか？」

訊ねてみる。すると彼は、少しだけ気後れしたように振り向いてから、かくかくと油が切れた機械のように小刻みに頷いた。

そんな深刻そうな顔に、ハーガймは思わず吹き出しそうになる。押し殺せずに表情に染みでてきそうになる笑みを抑えて、うつむいた。

この少年がそう簡単に死ぬわけがない。冗談抜きで、本気で殺そうとしても死にそうにはない、その死ぬというビジョンが見えない男なのだ。

「また、誰かのための犠牲に……？」

また、という言葉に引つかかる。が、どうせ彼の事だ。同じようなことをこの男の前でしてみせたのだろう。

「そうだな。概ねその通りだ」

理由もわからず、ただそいつのタメになると思って殺された。もつとも、まさか死ぬほどの事になるとは思ってもいなかっただろうが、その死が”視えた”時点で覚悟くらいは出来ただろう。彼が得られる未来の五秒は、その為にも在るのかも知れない。

「だが今回は深刻でな。心臓は潰され肺に穴が空き、その他諸々も重傷。機関の技術がなければ即死レベルだ」

しかし衛士の戦闘経歴を聞く限りでは二度目の即死だ。今回に至っては実際に、治療を受けるまで死んではいなかったようだ。

「……懲りないな、彼は」

嘆息。シヨックというよりは、またか、という感じだった。

頬を搔いて、彼は頷く。何かを納得するような仕草。それから壁に寄りかかって落ち着いた。

「そういえば面会謝絶といったな」

「はい。だから彼の友達が、余裕のある時間に見舞いに来て、門前払いくらつてると言っていました」

「ほう。ならばあと一人ほど来るはずだな」

「……もしかして、わたしたちは招かれたのですか？」

そう考えれば合点がいく。己の存在は、衛士にとってそれほど重要ではなかったのだから。だというのにわざわざここへ通されたとなれば、自ずと理由は狭まり限定されていく。

理由……そもそもこの老人との共通点は？ あ の 肥 満 症 の 男 と の 共通点は？

恐らくは特異点だとか、そういったモノだろう。

「もしかして……ええっと」

「ああ、ハーガймだ。特異点の。そっちのでぶはヤコブ。わたしの部下だが、何の能力も持たない」

狙撃能力は限りなく高いというわけではないが、それでもそのレベルまで上達させるまでにはかなりの時間と才能<sup>センス</sup>が必要となる。そしてあの巨体でこれまで敵に見えられず、また発見されても逃げ切れたのは奇跡を通り越して、彼の實力と言えるだろう。

ただその趣味には難があるのだが。

「わたしはスコール・マンティアです。いわゆる、付焼刃に於ける特異点というものらしいです」

能力は『神通力』。いわゆる念動力が主だが、腕、骨を結合させたり、また肉体を弾いて加速したりなどの効果を持つ。

訊かれてもいないのにそう説明する彼に、ハーガймは仕方なく自身についても語ろうかと口を開くと、彼はそれを制して首を振った。

「わたしは一応、協会の人間でしたので。ただ信用してもらおうと説明しただけです」

「ふん、なんだ。わたしはてっきり、ソレほどまで自分の力に自身があるのだと思ったぞ」

「右に同じく」

「ち、違いますよ！ むしろ、これから磨きたいと思うくらいです」

好青年だな、とハーガムは微笑んだ。娘がいればくれてやりたいくらいの良い安定だ。一時期、時衛士もまっすぐで中々見どころがあると思ったが、こいつはどちらかといえば同僚、共に戦場に出たいタイプだった。とても娘なんかやれないクソツタレだ。こいつは死ぬ寸前を救ってやるのが丁度いい。

もつとも、娘はおろか子どもが生まれる前に妻が死んでしまったから、そんな事を言っても虚しいだけなのだが。

「ってかさ、マンティアだっけ？ きみは……」

ヤコブが何かを言おうとして、すぐに止めた。その理由は言わずとも、同時に二人も察したように振り返る。

開いた扉からあらわになるのは、彼らを感じたその気配の主だった。

「ふむ。言われたとおり来てみれば、随分な顔合わせだな？」

褐色の娘は入ってくるなり、舐め回すように周囲を見回してそう告げる。

あの時にみせた酷くつらそうな泣き顔は既に失せていて、いつも通りの、凜々しい顔で後ろで手を組んでいた。休むの体勢を取る彼女は、それから続けた。

「それが目上に対する口調か？」

「ほう、米人なのに敬語を気にすると……？」

チノパンにタンクトップというあまりにも簡単な姿だったが、彼女は仕事では無い限りその殆どを季節問わずにその格好だった。

「魂は日本に捧げたのだから。どちらにしろ、余生はこの小さな島国で過ごそうと思っていた」

「深くは聞きませんが、いいセンスですね」

趣味のせいかな。あるいは何か思い入れがあるのだろうかと考えた所で、エミリアは彼の経歴を思い出していた。彼女が最愛にして妻にした女性が日本人だったことを思い出した彼女は、それを察されぬ内に流し、そして大きく一つ咳払いをする。

今回は彼らの身の上話を聞きに来たわけではない。忙しいアイリンに代わって、色々と潰れてしまった休暇の代休をさらに潰して、またやって来たのだ。

なんだか時衛士がここに来てからついていない。肩を落としたくなるのを堪らえて、彼女は適当にハーガймを見た。

「ご老体。これまで我々への情報提供ご苦労でした……次は外で身体を動かしてもらいたいのですが」

「……相も変わらず冗談のつまらんヤツだな。また尻でも触られたいのか？」

「もうろくしてんじやあない、ご老体。時衛士にはまだ貴方が必要だ。特異点のなんたるかを教えてもらいたい……彼はまだ機関に尽くそうとしている。彼が離れることは私にとっては惜しい話だが、それが本望ではないことくらいは分かる」

「エミリア——それは英国人<sup>アイリン</sup>の差金ではないな？」

スイカの種を吹き出すように禁煙パイプを吹き、地面に落とす。そうして前かがみになり、やがて立ち上がる老人は改めてエミリアへと向き直った。

何を考えている？ そう思うのと同時に、もしかして自分と同じ事を？ <sup>アップグレード</sup>とも考えられる。

こいつは上位互換と呼ばれる実力者集団の中でも古参で発言力もある。だからてつきり機関に全てを捧げた身であろうと思っていたが……その燃える瞳は、未来を見ていた。

この女性は特異点で無くとも同じような体験を持っている。否、この機関に所属している者の多くはその筈だ。ただ力があるか否かの違い。

そこまで考えると、この女が本当に何を考えているかがわからなくなる。何でも言われたことはこなす典型的な職業軍人の彼女に、まさか裏をかかれることはないだろうが……。

「さあ、答えかねます」

彼女はしらししく肩をすくめて首を捻った。

「話を戻します。時衛士には教養がない。貴方には教育係として働いて欲しいのですが……」

「はっ、教育係だと？ こいつは貴族か何かのお坊ちゃまか？」

「特異点はただその身一つだけでも機関に居場所を察知される。だからこそ自由な外出許可が降りますが……仕方がありません。私が引き受け——」

「ちよつと待った！」

自由な外出。それはつまり、この広くも狭くも苦しく感じる空間から地上へ出られるということだ。

機関の転送技術があれば、わざわざ航空券を買って飛行機に乗り込み、あの非常にストレスのたまる狭い椅子に身を押し込んで九時間も我慢しなくても、あの眩い閃光さえ耐えれば一瞬で祖国だ。

これを利用しない手はない。

ただ、この自他共に認める弱い少年を鍛えるだけで済むのならばまさに棚ボタ。断るべくもないのだ。

もっとも、この少年にとっては筋骨隆々とした老人より、まだ若く綺麗なお姉さんに手取り足取り教わったほうが良いだろうが、そこまでを考慮してやるほどやさしくはなかった。そもそも、一度は拳を交えているのだ。本来はそれだけで十分な筈であつたのに手を貸してやるのだから、それくらいは構わないだろう。

「引き受けよう」

「ならヤコブ、貴様も一緒だ」

「はっ？ ふ、ふざけんなよう！ さ、散々人をコキ使つて……五日間まるまる徹夜で、トーキくんオペレーターの遠隔援助のバックで頑張つてたのつて僕ですよ？」

「拒否権など無い。貴様ばかりは、目上だとかは言っていられないな……ほかは気づいていないだろうが、犯罪者だぞ？ 盗撮に——」

「ちよ、ちよつと待って！」

「……何だ、何か言い分でもあるのか？」

「ひ、引き受けさせてください」

「最初からそう言えば良いんだ、犯罪者め」

「ひいつ！」

隠すことのない殺気を噴出し、その鋭い視線は衛士の鬼火よりも恐ろしく見える。彼を殺害してもハーガймの話し相手が少なくなる程度の損失しかないため、彼女はその気になれば本当に手を出してしまいそうな気迫があった。

さすがに殺しはしないだろうが、病院送りにくらいはするだろう。壁を背に、周囲を伺うように見ていたスコールはあまり面識のない彼女に恐怖を抱いていた。

身を縮こまらせて壁の隅に逃げるヤコブを見送ってから、彼女は最後に、そのスコールへと向き直った。

「スコール・マンティア。貴方には、これまで時衛士に予定されていた任務をこなしてもらいたい」

「……わたしが、ですか？」

それまで敵であり、この機関さえ未だ憎んでいる自分を？  
監視の意味も伴うのだろうか、それはあまりにも突飛のしすぎではないだろうか。

そんな心情を知ってか知らずか、彼女は頷き、そのかたく引きつる表情をにわかに弛緩させた。

「貴方は時衛士のためにここに来たと言っても過言ではない。そうだろう？」

「え、ええ……まあ」

「時衛士は我々の人質のようなものだ。彼を離してもらいたくば、我々の口車に上手く乗せられるしか無い……というのが建前だ」

「……は、手が出せないわたしは、確かに貴方たちの言うことに従うしか無い」

上手くこの機関に溶け込めていないから、遠慮が入っていると思われたのか。彼女はそう言って彼に説明する。

スコールとしては特にそういった理由がないわけではないが、的確というわけでもなく、どこか気まずそうにそう返事をして頷いた。

それからエミリアは一步退いて、再びその三人へと連絡を伝える。  
「ならば貴様等は時衛士の意識が覚醒するまで、明日から強制的に訓練へと移行する。動きやすい汚れてもいい格好で屋外訓練場<sup>グラウンド</sup>に八時。分までに集合。原則として、一秒でも遅刻した者は訓練から逃走したと判断して私刑<sup>リンチ</sup>を執行する。良いな!？」

「じよ、冗談じゃ——」

ヤコブが勢いよく立ち上がってまた口をはさむ。

それを見るハーガム、スコール両名はまた余計なことを、と思わず顔を手で覆った。

ただでさえ犯罪者呼ばわりしているのに、口答えでもしてみれば遠慮も無しに半殺しだ。眼に見えている。

そう考える通りに、エミリアは腰から拳銃を抜いて構えた。安全<sup>セーフティ</sup>装置を外しながら。

「労働の後に旨いクラブサンドを喰らうか、今この鉛弾を土手っ腹に喰らうかは貴様の自由だ。発言を許可する。続けてみる」

理不尽に殺害意欲をもつその教官役には少しばかり残念だったが、彼女が女性である限りは舐めて見られる。むしろこの程度の、殺しはしないが当面訓練に支障が出る怪我を与える事は簡単だ、というような覇気はあった方が良くないのかも知れない。

この機関の技術ならば傷はすぐに治せる。そもそも訓練に至る前に怪我は癒えるから、痛いのはその時だけなのだ。

「い、いえ……なんでもありません」

「そうか。残念だな」

彼女は安全装置を戻し、また拳銃を収める。

そうしてドアの元へと退いていく彼女は、何かを思い出したように向き直った。

「ああ、そういえばご老体」

「ん、なんだ？」

「アイリンから伝言がひとつ」

これまでも全てが彼女の伝言だった。ただ言いやすいようにエミ

リアなりに言い方を替えたものだが、内容が異なったものは何一つとしてないし、その全てを自分でもしつかりと理解していたつもりだ。

だが、この言葉だけはよく分からなかった。

おそらく暗号か何かなのだろう。

「既に分岐は過ぎた、と」

「ん……そうか。分かった。すまないな、ありがとう」

ハーガームは驚いたように硬直したあと、それを理解するように頷き、礼を言う。

エミリアはそんな彼を意外に思いつつ病室を辞し、それからようやく休めると、まっすぐ自宅へと向かっていった。

時衛士が、ナルミ・リトヴャクが横たわり、祝英雄が機関リリースから消失する。

たった一人が失せて二人が黙りこむだけで、機関は途端に酷く静かになったような気がした。

しかし時衛士が目覚めるまでの空白の期間は、リリースにとっての束の間の休息にもなっていた。

協会がその規模を大きくする。リリースが技術を進展させる。気を許せぬ状況になりつつあるというのにも関わらず、リリース内部では不穏と不安が混じりつつあった。

運命がめまぐるしく変異する。

時衛士が現れてからそれがより顕著になった。

そして今回の出来事が、決定的すぎた。

「始末をするか。あるいは洗脳するかしなければ我々は終いだぞ」  
しわがれた声がそう言った。

暗がりの中、互いの姿、気配すら感じる事ができないモニターの前である。

「しかしまだ様子見しかできないでしょう？ でも彼の協会に対する恨みは機関よりも大きい。大丈夫でしょう」

女性の声は気楽に答えた。あまりにも楽観的な言いように二人の息を飲む様子が感じ取れたが、残る一人は楽しそうに笑い始めていた。

「くふふふ、確かにそうさのう。その時になってみなければ分からない。害なす時になれば、仕方ない、貴重な特異点だろうが殺すしかあるまいに」

「……むう、確かにたかが一人だ。上位互換の一人や二人で事足りる」

「いや、奴はごく自然的に身内を増やしている。下手に面識のある者に処刑させるより、ただの戦闘員を数用意して始末させれば良いのではないか？」

決して穏やかとは言えない、不穏な空気はただ一人を話題の中心にして展開されていく。

そうして、女性はふと気づいた。

あの少年が来てから、この機関には良くも悪くも、いつでも中心にあの少年の名が出ているということに。

——随分と、たかが一人、十七歳の少年が組織を掻き回してくれる。まさか、彼自身の人生を滅茶苦茶にしまったバチでもあたってしまったのだろうか。

冗談めかしく考えて、彼女は大きく息を吐いた。

疲れているのだろうか。まあいい、エミリアがしっかりと伝えてくれていれば今はそれで。

「ともかく、かの少年が動き出す前にある程度、事を進めなければ」「うむ。そうだ。特に今は、協会とてその水面下が忙しないのだからな」

「ならばアイリン。頼むぞ」

「ええ、委細承知しております。では、失礼ながらお先に退席させて頂きますわ」

ただキーを叩いてマウスを動かすだけで、その通信はすぐに遮断されてしまう。

こんな簡単な操作で、ただ顔も合わせずに会話するだけで、機関の命運が決まってしまうなんて。

実感があまり湧かないからこそ、そこが妙に怖くあり、どこか快感でもあった。

——運命が変わる。

今までそれを動かしていたのが機関、それを指揮する自分だったから、こんな気持は始めてだった。

運命を変える。今ではそれを無自覚に行える存在があった。まだ成人もしないただ一人の少年だ。

何がどうなつてこんな事になつてしまったのか。

現実というものは何が起こるか分からない。だからこそ怖くて、だからこそ楽しい。

こんな気持は久しぶりだった。

「さて、いよいよ次の段階か」

イワイが装備していた旧式の耐時スーツの情報も、その殆どを解析し結果が出ている。

これedyouやく、ただ様々な種類の耐時スーツを用意するのではなく——耐時スーツという装備自体を進化させることが可能になった。

特異点という、不幸にならなければ、己を苦しめなければ誕生しない能力者が要らなくなるように。

ただ身につけるだけで膨大な戦力に、たとえば巨大な人型ロボット級の戦力が生まれるような、というのは流石にあからさまだが、それほどに強い、特異能力なんていなくなる装備。

それさえあれば、わざわざ無茶苦茶に人を殺さずに済む。機関に巻き込まれた人間も、こんな地下で息をひそめずとも、昼も夜もある地上に出ることもできるのかも知れない。

地下で生まれ育った彼女の夢は、おそらく叶わぬであろうそれだった。

成長過程で現実を知っても、こうやって技術部の長たる権力者に

なつて、その決して揺らがぬと思つていた現実を変えられる力を得た今は、ようやくその夢を胸に抱き直すことが出来ていた。

子どもつばいと自分でも思う。いい年した女が夢物語と、とも思ふかも知れない。

散々人を騙すような事をしてきて、都合の良いものだとも自分でもよく思う。

だがそれでも一人の人間だ。

運命など、と嘲笑できるような平和な未来くらい、願つたつて良いじゃないか。

「ふう、少し眠ろつかしら」

やはりどうやら疲れているらしい。

まさか口には出ていないだろうが、こんな事を考えてしまうなんて随分”らしく”ない。

彼女はその研究施設にある仮眠室へと向かつて、簡素な寝台に身を投げた。ギシギシと安っぽい板のきしむ音がして、木の臭いがする。

筋張つていた背筋が、妙に痛みを發して、だがそれが心地よく感じる。全身の疲れが寝台に吸い込まれていくようだった。

最後に横になったのはいつだろうか。そう言えば、最後にシャワーを浴びたのは何日前だろうか。

駄目だ、完全に女の部分が死んでいる。エミリアを心配する以前に、少しくらい自分をかまつてやったほうが良かったのかも知れない。

早くも虚ろになり始める意識の中で、アイリンはそう思った。

運命だとか、そういう前に——そう、あの少年だつてそうだ。

自分の事を考えるべきだ。確かに自分一番と彼自身考えているだろうが、殆どが復讐か、誰かのために、と考えている。馬鹿げていると思つたが、何故だか笑えなかった。

それは彼が真剣だからだ。彼女が真剣に、平和を考えるように。

「ったく、ホントに疲れてるわ」

何かを考えだすと止まらない。これがアイディアなら良いのだから、全てが無駄。記憶整理なら夢でお願いしたいものだ。

彼女はそう残して、布団を頭まで一気に被った。

——目が覚めた時、世界が変わらずまだこの状態を維持しているように。

心の底からそう思う。

眠りは誰に対しても恒久的に、平等に平和を与えてくれる。

だから今は寝よう。とりあえず。

次いでそう考えるアイリンが、その穏やかな寝顔に静かな寝息を立て始めるのは、それから僅か数秒後の事だった。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1688v/>

---

その男、神の眼につき

2011年9月3日03時37分発行